# 上白井西伊熊遺跡

## －縄文時代以降編－

一般国道17号（鯉沢バイパス）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査（その２）報告書第９集

2010

国　土　交　通　省
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 序

一般国道17号は、関東と北陸を結ぶ大動脈であり、本県においては県北部と平野部を結ぶ地域の主要道路であります。この国道は渋川市と旧子持村(平成18年２月渋川市と合併)の市街地を通過すること、国道353号と接続する地理的条件などから、渋滞が恒常的なものとなっており、その解消のため全長5.5kmの鯉沢バイパスが計画されました。平成８年10月には渋川市東町から国道353号バイパスとの交差点までの2.3kmが開通し、さらに終点の旧子持村上白井までの3.2kmについて事業が進められております。

国道353号バイパス交差点から終点までの埋蔵文化財調査は、一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その２)として、平成14年８月に当時の建設省関東地方整備局長・群馬県教育委員会教育長・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の三者で協定書を締結し、調査の運びとなりました。整理事業は平成17年度から開始し、本報告書は一連の発掘調査に伴う報告書として、上白井西伊熊遺跡の成果をまとめたものであります。

上白井西伊熊遺跡では、旧石器時代の石器製作址、縄文時代前期の集落や古墳時代の放牧地跡などが調査されました。今回の報告は地域の歴史を考える上で重要な資料となる縄文時代以降の遺構及び遺物を報告させていただきます。

今回の報告書刊行に至るまでには、国土交通省関東地方整備局、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、旧子持村教育委員会、地元関係者の皆様には、格別の御尽力を賜りました。銘記して心から感謝申し上げます。本報告書が広く基本的な歴史資料として活用されることを念願し、報告書の序といたします。

平成22年２月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　須田栄一

# 例　言

1　本書は一般国道17号（鯉沢バイパス）改築工事に伴う、上白井西伊熊遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡所在地　群馬県北群馬郡子持村大字上白井字西伊熊（現渋川市上白井、平成18年2月市町村合併）

3　事業主体　国土交通省　関東地方整備局

4　調査主体　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

5　調査体制および期間

【平成15年度】

期　　間　平成16年1月1日～平成16年3月31日

管理指導　小野宇三郎、住谷永市、神保侑史、右島和夫、萩原利通、関　晴彦、植原恒夫、竹内　宏、高橋房雄

事務担当　須田朋子、吉田有光、阿久澤玄洋、田中賢一、今井もと子、内山佳子
佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、若田　誠、松下次男、吉田　茂

調査担当　山口逸弘、石原良人、吉田和夫

【平成16年度】

期　　間　平成16年4月1日～平成16年11月30日

管理指導　小野宇三郎、住谷栄市、矢崎俊夫、神保侑史、右島和夫、関　晴彦、丸岡道雄、竹内　宏、高橋房雄

事務担当　須田朋子、吉田有光、栗原幸代、阿久澤玄洋、佐藤聖行、今井もと子、内山佳子
佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、若田　誠、武藤秀典

調査担当　神谷佳明、関　俊明、阿久津　聡、石原良人

6　整理体制および期間

【平成18年度】

期　　間　平成19年2月1日～平成19年3月31日

管理指導　高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、萩原　勉、西田健彦、中束耕志、笠原秀樹、石井　清

事務担当　須田朋子、柳岡良宏、斉藤恵利子、今泉大作、栗原幸代、佐藤聖行、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、若田　誠、武藤秀典

整理担当　齊藤利昭

整理作業　保存処理　関　邦一、小材浩一、津久井桂一、多田ひさ子、長岡久幸
機械実測　伊藤博子、岸　弘子、田所順子

【平成21年度】

期　　間　平成21年4月1日～平成21年12月31日

管理指導　高橋勇夫、須田栄一、木村裕紀、相京建史、笠原秀樹、石坂　茂、大木紳一郎、佐嶋芳明

事務担当　須田朋子、柳岡良宏、田口小百合、矢島一美、高橋次代、今井もと子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子

整理担当　編集　桜岡正信　実測　関　晴彦、橋本　淳、岩崎泰一　デジタル編集　齊田智彦

整理作業　保存処理　関　邦一、津久井桂一、増田政子、多田ひさ子

機械実測　田中精子、町田礼子、田所順子、岸　弘子、木原幸子、福島瑞希

デジタル編集・写真図版作成　牧野裕美、市田武子、安藤美奈子、酒井史恵、廣津真希子、須藤絵美、高梨由美子、矢端真観、横塚由香、下川陽子

7　本書作成の担当は次のとおりである。

編集　桜岡正信　デジタル編集　齊田智彦

執筆　第１・２章、第３章第１節　齊藤利昭、第４章　古墳時代土器観察　関　晴彦、第６章　縄文時代土器観察及び第４節１、第８章第２節　橋本　淳、第６章　石器観察及び第４節２　岩崎泰一、上記以外の本文　桜岡正信

遺構写真撮影　調査担当　山口逸弘、石原良人、吉田和夫、神谷佳明、関　俊明、阿久津　聡

遺物写真撮影　佐藤元彦

8　報告書の作成に際して、以下の方々に分析・同定を依頼した。

石器の石材同定　飯島静男氏

火山灰同定　古環境研究所

黒曜石原産地分析　株式会社　パレオ・ラボ

9　本遺跡の出土遺物及び図面・写真等の資料は群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10　発掘調査及び報告書作成にあたっては、次の方々に有益な指導と助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。

石井克己、飯島静男、細田　勝、鈴木徳雄、高橋清文（敬称略）

# 凡　　例

1　調査区域には、国家座標に基づいて５ｍ間隔のグリッドを設定した。原点については、日本平面直角座標系第Ⅸ系のＸ＝58,000m、Ｙ＝-72,500mを用いた。グリッドは、起点から東に向かって100mごとの大区画にアルファベット大文字Ａ～を付し、さらにそれぞれの大区画内の５ｍごとにアルファベット小文字ａ～を付し、これを組み合わせてAa・Ab～と表記した。また、北に向かっては起点から５ｍ間隔で０～の数字で表記した。したがって５ｍ×５ｍのグリッドを呼称するには、南西部の交点を基準として、Ds－121、Dt－124のように表記した。さらに遺構近くに適当なグリッド交点が無い場合は、基準となる交点から○ｍ東または北の位置として(Ds+2)－121、(Dt+2)－(124+1)のように表記し、プラスした○ｍのｍを省略した。

2　道路・水路等で区切られた範囲を調査区とした。また、調査区名称は工事区名称を使用せず１区・２区・・等の算用数字を用いた。

3　本文中で使用した地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「鯉沢」、「渋川」、「金井」、「伊香保」、20万分の１地勢図「宇都宮」、「長野」を用いた。

4　本書では榛名山の噴出物である、榛名二ツ岳渋川テフラ（Ｈｒ－ＦＡ）をＦＡと表記し、榛名二ツ岳伊香保テフラ（Ｈｒ－ＦＰ）をＦＰと表記した。

5　遺構及び遺物実測図の縮尺は各図中に表示してある。また、挿図中の「Ｌ＝○○ｍ」は、断面図中の基準線の標高を示す。

6　本書第１面で検出された耕作坑について挿図中では１号耕作坑を１耕、２号耕作坑を２耕と表記する。

7　遺構図中の●印は土器の出土地点を示し、▲印は石器の出土地点を示す。

8　本文中及び観察表中の用語については統一を図ったが、執筆担当の意向を反映させたものもある。

9　土層断面の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」に従った。

10　遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

（１）　胎土中の砂粒の大きさによる分類は、土壌物理研究会による基準に従い、細砂粒(<0.5mm)、粗砂粒(0.5～2.0mm)、細礫(2.0～5.0mm)、中礫(5.0mm<)とした。

（２）　色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」に従った。

（３）　石器の器種は以下のように省略表記した。

打斧（打製石斧）　磨斧（磨製石斧）　有舌（有舌尖頭器）　多孔（多孔石）　環状（環状石斧）
加工（加工痕ある剥片）　使用（使用痕ある剥片）

（４）　石材の名称は以下のように省略表記した。

黒頁（黒色頁岩）　珪頁（珪質頁岩）　黒曜（黒曜石）　黒安（黒色安山岩）　変安（変質安山岩）
赤碧（赤碧玉）　流紋（流紋岩）　硬泥（硬質泥岩）　チャ（チャート）　ホルン（ホルンフェルス）
デイ（デイサイト）　細安（細粒輝石安山岩）　粗安（粗粒輝石安山岩）　石閃（石英閃緑岩）　緑片（緑色片岩）　変玄（変玄武岩）　変玄武（変質玄武岩）　輝緑（輝緑岩）

# 目　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
観察表目次
写真図版目次
抄録

第１章　調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第１節　調査の経緯・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　調査の経過と方法・・・・・・・・・ 2
　　1　調査の経過・・・・・・・・・・・・ 2
　　2　発掘調査の方法・・・・・・・・・・ 2
第２章　地理的・歴史的環境・・・・・・・・・ 6
　第１節　遺跡の位置と周辺の地形・・・・・ 6
　第２節　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・ 7
　第３節　基本土層・・・・・・・・・・・・ 10
第３章　１面の調査(Hr-FP上面)　・・・・・・ 11
　第１節　調査の概要・・・・・・・・・・・ 11
　第２節　検出された遺構・・・・・・・・・ 11
　　1　０区の検出状況・・・・・・・・・・ 13
　　2　１区の検出状況・・・・・・・・・・ 14
　　3　３区の検出状況・・・・・・・・・・ 20
　　4　４区の検出状況・・・・・・・・・・ 21
　　5　５区の検出状況・・・・・・・・・・ 22
第４章　２面の調査(Hr-FP下面)　・・・・・・ 25
　第１節　調査の概要・・・・・・・・・・・ 25
　第２節　検出された遺構・・・・・・・・・ 25
　　1　０区の検出状況・・・・・・・・・・ 25
　　2　１区の検出状況・・・・・・・・・・ 25
　　3　３区の検出状況・・・・・・・・・・ 27
　　4　４区の検出状況・・・・・・・・・・ 28
　　5　５区の検出状況・・・・・・・・・・ 34
　　6　２面及び下層出土遺物・・・・・・ 35
第５章　３面の調査(Hr-FA下面)　・・・・・・ 36
　第１節　調査の概要・・・・・・・・・・・ 36
第６章　４面の調査(縄文時代)・・・・・・・ 37
　第１節　調査の概要・・・・・・・・・・・ 37
　　1　０区の概要・・・・・・・・・・・ 37
　　2　１区の概要・・・・・・・・・・・ 37
　　3　３区の概要・・・・・・・・・・・ 37
　　4　４・５区の概要・・・・・・・・・ 37
　第２節　検出された遺構・・・・・・・・・ 37
　　1　竪穴住居・・・・・・・・・・・・ 37
　　2　土坑・・・・・・・・・・・・・・ 64
　　3　ピット・・・・・・・・・・・・・ 80
　第３節　包含層の調査・・・・・・・・・・ 81
　　1　調査の概要・・・・・・・・・・・ 81
　　2　土器の数量的出土傾向・・・・・・ 81
　　3　黒曜石の数量的出土傾向・・・・・ 84
　第４節　遺構外出土遺物・・・・・・・・・ 84
　　1　土器・土製品・・・・・・・・・・ 84
　　2　石器・・・・・・・・・・・・・・ 103
第７章　自然科学分析・・・・・・・・・・・ 128
　第１節　黒曜石製石器の産地推定・・・・・ 128

第８章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・ 133
　第１節　各調査面の遺跡景観・・・・・・・ 133
　第２節　前期前葉土器群について・・・・・ 134

遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
写真図版

# 挿図目次


第1図　遺跡位置図　1
第2図　遺跡位置及び調査区配置図　3
第3図　グリッド設定及び調査面の呼称　5
第4図　段丘面分類図　6
第5図　周辺遺跡位置図　8
第6図　基本土層　10
第7図　1面調査区位置図　12
第8図　0区　全体図　13
第9図　0区　1・2号溝　13
第10図　1区　全体図　14
第11図　1区　14～16・25・26・39号耕作坑　15
第12図　1区　28・31・37号耕作坑・38号土坑　16
第13図　1区　17～24号土坑　18
第14図　1区　27・29・30・32～36・40・41号土坑　19
第15図　1区　1号柵列　20
第16図　3区　全体図　20
第17図　3区　4号耕作坑・3号土坑　21
第18図　3区　1・2号土坑　22
第19図　4区　全体図　22
第20図　5区　全体図　23
第21図　5区　5・6・8号耕作坑　23
第22図　5区　7号土坑　24
第23図　0区　全体図　25
第24図　2面調査区位置図　26
第25図　1区　全体図　27
第26図　3区　全体図　27
第27図　3区　詳細図位置　28
第28図　3区　詳細図（1）　28
第29図　3区　詳細図（2）　29
第30図　4区　全体図　30
第31図　4区　詳細図位置　30
第32図　4区　詳細図（1）　31
第33図　4区　詳細図（2）　32
第34図　4区　土師器出土位置図　33
第35図　4区　土師器出土詳細図・出土遺物　33
第36図　5区　全体図　34
第37図　5区　詳細図位置　34
第38図　5区　詳細図（1）　34
第39図　5区　詳細図（2）　35
第40図　2面及び下層出土遺物　35
第41図　3面調査区位置図及び全体図　36
第42図　4面調査区位置図　38
第43図　1区　全体図　39
第44図　3区　全体図　39
第45図　3区　2号住居　40
第46図　3区　2号住居炉　41
第47図　3区　2号住居出土遺物（1）　41
第48図　3区　2号住居遺物出土状況　42
第49図　3区　2号住居出土遺物（2）　42
第50図　3区　2号住居出土遺物（3）　43
第51図　3区　2号住居出土遺物（4）　44
第52図　3区　2号住居出土遺物（5）　45
第53図　3区　3号住居・炉　46
第54図　3区　3号住居遺物出土状況　46
第55図　3区　3号住居出土遺物（1）　47
第56図　3区　3号住居出土遺物（2）　48
第57図　3区　3号住居出土遺物（3）　49
第58図　3区　5号住居・炉・遺物出土状況　50
第59図　3区　5号住居出土遺物（1）　51
第60図　3区　5号住居出土遺物（2）　52
第61図　3区　5号住居出土遺物（3）　53
第62図　1区　6・8号住居（1）　54
第63図　1区　6・8号住居（2）　55
第64図　1区　6・8号住居遺物出土状況・炉　56
第65図　1区　6号住居出土遺物（1）　57
第66図　1区　6号住居出土遺物（2）　58
第67図　1区　6号住居出土遺物（3）　59
第68図　1区　8号住居出土遺物　59
第69図　1区　7号住居　59
第70図　1区　7号住居・炉　60
第71図　1区　7号住居遺物出土状況　61
第72図　1区　7号住居出土遺物（1）　61
第73図　1区　7号住居出土遺物（2）　62
第74図　1区　7号住居出土遺物（3）　63
第75図　3区　9号土坑・出土遺物　64
第76図　3区　10a～10d号土坑　65
第77図　3区　10a～10d号土坑遺物出土状況　66
第78図　3区　10a～10d号土坑出土遺物（1）　67
第79図　3区　10a～10d号土坑出土遺物（2）　68
第80図　3区　10a～10d号土坑出土遺物（3）　69
第81図　3区　10a～10d号土坑出土遺物（4）　70
第82図　3区　11～13号土坑・出土遺物　71
第83図　1区　42～45号土坑　72
第84図　1区　46～50・64号土坑・出土遺物　73
第85図　1区　51～53号土坑・出土遺物　74
第86図　1区　54・55号土坑・出土遺物　75
第87図　1区　56・57号土坑・出土遺物　76
第88図　1区　58～61・63号土坑・出土遺物　77
第89図　1区　65～69号土坑・出土遺物　78
第90図　1区　70・71号土坑・出土遺物　79
第91図　1区　2～6号ピット　80
第92図　グリッド遺物出土状況（1）　82
第93図　グリッド遺物出土状況（2）　83
第94図　1区遺構外出土土器（1）　89
第95図　1区遺構外出土土器（2）　90
第96図　1区遺構外出土土器（3）　91
第97図　1区遺構外出土土器（4）　92
第98図　1区遺構外出土土器（5）　93
第99図　1区遺構外出土土器（6）　94
第100図　1区遺構外出土土器（7）　95
第101図　1区遺構外出土土器（8）　96
第102図　3区遺構外出土土器（1）　98
第103図　3区遺構外出土土器（2）　99
第104図　3区遺構外出土土器（3）　100
第105図　3区遺構外出土土器（4）　101
第106図　4区遺構外出土土器　102
第107図　5区遺構外出土土器　103
第108図　1区遺構外出土石器（1）　112
第109図　1区遺構外出土石器（2）　113
第110図　1区遺構外出土石器（3）　114
第111図　1区遺構外出土石器（4）　115
第112図　1区遺構外出土石器（5）　116
第113図　1区遺構外出土石器（6）　117
第114図　1区遺構外出土石器（7）　118
第115図　3区遺構外出土石器（1）　119
第116図　3区遺構外出土石器（2）　120
第117図　3区遺構外出土石器（3）　121
第118図　3区遺構外出土石器（4）　122
第119図　3区遺構外出土石器（5）　123
第120図　3区遺構外出土石器（6）　124

第121図　3区遺構外出土石器（7）・・・・・・・・・・・・・125
第122図　4区遺構外出土石器（1）・・・・・・・・・・・・・126
第123図　4区遺構外出土石器（2）・・・・・・・・・・・・・127
第124図　5区遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・127

# 表　目　次

第1表　上白井西伊熊遺跡調査工程表・・・・・・・・・・・　4
第2表　周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
第3表　遺構外出土凹石属性表・・・・・・・・・・・・・・106
第4表　遺構外出土磨石属性表・・・・・・・・・・・・・・107
第5表　遺構外出土石器の器種・石材構成・・・・・・・・・108
第6表　遺構外出土剥片の石材別総量・・・・・・・・・・・108
第7表　遺構外出土礫・礫片の石材別総量・・・・・・・・・109

# 観察表目次

2面出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・139
3区2号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・139
3区3号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・142
3区5号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
1区6号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・145
1区7号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
1区8号住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
遺構外・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・153

# 写真図版目次

ＰＬ１　上白井西伊熊遺跡遠景（利根川左岸より）
ＰＬ２　0区1面　調査区全景（北東から）
　　0区1面　1号溝全景
　　0区1面　2号溝全景（北から）
ＰＬ３　1区1面　調査区全景（南東から）
　　1区1面　調査区全景（北から）
　　1区1面　14号耕作坑　全景（南から）
　　1区1面　15号耕作坑　全景（南から）
ＰＬ４　1区1面　16号耕作坑　全景（南から）
　　1区1面　25号耕作坑　全景（南から）
　　1区1面　26号耕作坑　全景（南から）
　　1区1面　28号耕作坑　全景（南から）
　　1区1面　31号耕作坑　全景（北から）
　　1区1面　39号耕作坑　全景（東から）
　　1区1面　17号土坑　全景（南から）
　　1区1面　18号土坑　全景（南から）
ＰＬ５　1区1面　19号土坑　全景（南から）
　　1区1面　20号土坑　全景（東から）
　　1区1面　21号土坑　全景（南から）
　　1区1面　22号土坑　全景（北から）
　　1区1面　23号土坑　全景（南から）
　　1区1面　24号土坑　全景（南から）
　　1区1面　27号土坑　全景（南から）
　　1区1面　29号土坑　全景（西から）
ＰＬ６　1区1面　30号土坑　全景（東から）
　　1区1面　32号土坑　全景（南から）
　　1区1面　33号土坑　全景（東から）
　　1区1面　34号土坑　全景（東から）
　　1区1面　35号土坑　全景（東から）
　　1区1面　36号土坑　全景（南から）
　　1区1面　37号耕作坑・38号土坑　全景（南から）
　　1区1面　40号土坑　全景（南から）
ＰＬ７　1区1面　41号土坑　全景（北から）
　　1区1面　1号柵列　全景（南から）
　　3区1面　調査区全景（南から）
　　3区1面　4号耕作坑　全景
　　3区1面　1号土坑　全景
ＰＬ８　3区1面　2号土坑　全景
　　3区1面　3号土坑　全景
　　3区1面　ピット群　全景
　　3区1面　ピット群　全景
　　4区1面　調査区全景（南から）
ＰＬ９　5区1面　調査区全景（北から）
　　5区1面　5号耕作坑　全景
　　5区1面　6号耕作坑　全景
　　5区1面　8号耕作坑　全景
　　5区1面　7号土坑　全景
ＰＬ10　0区2面　調査区全景（空撮）
　　0区2面　調査区全景（南西から）
　　1区2面　調査区全景（空撮）
ＰＬ11　1区2面　調査区全景（南から空撮）
　　1区2面　調査区全景（北から空撮）
　　3区2面　調査区全景（北から）
　　3区2面　調査区全景（南から）
　　3区2面　調査区全景（南から）
ＰＬ12　3区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況（北から）
　　3区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況
　　3区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況（南東から）
　　3区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況（南から）
　　4区2面　調査区全景（北から）
　　4区2面　調査区全景（南から）
　　4区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況
ＰＬ13　4区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況
　　4区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況
　　4区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況
　　4区2面　踏み分け道検出状況
　　4区2面　踏み分け道検出状況
　　4区2面　遺物出土状態
　　5区2面　調査区全景（南から）
ＰＬ14　5区2面　調査区全景（北から）
　　5区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況（南から）
　　5区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況（南から）
　　5区2面　遺物出土状態
　　1区4面　調査区全景（空撮）
ＰＬ15　3区4面　調査区全景（南から）
　　3区4面　2号住居　全景（南から）
ＰＬ16　3区4面　2号住居　遺物出土状態（西から）
　　3区4面　2号住居　炉全景（南から）
　　3区4面　2号住居　炉調査状況（南から）
　　3区4面　2号住居　炉掘り方全景（西から）
　　3区4面　3号住居　全景（南から）
　　3区4面　3号住居　遺物出土状態（北から）
　　3区4面　3号住居　炉全景（南から）
　　3区4面　3号住居　炉掘り方全景（西から）
ＰＬ17　3区4面　5号住居　全景（南から）
　　3区4面　5号住居　遺物出土状態
　　3区4面　5号住居　炉全景（東から）
　　3区4面　5号住居　炉掘り方全景（西から）
　　1区4面　6・8号住居　全景（南から）
ＰＬ18　1区4面　6・8号住居　全景（北西から）
　　1区4面　6・8号住居　掘り方全景（北東から）

1区4面　6号住居　炉全景（南西から）
1区4面　6号住居　炉掘り方全景（北東から）
1区4面　7号住居　全景（東から）
P L19　1区4面　7号住居　全景（西から）
1区4面　7号住居　掘り方全景（西から）
1区4面　7号住居　炉全景
1区4面　7号住居　炉全景（南から）
1区4面　7号住居　炉掘り方全景（南から）
1区4面　7号住居　遺物出土状態（南から）
3区4面　9号土坑　全景（西から）
3区4面　10a ～ 10d号土坑　全景（南から）
P L20　3区4面　10a ～ 10d号土坑　遺物出土状態
3区4面　10a ～ 10d号土坑　遺物出土状態（西から）
3区4面　11号土坑　全景（南から）
3区4面　12号土坑　全景（南から）
3区4面　13号土坑　全景（南から）
1区4面　42号土坑　全景（南から）
1区4面　43号土坑　全景（西から）
1区4面　44号土坑　全景（西から）
P L21　1区4面　45号土坑　全景（西から）
1区4面　46号土坑　全景（北から）
1区4面　47・49・50・64号土坑　全景（南から）
1区4面　48号土坑　全景
1区4面　50号土坑　全景（西から）
1区4面　54・55号土坑　全景（東から）
1区4面　56号土坑　全景（西から）
1区4面　57号土坑　全景（北西から）
P L22　1区4面　58号土坑　全景（南から）
1区4面　61号土坑　全景（北から）
1区4面　63号土坑　全景（南から）
1区4面　65号土坑　全景（南から）
1区4面　67号土坑　全景（南から）
1区4面　68号土坑　全景（北西から）
1区4面　69号土坑　全景（北西から）
1区4面　70号土坑　全景（西から）
P L23　1区4面　71号土坑　全景（南東から）
1区4面　3号ピット　全景（北から）
1区4面　4号ピット　全景（北から）
1区4面　5号ピット　全景（北から）
1区4面　6号ピット　全景（北から）
1区4面　Bq-120グリッド　遺物出土状態
1区4面　包含層調査全景（北から）
P L24　1区4面　Bq・Br-123 ～ 125グリッド　遺物出土状態
1区4面　Br-121グリッド　遺物出土状態（西から）
1区4面　Br-122グリッド　遺物出土状態（南から）
4区4面　包含層　遺物出土状態
4区4面　包含層　遺物出土状態（南東から）
P L25　4区2面　5区2面出土遺物
3区4面　2号住居出土遺物
P L26　3区4面　2号住居出土遺物
P L27　3区4面　2号住居出土遺物
3区4面　3号住居出土遺物
P L28　3区4面　3号住居出土遺物
P L29　3区4面　3号住居出土遺物
3区4面　5号住居出土遺物
P L30　3区4面　5号住居出土遺物
P L31　1区4面　6号住居出土遺物
P L32　1区4面　6号住居出土遺物
1区4面　8号住居出土遺物
1区4面　7号住居出土遺物
P L33　1区4面　7号住居出土遺物
3区4面　9号土坑出土遺物
3区4面　10a ～ 10d号土坑出土遺物
P L34　3区4面　10a ～ 10d号土坑出土遺物
P L35　3区4面　10a ～ 10d号土坑出土遺物
3区4面　12号・1区4面　46・49・50・64号土坑出土遺物
P L36　1区4面　51・52・54 ～ 57・63・67 ～ 71号土坑出土遺物
P L37　1区遺構外出土土器
P L38　1区遺構外出土土器
P L39　1区遺構外出土土器
P L40　1区遺構外出土土器
P L41　1区遺構外出土土器
3区遺構外出土土器
P L42　3区遺構外出土土器
P L43　3区遺構外出土土器
4区遺構外出土土器
P L44　4区遺構外出土土器
5区遺構外出土土器
1区遺構外出土石器
P L45　1区遺構外出土石器
P L46　1区遺構外出土石器
P L47　1区遺構外出土石器
P L48　1区遺構外出土石器
3区遺構外出土石器
P L49　3区遺構外出土石器
P L50　3区遺構外出土石器
P L51　3区遺構外出土石器
4区遺構外出土石器
P L52　4区遺構外出土石器
5区遺構外出土石器

# 抄　録

| | |
|---|---|
| 書名ふりがな | かみしろいにしいくまいせき　―じょうもんじだいいこうへん― |
| 書名 | 上白井西伊熊遺跡　―縄文時代以降編― |
| 副書名 | 一般国道17号（鯉沢バイパス）改築工事に伴う<br>埋蔵文化財発掘調査（その２）報告書 |
| 巻次 | 第９集 |
| シリーズ名 | 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第487集 |
| 編集者名 | 桜岡正信　齊藤利昭 |
| 編集機関 | 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 発行機関 | 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 発行年月日 | 2010年２月19日 |
| 作成法人ＩＤ | 21005 |
| 郵便番号 | 377-8555 |
| 電話番号 | 0279-52-2511 |
| 住所 | 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2 |
| 遺跡名ふりがな | かみしろいにしいくまいせき |
| 遺跡名 | 上白井西伊熊遺跡 |
| 所在地ふりがな | ぐんまけんしぶかわしかみしろい |
| 遺跡所在地 | 群馬県渋川市上白井2586番地ほか |
| 市町村コード | 10208 |
| 遺跡番号 | K0131 |
| 北緯（日本測地系） | 363157 ～ 363217 |
| 東経（日本測地系） | 1390137 ～ 1390142 |
| 北緯（世界測地系） | 363208 ～ 363228 |
| 東経（世界測地系） | 1390125 ～ 1390130 |
| 調査期間 | 2004年01月01日-2004年11年30日 |
| 調査面積 | 5,871㎡ |
| 調査原因 | 道路建設工事 |
| 種別 | 集落／放牧地／その他 |
| 主な時代 | 縄文／古墳／近世 |
| 遺跡概要 | 集落－縄文－竪穴住居６＋土坑34＋包含層－縄文土器＋石器　古墳－放牧地－道－土師器　その他－近世－土坑23＋耕作坑13 |
| 特記事項 | 縄文時代前期二ッ木式段階の集落及び古墳時代６世紀中葉の火山災害で埋もれた放牧地の調査。 |

# 第１章　調査の経緯

## 第１節　調査の経緯

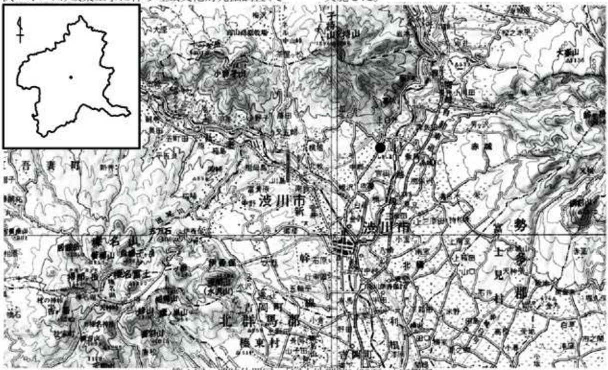
一般国道17号は、東京を起点として関東と北陸を結ぶ大動脈である。この国道は渋川市及び旧子持村（以下子持村と呼称する）の市街地を通過し、子持村鯉沢では長野・草津方面に向かう国道353号と接続する地理的条件も含め、休日等において観光交通による渋滞が恒常的なものとなっている。この渋滞解消のため､渋川市東町で現在の国道17号と分岐し、市街地を迂回しながら子持村上白井で国道17号と再び合流する４車線、約5.5㎞の一般国道17号（鯉沢バイパス）道路改築工事が計画された。

本事業は、事業地を大きく２分割する計画で進められ、渋川市東町から子持村白井の、同事業と並行して進められた国道353号バイパスの接続部分までが、平成８年に供用が開始された。その後、子持村白井から同上白井の終点までの間については、国土交通省高崎工事事務所（現：国土交通省高崎河川国道事務所）から、平成13年10月に一般国道17号（鯉沢バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その２）として群馬県教育委員会文化財保護課に事業照会があった。

同課は、６世紀代に２度噴火した榛名山の火山灰・軽石に埋もれた遺跡が存在する旨を回答した。その後、事業者である高崎工事事務所と協議を進め、発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなった。

平成14年８月30日付けで、国土交通省関東地方整備局長並びに群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、一般国道17号（鯉沢バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その２）に関する協定書を締結した。また、国土交通省関東地方整備局長と財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、平成14年度の埋蔵文化財発掘調査に係る委託契約を締結し、発掘調査を進めることとなった。８遺跡、約115,000㎡に及ぶ発掘調査は平成17年７月まで実施し、整理事業は平成17年４月から開始した。

上白井西伊熊遺跡の整理業務は、平成18年度から実施した。



第１図　遺跡位置図「国土地理院1/20万」「宇都宮」

# 第２節　調査の経過と方法

## １．調査の経過

本遺跡の範囲はバイパスの終点に位置し、国道17号との合流点にあたる。合流点は上白井長坂地内に位置し、長坂面の段丘崖際で接するため安全対策上崖下からの護岸工事が必要となり、崖下の上白井西伊熊遺跡が含まれることとなった。国道17号に接続する長坂地内の標高は250m前後で、上白井西伊熊地内では230m前後であり、比高は20mほどである。この段丘崖は、工事区35-2に入るが、雑木が繁茂する斜面部であり、遺構の存在は希薄と判断し、平坦面の調査を行う課程で判断することとした。また、調査地は小さな段丘面上にあり、工事区35-1の東側は５ｍ程の段差がある。この小段丘面上には、段丘上と同じく昭和40年代に圃場整備が行われ階段状の蒟蒻畑が広がっていた。その中をコンクリート舗装の狭い村道が伸び大型重機の進入は困難であった。

発掘調査は、他地区同様６世紀中頃の榛名山噴火軽石のFP層を基準に、その上下の２面と５世紀末の榛名山噴火に伴う火砕流堆積物のFA層下面で１面、さらにローム層までの間の黒色土及び暗褐色土中に縄文時代の検出面として１面、ローム層中の旧石器時代の調査を含め５面の調査が必要と想定できた。

調査は、１・２面の調査では重機により表土やFPなどの被覆層の除去を行い、遺構確認後、遺構掘削、写真撮影、測量等の記録を作成し面調査を終えた。多面調査では、上面の調査が終わるまで次の面の調査が行えないため、２ヵ所の調査区を交互に調査することにより調査の効率化を図った。

上白井西伊熊遺跡の調査経過は以下の通りである。

平成16年１月の発掘調査開始段階では、用地買収の関係などにより調査地が限定され、斜面部下の35-4から調査を開始した。その際に表土等の掘削排土は、用地の関係から工事区35-5に置くこととした。また、工事区35-3も35-4の調査途中より開始し、２ヵ所の調査を交互に進めた。35-4は、表土下はFPの堆積が傾斜しており、昭和40年代の圃場整備で平坦面が造成されたことが分かった。その後２面の調査でも、やはり緩傾斜面が検出でき、その下は礫混じりの層であり調査を終えた。次に埋め戻しを行いながら工事区35-5の調査を開始した。

その段階では、工事区35-3は縄文時代の住居跡等を検出し調査を行っていた。

平成16年度は工事区35-1の発掘調査を開始した。調査地は、斜面部下端でありFPの堆積が厚く、また、工事区25 ～ 27にかけて第４面の調査においては、多量の縄文時代の土器や石器が出土し、その下層からは住居跡や土坑などが検出でき、更に工事区19や工事区23では1.5万年前の石器が発見されるなど遺構の調査量が増え、平成15年度中に調査を終了することはできなかった。

平成16年度は工事区27南半の調査が主体であり、４月から調査を開始し、４面調査時には縄文時代前期の集落が検出されたが、７月にこの調査区の調査が終了し上白井西伊熊遺跡の全調査が終了した。

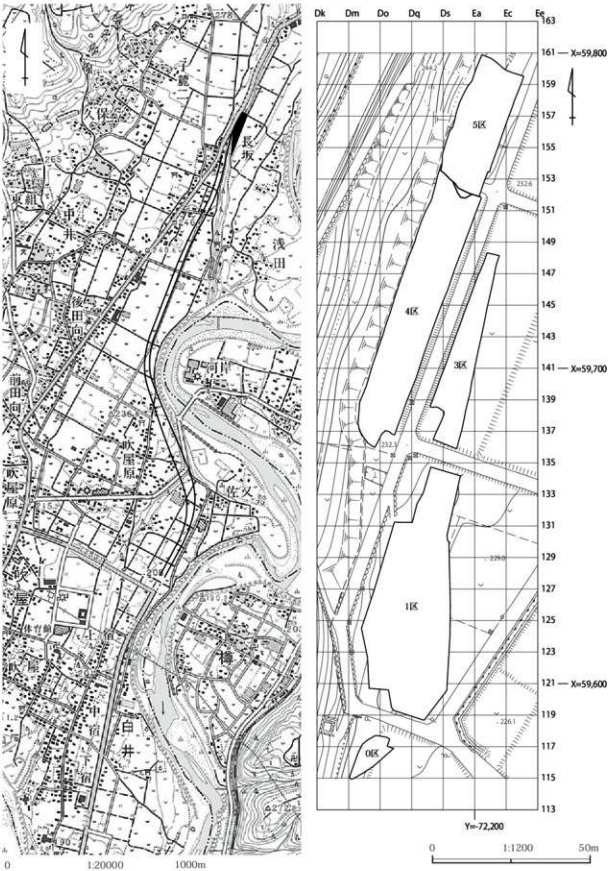
調査対象面積は合計23,986.8㎡であった。

## ２．発掘調査の方法

### （１）発掘調査区の設定

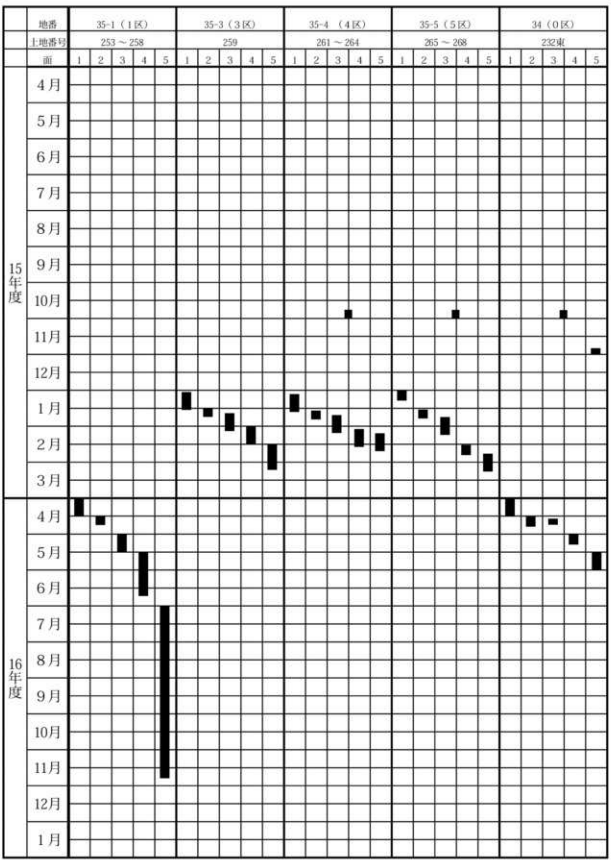
発掘調査区の名称は、工事区と同じように道路や水路を境に路線を分割し調査区名を付けた。

平成16年１月の調査開始当初は、工事区35-3 ～ 35-5までを対象とした。調査区名称は工事区No35-1、-2、-3の枝番を用い１区、２区、３区の名称を付した。また、村道を挟んだ１区南側の数十㎡の小平坦面を０区として調査を行った。２区については、斜面地である上に対象面積が狭く１面調査以下の調査が安全面からも不可能であるため、２面以下の調査は実施をしなかった。




第２図　遺跡位置及び調査区配置図

第１表　上白井西伊熊遺跡調査工程表



## （２）グリッドの設定

原点は中郷遺跡と同じＸ＝58,000m、Ｙ＝-72,500mから東西南北５m間隔で振り出したものを使用し、東から西へアルファベットの大文字小文字併記で、南から北へは算用数字を送った。南西隅の座標交点をグリッドの名称とした。(第３図参照)。

## （３）調査面の呼称

本遺跡の所在する子持村では、古墳時代における榛名山の二度の噴火に伴う軽石と火山灰が堆積しており、これらの層の上・下面の調査はもとより、古墳時代以前の土層も安定しており多面調査を免れない地域である。調査にあたっては、表土層と１mを超すFPの除去については、バックフォーを用いた。また、FP直下面は刷毛や竹箒等を用い遺構・遺物の検出を行った。

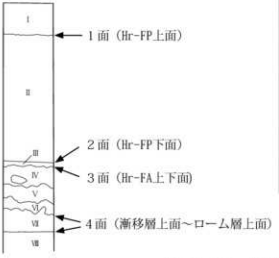
１面（FP上面）：FP降下以降～現代までの掘り込みが見られる面の調査。主に耕作に関連する土坑(耕作坑)などを検出した。

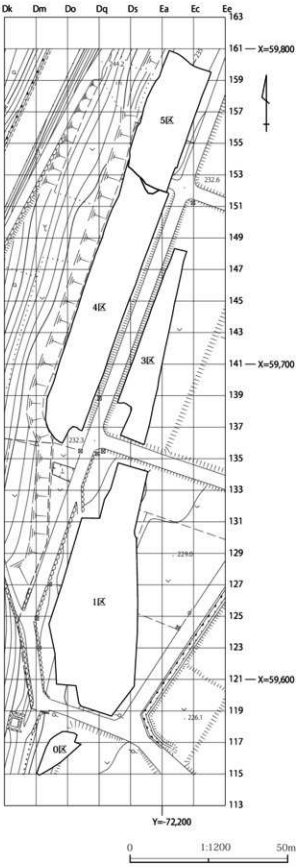
２面（FP下面）：６世紀中頃の噴火直前の地表面の調査。放牧地面を検出した。

３面（FA層の上下面）：FAとFAの撹拌土層の調査。

４面：暗褐色土からローム層上面までの調査。縄文時代の集落及び包含層を検出した。

５面：ローム層中の調査。石器製作跡を検出した。




第３図　グリッド設定及び調査面の呼称

# 第２章　地理的・歴史的環境

## 第１節　遺跡の位置と周辺の地形

上白井西伊熊遺跡は、渋川市上白井（旧子持村大字上白井、平成18年２月市町村合併）に所在しており、群馬県の中央部やや北寄りに位置する。渋川市北部の旧子持村（以下子持村と呼称する）は新潟方面に向かう国道17号と長野方面に向かう国道353号の分岐点にあたり、交通の要衝となっている。

この地域の主な産業は、蒟蒻の生産と軽量ブロックの製造であるが、これらは古墳時代の榛名山の噴火による軽石層（FP）の存在によるものである。上白井西伊熊遺跡の南西約3.5kmの所には、この軽石層に埋もれた古墳時代のムラ、黒井峯遺跡（国指定史跡）がある。

子持村は東に赤城山、西に榛名山、北に子持山・小野子山と三方を山に囲まれ、関東平野の北端部に位置している。また北から利根川、北西から吾妻川が流下し、村の南端部でそれらが合流する。山地から平野部への変換点にあたる村の南部では、利根川と吾妻川により形成された河岸段丘が発達している。これらの段丘面は形成年代の古い順に、雙林寺面、長坂面、西伊熊面、白井面、浅田面と呼ばれている。上白井西伊熊遺跡は、長坂面の崖下、浅田面より一段高い西伊熊面と呼ばれる小さな段丘面上にある。

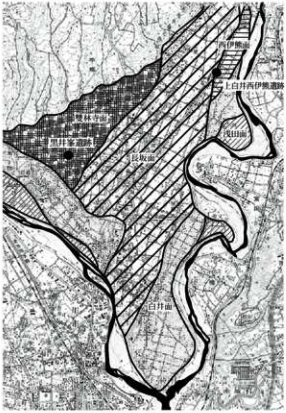
上白井西伊熊遺跡は、標高230mを測り、上位の長坂面とは26m前後、下位の浅田面とは10m前後の比高を持つ。浅田面へは圃場整備により棚田状に下がっていくが、長坂面へは急傾斜で上がる。遺跡地は、西伊熊面の南端部に位置し、段丘幅は30m前後を測る。

下層に約２万数千年前とされる前橋泥流が確認でき、この前橋泥流は南の吹屋伊勢森遺跡や更に南の吹屋犬子塚遺跡でも確認され、広範囲に堆積していることが判明した。逆に、既報告の吹屋遺跡Ⅲ区側の下の段では前橋泥流は確認できず、明瞭なAs-BP層群や４万年前の榛名八崎軽石（Hr-HP）まで連続して確認できた。

このことから、吹屋遺跡Ⅱ区・Ⅲ区境の段差付近が前橋泥流の北限で、南側の台地上は長坂面に乗る前橋泥流堆積時に形成された残丘と考えられる。

また、この地域は、古墳時代に２度の大きな火山災害に見舞われたことが特筆される。いずれも榛名山の噴火によるもので、６世紀初頭の噴火に伴う堆積物は榛名渋川テフラ（Hr-FA）と呼ばれ、６世紀中葉の噴火に伴う堆積物は榛名伊香保テフラ(Hr-FP）と呼ばれている。FPは東北地方南部まで分布が確認されている。

堆積しているFAは主に降下火山灰であるが、その中に火砕流堆積物の堆積が見られ、吾妻川を乗り越えて本地域にも到達していることが分かる。




第４図　段丘面分類図（「子持村誌上巻」参照）

上白井西伊熊遺跡のFAの堆積は薄く、明瞭に面としての調査ができたのは１区だけであった。FAの堆積は、地理的に南に行くほど厚く約３㎞南の白井二位屋遺跡では約40㎝の厚さで堆積しており、火山灰層や火砕流堆積物が明瞭に判別できる。

FPは、上白井西伊熊遺跡付近では厚さ140㎝前後が残存している。子持村はFPの降下した範囲の中心軸上に位置しており、黒井峯遺跡では最大200㎝に及ぶ堆積が認められる。なお、遺跡は噴火口に当たる榛名山二ッ岳から北東へ約14㎞の位置に所在している。

## 第２節　周辺の遺跡

上白井西伊熊遺跡が所在する子持村とその周辺は、古墳時代の榛名山の噴火によるFPの堆積が厚いため、古墳時代以前の遺跡の確認が難しくなっていた。しかし、近年道路開発等で調査事例が増え、旧石器時代から近世に至るまで各時代を通して多くの遺跡がある事が分かってきた。更にFPにパックされる事により遺跡の保存状態が良く、どの遺跡の調査でも新たな発見があり特に注目される地域でもある。

旧石器時代の遺跡は、道路建設が集中する長坂面での調査例が多くなり、吹屋犬子塚遺跡(14)で浅間白糸降下軽石(As-Sr)下、浅間板鼻褐色軽石(As-BP)下の石器群を、吹屋中原遺跡(15)で浅間板鼻黄色軽石(As-YP)下の石器群を確認している。国道17号鯉沢バイパス関連でも吹屋遺跡(４)でAs-YP下、中郷遺跡(３)でAs-BP下、当遺跡(１)でAs-SrからAs-BPにかけての石器群が検出された。

縄文時代に入ると調査遺跡も多くなり、各段丘面で遺跡が発見されるようになっている。白井北中道遺跡(８)、白井十二遺跡(５)で草創期の調査がなされている。前期の遺跡は、集落規模はあまり大きくはないが調査例が増えている。吹屋犬子塚遺跡(14)、吹屋中原遺跡(15)、吹屋遺跡(４)、中郷遺跡(３)、当遺跡(１)、白井十二遺跡(５)、白井北中道Ⅲ遺跡(６)、黒井峯遺跡(22)、押手遺跡(24)などで集落の調査が行われている。また利根川の対岸の旧赤城村でも見立溜井遺跡(40)、諏訪西遺跡(41)、中畦遺跡(42)、三原田城遺跡(43)などの集落遺跡がある。中期では利根川の対岸の三原田遺跡(45)や房谷戸遺跡(44)などと同様な大規模集落が中郷遺跡(３)で検出されている。

古墳時代前期の遺跡は、吹屋糀屋遺跡(19)、中郷田尻遺跡(18)、白井北中道Ⅲ遺跡(６)などで集落が検出されている。FA直下（６世紀初頭）の遺跡では北牧相ノ田遺跡(31)、北牧大境遺跡(20)、吹屋瓜田遺跡(21)などで水田が調査された。FP直下（６世紀中葉）の遺跡では黒井峯遺跡(22)、西組遺跡(23)、押手遺跡(24)、田尻遺跡(26)などで、集落・墳墓・水田・畠が検出され、当時の集落構造の解明に貴重な資料となっている。FA直下で水田が検出された前述の各遺跡ではFP直下でも水田が確認されている。さらにFP直下では白井地区、吹屋地区などで馬の放牧地が広範囲に確認されている。FP下の古墳では、中ノ峯古墳(48)、浅田遺跡(35)、伊熊・有瀬古墳群(50)などが調査されている。FP降下以降になると群集墳が数多く作られている。吹屋伊勢森遺跡に近い大塚（稲荷塚）(53)、笄塚(54)は古墳でない可能性もある。

第５図　周辺遺跡位置図（1:25,000）（丸印は古墳）

第２表　周辺遺跡一覧表

| | 遺跡名 | 概要 | 文献 |
|---|---|---|---|
| 1 | 上白井西伊熊遺跡 | 旧石器製作跡、縄文集落、FP下放牧地 | 本書 |
| 2 | 吹屋伊勢森遺跡 | 縄文前期集落、FP下畠・放牧地 | 50 |
| 3 | 中郷遺跡 | 縄文前・中期集落、FP下放牧地 | 15,16 |
| 4 | 吹屋遺跡 | 旧石器製作跡、縄文前期集落、FP下放牧地 | 51 |
| 5 | 白井十二遺跡 | 縄文草創期・前期、FP下放牧地 | 15-17,52 |
| 6 | 白井北中道Ⅱ遺跡 | 縄文前期、古墳前期集落、FP下放牧地 | 14,15 53 |
| 7 | 白井北中道Ⅱ遺跡 | FP下畠・放牧地 | 17 |
| 8 | 白井北中道遺跡 | 縄文草創期遺物、FP下放牧地 | 19,20 |
| 9 | 白井丸岩遺跡 | FP下放牧地 | 19,20 |
| 10 | 白井南中道遺跡 | FP下放牧地、奈良平安集落 | 20,22 |
| 11 | 白井二位屋遺跡 | FP下放牧地、奈良平安集落 | 21,23 |
| 12 | 白井大宮遺跡 | FP下放牧地 | 24 |
| 13 | 渡屋遺跡 | 古墳前期集落 | 25 |
| 14 | 吹屋犬子塚遺跡 | 縄文前期集落、FA下水田、FP下放牧地 | 17 |
| 15 | 吹屋中原遺跡 | 縄文前・中期集落、FP下畠・放牧地 | 17 |
| 16 | 中郷虫久保遺跡 | 4c～5c集落、FA・FP下水田・畠 | 11～13 |
| 17 | 吹屋三角遺跡 | FA下水田、FP下水田 | 11 |
| 18 | 中郷田尻遺跡 | 古墳5c集落、FA・FP下水田他 | 16 |
| 19 | 吹屋稲屋遺跡 | 古墳5c集落、FA・FP下水田他 | 13 |
| 20 | 北牧大境遺跡 | FA・FP下水田、平安集落 | 26 |
| 21 | 吹屋瓜田・鰹沢瓜田遺跡 | FA下水田、FP下水田 | 27,28 |
| 22 | 黒井峯遺跡 | 縄文集落、FP下集落・古墳・水田他 | 29 |
| 23 | 西垣遺跡 | FP下集落・水田・畠 | 30 |
| 24 | 押手遺跡 | 縄文集落、FP下集落・畠 | 31 |
| 25 | 獅野遺跡 | FP下畠 | 32 |
| 26 | 田尻遺跡 | 縄文集落、FP下集落・古墳・畠 | 3～15 |
| 27 | 八幡神社遺跡 | FP下集落・畠 | 3 |
| 28 | 中堀遺跡 | FP下道・畠 | 2 |
| 29 | 池田沢東遺跡 | FP下道・畠 | 1 |
| 30 | 丸子山遺跡 | FP下・FP上古墳 | 4 |
| 31 | 北牧相ノ田遺跡 | FA下水田、FP下水田 | 33 |
| 32 | 畑中遺跡 | FA下水田、FP下水田 | 4 |
| 33 | 後田遺跡 | FP下水田 | 25 |
| 34 | 源空寺裏遺跡 | FP下放牧地 | 3 |
| 35 | 浅田遺跡 | FP下古墳 | 9,10 |
| 36 | 白郷井中学校庭遺跡 | 古墳時代集落 | 34 |
| 37 | 猫持久保遺跡 | FP下道・畠 | 35 |
| 38 | 宮田諏訪原遺跡 | FA下祭祀、FP下道・畠 | 35 |
| 39 | 宮田畦畔遺跡 | FP下水田 | 35 |
| 40 | 見立原井遺跡 | 旧石器、縄文前・中期集落 | 36 |
| 41 | 諏訪西遺跡 | 旧石器、縄文前・中期集落 | 37 |
| 42 | 中畑遺跡 | 旧石器、縄文前期集落 | 37 |
| 43 | 三原田城遺跡 | 縄文前期集落 | 38 |
| 44 | 厚谷戸遺跡 | 旧石器、縄文中期集落 | 39 |
| 45 | 三原田遺跡 | 縄文前期～後期集落 | 40 |
| 46 | 樽遺跡 | 弥生時代集落 | 41 |
| 47 | 坂之下遺跡 | FA下水田 | 42 |
| 48 | 中ノ峯古墳 | FP下古墳 | 43 |
| 49 | 白井古墳群 | FP上古墳 | 44 |
| 50 | 伊熊・有瀬古墳群 | FP上古墳 | 45 |
| 51 | 河岸古墳群 | FP上古墳 | 45 |
| 52 | 坂下町古墳群 | FA下古墳 | 46 |
| 53 | 大塚（稲荷塚） | FP上古墳？、長尾村14号 | 45 |
| 54 | 笄塚 | 古墳？、長尾村15号 | 45 |
| 55 | 金井製鉄遺跡 | 平安製鉄跡 | 47 |
| 56 | 東町関下遺跡 | 中～近世水田 | 48 |
| 57 | 白井城跡 | 中・近世城跡 | 44,49 |
| 58 | 仁谷屋城跡 | 中世城跡 | 49 |
| 59 | 白井上城跡 | 中世城跡 | 49 |

文献


1 『年報７』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
2 『年報８』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1989
3 『年報11』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992
4 『年報12』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993
5 『年報13』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
6 『年報14』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1995
7 『年報15』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996
8 『年報16』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997
9 『年報17』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998
10 『年報18』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
11 『年報19』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　2000
12 『年報20』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　2001
13 『年報21』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002
14 『年報22』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003
15 『年報23』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004
16 『年報24』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005
17 『年報25』 群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006
18 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』第１冊、第２冊　群埋文　1996、1998
19 『白井遺跡群－縄文時代編－』 群埋文　1998
20 『白井遺跡群－古墳時代編－』 群埋文　1997
21 『白井遺跡群－集落編Ⅰ－』 群埋文　1994
22 『白井遺跡群－集落編Ⅱ－』 群埋文　1996
23 『白井遺跡群－中世編－』 群埋文　1993
24 『白井大宮遺跡』、『白井大宮遺跡Ⅱ』 群埋文　1993、2002
25 子持村教育委員会石井克己氏のご教示による。
26 『北牧大境遺跡』 群埋文　2004
27 『吹屋瓜田遺跡』 群埋文　1996
28 『鰹沢瓜田遺跡』 子持村教育委員会　2000
29 『黒井峯遺跡発掘調査報告書』 子持村教育委員会　1991
30 『西垣遺跡発掘調査報告書』 子持村教育委員会　1985
31 『押手遺跡発掘調査概報』 子持村教育委員会　1987
32 『群馬県史　資料編２』 群馬県史編さん委員会　1986
33 『北牧相ノ田遺跡』 子持村教育委員会　2000
34 『群馬県遺跡台帳Ⅰ　西毛編』 群馬県教育委員会　1971
35 『宮田諏訪原遺跡Ⅲ・猫持久保遺跡』 赤城村教育委員会　2004
36 『見立溜井遺跡』 赤城村教育委員会　1985
37 『中畦遺跡・諏訪西遺跡』 群埋文　1986
38 『三原田城遺跡』 群埋文　1987
39 『厚谷戸遺跡Ⅰ』、『厚谷戸遺跡Ⅱ』 群埋文　1989、1992
40 『三原田遺跡』第１～３巻　群馬県企業局　1980～1992
41 杉原荃介「上野樽遺跡調査概報」「考古学」第10巻第10号1939
42 『坂之下遺跡』 渋川市教育委員会　1988
43 『中ノ峯古墳発掘調査報告書』 子持村教育委員会　1980
44 『子持村誌　上巻』 子持村誌編さん室　1987
45 『上毛古墳綜覧』 群馬県　1938
46 『北群馬・渋川の歴史』 北群馬・渋川の歴史編さん委員会　1971
47 『金井製鉄遺跡発掘調査報告書』 渋川市教育委員会　1988
48 『東町関下遺跡』 群埋文　1998
49 山崎　一 『群馬県古城塁址の研究』 1972
50 『吹屋伊勢森遺跡』 群埋文　2006
51 『吹屋遺跡』 群埋文　2007
52 『白井十二遺跡』 群埋文　2008
53 『白井北中道Ⅲ遺跡』 群埋文　2009

# 第３節　基本土層

上白井西伊熊遺跡の乗る西伊熊面は、発掘調査の鍵層となる榛名山や浅間山の噴火火山灰・軽石などが堆積し、土層観察に適した地である。

今回の発掘調査で確認できた火山灰は、浅間山噴火火山灰の浅間板鼻褐色軽石（As-BP層群）、浅間白糸降下軽石（As-Sr）、浅間板鼻黄色軽石（As-YP）等が確認できた。(『上白井西伊熊遺跡』旧石器時代編参照)

また、ローム上層には榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)が堆積している。その他にHr-FA下層の黒褐色土中に榛名有馬テフラか浅間Ｃ軽石か詳細が不明な軽石が見られた。

Ⅰ層：表土。黒褐色土。Hr-FPを多量に含む。

Ⅱ層：榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、６世紀中葉)。層厚110 ～ 200cm。

Ⅲ層：褐灰色土。Ⅳ層起源の撹拌土壌。

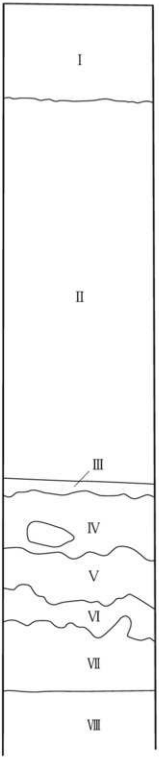
Ⅳ層：榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA、６世紀初頭)。

Ⅴ層：黒色土。白色・黄色軽石(２mm前後）を含む。

Ⅵ層：褐色～にぶい黄褐色土。淡色黒ボク土。

Ⅶ層：にぶい黄褐色土。ローム漸移層。

Ⅷ層：明黄褐色土。固く締まったローム層。浅間板鼻黄色軽石（As-YP、約1.3～1.4万年前）の小ブロック含む。




第６図　基本土層

# 第３章　１面の調査(Hr-FP上面)

## 第１節　調査の概要

上白井地区は昭和40年代に圃場整備が実施され、群馬用水の敷設により大規模な水田化が行われた。しかし、現在は下層に厚く堆積するFPの影響で水はけが良すぎるために、大半の水田は蒟蒻畑へと切り替わっている。

圃場整備は、基本的には旧地形を利用した造成工事であり、地形に沿って切り土と盛り土の造成が行われるため、傾斜地となる当地区では水田が階段状に造られている。

１面の調査は、まず重機を用いて30cm前後の表土の除去から行い、FP層上面を出すことから始めるが、遺跡地は段丘崖下にあり大型掘削機械の搬入に苦労した。

４区及び５区は段丘崖下であるためFP層上面は傾斜を持ち、斜面部や上位段丘からの崩落などにより二次堆積のFPも見られた。

１面の調査はこのFP層上面の遺構確認から行うわけであるが、大小様々な軽石の上をジョレンで精査するためジョレンが撥ねたり、遺構内の黒色土を掻きだした際に黒色土が外の軽石の間につまり、範囲が不明瞭となったりと確認作業に手間のかかる調査となった。また、調査中も遺構掘り下げ、写真撮影用の清掃、図化記録等の作業の際に遺構確認面の軽石が崩れることが多く、各作業の手際の良さが求められた。さらに、黄白色軽石層が地山であるため常に調査区全面に雪が降ったような状況となり、晴天の日には照り返しが眩しく写真撮影など曇り空を望むほどであった。

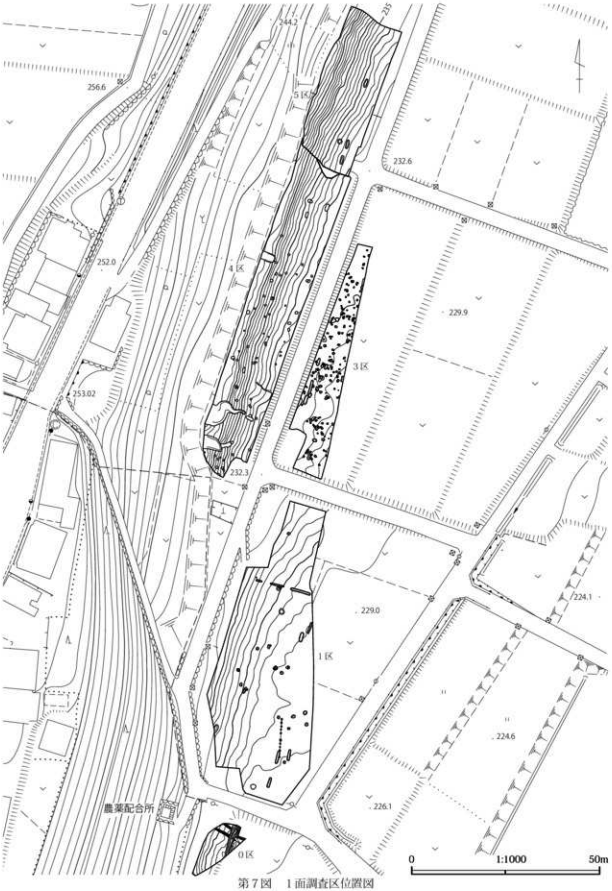
## 第２節　検出された遺構

１面で検出される遺構は、６世紀中頃の榛名山噴火(FP)以降から現代までの約1,500年間に掘り込まれたものである。その痕跡が表土下に厚く堆積しているFP上面で確認できるわけである。

当遺跡の１面で検出した主な遺構は、土坑・耕作坑・溝などである。白井北中道遺跡のような竪穴住居や掘立柱建物等は検出されず、古代の集落などの様相は確認されなかった。

**耕作坑**：土坑の中で特定の要件を満たすものについてこの名称を用いた。形状は溝状もしくは細長い楕円形を呈し、長さは大半のものが１m以上で、長いものでは８mを超える長大なものもある。幅は概ね人が一人入れる0.5～0.8m程度が多く、断面形はU字状を呈する。耕作坑の掘られる位置としては、圃場整備前の道際に平行するように掘られるものがほとんどである。深さは、FP中で止まるものとFPを掘り抜き下層の黒色土まで達するものがある。また、埋没土は、二次堆積のくすんだ軽石、黒色土、黒色土との混土、FPと黒色土が互層に堆積するものなど様々である。

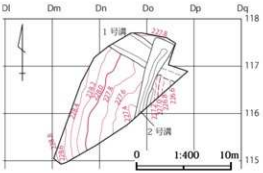
耕作坑については、鯉沢バイパス白井遺跡群の発掘調査時に、遺跡周辺に在住の方々に聞き取り調査を行い、近年に至るまで畑の境界に沿って土坑を掘り、冬季に芋類やごぼうなどの根菜類を貯蔵していた例があることが確認できている。また、白井遺跡群の調査では、これらの土坑から出土する遺物は江戸時代後期のものが主体であり、遺構の上限をこの時期と捉えている。




第７図　１面調査区位置図

## 1　０区の検出状況（第８図）

重機によりFP混じりの黒色土である表土の除去後にFP面を確認した。調査区は狭く、圃場整備によりFP面は削られていた。溝２条の他に耕作坑及び道跡などは検出されなかった。



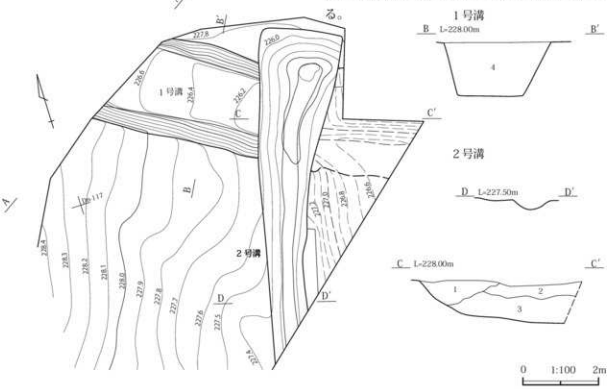

第８図　０区　全体図

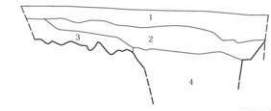
**１号溝**（第９図　Pl. ２）

**位置**：Dn-117・Do-117グリッド　**形状**：断面逆台形状　**規模**:上幅2.80m、下幅1.75m　**残存深度**:1.40m　**主軸方位**:Ｅ－31°－Ｓ　**埋没土**：FPを主体として黒色土を乱れた状態で含む土層　**重複**：東側で２号溝に壊されている。　**所見**：覆土上層から近現代と見られる出土物があることから近現代の所産である。

**２号溝**（第９図　Pl. ２）

**位置**：Do-116・117グリッド　**形状**：断面逆台形状と考えられる。　**規模**：不明　**主軸方位**:Ｎ－13°－Ｅ　**埋没土**：FPを主体として黒色土を乱れた状態で含む土層　**重複**：１号溝を壊している。　**所見**：覆土上層の出土物の状況から現代の所産と見られる。




1号溝
1：黒 色 土　FPの割合が20％を占める現耕作土。
2：黒褐色土　FPの割合が30％を占め、しまりが弱く色調が１層より明るい。
3：黒褐色土　FPの割合が50％を占め、１・２層よりもしまりが強い。
4：灰色軽石層　FP主体で、黒色土を20％程度不規則に含む乱れた軽石層。
FP純層と比較してしまりが弱く、10 ～ 26cm程度の層厚に互層を呈する。

2号溝
1：黒褐色土　FPを10％程度互層に含み、しまりがない層。
2：黒褐色土　１層に類似するが層の乱れが強い。
3：灰色軽石層　黒色土ブロックを含む乱れの強い層。

第９図　０区　１・２号溝

## ２　１区の検出状況（第10図　PL．3）

段丘崖下に位置し、圃場整備により段丘崖側を通る村道から２ｍ近く下がり、一度は水田化され、その後蒟蒻畑に転化した土地である。FP面は傾斜を持ち、西側の崖側と東側の平坦面までは２ｍの比高を持つ。

検出遺構は耕作坑や土坑、その他に柵列等を検出した。

### （１）耕作坑

耕作坑は９基検出した。調査区南端の14号・15号耕作坑や北よりの28号・37号・39号耕作坑は直線的に並び、15号・16号や25号・26号耕作坑は平行する。道跡は検出できなかったが、他遺跡における調査例から耕作坑と併走する道があったと考えられる。

**14号耕作坑**（第11図　PL．3）

**位置**：Dq-119・120グリッド　**形状**：長楕円形　**規模**：長軸2.68m、短軸0.66m　**残存深度**：0.30m　**主軸方位**：N－18°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし

**15号耕作坑**（第11図　PL．3）

**位置**：Dq-120・121グリッド　**形状**：長楕円形　**規模**：長軸3.47m、短軸0.62m　**残存深度**：0.55m　**主軸方位**：N－13°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし

**16号耕作坑**（第11図　PL．4）

**位置**：Dr-121グリッド　**形状**：長楕円形　**規模**：長軸3.04、短軸0.66m　**残存深度**：0.36m　**主軸方位**：N－10°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし

**25号耕作坑**（第11図　PL．4）

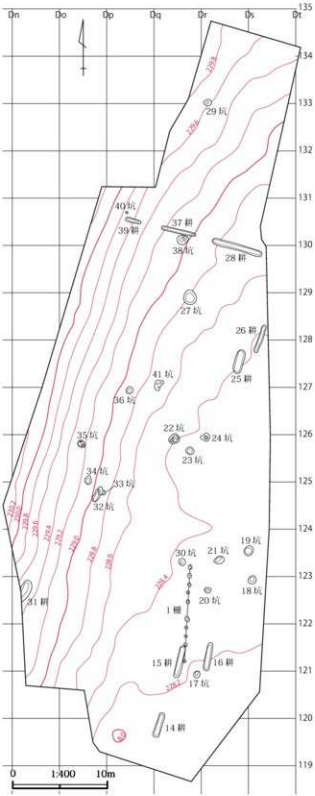
**位置**：Dr-127グリッド　**形状**：長楕円形　**規模**：長軸2.58m、短軸0.94m　**残存深度**：0.63m　**主軸方位**：N－15°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし

**26号耕作坑**（第11図　PL．4）

**位置**：Ds-127・128グリッド　**形状**：長楕円形　**規模**：長軸3.14m、短軸0.53m　**残存深度**：0.22m　**主軸方位**：N－19°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし

**28号耕作坑**（第12図　PL．4）

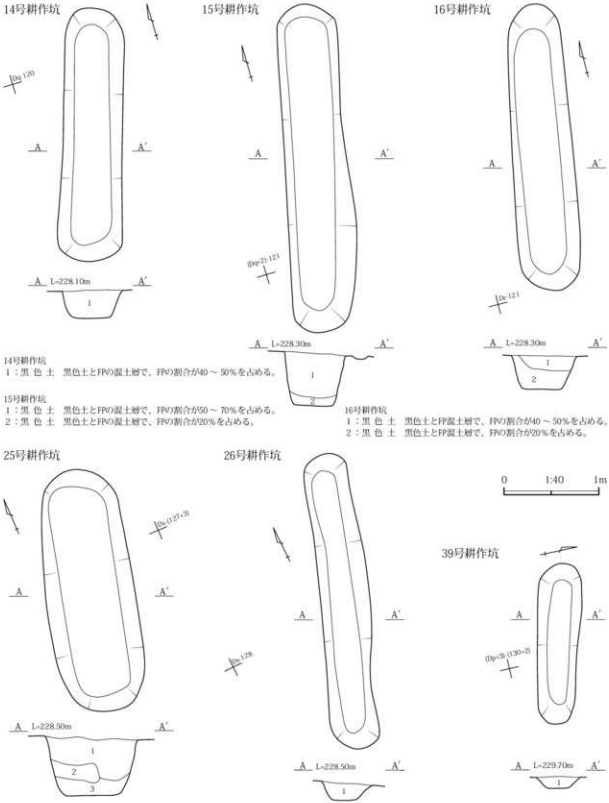
**位置**：Dr-129・130・Ds-129グリッド　**形状**：長楕円形　**規模**：長軸5.47m、短軸0.65m　**残存深度**：0.15m　**主軸方位**：N－15°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし




第10図　１区　全体図

**31号耕作坑**（第12図　PL．4）

**位置**：Dn-122グリッド　**形状**：不整楕円形　**規模**：




14号耕作坑
１：黒 色 土　黒色土とFPの混土層で、FPの割合が40 ～ 50％を占める。

15号耕作坑
１：黒 色 土　黒色土とFPの混土層で、FPの割合が50 ～ 70％を占める。
２：黒 色 土　黒色土とFPの混土層で、FPの割合が20％を占める。

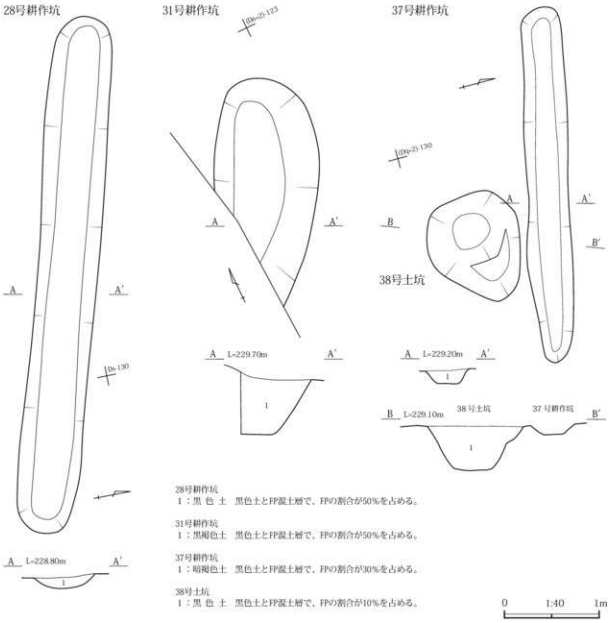
16号耕作坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が40 ～ 50％を占める。
２：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が20％を占める。

25号耕作坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が50％を占める。
２：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が30％を占める。
３：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が70％を占める。

26号耕作坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が50％を占める。

39号耕作坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が30％を占める。

第11図　１区　14 ～ 16・25・26・39号耕作坑




第12図　１区　28・31・37号耕作坑・38号土坑

長軸(2.35)m、短軸1.11m　**残存深度**：0.58m　**主軸方位**：N－27°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし

**37号耕作坑**（第12図　PL. 6）

**位置**：Dq-130グリッド　**形状**：長楕円形　**規模**：長軸3.75m、短軸0.47m　**残存深度**：0.16m　**主軸方位**：N－13°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし

**39号耕作坑**（第11図　PL. 4）

**位置**：Dp-130グリッド　**形状**：長楕円形　**規模**：長軸1.71m、短軸0.47m　**残存深度**：0.12m　**主軸方位**：E－14°－S　**遺物**：なし　**重複**：なし

（２）土坑

19基検出した。調査区南寄りに17号～21号・30号土坑の６基を、中央部で22号～24号、32号～36号及び41号土坑の９基を確認し、北寄りで27号、38号・40号、北端で29号土坑を検出した。

**17号土坑**（第13図　PL. 4）

**位置**：Dq-120グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.67m　**残存深度**：0.47m　**遺物**：なし　**重複**：なし

**18号土坑**（第13図　PL. 4）

**位置**：Ds-122グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.83

m　残存深度：0.65m　遺物：なし　重複：なし

**19号土坑**（第13図　PL．5）

位置：Dr-123・Ds-123グリッド　形状：円形　規模：径0.92m　残存深度：0.95m　遺物：なし　重複：なし

**20号土坑**（第13図　PL．5）

位置：Dr-122グリッド　形状：楕円形　規模：長軸0.71m、短軸0.57m　残存深度：0.59m　遺物：なし　重複：なし　所見：柱痕状の土層が観察されることから柱穴の可能性が高い。

**21号土坑**（第13図　PL．5）

位置：Dr-123グリッド　形状：楕円形　規模：長軸1.15m、短軸0.78m　残存深度：0.80m　埋没土：FPと黒色土の混土層　遺物：なし　重複：なし

**22号土坑**（第13図　PL．5）

位置：Dq-125グリッド　形状：不整形　規模：長軸1.16m、短軸0.98m　残存深度：0.46m　遺物：なし　重複：なし

**23号土坑**（第13図　PL．5）

位置：Dq-125グリッド　形状：円形　規模：径0.77m　残存深度：0.26m　遺物：なし　重複：なし

**24号土坑**（第13図　PL．5）

位置：Dr-125グリッド　形状：不整楕円形　規模：長軸0.99m、短軸0.87m　残存深度:0.75m　遺物：なし　重複：なし　所見：鍋底状の底面中央にピット状に深くなる。柱痕状の土層は観察されなかったが柱穴の可能性がある。

**27号土坑**（第14図　PL．5）

位置：Dq-128グリッド　形状：円形　規模：径1.39m　残存深度:0.65m　遺物：なし　重複：なし

**29号土坑**（第14図　PL．5）

位置：Dr-133グリッド　形状：円形　規模：径0.69m　残存深度:0.88m　遺物：なし　重複：なし

**30号土坑**（第14図　PL．6）

位置：Dq-123グリッド　形状：不整円形　規模：径0.76m　残存深度:0.74m　遺物：なし　重複：なし

**32号土坑**（第14図　PL．6）

位置：Do-124グリッド　形状：楕円形　規模：長軸(1.56)m、短軸0.59m　残存深度：0.36m　主軸方位：N－26°－E　遺物：なし　重複：なし

**33号土坑**（第14図　PL．6）

位置：Do-124グリッド　形状：不整形　規模：長軸0.94m、短軸0.55m　残存深度：0.59m　遺物：なし　所見：平面形および底面形状から２基のピットの重複である可能性が高い。

**34号土坑**（第14図　PL．6）

位置：Do-125グリッド　形状：不整円形　規模：径0.75m　残存深度:0.32m　遺物：なし　重複：なし

**35号土坑**（第14図　PL．6）

位置：Do-125グリッド　形状：不整円形　規模：径0.72m　残存深度：0.17m　遺物：なし　重複：なし

**36号土坑**（第14図　PL．6）

位置：Dp-126グリッド　形状：円形　規模：径0.67m　残存深度：0.79m　遺物：なし　重複：なし

**38号土坑**（第12図　PL．6）

位置：Dq-130グリッド　形状：隅丸方形　規模：長辺0.76m、短辺0.67m　残存深度：0.77m　遺物：なし　重複：なし

**40号土坑**（第14図　PL．6）

位置：Dp-130グリッド　形状：円形　規模：径0.24m　残存深度：0.34m　遺物：なし　重複：なし

**41号土坑**（第14図　PL．7）

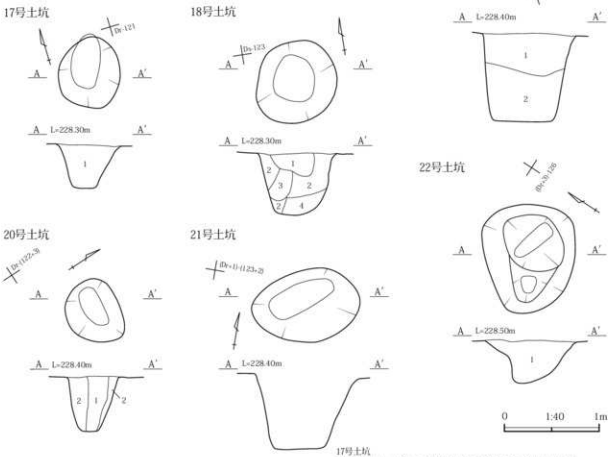
位置：Dq-127グリッド　形状：不整形　規模：長軸1.15m、短軸0.54m　残存深度：0.65m　遺物：なし　所見：平面形および底部の状況から３基のピットの重複の可能性が高い。

（３）１号柵列（第15図　PL．7）

調査区南よりの位置に同規模のピットが直線状に検出されたので柵列と判断した。

位置：Dq-121 ～ 123グリッド　規模：10.40m、ピット径0.3 ～ 0.62m　残存深度：0.1 ～ 0.28m、ピット間0.86 ～ 0.97m(平均0.91m)　主軸方位：N－5°－E　遺物：なし　重複：15号耕作坑と重複す

る。　**所見**：重複関係から耕作坑よりも古い段階に構築された遺構と考えられるが、構築されている位置や方位は耕作坑と類似する部分もあり、耕作坑に沿って想定される道跡に関連して構築されたものである可能性がある。




17号土坑
1：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が30％を占める。

18号土坑
1：黒褐色土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が30％を占める。
2：FP土体の層。
3：黒褐色土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が50％を占める。
4：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が20％を占める。

19号土坑
1：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が70％を占める。
2：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が80％を占める。

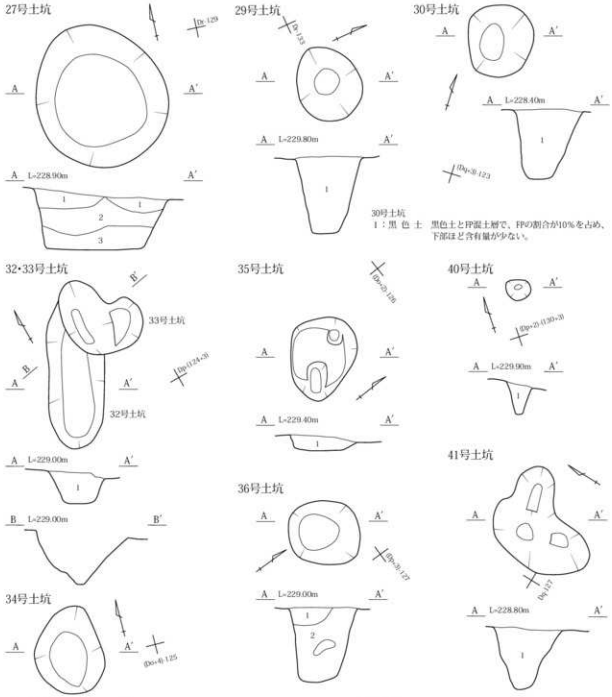
20号土坑
1：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が20％を占める。
2：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が40 ～ 50％を占める。

22号土坑
1：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が20％を占める。

23号土坑
1：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が10％を占める。

24号土坑
1：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が10％を占める。
2：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が30％を占める。

第13図　１区　17 ～ 24号土坑




30号土坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が10％を占め、下部ほど含有量が少ない。

27号土坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が40 ～ 50％を占める。
２：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が80％を占める。
３：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が30％を占める。

29号土坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が10％を占める。

32号土坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が10％を占める。

34号土坑
１：黒褐色土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が20％を占める。

35号土坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が20％を占める。

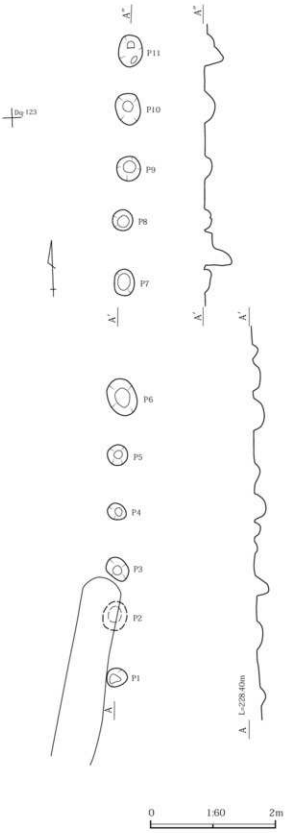
36号土坑
１：黒褐色土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が30％を占める。
２：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が10％を占める。

40号土坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が50％を占める。

41号土坑
１：黒 色 土　黒色土とFP混土層で、FPの割合が40％を占める。

第14図　１区　27・29・30・32 ～ 36・40・41号土坑

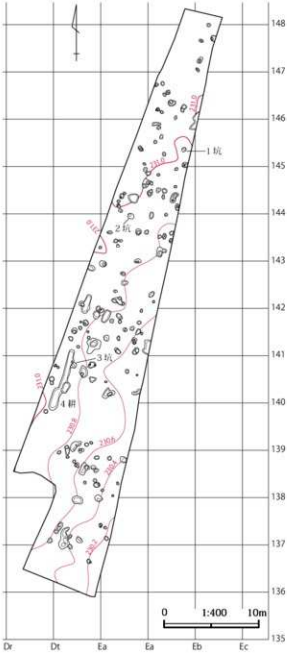
１号柵列




第15図　１区　１号柵列

## ３　３区の検出状況（第16図　PL．7）

１区と東西方向の農道を挟んだ北側の調査区であり、１区同様段差を持つ蒟蒻畑内に位置する。多数の不整形のピット状の落ち込みを検出したが、大半が桑根の入ったものや斜めに黒色土が入ったものばかりで、遺構と判断したものは耕作坑１基、土坑３基だけである。耕作坑が検出されたが、脇に想定される道跡は１区同様に検出されなかった。




第16図　３区　全体図

（１）耕作坑

耕作坑は４号耕作坑とした１基のみであるが、その北側に長方形をした２基の掘り込みもある。

**４号耕作坑**（第17図　PL．７）

**位置**：Dr-139・140・Dt-139 ～ 141グリッド　**形状**：変形の長楕円形　**規模**：長軸6.73m、短軸0.66m　**残存深度**：0.41m　**主軸方位**：N－15°－E　**遺物**：なし　**重複**：３号土坑を壊している。　**所見**：平面形状から長軸4.69mほどの隅丸長方形の耕作坑と、長軸2.50mほどの楕円形の耕作坑の重複と考えられるが、充填していた土層が類似するものであるため、新旧関係は明らかでない。

（２）土坑

**１号土坑**（第18図　PL．７）

**位置**：Eb-145グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.47m　**残存深度**：0.83m　**遺物**：なし　**重複**：なし

**２号土坑**（第18図　PL．８）

**位置**：Dt-143グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.62m　**残存深度**：0.58m　**遺物**：なし　**重複**：なし

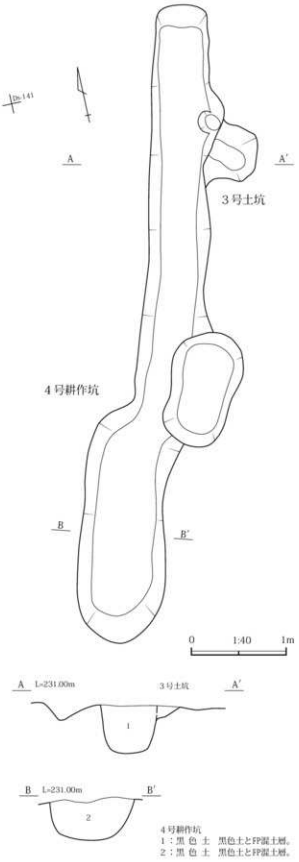
**３号土坑**（第17図　PL．８）

**位置**：Dt-140グリッド　**形状**：不明　**規模**：不明　**遺物**：なし　**重複**：４号耕作坑によって西側が壊されている。

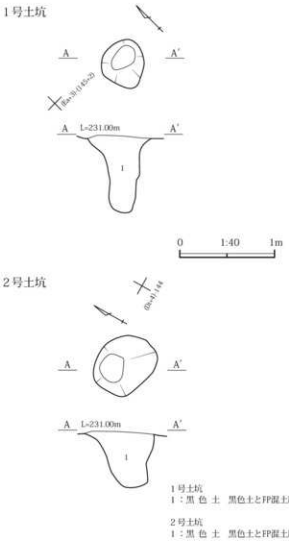
## ４　４区の検出状況（第19図　PL．８）

４区は段丘崖下の調査区であり、現況でも緩斜面であったが、FP上面は更に傾斜がきつくなり、比高は2.6mほどもある。調査区南端でFP面が流失した箇所を確認した。

検出遺構は、耕作坑や道、土坑等は検出できず、ピット状の落ち込みが散在していた。このピット状の落ち込みは腐りかけた桑根が入ったものや斜めに黒色土の入ったものばかりであり、人為的な要素が看取できないため、遺構としては扱わなかった。




第17図　３区　４号耕作坑・３号土坑




第18図　３区　１・２号土坑

## 5　５区の検出状況（第20図　PL．9）

５区は４区北側の段丘崖下の調査区である。Ⅳ区同様FP面は傾斜し、3.6mほどの比高がある。

検出遺構は斜面部下側で４基の土坑を検出したほかは、特に特筆すべき遺構の検出はなかった。検出した４基の土坑のうち３基が形状などから耕作坑と判断した。

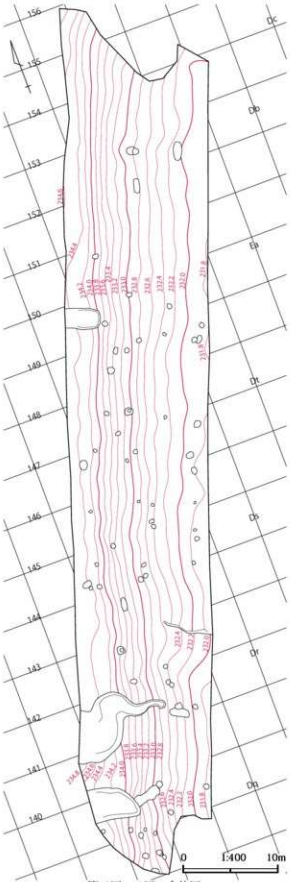
（１）耕作坑

５号・６号耕作坑は近接し、８号はやや離れているがほぼ直線的に並んで検出された。

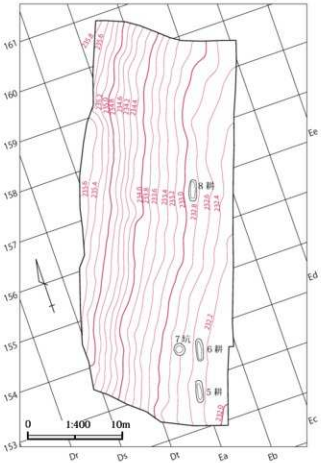
**５号耕作坑**（第21図　PL．9）

**位置**：Dt-152・Ea-152グリッド　**形状**：長楕円形

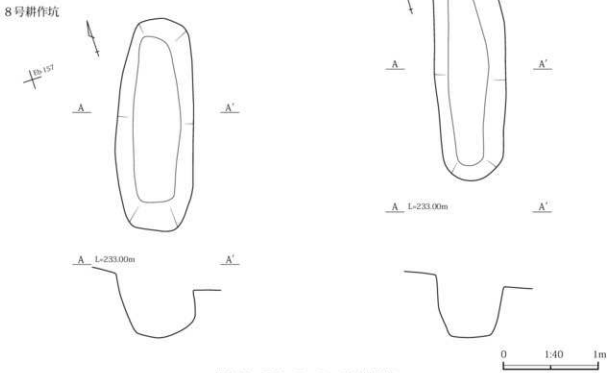
**規模**：長軸2.38m、短軸0.77m　**残存深度**:0.62m




第19図　４区　全体図




第20図　5区　全体図




第21図　5区　5・6・8号耕作坑

**主軸方位**：N－12°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし

**６号耕作坑**（第21図　PL.9）

**位置**：Ea-153グリッド　**形状**：長楕円形　**規模**：長軸2.38m、短軸0.75m　**残存深度**：0.66m　**主軸方位**：N－14°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし

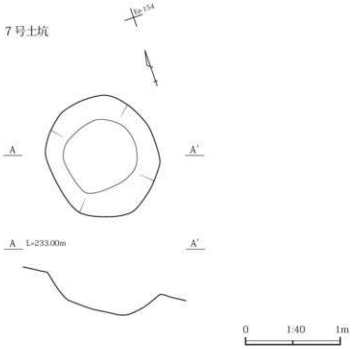
**８号耕作坑**（第21図　PL.9）

**位置**：Eb-156グリッド　**形状**：隅丸長方形　**規模**：長辺2.27m、短辺0.83m　**残存深度**：0.68m　**主軸方位**：N－20°－E　**遺物**：なし　**重複**：なし

（２）土坑

**７号土坑**（第22図　PL.9）

**位置**：Dt-153グリッド　**形状**：円形　**規模**：径1.14m　**残存深度**：0.45m　**埋没土**：FPを多く含む黒色土が入る。　**遺物**：なし　**重複**：なし




第22図　５区　７号土坑

# 第４章　２面の調査(Hr-FP下面)

## 第１節　調査の概要

２面の調査は、FPで埋没した古墳時代の地表面の調査であり、火山災害時の姿がそのまま残されていることが最大の特徴である。上白井西伊熊遺跡の南西方向にある黒井峯遺跡や西組遺跡などの調査では、竪穴住居や平地式建物、家畜小屋、芝垣、道等が軽石にパックされ上部構造なども含めて立体的に残されていた。これらの調査を通してこれまで推定の域を出なかった、当時の建物の構造や１軒の建物構成、集落構造などの視覚的検証が可能となった。

今回の事業である鯉沢バイパス建設関連の発掘調査では、利根川右岸部の白井・長坂および西伊熊の各段丘面を南北に貫くように調査を行ったわけであるが、同じFP直下の調査でありながら黒井峯遺跡などのような集落は検出されず、広範囲にわたって馬の放牧地や畠が検出された。これらの畠や馬の放牧地は、FA降下(６世紀初頭)後からFP降下(６世紀中葉)までの限られた時間内で形成されたものであり、黒井峯遺跡で検出された集落とほぼ同時存在したと見てよいものである。下位段丘の浅田面からは、浅田１号墳のようにFPに埋もれた古墳が検出された場所もあり、上白井西伊熊遺跡をはじめとした鯉沢バイパス関連の調査成果と、黒井峯遺跡、浅田古墳などの調査成果を合わせて検討することで、集落、生産地、墓域など当時の土地利用のあり方とその変遷など、当時の社会を解明する手がかりとなるはずである。

## 第２節　検出された遺構

２面の調査として検出された遺構は、分岐しながら南北方向に続く踏み分け道と考えられるわずかに窪んだ硬化面と馬の蹄跡だけである。幹線と見られるような道や畦状の高まり、畠などはまったく検出されなかった。したがって上白井西伊熊遺跡の地域は、馬の放牧地として利用がされていたものと考えられるが、馬の蹄跡の検出数も経験的に言えばこれまでに調査された他の遺跡と比較して少ないように感じている。

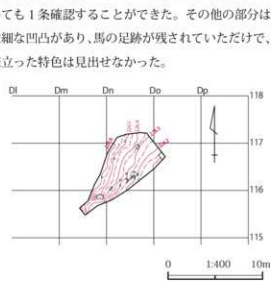
### １　０区の検出状況（第23図　PL.10）

調査区が狭小であり、厚く堆積したFP層の除去を行ったところ更に調査範囲が狭くなった。

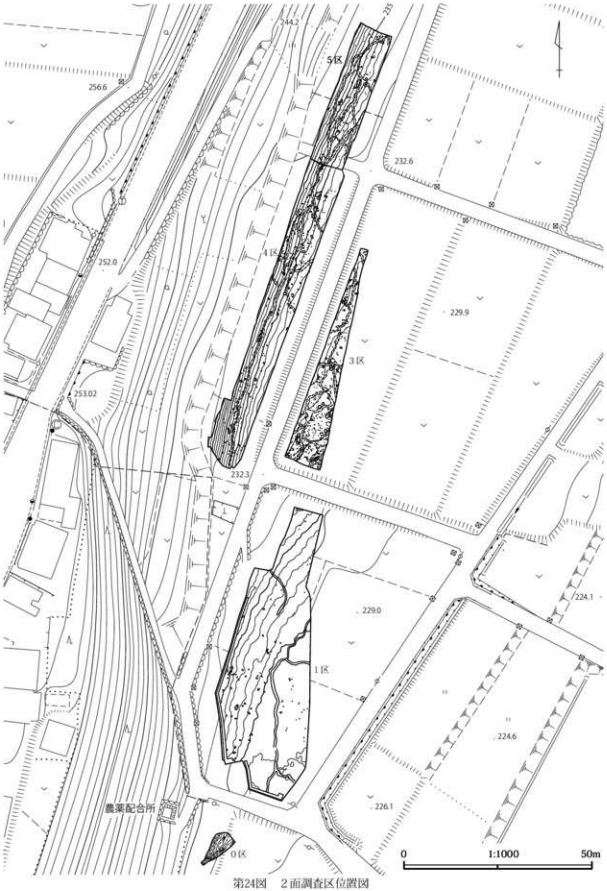
FP下面は、１面以上に傾斜がきつく遺構・遺物は検出できなかった。検出した面はわずかに凹凸が見られるものの、他調査区ほどの起伏はなく、馬の足跡は検出されなかった。斜面部には崩落したと考えられる人頭大の礫が見られた。

### ２　１区の検出状況（第25図　PL.10・11）

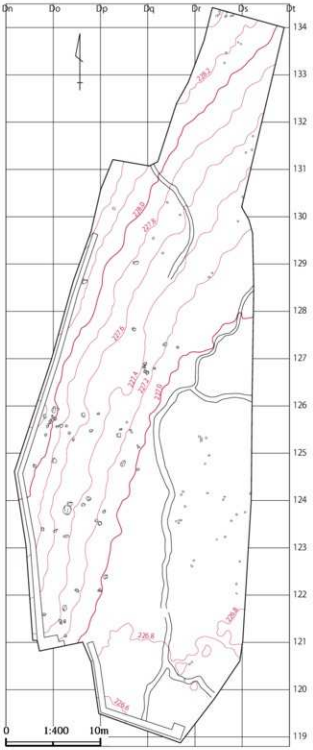
段丘崖下の調査区であり、西側の段丘崖寄りは比高1.5mほどの急傾斜となっている。調査区の1/2を斜面地が占め、平坦面は調査区南東部に確認できたので、調査区外に広がって行くようである。斜面部には大小の礫が頒を出していた。畦状遺構やその他の遺構は検出できなかったが、幅数十cmの踏み分け道状の硬化面を確認した。道状の痕跡は、平坦面の部分で分岐・合流するように確認でき、斜面部においても１条確認することができた。その他の部分は微細な凹凸があり、馬の足跡が残されていただけで、際立った特色は見出せなかった。




第23図　０区　全体図




第24図　２面調査区位置図

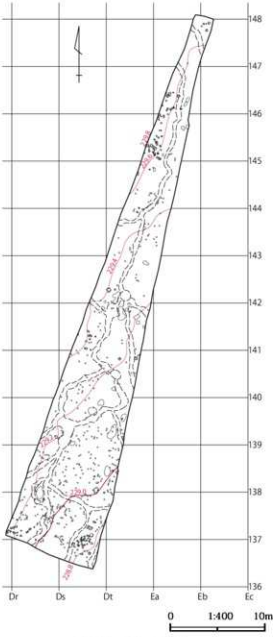



第25図　１区　全体図

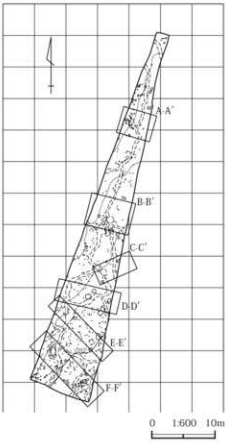
## ３　３区の検出状況（第26･27･28･29図　PL.11･12）

３区は、他の調査区に比べて全体的に傾斜は緩く、僅かに西北から南東方向に緩やかな傾斜が見られた。畦状遺構や明確な道跡は検出できなかったが、筋状に延びる踏み分け道と考えられる硬化面を確認した。この硬化面は分岐・合流しながら調査区全域に不規則に延びていた。硬化面以外の場所は、微細な凹凸があり無数に馬の足跡が残されていた。これまでの調査でも指摘されている状況と同様に、馬の蹄跡には定まった方向性は見出すことができなかった。

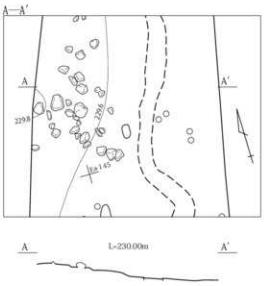
FP除去後の黒色土中より礫が露出する箇所が散在していた。特に南端と北寄りの２ヵ所で拳大の礫のまとまりがあり、30cmを超える大礫も混在していた。これらの礫は崩落した段丘礫と考えられる。



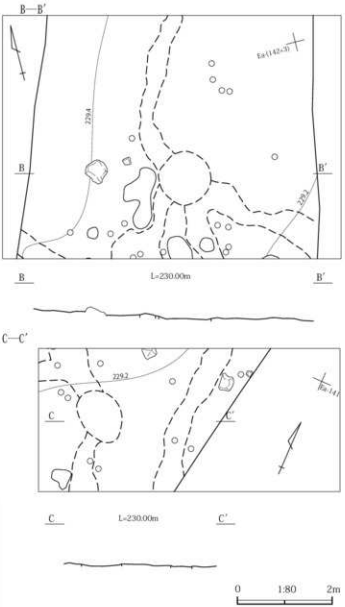

第26図　３区　全体図




第27図　３区　詳細図位置




第28図　３区　詳細図（１）

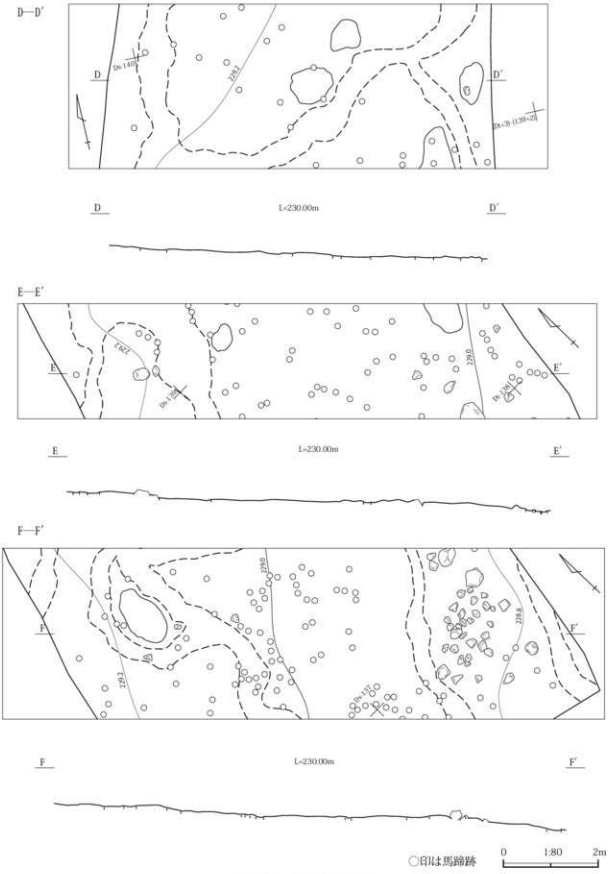



## 4　４区の検出状況（第30～35図　PL.12・13・25）

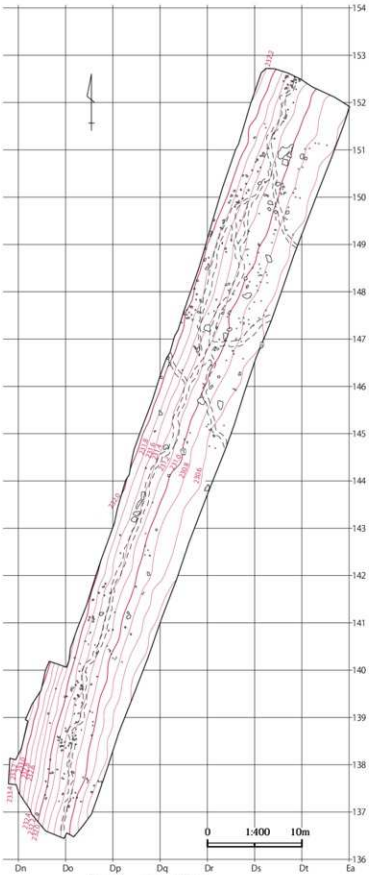
４区は段丘崖から続く斜面であり、南端部側は傾斜がきつく比高は３ｍほどあるが、北側に行くにしたがって傾斜は緩くなっている。

畦状遺構や明確な道跡は検出できなかったが、等高線に沿って南北に延びる筋状の踏み分け道と見られる硬化面を確認した。この南北方向の硬化面を中心に、山側・谷側に分岐・合流する筋状の硬化面が確認できた。硬化面以外の場所は、これまでの調査区の状況と同様に微細な凹凸があるが、耕作の痕跡などは認められなかった。また、馬の蹄跡が検出されているが、全域に広がることはなく、踏み分け道に沿う傾向が見られた。

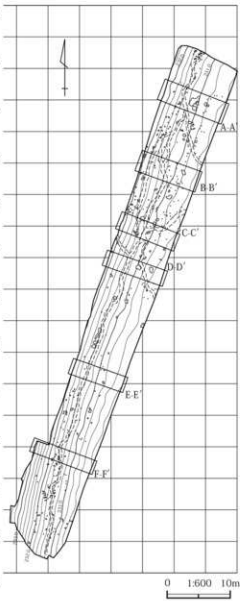
遺物はDr-146グリッドより土師器の甕が潰れた状態で面的に出土した。



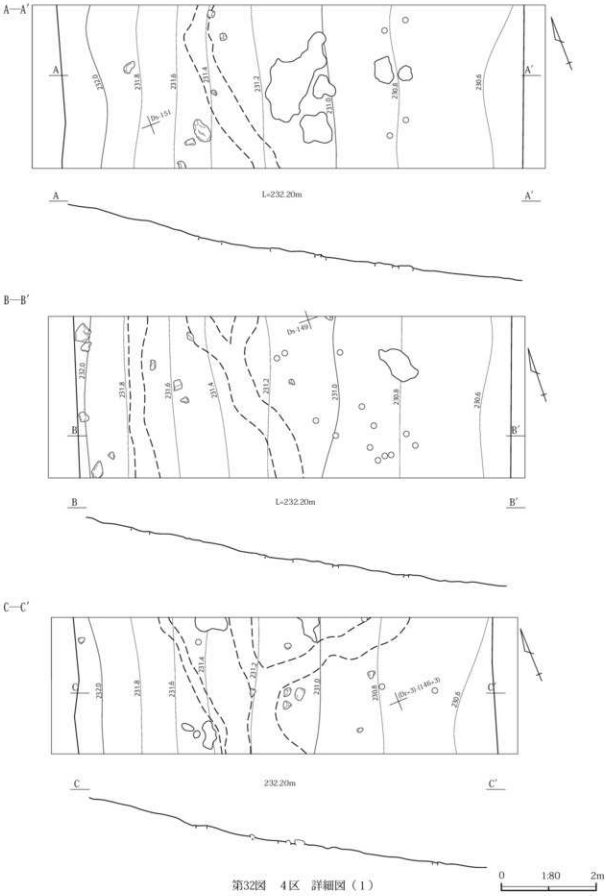

第29図　３区　詳細図（２）



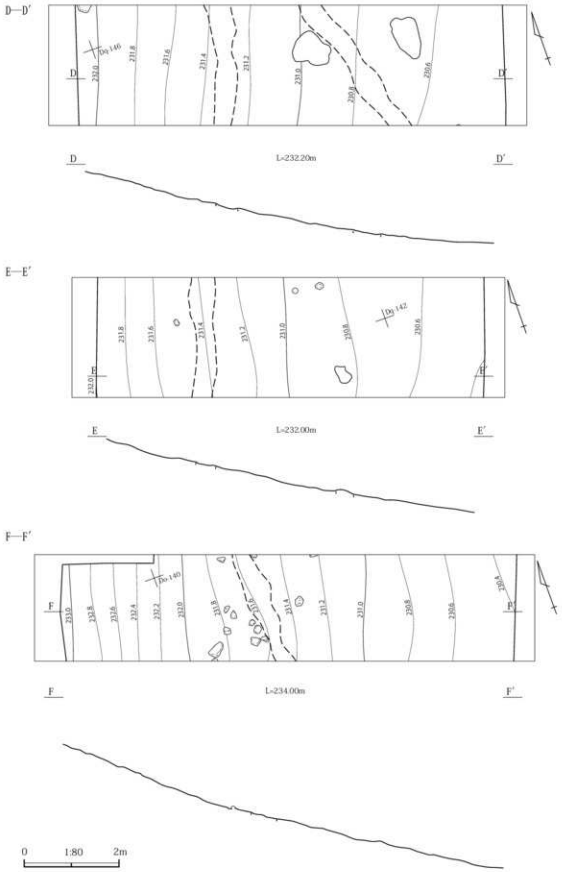

第30図　４区　全体図



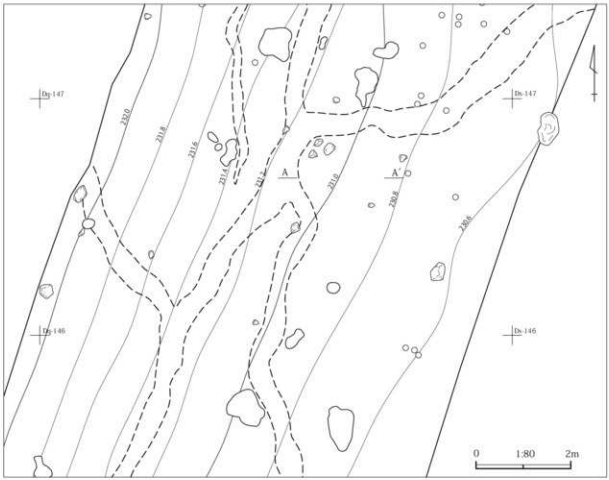

第31図　４区　詳細図位置


A—A′
A
A′
232.0
231.8
231.6
231.4
231.2
231.0
230.8
230.6
Dx-151
L=232.20m
B—B′
B
B′
232.0
231.8
231.6
231.4
231.2
231.0
230.8
230.6
Dx-149
L=232.20m
C—C′
C
C′
232.0
231.8
231.6
231.4
231.2
231.0
230.8
230.6
Dx-5/(146-3)
232.20m
0
1:80
2m

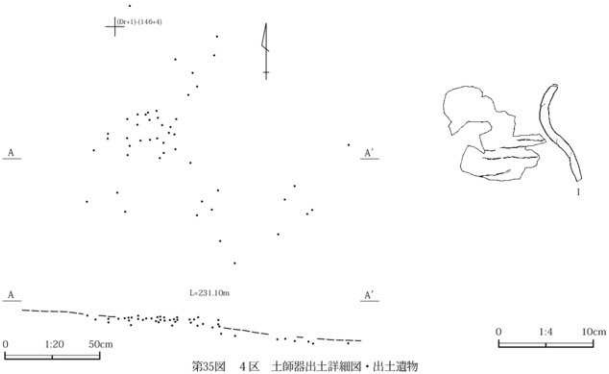
第32図　４区　詳細図（１）


D—D′
Do.140
232.0
231.8
231.6
231.4
231.2
230.6
230.8
230.6
D
D′
L=232.20m
E—E′
Do.142
232.0
231.8
231.6
231.4
231.2
231.0
230.8
230.6
E
E′
L=232.00m
F—F′
Do.140
232.0
232.2
232.4
232.6
232.8
233.0
233.2
233.4
233.6
233.8
234.0
234.2
234.4
234.6
234.8
F
F′
L=234.00m
0
1:80
2m

第33図　4区　詳細図（2）



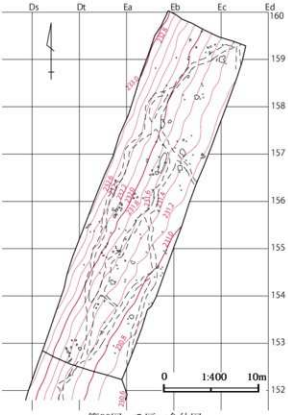

第34図　４区　土師器出土位置図



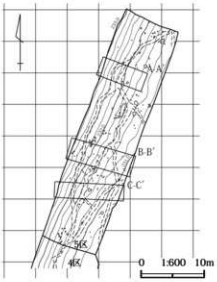

第35図　４区　土師器出土詳細図・出土遺物

## 5　５区の検出状況 (第36～39図　PL.13･14)

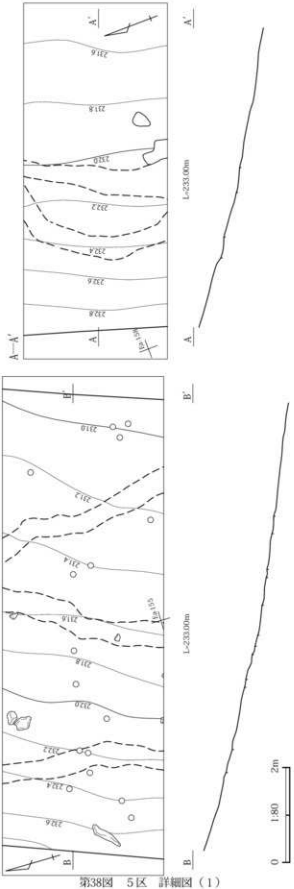
調査区は４区から続く斜面地であり、比高は２ｍほどである。他の調査区同様、畦状遺構や明確な道は検出できなかったが、分岐・合流しながら不規則に筋状に延びる踏み分け道と見られる硬化面を確認した。筋状の硬化面は４区からの続きで、斜面を上下したような状況が見られた。




第36図　５区　全体図




第37図　５区　詳細図位置

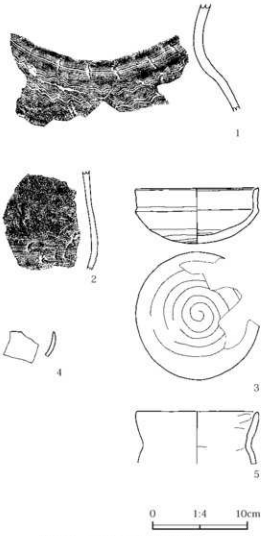



第38図　５区　詳細図（１）

第39図　５区　詳細図（２）

## ６　２面及び下層出土遺物（第40図　PL.25）

２面調査で出土した古墳時代の遺物は、３区で土師器坏の小片が１点、４区で土師器甕が２点（１点は第35図に出土状態を掲載）、５区で土師器坏が１点の４点だけである。４区出土の土師器甕は、細片化されたものが径1.5mほどの範囲に散らばったような状況で出土した。破片は胎土から同一個体と考えられるが、接合がほとんどできないほどに細片化されており、故意に細片化されたことを予想させる状況である。また、第40図-3の５区Ⅳ層出土の土師器坏は、ほぼ完形に接合復元されたものであるが、底部は回転篦削りで整形されており、口唇部がシャープな作りで、口縁部外面及び見込み部に轆轤整形の痕跡が見られる。こうした特徴は、量産段階の模倣坏ではなく出現期に認められるものである。いずれにしても比較的広範囲の調査にもかかわらず遺物出土が少ないことは明らかであり、遺跡周辺が居住を伴うような生活空間ではなかったことを窺わせるものである。また、下層の調査で弥生時代の樽式土器甕の破片が２点（第40図-1、2）出土したが、関連するような遺構の検出はなかった。

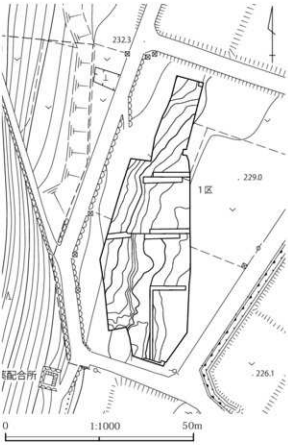


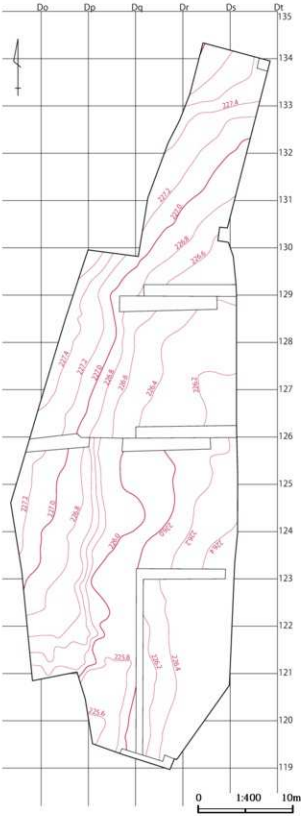

第40図　２面及び下層出土遺物

# 第５章　３面の調査(Hr-FA下面)

## 第１節　調査の概要

３面の調査は、FAと同層が攪拌されることで形成された層の下面として捉えたものである。０区においては、２面調査の終了後、トレンチを設定して部分的に掘り下げたが、３面の鍵となるFA層は明瞭には検出できなかった。上白井西伊熊遺跡の調査区の大半が傾斜部であるためFAの残存が悪く、FAが面的に捉えられたのは比較的平坦部の多い１区だけであった。調査の結果、遺構はまったく検出されず、FA降下時点の地形を把握するにとどまった。基本的な地形は、第２面で捉えたものと変わらないが、西側により急な斜面部分があり、これがFP降下までの間に斜面の崩落などにより埋没し緩傾斜化していった状況を窺うことができる。




第41図　３面調査区位置図及び全体図

# 第６章　４面の調査（縄文時代）

## 第１節　調査の概要

４面は、基本土層Ⅴ層の黒色土中からローム上面(Ⅷ層)までの間を対象としたもので、古墳時代中期から縄文時代までの遺構・遺物の検出が期待された。しかし、結果的には弥生時代後期の土器片が２点出土した他は、ほぼすべてが縄文時代前期を主体とする遺構・遺物であった。

調査方法は、３面のFA面の調査段階で利用した市松模様のグリッド面を更に掘り下げ、遺構・遺物の確認を行うこととした。その際に調査区によっては基本土層Ⅴ層の黒色土が厚く堆積し、遺物分布の少ない場合は重機により黒色土の除去を行い、再度グリッド単位で面調査を進め遺構の有無を確認した。遺構確認に至らない段階から顕著な遺物出土があった調査区では包含層調査として遺物出土が希薄になるまで拡張した。その結果、縄文時代遺物の出土が顕著だった１区と３区については全面調査に切り替えた。

各区の調査概要は以下の通りである。

### １　０区の概要

部分的に拡張し面調査を行ったが、遺構の検出はなく遺物出土もわずかであった。

### ２　１区の概要（第43図　PL.14）

４面調査開始当初は、２・３面調査時のグリッド単位で掘り下げを行い、遺構及び遺物の確認を行った。その際にⅤ層～Ⅵ層中から多量の縄文土器片や剥片が出土したために、遺物包含層としての調査を行い、さらに下層まで確認面を下げて住居や土坑を確認した。黒褐色土を取り去った段階の地形は、調査区の西側から北側にかけては４・５区に連続する傾斜地であり、南東部分では傾斜が緩くなっている。縄文時代の遺構は、北側の傾斜部分で１棟の住居と土坑数基を検出したが、多くは南東部の傾斜の緩やかな地形部分から検出した。

### ３　３区の概要（第44図　PL.15）

１区同様人力でグリッド面の掘り下げを行い遺構及び遺物の確認を行った。黒褐色土を取り去った時点での地形は、南東方向にわずかに傾斜する地形であり、希薄ではあるが、全域に縄文時代の遺構が展開していた。この調査区ではローム層中の調査により旧石器時代の文化層の存在を確認した。

### ４　４・５区の概要

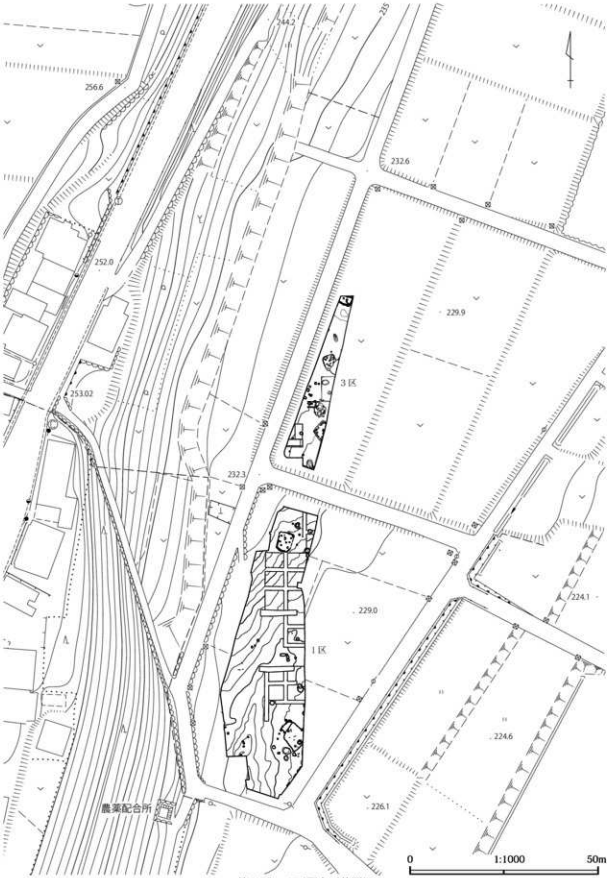
４区と５区については、調査区全体が段丘崖の斜面部であり、４面調査において遺構は検出されなかった。しかし、土器片や剥片の出土は一定量みられたので、グリッドを取り上げ単位とした包含層の調査を行った。

## 第２節　検出された遺構

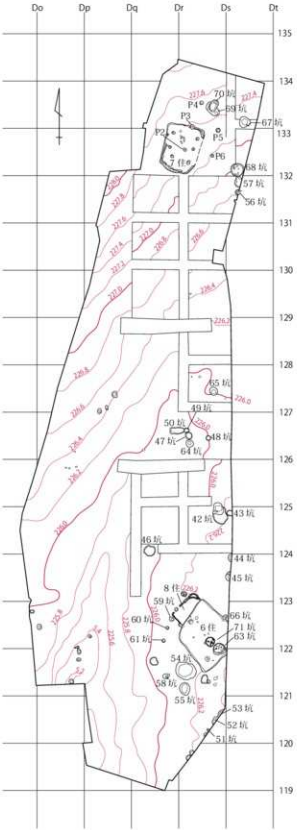
### １　竪穴住居

４面の調査では、平成15年度調査の３区で１～５号、平成16年度調査の１区で６～８号の計８遺構を竪穴住居と認識して調査を実施した。その結果、３区で検出し中期後半の土器が比較的まとまって出土したことから１号住居として調査を進めていた遺構については、調査途中で土坑の集合であることが分かり、１号住居を欠番とし10号土坑と名称変更した。また、調査区東壁にかかり３号住居と重複する４号住居に関しても、調査途中で倒木痕である可能性が高くなったため欠番とした。したがって４面の調査で最終的に竪穴住居として調査したものは、１区の６～８号と３区の２号・３号・５号住居の６棟である。

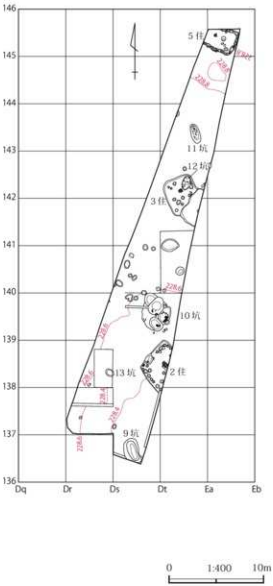
調査区際から検出された住居の土層断面観察などから、住居の構築はⅥ層土（褐色土）中から行われたものと考えられる。しかし、平面的には住居覆土とⅥ層土が明瞭に判別できない状況であった。したがって住居の確認は、Ⅶ層土（漸移層）またはローム（Ⅷ層）上面まで下げて行ったため、必然的に遺構の残存状況は良くないものが多くなった。




第42図　４面調査区位置図




第43図　1区　全体図

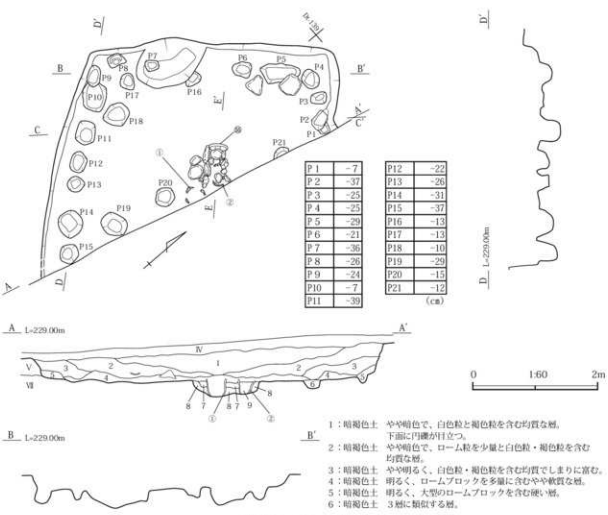



第44図　3区　全体図

**３区　２号住居**（第45～52図　PL.15･16･25～27）

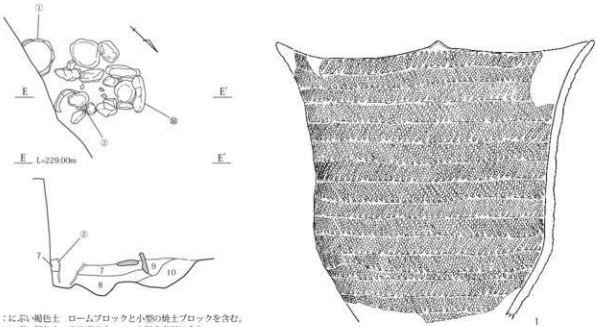
調査区南寄りで検出したもので、住居の東側1/2以上が調査区外にある。

**位置**：Ds-138･Dt-138グリッド　**形状**：長方形　**規模**：長辺(3.6)m、短辺4.3m　**残存深度**：0.5m(土層断面での確認)　**主軸方位**：N－40°－W　**埋没土**：Ⅴ層土に相当すると見られる黒色土主体で概ね５層に分層することができ、周囲からの自然埋没の状況が想定できる。　**柱穴**：壁に沿って径25～40cm、深さ20～30cmのピットが検出され、その２ヵ所からは柱痕と見られる土層が観察されていることから、壁柱穴を有する住居である可能性が高い。　**炉**：中央北寄りから検出された。川原石と割れた石皿を南東方向に開く「コ」の字状に立て並べ、北側の底面に扁平な石を水平に敷いた石組みの炉である。南側には口縁部の欠損した２個体の深鉢が正位の状態で埋設されていた。　**遺物**：炉付近に埋設されていた２個体の深鉢は、底部を欠損しているもののほぼ全体像を知りえる資料である。これ以外の遺物は、覆土中層を主体に出土したものである。石器では、半截された石皿が炉石に転用されており、10号土坑出土の石皿と接合した。また、第51図－50の敲石にベンガラが付着していたことが特筆される。　**重複**：調査範囲内では認められない。　**所見**：出土した土器は、胎土に繊維を含むものばかりであり、刻み隆帯で文様を描出するものや撚糸側面圧痕でワラビ手文を描き、胴部にはループ文や羽状縄文を施文するものが主体を占めている。炉体土器は、４単位の単頭波状口縁で刻み隆帯で文様を描出し、文様帯内に円形刺突を施し、胴部には幅の狭いループ文を帯状




第45図　３区　２号住居

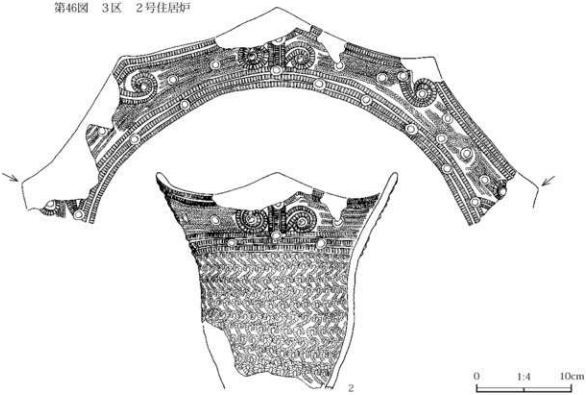
に施している。これらの特徴は二ツ木式でもやや新しい要素と考えられるものである。破片資料の中には関山式的な要素を持つ資料も散見されるが、主体となる資料は二ツ木式の特徴を有しており、炉体土器の時期と矛盾することはない。したがって住居の時期は、二ツ木式段階と考えてよいであろう。



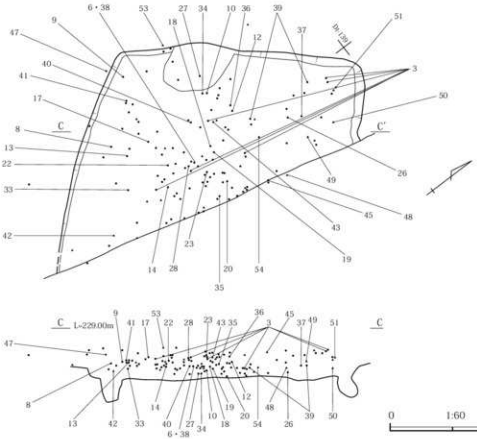

7：にぶい褐色土　ロームブロックと小型の焼土ブロックを含む。
8：にぶい褐色土　やや明るく、ローム粒を多量に含む。
9：暗 褐 色 土　やや暗色で、黒色土ブロックを含み、粘性・しまりが強い。
10：暗 褐 色 土　大型のロームブロックを含む第8層類似の層。

0　1:30　1m

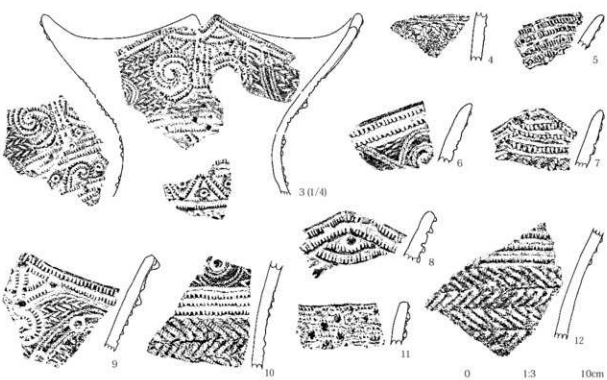
第46図　３区　２号住居炉



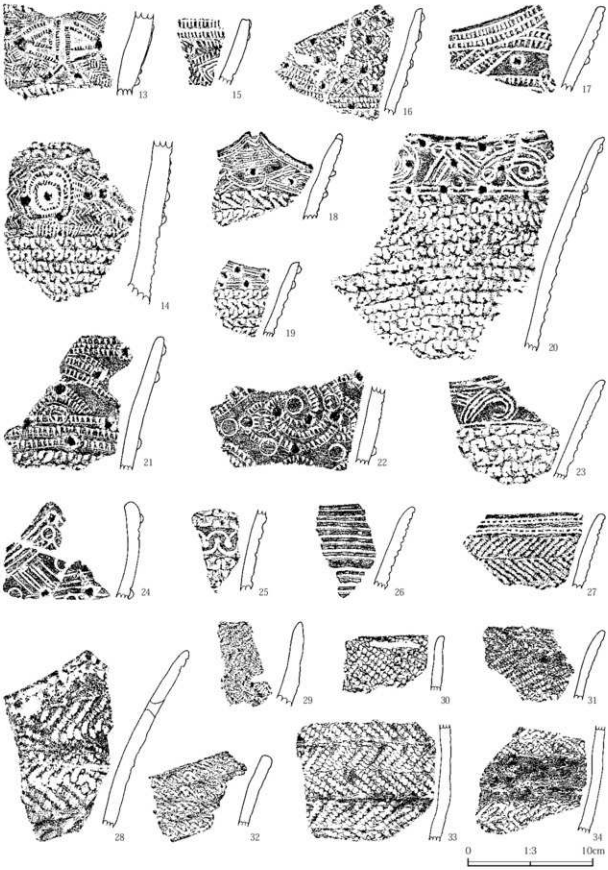

第47図　３区　２号住居出土遺物（１）



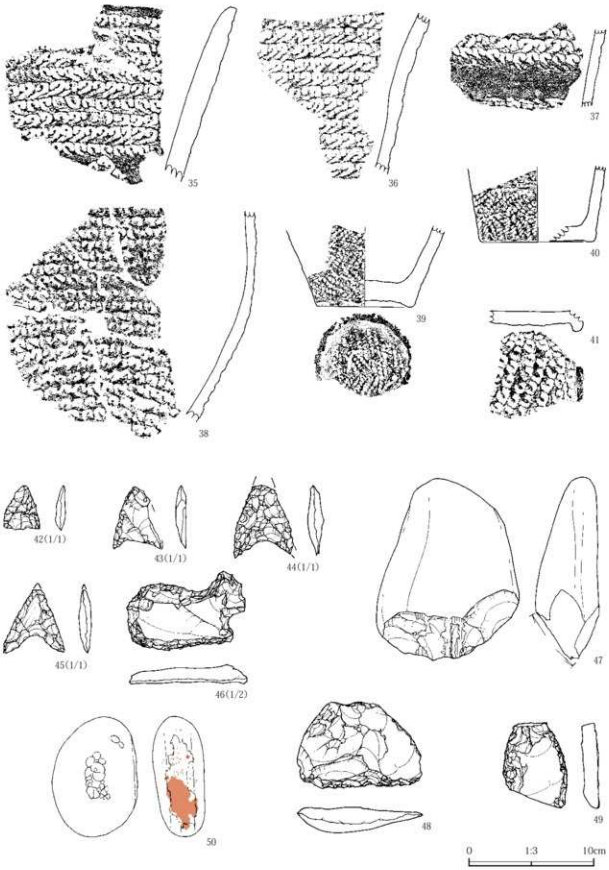

第48図　３区　２号住居遺物出土状況



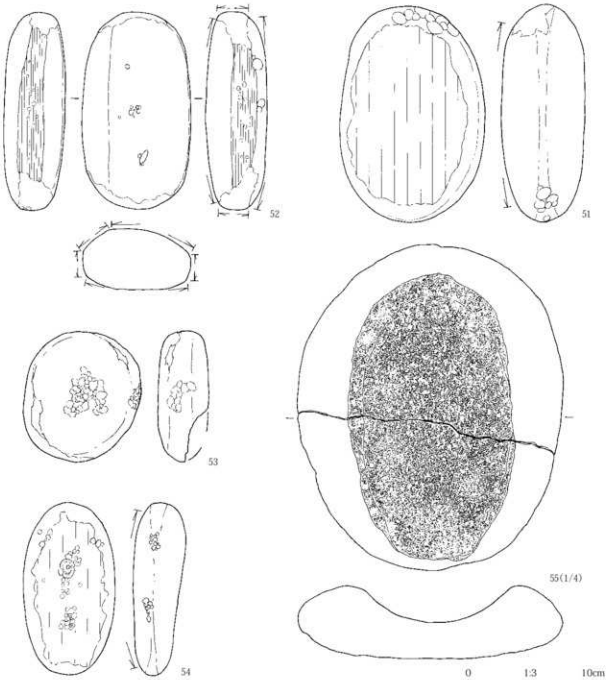

第49図　３区　２号住居出土遺物（２）




第50図　３区　２号住居出土遺物（３）




第51図　３区　２号住居出土遺物（４）

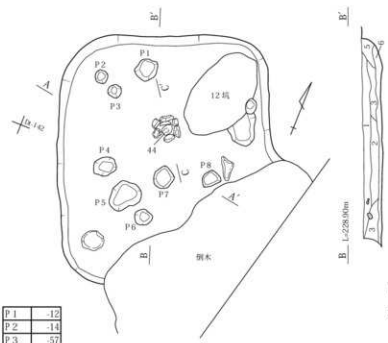


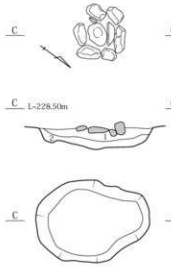

第52図　３区　２号住居出土遺物（５）

**３区　３号住居**（第53～57図　PL.16･27～29）

調査区中央やや北よりに位置しており、ほぼ全体が調査できた。

**位置**：Dt-141・Dt-142グリッド　**形状**：隅丸長方形
**規模**：長辺3.92m、短辺3.36m　**残存深度**：0.30m
**主軸方位**：N－24°－W　**埋没土**：上層は黒色土のV層を主体とし、下層にはロームブロックの含有量が多い。自然埋没と思われる堆積状況を示している。**柱穴**：床面からは径20～46cm、深さ９～57cmほどのピットが８ヵ所検出されているが、配置に規則性がなく、規模も一定していないため柱穴を特定することはできなかった。　**炉**[1]：床面中央やや北寄りに位置している。床面と面を揃えて扁平な川原石を据え付け、周囲を川原石で南に開く「コ」の字状に囲んだ石組みの炉[2]である。下位には長径90cm、短径65cm、深さ15cmほどの洋ナシ形の掘り方が検出さ



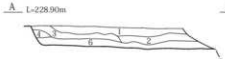



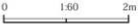

1：暗　褐　色　土　少量のローム粒と微量の炭化物・焼土粒を含む粘性の強い層。
2：にぶい褐色土　大型のロームブロックと暗褐色土ブロックで構成される粘性の弱い層。

| | |
|---|---|
| P 1 | -12 |
| P 2 | -14 |
| P 3 | -57 |
| P 4 | -22 |
| P 5 | -25 |
| P 6 | -9 |
| P 7 | -22 |
| P 8 | -20 |

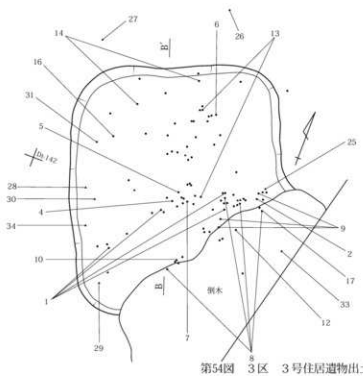
（cm）

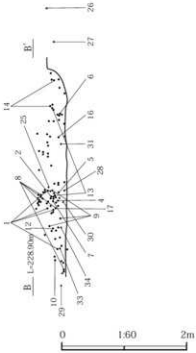
1：黒褐色土　白色粒と褐色粒を含む均質な層で粘性が乏しい。遺物を多く含む。
2：黒褐色土　やや暗い白色粒を含む均質な層で軟質。
3：黒褐色土　ローム小ブロックと白色粒を含む均質な層で粘性が乏しい。
4：暗褐色土　ロームブロックを主体とする均質な層で、粘性に富む。
5：暗褐色土　少量のローム粒と白色粒を含む、粘性に乏しい層。
6：暗褐色土　ローム小ブロックと炭化物を少量含む、粘性の強い層。






第53図　３区　３号住居・炉

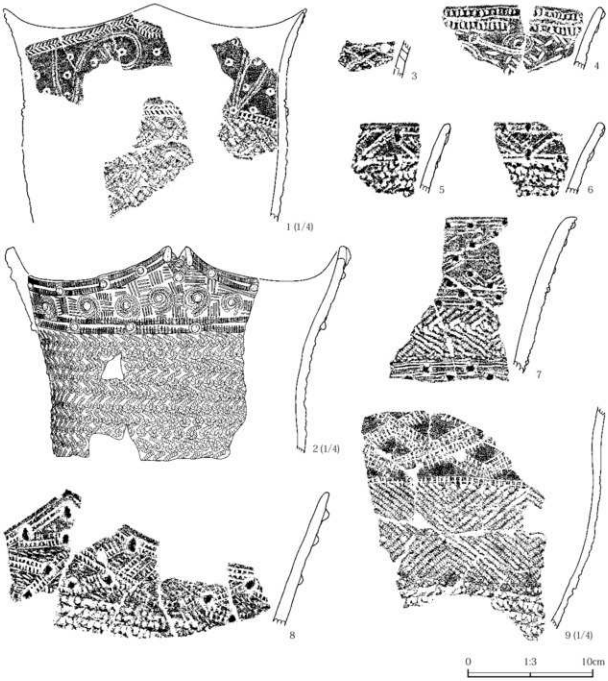


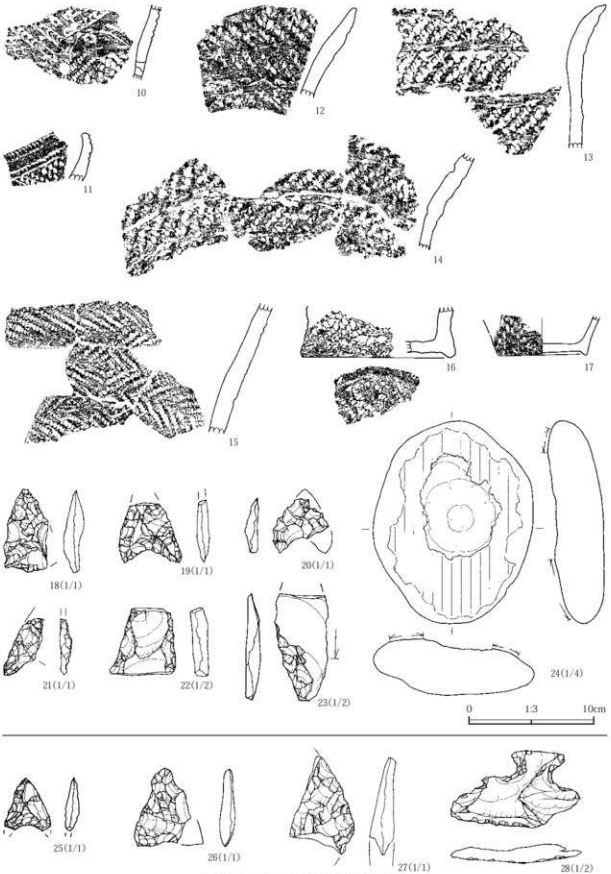
第54図　３区　３号住居遺物出土状況

れた。　**遺物**：南側コーナー近くの床面に接するように出土した扁平な川原石以外は、ほとんどが覆土中層からの出土である。　**重複**：北側コーナー部で12号土坑と重複するが、土坑覆土上層と当住居覆土上層が類似しているため、確認段階で新旧関係を把握することはできなかった。また、南東コーナー部を含む約1/4が倒木痕によって攪乱されている。

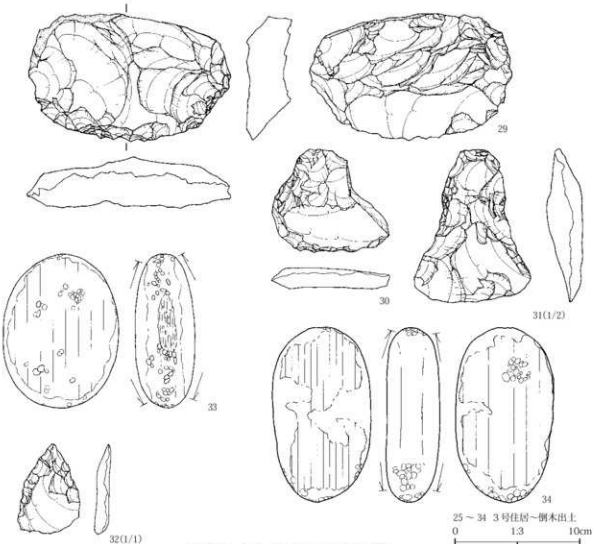
**所見**：当住居には炉体土器などがないため、覆土中の遺物から時期の判断をすると、撚糸側面圧痕によるワラビ手文と円形刺突が組み合わせられた文様構成や、梯子状沈線や貼付文などの施された資料など櫻ね二ツ木式の特徴を持つ土器片が主体を占めていることから、二ツ木式段階と考えられる。




第55図　３区　３号住居出土遺物（１）




第56図　３区　３号住居出土遺物（２）



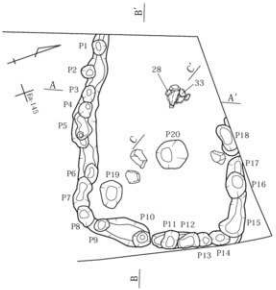

第57図　３区　３号住居出土遺物（３）

**３区　５号住居**（第58～61図　PL.17･29･30）

調査区北端で検出したもので、西側約1/3の部分が調査区外にある。

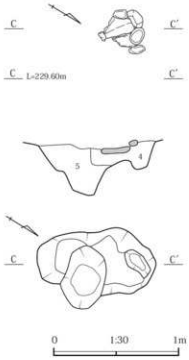
**位置**：Dt-145・Ea-145グリッド　**形状**：隅丸長方形　**規模**：長辺(3.36)m、短辺2.25m　**残存深度**：0.53m(土層断面での確認)　**主軸方位**　N－67°－W　**埋没土**:暗褐色土を主体とした土層で埋没しており、分層した結果から自然堆積の状況を窺うことができる。覆土の上層はⅤ層が覆っており、遺構構築面がⅥ層土中にあった可能性を示唆している。　**柱穴**：壁に沿って上幅30cm、深さ９cmの周溝状の掘り込みが巡り、掘り込み内に径20～30cm、深さ18～29cmの円形ピットが17本ほど検出されている。住居内部に柱穴と見られるような規則性のあるピットが認められないことから、これらのピットが壁柱穴となるものと考えられる。　**炉**：炉は長辺中央西寄りに位置し、底面に扁平な礫を敷き、周囲に川原石を配した石組みの炉である。炉石は西側部分しか残存していないため、平面形は判別できないが、下位で検出された長軸93cm、短軸54cm、深さ21cmの炉の楕円形掘り方は、３区３号住居と類似するものであることから「コ」の字状の平面形であった可能性が高い。**遺物**：遺物は住居東側の床面近くに比較的まとまって出土している。　**重複**：検出された部分においては他遺構との重複は認められない。　**所見**：当住居も炉体および住居内に埋設土器はないため、覆土中の出土遺物の主体を占める破片で判断すると、梯子状沈線による文様描出、撚糸側面圧痕によるワラビ

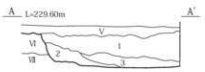
手文など二ツ木式の特徴を有する資料がある一方、復元された第59図－２のように胴部文様帯を持ち、半裁竹管を多用した関山式と見られる資料があることから、関山式段階と考えられる。



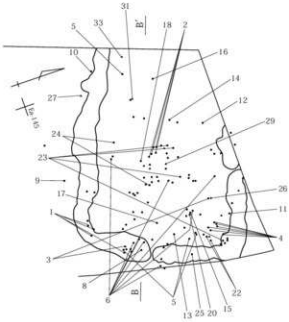

| | |
|---|---|
| P 1 | −29 |
| P 2 | −21 |
| P 3 | −18 |
| P 4 | −38 |
| P 5 | −27 |
| P 6 | −18 |
| P 7 | −21 |
| P 8 | −22 |
| P 9 | −25 |
| P10 | −24 |
| P11 | −29 |
| P12 | −28 |
| P13 | −28 |
| P14 | −24 |
| P15 | −32 |
| P16 | −23 |
| P17 | −22 |
| P18 | −28 |
| P19 | −6 |
| P20 | −34 |

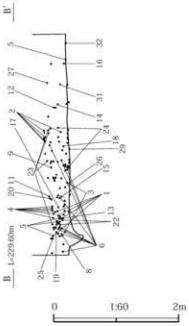
（cm）



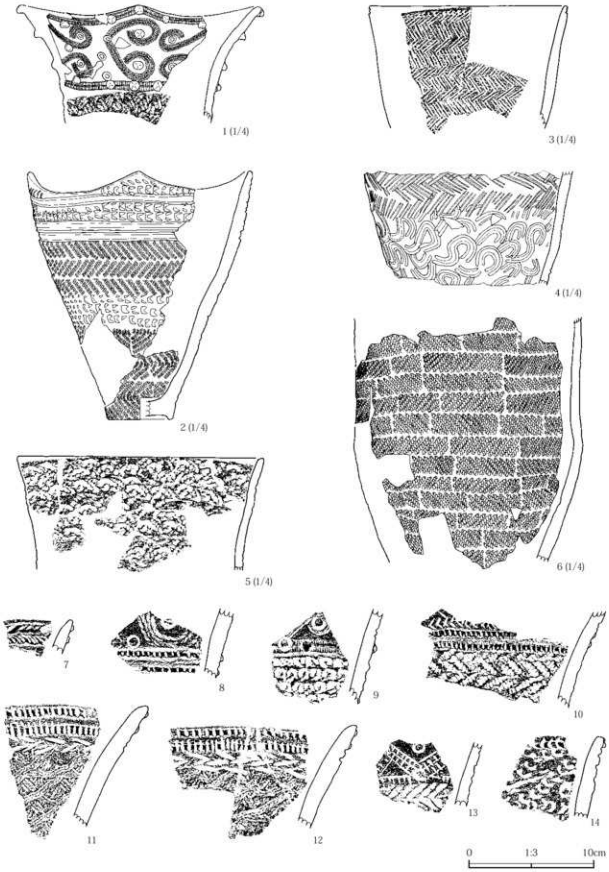




１：暗褐色土　白色粒と褐色粒を含む均質でしまりに富む層。
２：暗褐色土　大型のロームブロックと黒色土ブロックを少量含む均質な層。
３：暗褐色土　小型のロームブロックを多量に含み、白色粒が目立つ均質な層。
４：暗褐色土　ローム小ブロックを含む比較的軟質な層。
５：黄褐色土　大型のロームブロックで構成される層で、硬くしまりが強い。

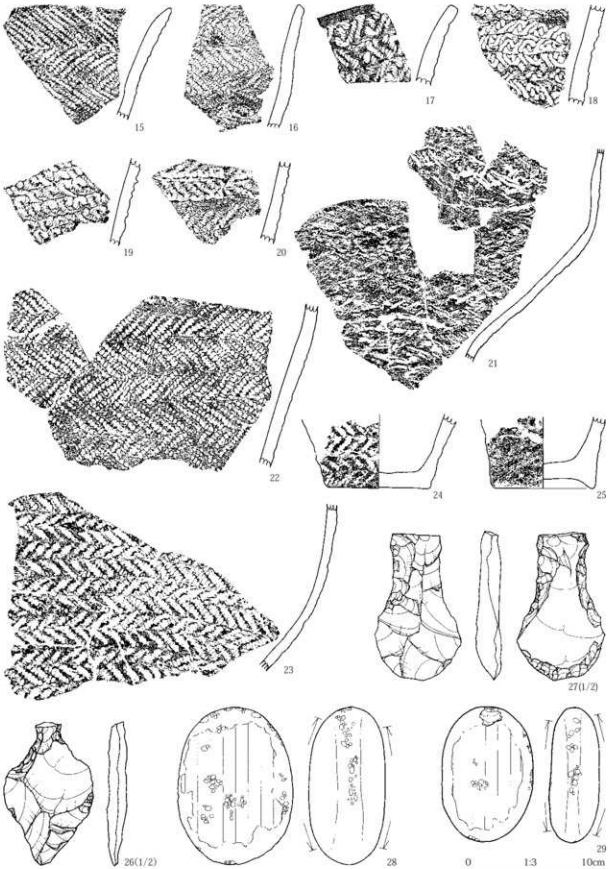


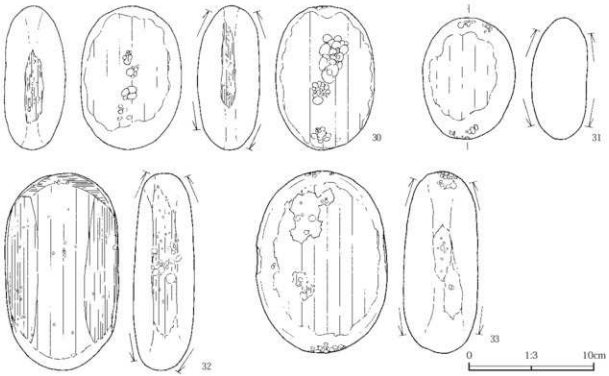

第58図　３区　５号住居・炉・遺物出土状況




第59図　３区　５号住居出土遺物（１）




第60図　３区　５号住居出土遺物（２）




第61図　３区　５号住居出土遺物（３）

**１区　６号住居**（第62～67図　PL.17･18･31･32）

調査区南よりで検出したもので、東側コーナー部は調査区外になり住居全体を調査することはできなかった。

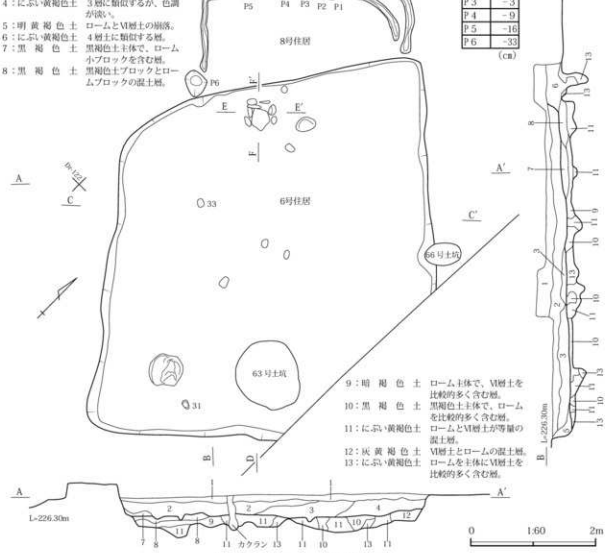
**位置**：Dr-121・Dr-122グリッド　**形状**：隅丸台形　**規模**：長辺(5.68)m、短辺(5.30)m　**残存深度**：0.50m　**主軸方位**：N－45°－W　**埋没土**：淡色黒ボク土(Ⅵ層相当)を主体としてロームブロックを多く含む土層が残存していた。こうした土層は、他の住居では最下層に見られたものに類似している。　**柱穴**：床面の精査段階ではまったく痕跡も検出することができなかった。掘り方として調査した面においても、多数のピットを検出したが、壁に沿って並ぶ傾向も規則性のある配置も見られないためどのピットが柱穴なのか判然としない。　**炉**：北西壁際中央で検出された。底面に扁平な礫を敷き、これを南東方向に開く「コ」の字状に礫で囲む石組みの炉である。底面に敷かれていた礫の下面からは焼土粒や炭化物が検出されていることから、作り直しが行われた可能性がある。　**遺物**：床面に近い位置から出土したのは円礫が多く、土器片の多くは覆土中層から出土したものである。　**重複**：北西部で８号住居と重複し、南東壁際で63号土坑を検出した。調査段階では８号住居を壊して当住居が造られたと判断した。63号土坑については、床下土坑と判断されているが詳細は土坑の項目で扱った。　**所見**：住居の時期は、覆土中出土遺物の主体を占める二ツ木式段階と考えられるが、重複する８号住居には時期の判断ができるような遺物出土がなかったため、遺物の上から時期差を捉えることはできなかった。また、当住居で気になる点として、平面形が他の住居と著しく異なっていることと、炉の位置が壁際に寄りすぎていることがある。当遺跡で検出された住居には、平面形が長方形を呈し、炉が床面中央のやや北寄りの位置に構築される傾向が捉えられるが、当住居はこの傾向に合致していない。仮に８号住居と認識していた部分を６号住居の一部として捉えなおすと、平面形には問題が残るものの、炉の位置関係は他の住居と類似するものとなる。また、平面形については、８号住居として調査された部分は確認面との比高がほとんど見られず、掘り方とした不整形の掘り込みの検出範囲を住居平面として捉えた感がある。掘り方の土

層断面を見ると縦方向に分層される個所が認められることから、掘り方として認識された部分が木根などによる攪乱であった可能性もある。こうした状況を総合すると、当住居は長辺7.3m、短辺5.7mほどの隅丸台形の平面形を有する住居であった可能性がある。

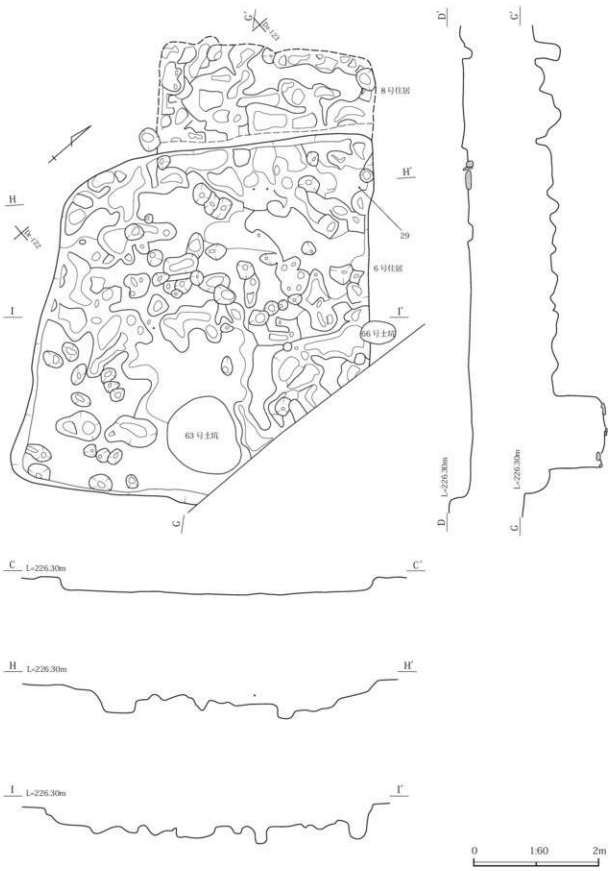
**１区　８号住居**（第62～64・68図　PL.17・18・32）

調査区南よりで検出したもので、南東側2/3以上が６号住居との重複で失われたものと考えられる。

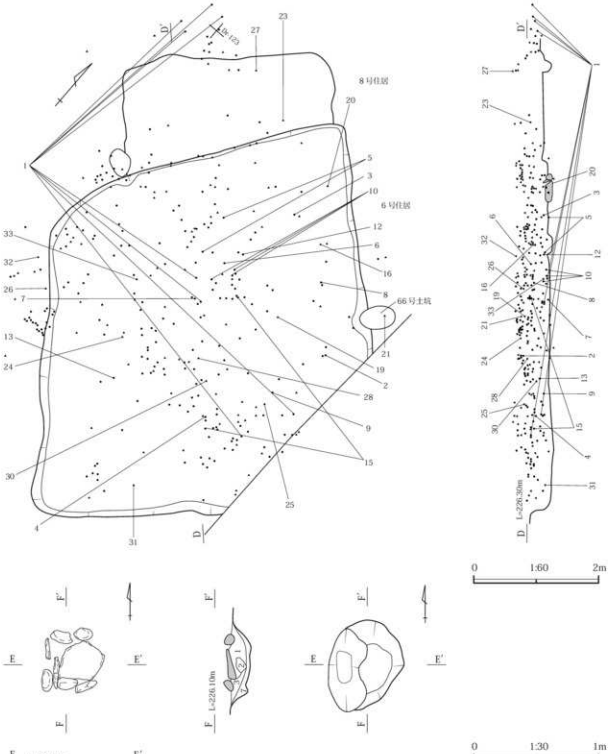
**位置**：Dq-122・Dr-122・Dr-123グリッド　**形状**：(隅丸長方形)　**規模**：長辺(1.7)m、短辺3.4m　**残存深度**：0.08m　**主軸方位**：N－45°－W　**埋没土**：残存状況が悪く不明。　**柱穴**：不明　**炉**：不明　**遺物**：覆土中からわずかに出土した。　**重複**：南東側で６号住居と重複する。　**所見**：床面下の調査で、６号住居同様に形状、規模ともに一定しない多数の掘り込みが検出された。これらが当住居の掘り方にあたるものとして調査を行ったが、６号住居の床下の状況と酷似することから当該遺構が６号住居の一部である可能性については前述したとおりである。




第62図　１区　６・８号住居（１）

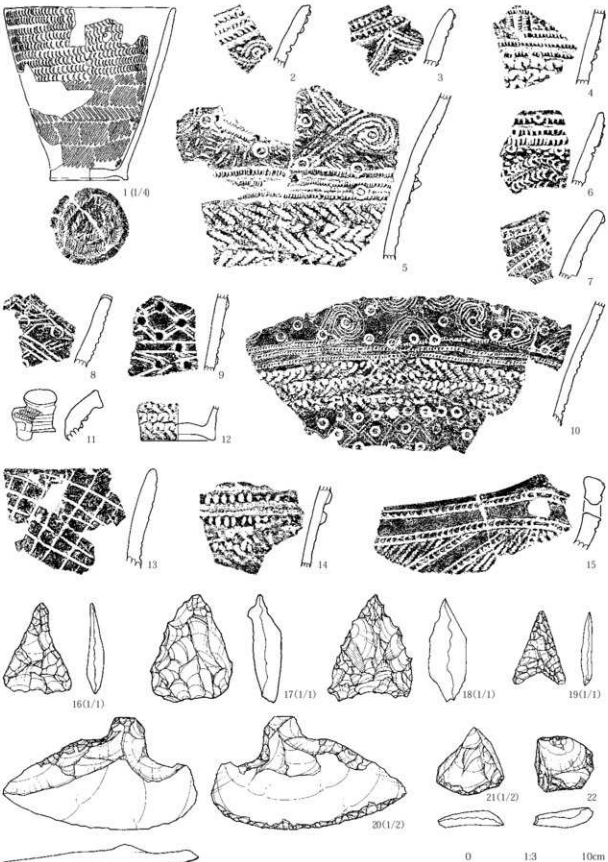



第63図　1区　6・8号住居（2）

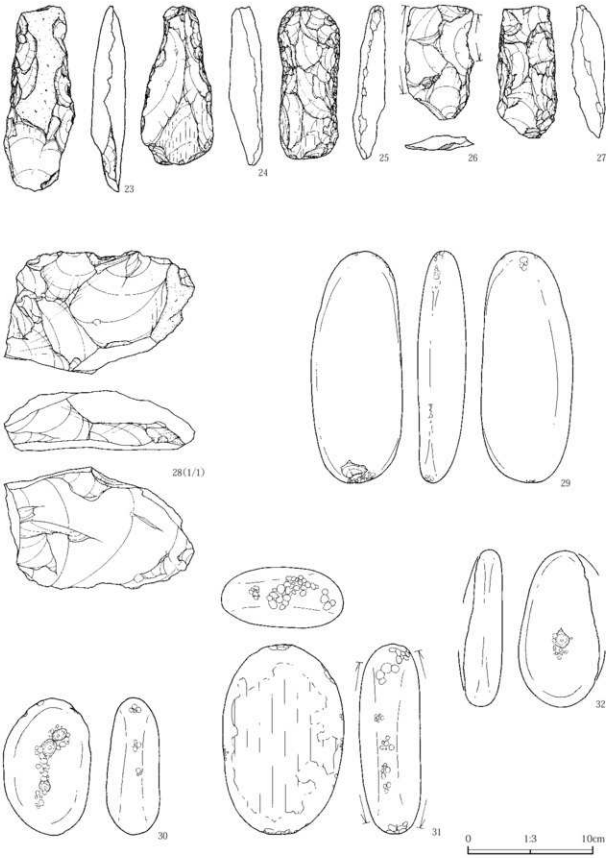



1：褐 灰 色 土　褐色土主体で、焼土粒とAs-Sr を微量に含む。
2：黒 褐 色 土　黒褐色土主体で、焼土粒を微量に含む。
3：褐 灰 色 土　褐色土主体で、焼土粒を１層と比較してやや多く含む。
4：明赤褐色土　焼土ブロック主体の層。
5：赤 褐 色 土　焼土粒を多量に含む層。
6：黒 褐 色 土　黒褐色土主体で、焼土ブロックとロームブロックを等量含む層。
7：褐 灰 色 土　褐色土主体で焼土粒を含まない。
8：暗 褐 色 土　色調の明るいくすんだローム土主体で、As-Sr を少量含む層。

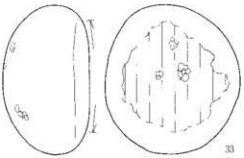
第64図　１区　６・８号住居遺物出土状況・炉



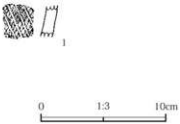

第65図　１区　６号住居出土遺物（１）




第66図　１区　６号住居出土遺物（２）




第67図　１区　６号住居出土遺物（３）




第68図　１区　８号住居出土遺物

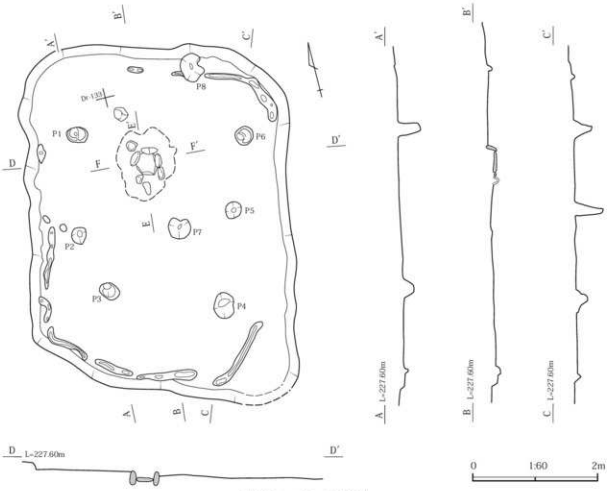
**１区　７号住居**（第69～74図　PL.18･19･32･33）

調査区の北寄りで検出したもので、他の住居と比較するとやや傾斜の強い位置である。

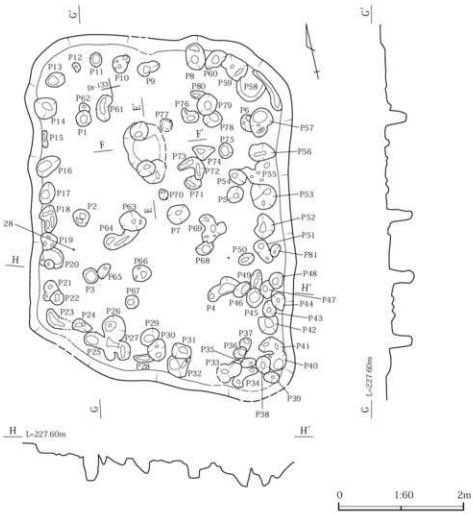
**位置**：Dq-132・Dq-133・Dr-132・Dr-133グリッド

**形状**：隅丸長方形　**規模**：長辺5.40m、短辺4.15m

**残存深度**：0.14m　**主軸方位**：N－13°－E　**埋没土**：床面近くまで下げた状況で確認されたため、黒色土の堆積がわずかに観察されただけである。　**柱穴**：床面精査段階で主柱穴と見られる６本のピットを検出した。規模は径24～30cm、深さ20～46cmと一定しない。さらに床面下の精査で壁に沿って多数のピットを検出した。規模は径20～46cm、深さ3.5～33.0cmと主柱穴以上に一定しないが位置関係から壁柱穴と考えられる。しかし、床面調査でこれら

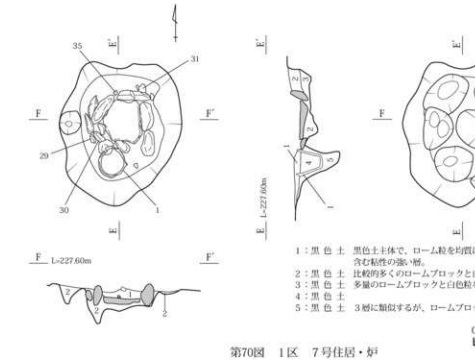



第69図　１区　７号住居




| | | | |
|---|---|---|---|
| P1 | -34 | P41 | -13 |
| P2 | -33 | P42 | -20 |
| P3 | -37 | P43 | -18 |
| P4 | -13 | P44 | -19 |
| P5 | -44 | P45 | -9 |
| P6 | -22 | P46 | -32 |
| P7 | -51 | P47 | -23 |
| P8 | -30 | P48 | -17 |
| P9 | -27 | P49 | -7 |
| P10 | -18 | P50 | -12 |
| P11 | -10 | P51 | -18 |
| P12 | -3 | P52 | -12 |
| P13 | -19 | P53 | -13 |
| P14 | -27 | P54 | -14 |
| P15 | -2 | P55 | -21 |
| P16 | -26 | P56 | -20 |
| P17 | -26 | P57 | -13 |
| P18 | -9 | P58 | -3 |
| P19 | -22 | P59 | -24 |
| P20 | -16 | P60 | -6 |
| P21 | -8 | P61 | -11 |
| P22 | -10 | P62 | -6 |
| P23 | -9 | P63 | -27 |
| P24 | -30 | P64 | -7 |
| P25 | -32 | P65 | -13 |
| P26 | -31 | P66 | -21 |
| P27 | -13 | P67 | -14 |
| P28 | -5 | P68 | -9 |
| P29 | -25 | P69 | -13 |
| P30 | -26 | P70 | -11 |
| P31 | -13 | P71 | -5 |
| P32 | -12 | P72 | -9 |
| P33 | -19 | P73 | -12 |
| P34 | -9 | P74 | -15 |
| P35 | -1 | P75 | -20 |
| P36 | -24 | P76 | -25 |
| P37 | -10 | P77 | -7 |
| P38 | -5 | P78 | -18 |
| P39 | -12 | P79 | -27 |
| P40 | -8 | P80 | -7 |
| | | P81 | -17 |

（cm）

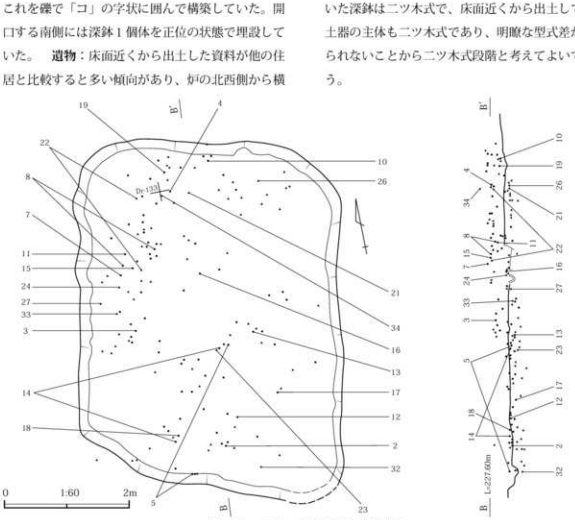



1：黒 色 土　黒色土主体で、ローム粒を均質に含み、白色粒と黄色軽石を微量に含む粘性の強い層。
2：黒 色 土　比較的多くのロームブロックと白色粒を微量に含む粘性の強い層。
3：黒 色 土　多量のロームブロックと白色粒を微量に含む粘性の強い層。
4：黒 色 土
5：黒 色 土　3層に類似するが、ロームブロックの含有量がさらに多い。

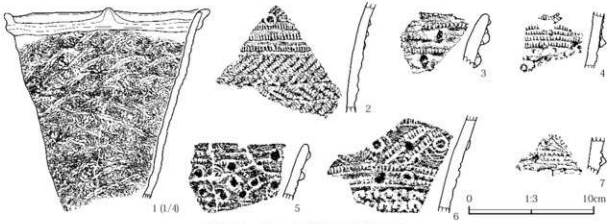
0　1:30　1m

第70図　1区　7号住居・炉

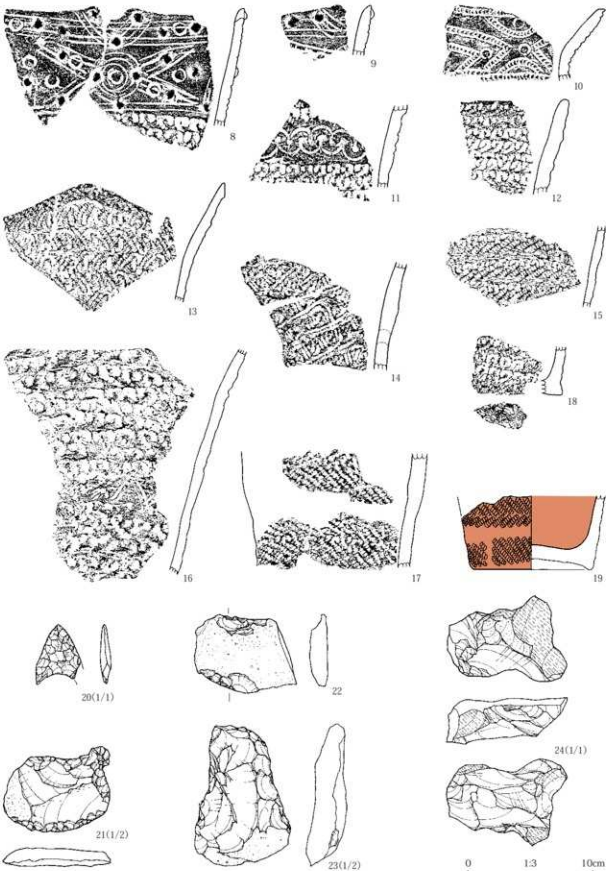
のピット群と重なる位置に周溝状の溝が部分的に検出されており、この溝と壁柱穴との関連が不明である。　**炉**：中央北寄りの位置で検出した。床面より８㎝程下がった位置に扁平な礫を敷いて炉底とし、これを礫で「コ」の字状に囲んで構築していた。開口する南側には深鉢１個体を正位の状態で埋設していた。　**遺物**：床面近くから出土した資料が他の住居と比較すると多い傾向があり、炉の北西側から横位で出土した深鉢底部（第73図-19）の中からベンガラとみられる赤色顔料が検出されたことが特筆されるものである。　**重複**：なし　**所見**：ほぼ完全な状態で調査できた唯一の例である。炉に埋設されていた深鉢は二ツ木式で、床面近くから出土している土器の主体も二ツ木式であり、明瞭な型式差が認められないことから二ツ木式段階と考えてよいであろう。



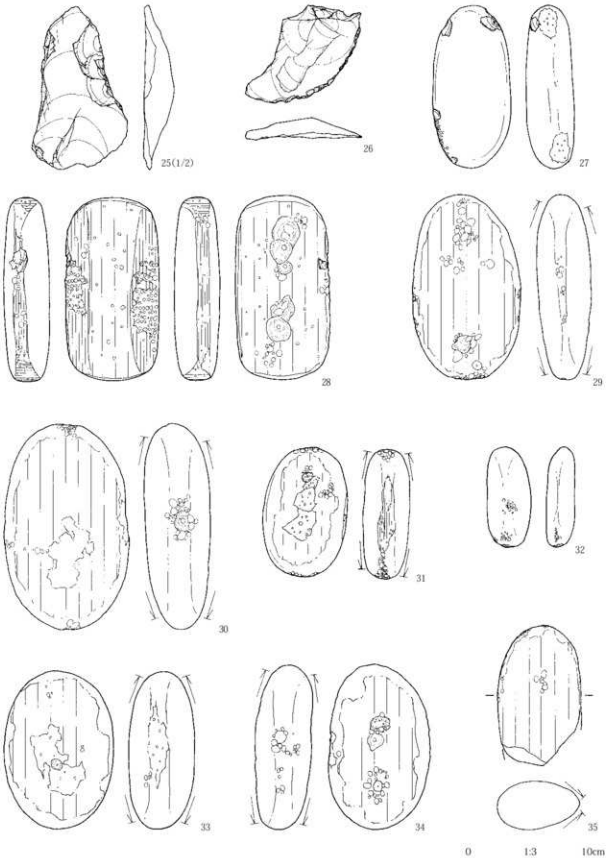

第71図　１区　７号住居遺物出土状況




第72図　１区　７号住居出土遺物（１）




第73図　１区　７号住居出土遺物（２）




第74図　１区　７号住居出土遺物（３）

## ２　土坑

土坑として調査したものは、３区の９号土坑～13号土坑までの５基、１区の42号土坑～61号土坑、63号土坑～71号土坑までの29基の合計34基である。この中で、３区10号土坑は、当初住居と認識されていたものであるが、調査途中で複数土坑の重複の可能性が高いことから名称変更されたものである。

**３区　９号土坑**（第75図　PL.19･33）

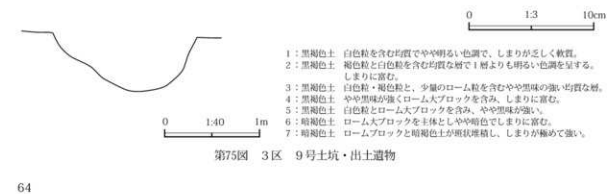
**位置**：Ds-136グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸2.67m、短軸1.59m　**残存深度**：0.57m　**主軸方位**：N－18°－W　**埋没土**：土層は自然堆積の様相を呈し、ロームブロックの混入状況から１～３層土と４～７層土に２大別できる。**遺物**：覆土中からは前期から後期までの異なる時期の土器片23点の他、削器や石核が出土した。　**重複**：なし

**３区　10号土坑**（第76～81図　PL.19･20･33～35）

当土坑は、上層の確認段階で中期末の土器片が比較的集中していたために、住居との認識で調査を開始した遺構である。しかし、調査が進んだ時点でも床面やが跡の確認ができなかったことから土坑と判断し10号土坑と名称変更をしたものである。調査の最終段階で４基の土坑の重複である可能性が高いことが判明したが、調査は10号土坑として終了したため個別の遺構番号が付与されていない。したがってここではa～dの枝番を付けて報告する。遺物は、４基の土坑を覆うように出土した。

**３区　10a号土坑**

**位置**：Ds-139グリッド　**形状**：不整楕円形　**規模**：長軸2.00m、短軸1.42m　**残存深度**：0.45m　**主軸方位**：N－29°－E　**遺物**：下層で炭化物が出土し



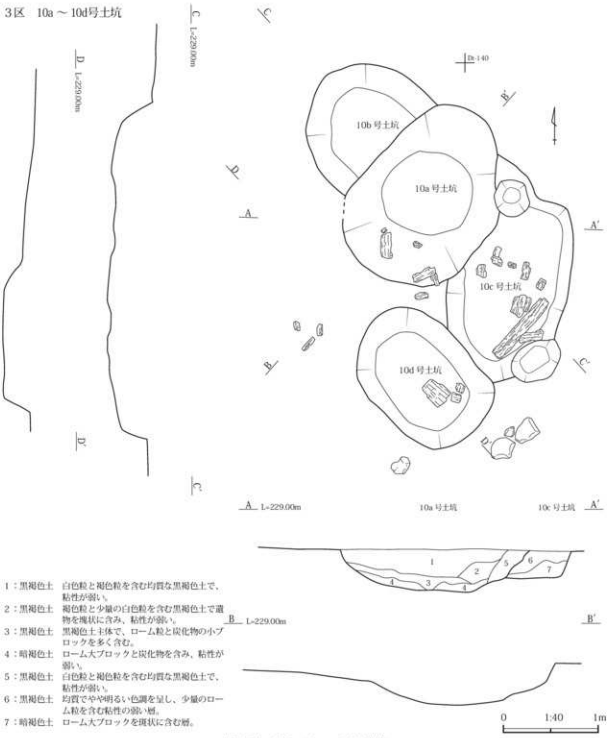

1：黒褐色土　白色粒を含む均質でやや明るい色調で、しまりが乏しく軟質。
2：黒褐色土　褐色粒と白色粒を含む均質な層で１層よりも明るい色調を呈する。しまりに富む。
3：黒褐色土　白色粒・褐色粒と、少量のローム粒を含むやや黒味の強い均質な層。
4：黒褐色土　やや黒味が強くローム大ブロックを含み、しまりに富む。
5：黒褐色土　白色粒とローム大ブロックを含み、やや黒味が強い。
6：暗褐色土　ローム大ブロックを主体としやや暗色でしまりに富む。
7：暗褐色土　ロームブロックと暗褐色土が斑状堆積し、しまりが極めて強い。

第75図　３区　９号土坑・出土遺物

た。第78図－４の深鉢は中層から出土した。　**重複**：10b号土坑・10c号土坑→10a号土坑　**所見**：出土遺物から加曽利E4式段階である。

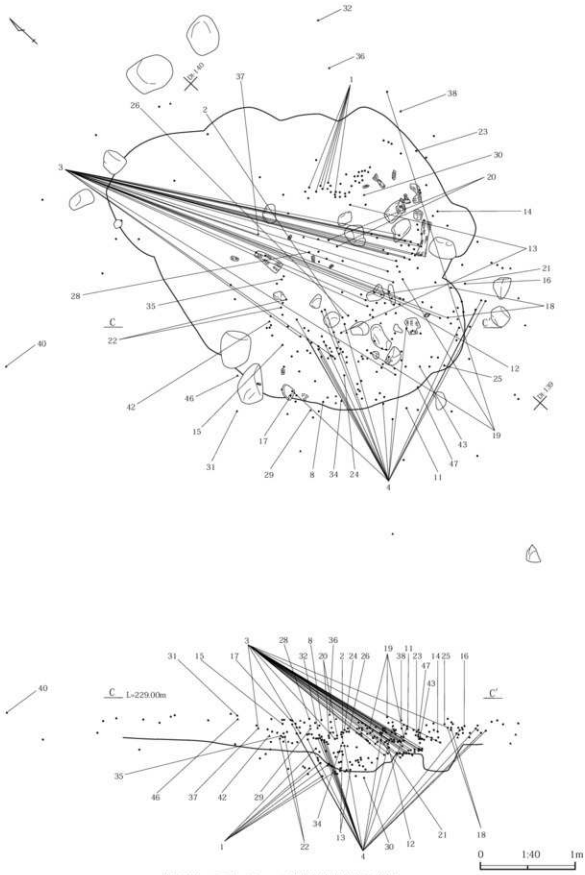
### ３区　10b号土坑

**位置**：Ds-139グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸(0.99)m、短軸1.38m　**残存深度**：0.43m　**主軸方位**：Ｎ－44°－Ｗ　**遺物**：礫とわずかに土器片が出土した。　**重複**：10b号土坑→10a号土坑　**所見**：時期を特定できるような遺物出土はなかったが、形態的にも重複する土坑に類似しているので、近い時期の所産と考えられる。

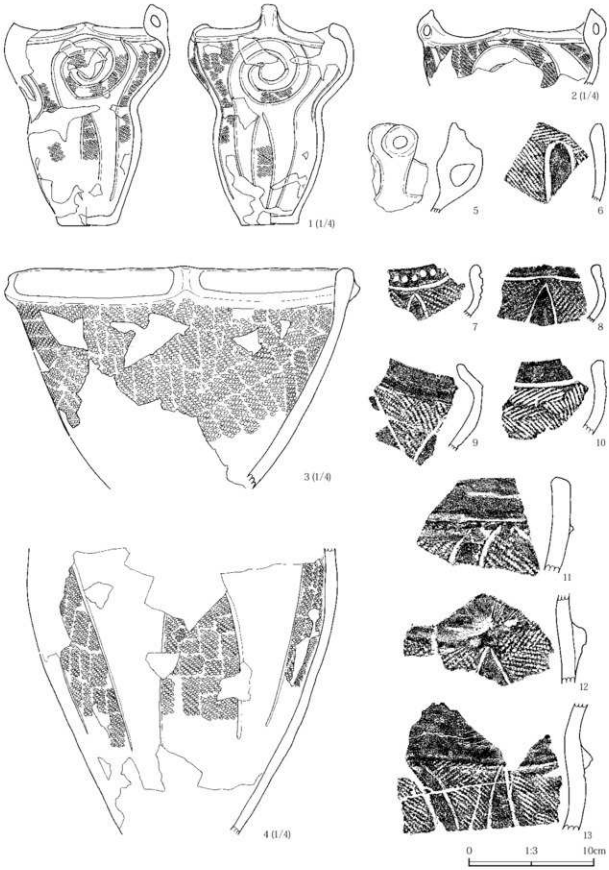



1：黒褐色土　白色粒と褐色粒を含む均質な黒褐色土で、粘性が弱い。
2：黒褐色土　褐色粒と少量の白色粒を含む黒褐色土で遺物を塊状に含み、粘性が弱い。
3：黒褐色土　黒褐色土主体で、ローム粒と炭化物の小ブロックを多く含む。
4：暗褐色土　ローム大ブロックと炭化物を含み、粘性が弱い。
5：黒褐色土　白色粒と褐色粒を含む均質な黒褐色土で、粘性が弱い。
6：黒褐色土　均質でやや明るい色調を呈し、少量のローム粒を含む粘性の弱い層。
7：暗褐色土　ローム大ブロックを斑状に含む層。

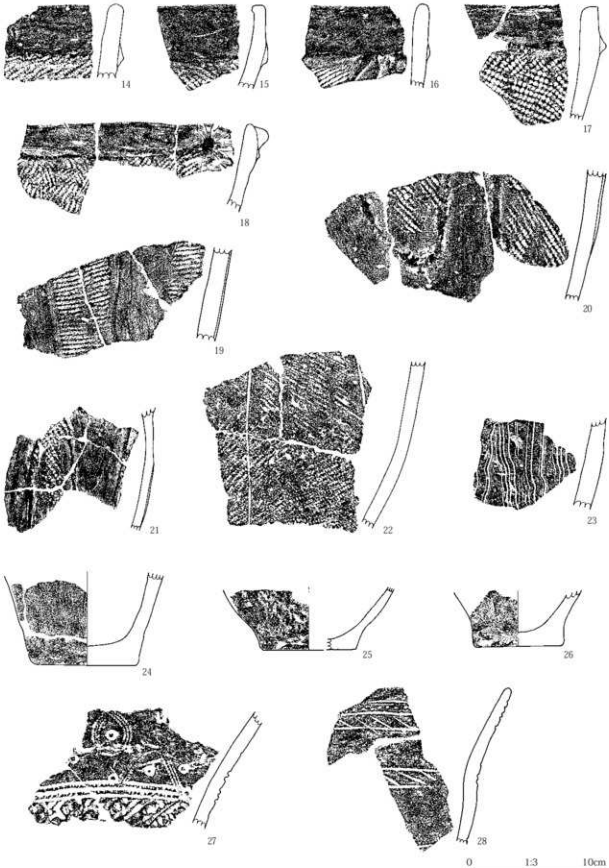
第76図　３区　10a ～ 10d号土坑



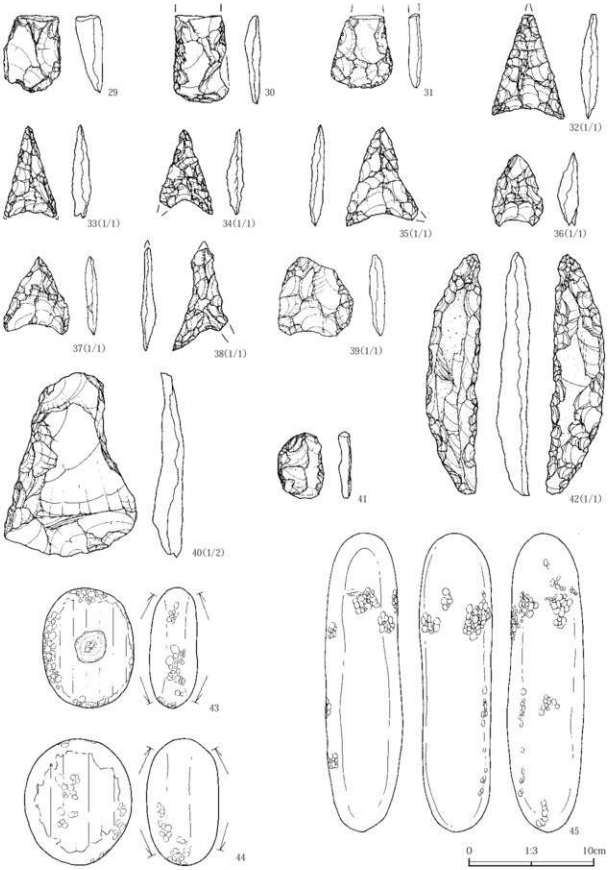

第77図　３区　10a ～ 10d号土坑遺物出土状況



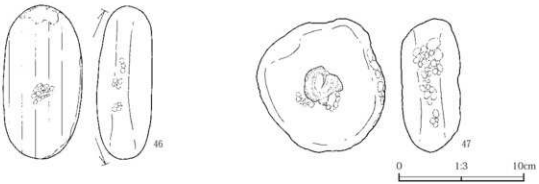

第78図　３区　10a ～ 10d号土坑出土遺物（１）




第79図　３区　10a ～ 10d号土坑出土遺物（２）




第80図　３区　10a ～ 10d号土坑出土遺物（３）




第81図　３区　10a ～ 10d号土坑出土遺物（４）

**３区　10c号土坑**

**位置**：Dt-139グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸2.00m、短軸1.37m　**残存深度**:0.30m　**主軸方位**:N－８°－E　**遺物**：底面から20cmほど上位から炭化材が、また覆土中から土器片が出土した。　**重複**:10c号土坑→10a号土坑・10d号土坑　**所見**：復元できるような土器の出土は見られなかったが、出土した土器片の多くは加曽利E4式であることから、土坑の時期は当該段階と考えられる。

**３区　10d号土坑**

**位置**：Ds-139グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸1.57m、短軸1.08m　**残存深度**:0.29m　**主軸方位**:N－44°－W　**遺物**：底面から15cmほど上位から炭化材と骨片が出土した他、土器片が出土した。　**重複**：10c号土坑→10d号土坑　**所見**：当土坑上層から出土した土器から加曽利E4式段階と考えられる。

**３区　11号土坑**（第82図　PL.20）

**位置**：Dt-143グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸2.11m、短軸0.95m　**残存深度**:0.80m　**主軸方位**:N－18°－W　**埋没土**：１～３層と４・５層との間に不自然な堆積が認められ、掘り直しがあった可能性がある。　**遺物**：前期前葉の土器片が６点出土した。　**重複**：なし　**所見**：平面および断面形状から陥穴の可能性がある。

**３区　12号土坑**（第82図　PL.20･35）

**位置**：Dt-142グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸1.52m、短軸0.91m　**残存深度**:0.68m　**主軸方位**:N－17°－E　**埋没土**：短軸方向の土層断面の状況が11号土坑に類似する。　**遺物**：前期前葉の土器片15点と石匙が１点出土した。　**重複**：３号住居内から検出されたものであるが、検出状況から当土坑が古い段階と考えられる。　**所見**：断面形状や埋没状況、主軸方位など11号土坑と共通する要素が多いことから、当土坑も陥穴と考えられる。

**３区　13号土坑**（第82図　PL.20）

**位置**：Dr-138グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸(0.95)m、短軸0.71m　**残存深度**：0.20m　**遺物**：なし　**重複**：なし

**１区　42号土坑**（第83図　PL.20）

**位置**：Dr-124グリッド　**形状**：不整円形　**規模**：径0.95m　**残存深度**：0.67m　**埋没土**：３層が水平堆積する。　**遺物**：なし　**重複**：楕円形の浅い掘り込みと重複する。　**所見**：上部の崩落により平面形状が不整形であるが、本来は袋状の断面を有する円形土坑と考えられる。

**１区　43号土坑**（第83図　PL.20）

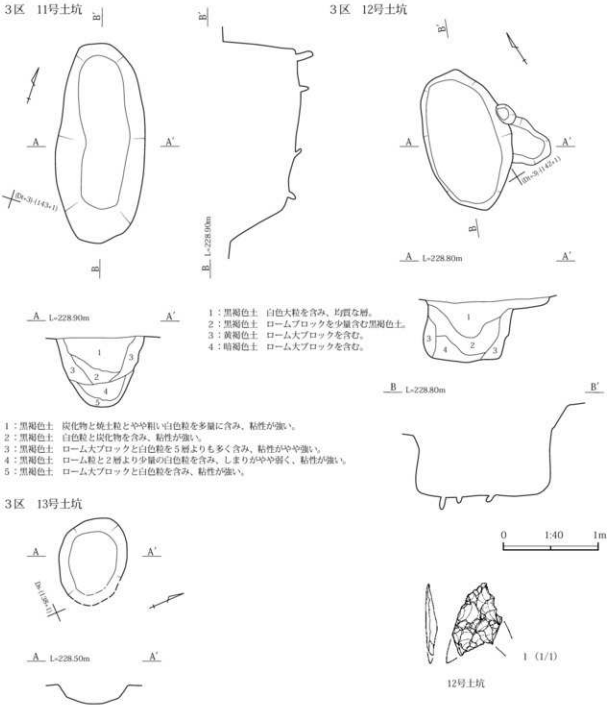
**位置**：Ds-124グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.59m　**残存深度**：0.39m　**遺物**：なし　**重複**：なし

**１区　44号土坑**（第83図　PL.20）

**位置**：Ds-123グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.70m　**残存深度**：0.55m　**埋没土**：柱痕状の縦位の分層ができた。　**遺物**：なし　**重複**：なし　**所見**：土層の堆積状況から柱穴の可能性がある。

**１区　45号土坑**（第83図　PL.21）

**位置**：Ds-123グリッド　**形状**：不明　**規模**：不明　**残存深度**：0.61m　**埋没土**：44号土坑と類似する。　**遺物**：なし　**重複**：なし　**所見**：44号土坑と同様に柱穴となる可能性がある。




第82図　３区　11～13号土坑・出土遺物

**１区　46号土坑**（第84図　PL.21･35）

**位置**：Dq-124グリッド　**形状**：円形　**規模**：径1.14m　**残存深度**：0.25m　**遺物**：前期の土器小片が３点出土した。　**重複**：なし

**１区　47号土坑**（第84図　PL.21）

**位置**：Dr-126グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.68m　**残存深度**：0.13m　**遺物**：なし　**重複**：なし

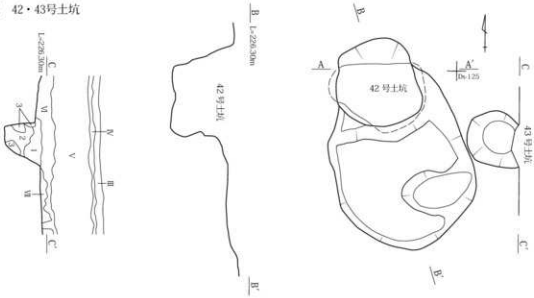
**１区　48号土坑**（第84図　PL.21）

**位置**：Dr-126グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.48m　**残存深度**：0.14m　**遺物**：なし　**重複**：なし

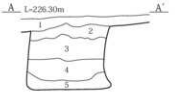
**１区　49号土坑**（第84図　PL.21･35）

**位置**：Dr-126グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸0.62m、短軸0.48m　**残存深度**：0.09m　**遺物**：前期前葉の土器片が２点出土した。　**重複**：50号土坑

## １区　42・43号土坑

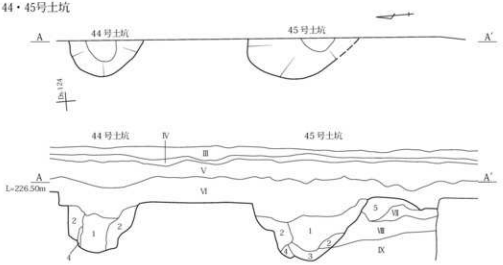



１区－42号土坑
１：黒　褐　色　土　ロームブロックを30％程度含む。
２：黒　褐　色　土　ロームブロックを５％、ローム粒を２～３％程度含む。
３：オリーブ褐色土　ロームブロックとローム粒を10％程度含む。
４：暗 灰 黄 色 土　３層に類似する層。
５：にぶい黄褐色土　Ⅶ層土ブロック。




１区－43号土坑
１：黒　褐　色　土　ロームブロックを５％程度含む。
２：オリーブ褐色土　ロームブロックとローム粒を10％程度含む。
３：暗 灰 黄 色 土　２層に類似する層。

## １区　44・45号土坑

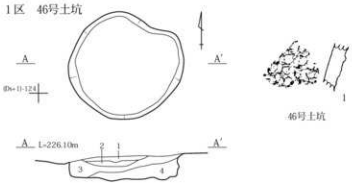


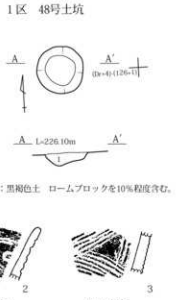

１区－44号土坑
１：褐灰色土　ローム粒とロームブロックを10％程度含む。
２：褐灰色土　１層に類似する層で、ロームブロックを５％程度含む。
３：黄褐色土　Ⅶ層土の崩落。
４：暗褐色土　Ⅸ層土と２層土の混土。
５：褐灰色土　ローム粒とロームブロックを５％程度含む。

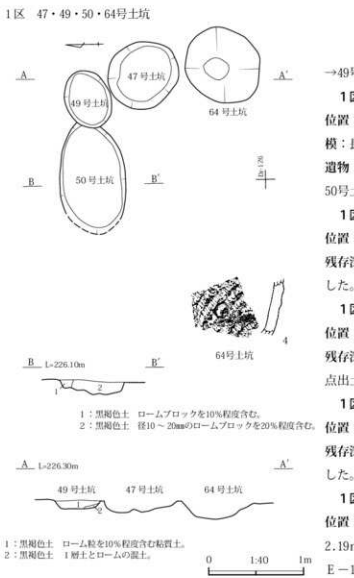
１区－45号土坑
１：褐灰色土　ローム粒とロームブロックを10％程度含む。
２：褐灰色土　１層に類似する層で、ロームブロックを５％程度含む。
４：暗褐色土　Ⅸ層土と２層土の混土。

0　1:40　1m

第83図　１区　42～45号土坑




第84図　1区　46～50・64号土坑・出土遺物

→49号土坑

**1区　50号土坑**（第84図　PL.21･35）

**位置**：Dq-126・Dr-126グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸(1.23)m、短軸0.70m　**残存深度**：0.13m　**遺物**：前期末葉の土器片が１点出土した。　**重複**：50号土坑→49号土坑

**1区　51号土坑**（第85図　PL.36）

**位置**：Dr-120グリッド　**形状**：不明　**規模**：不明　**残存深度**：0.12m　**遺物**：前期の土器片が１点出土した。　**重複**：不明

**1区　52号土坑**（第85図　PL.36）

**位置**：Dr-120グリッド　**形状**：不明　**規模**：不明　**残存深度**：0.35m　**遺物**：前期と後期の土器片が５点出土した。　**重複**：不明

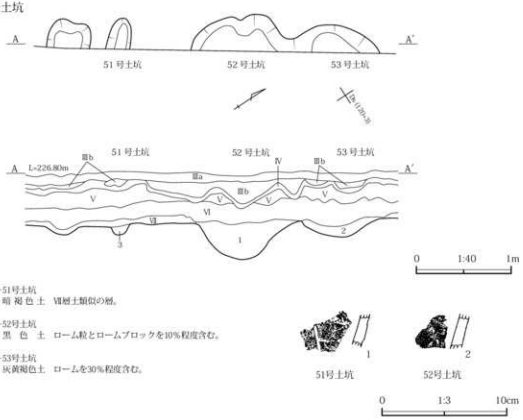
**1区　53号土坑**（第85図）

**位置**：Dr-120グリッド　**形状**：不明　**規模**：不明　**残存深度**：0.16m　**遺物**：前期の土器片が１点出土した。　**重複**：不明

**1区　54号土坑**（第86図　PL.21･36）

**位置**：Dr-121グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸2.19m、短軸1.72m　**残存深度**：0.46m　**主軸方位**：Ｅ－18°－Ｓ　**遺物**：前期から中期の土器片が20点出土した。　**重複**：なし

１区　51～53号土坑




第85図　１区　51～53号土坑・出土遺物

**１区　55号土坑**（第86図　PL.21・36）

**位置**：Dr-121グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸1.32m、短軸1.06m　**残存深度**：0.48m　**遺物**：前期から中期の土器小片が21点と削器が出土した。

**重複**：なし

**１区　56号土坑**（第87図　PL.21・36）

**位置**：Ds-131グリッド　**形状**：不明　**規模**：不明

**埋設土**：上下２層に分離でき、上層で深鉢が出土。**遺物**：口縁部と底部の欠損した深鉢が１点と前期前葉の土器片が21点出土した。　**重複**：不明　**所見**：深鉢は口縁部と底部が欠損したもので、正位でやや傾いた状況で出土している。土層の状況からも土器を埋設したものとは考えにくい。出土した土器は、二ツ木式である。

**１区　57号土坑**（第87図　PL.21・36）

**位置**：Ds-131グリッド　**形状**：円形　**規模**：径1.13m　**残存深度**：0.49m(土層断面での計測)　**埋設土**：上下２層に大別された。　**遺物**：前期前葉の土器片が10点出土した。　**重複**：不明

**１区　58号土坑**（第88図　PL.22）

**位置**：Dq-121グリッド　**形状**：不整形　**規模**：不明

**残存深度**：0.26m　**遺物**：なし　**重複**：なし

**１区　59号土坑**（第88図）

**位置**：Dq-122グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.41m　**残存深度**：0.45m　**遺物**：なし　**重複**：なし

**１区　60号土坑**（第88図）

**位置**：Dq-122グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.30m　**残存深度**：0.32m　**遺物**：なし　**重複**：なし

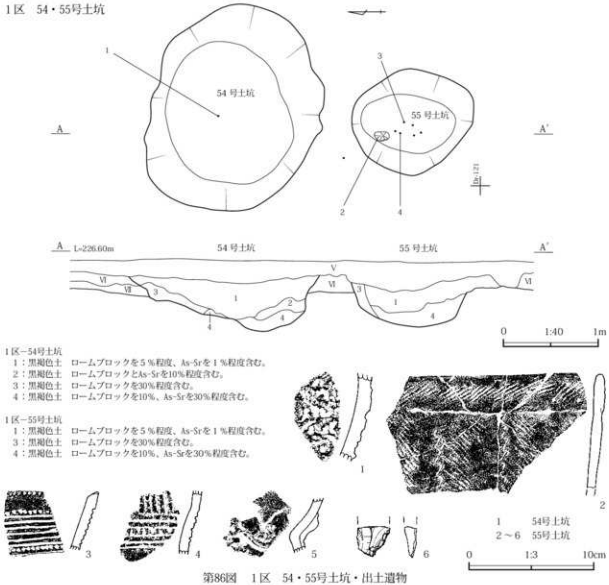
**１区　61号土坑**（第88図　PL.22）

**位置**：Dq-122グリッド　**形状**：不整円形　**規模**：径0.31m　**残存深度**：0.18m　**遺物**：なし　**重複**：なし

**１区　63号土坑**（第88図　PL.22・36）

**位置**：Dr-121・122グリッド　**形状**：円形　**規模**：径1.10m、底径1.18m　**残存深度**：0.96m　**遺物**：前期前葉の土器片が６点と磨石が１点出土した。

**重複**：６号住居の床面で検出された。　**所見**：口径よりも底径が大きい断面形状がいわゆる袋状を呈す




第86図　１区　54・55号土坑・出土遺物

る土坑である。６号住居の床下は全体に凹凸の激しい状況であったが、土坑が検出された部分では凹凸が少なく、６号住居の床面中央の壁際で検出された位置関係からも住居に伴う土坑である可能性がある。出土した遺物は、前期前葉の土器片であり、６号住居と明らかな時期差があるものとは考えられない。

**１区　64号土坑**（第84図　PL.21･35）

**位置**：Dr-126グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.74m　**残存深度**：0.19m　**遺物**：前期前葉の土器片が２点出土した。　**重複**：なし

**１区　65号土坑**（第89図　PL.22）

**位置**：Dr-127グリッド　**形状**：円形　**規模**：径0.76m　**残存深度**：0.33m　**遺物**：なし　**重複**：なし

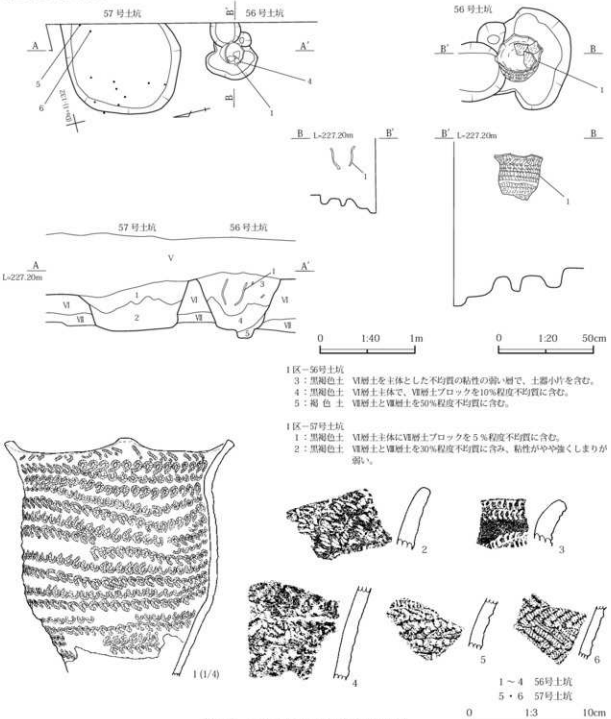
**１区　66号土坑**（第89図）

**位置**：Ds-122グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸0.57m、短軸0.37m　**残存深度**：0.31m　**遺物**：なし　**重複**：６号住居の調査で検出したものであるが、土層断面の状況から当土坑が新しい。

**１区　67号土坑**（第89図　PL.22･36）

**位置**：Ds-133グリッド　**形状**：円形　**規模**：径1.00m　**残存深度**：0.20m　**遺物**：口縁部破片が４点出土し、すべて接合した。　**重複**：なし

１区　56・57号土坑




第87図　１区　56・57号土坑・出土遺物

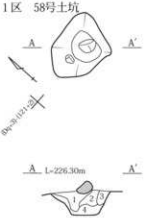
**１区　68号土坑**（第89図　PL.22･36）

**位置**：Ds-132グリッド　**形状**：円形　**規模**：径1.35m　**残存深度**：0.21m　**遺物**：前期前葉の土器片が９点出土した。　**重複**：なし　**所見**：規模や平面形、底面の状況から本来は、63号土坑などと同様な形状の土坑であった可能性がある。

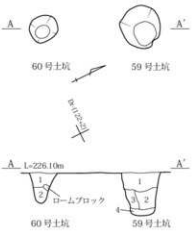
**１区　69号土坑**（第89図　PL.22･36）

**位置**：Dr-133グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸1.21m、短軸0.73m　**残存深度**:0.24m　**主軸方位**:N－33°－E　**遺物**：前期前葉と後期の土器片が11点出土した。　**重複**：70号土坑→69号土坑

1区　58号土坑




1区　59・60号土坑

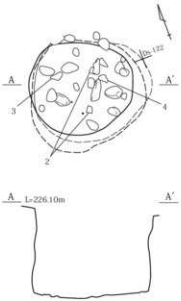



1区－58号土坑
1：灰黄褐色土　径５㎝程度のローム大粒を５％、As-Srを１％程度含む。
2：明黄褐色土　ロームブロック主体の層。
3：黒褐色土　ロームブロックを10％、As-Srを３％程度含む。
4：明黄褐色土　ロームブロック主体の層。

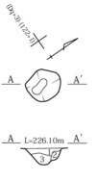
1区－59号土坑
1：黒褐色土　ロームブロックを５％程度含む。
2：黒褐色土　ローム粒とAs-Srを10％程度含む。
3：黒褐色土　ローム粒とAs-Srを５％程度含む。
4：黒褐色土　ローム粒とAs-Srを２％程度含む。

1区－60号土坑
1：黒褐色土　ロームブロックを５％程度含む。
2：灰黄褐色土　20％程度のロームブロックとAs-Srを10％程度含む。

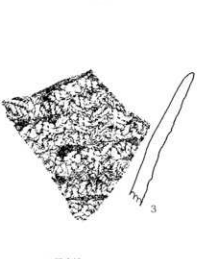
1区　63号土坑

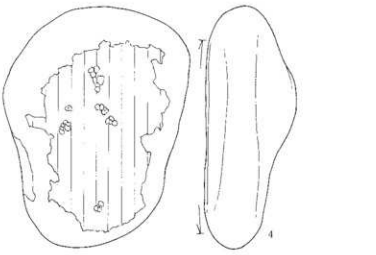



1区　61号土坑




1区－61号土坑
1：黒褐色土　ロームブロックを５％程度含む。
2：明黄褐色土　ロームの崩落土。
3：灰黄褐色土　20％程度のロームブロックとAs-Srを10％程度含む。



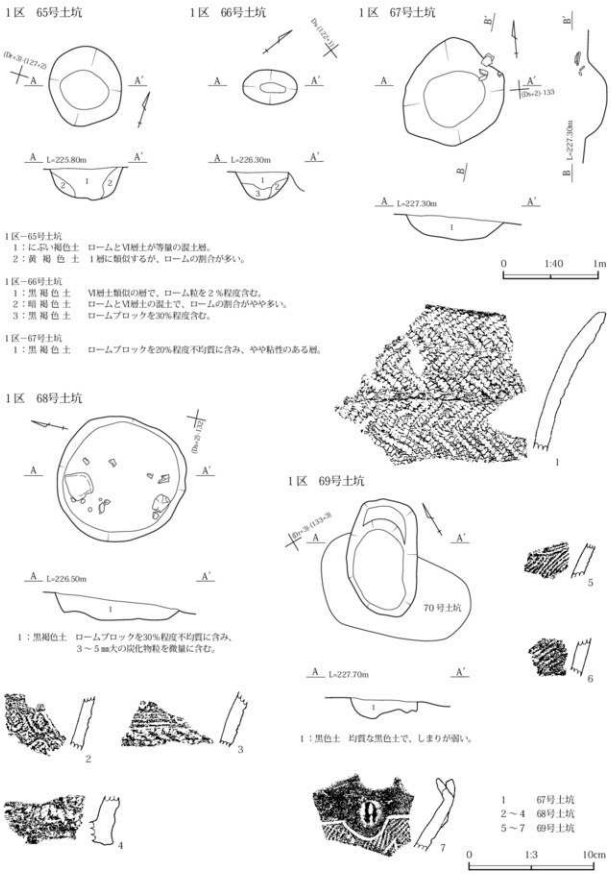




1～4　63号土坑

0　1:40　1m

0　1:3　10cm

第88図　1区　58～61・63号土坑・出土遺物




1区－65号土坑
　1：に赤い褐色土　ロームとⅥ層土が等量の混土層。
　2：黄 褐 色 土　1層に類似するが、ロームの割合が多い。

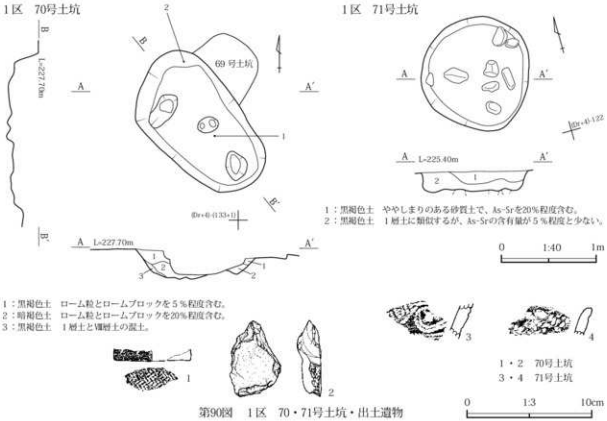
1区－66号土坑
　1：黒 褐 色 土　Ⅵ層土類似の層で、ローム粒を２％程度含む。
　2：暗 褐 色 土　ロームとⅥ層土の混土で、ロームの割合がやや多い。
　3：黒 褐 色 土　ロームブロックを30％程度含む。

1区－67号土坑
　1：黒 褐 色 土　ロームブロックを20％程度不均質に含み、やや粘性のある層。

1：黒褐色土　ロームブロックを30％程度不均質に含み、
　　3～5㎜大の炭化物粒を微量に含む。

1：黒色土　均質な黒色土で、しまりが弱い。

第89図　1区　65～69号土坑・出土遺物




第90図　１区　70・71号土坑・出土遺物

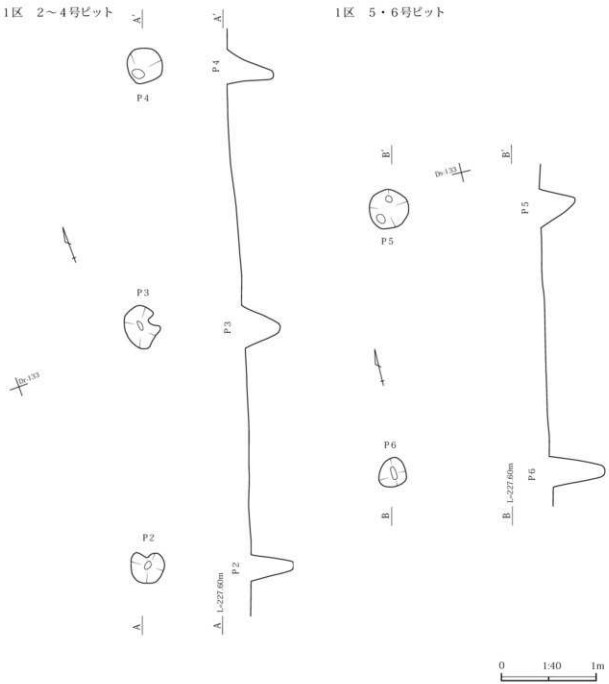
**１区　70号土坑**（第90図　PL.22･36）

**位置**：Dr-133グリッド　**形状**：楕円形　**規模**：長軸1.65m、短軸0.95m　**残存深度**:0.28m　**主軸方位**:N－39°－W　**遺物**：後期の土器片が３点出土した。**重複**：70号土坑→69号土坑

**１区　71号土坑**（第90図　PL.23･36）

**位置**：Dt-122グリッド　**形状**：円形　**規模**：径1.15m　**残存深度**：0.21m　**遺物**：前期前葉の土器片が５点出土した。　**重複**：１区６号住居←71号土坑

以上のように４面として調査された土坑は34基であるが、形状や規模は様々でありすべてが同じ機能を担ったものでないことは明らかである。個別土坑についてその機能を特定することは不可能であるが、いくつか定型化された土坑があるのでそれをまとめておきたい。第１は３区で検出された11号土坑と12号土坑である。長楕円形の平面形を有し、比較的深く掘削され底面が平坦に構築される特徴がある。また、短軸方向の土層断面では壁面に沿って縦位の土層堆積が観察され、さらに主軸方位が近似する傾向がある。このような特徴を持つ土坑は、川場村の生品西浦遺跡でも多数検出されており、底面に掘り込まれたピットの存在などから陥穴と位置づけている。当遺跡で検出したものも共通する要素が多いことから陥穴とみてよいであろう。所属時期に関しては、遺物出土が無いため特定はできない。第２は、１区63号土坑に代表される径１m程度の円形の平面形で、口径よりも底径が大きいいわゆる袋状の断面形を有する土坑である。崩落によるものか平面形は整形でないが、断面で袋状であることが確認された１区42号土坑は同様の土坑である。また、検出面からの残存が悪いため特徴的な要素すべてにおいて一致するわけではないが、比較的整形な円形を呈する平面形と平坦な底面を有する１区46・57・68・71号土坑もこの範疇の土坑とみて良いであろう。このような特徴の土坑は、群馬県内においては前期に特徴的な形態のものであり、従来から貯蔵穴と認識されてきたものである。第３は、３区10a ～ 10d号土坑、１区69・70号土坑である。これらの土坑は、楕円形（隅丸長方形）の平面形で、長軸と短軸の比が概ね３：２に近い値を示すものである。中期末か




第91図　1区　2～6号ピット

ら後期初頭の所産と見られ、同形態の土坑が重複する特徴がある。

## 3　ピット（第91図　PL.23）

４面調査で検出したピットは５ヵ所である。ローム層上面においては多数のピット様の掘り込みが検出されているが、その多くは平面形が不整形で、掘り方も一定しないことなど木根の痕跡である可能性が高いものであった。そうした中にあってここに掲載した５本については比較的掘り方がしっかりとしていることからピットと判断した。ただし、２～４号ピットのように直線的に並ぶような配置の部分もあるが用途は不明である。

# 第３節　包含層の調査

## １　調査の概要

３面の調査が終了した時点で、４面調査の一環としてグリッド境にセクションベルトを残しながらⅤ・Ⅵ層中に形成された遺物包含層の調査を行った。出土位置を図化しながら取り上げた遺物も一部あるが、基本的には５ｍ×５ｍのグリッド単位で取り上げを行った。その結果、０区を除く１区・３区～５区の４調査区において粗密の違いはあるものの包含層が形成されていることが確認できた。特に多くの遺物が出土した１区と３区について、出土遺物総数がある程度わかるように示したのが第92図２である。

１区においては、西側斜面部分及び南西谷部分では遺物出土数は少なく、遺構が検出されている緩斜面と平坦部分から多くの遺物が出土していることがわかる。ほぼ全域から多くの遺物出土があった１区と３区とでは出土の様相が相違するかのように思えるが、１区においては斜面部と平坦部が同一調査区内で検出されているのに対して、３区は平坦部にあたり、１区の斜面部にあたるのが４・５区という位置関係にある。つまり、傾斜部では包含層の形成は未発達で、変換点から平坦部にかけて包含層が形成されていることになる。

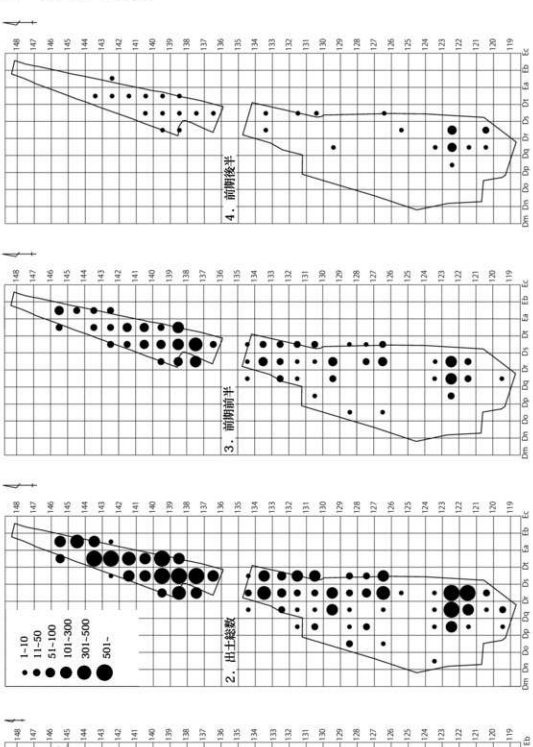
## ２　土器の数量的出土傾向

１区と３区のグリッド出土の土器片について縄文時代前期前半、前期後半、中期前半、中期後半、後期前半の５つの大まかな時期に分けて出土数を集計して図化したのが第92・93図３～７である。時期分けについては、無文の破片などについても胎土や色調などから可能な限り時期を判断するため詳細な型式別とはせず、前述のような大まかな時期分けとした。当遺跡出土の土器型式については遺構外出土土器の項で述べるのでここでは詳述しないが、前期前半では二ツ木式・関山式、前期後半では十三菩提式、中期前半では五領ヶ台式、阿玉台式、中期後半は加曽利Ｅ式、後期前半では称名寺式と堀之内式がそれぞれ土器の主体を占めている。

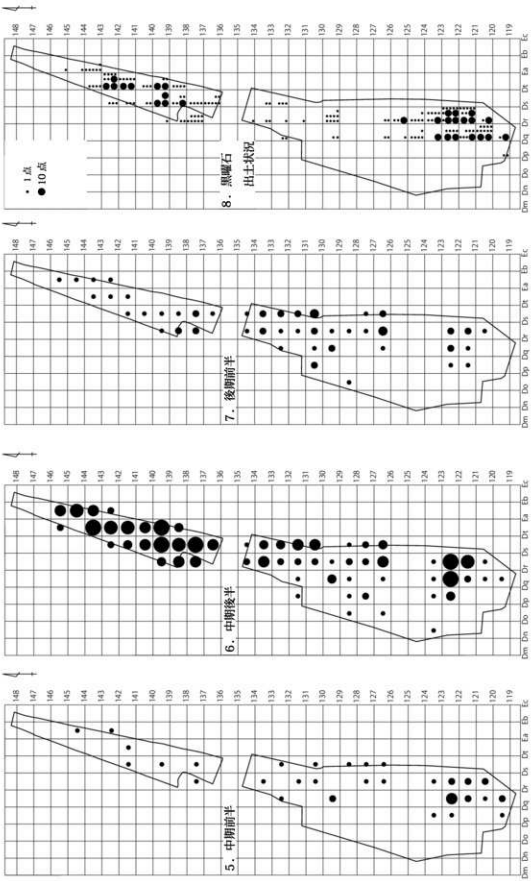
前期前半の土器は、１区ではDq・Dr-122グリッドを中心とした地点に集中し、３区では南よりに位置するDr・Ds-137・138グリッド付近により多くの出土が認められる。これらの集中部分では下層の調査で、前期前半二ツ木式段階の１区６号住居及び３区２号住居がそれぞれ検出されており、これらの住居覆土遺物が少なからず影響を及ぼしていると考えられるが、基本的に当該期の遺構が構築されている付近に土器出土が集中している傾向を窺うことができる。前期後半および中期前半の遺物は、全体に出土数が少なく傾向を捉えにくいが、前期前半の遺物集中部分に重なるように多い傾向はありそうである。また、中期前半の遺物の中には比較的大型の破片も見られるのに対して、前期後半の遺物は細片化したものが多い傾向もある。

中期後半の土器については、全体的な出土傾向は前期前半に類似するが、１区と比較して３区の出土総数が多く、中でも北寄りのグリッドにおいても遺物の集中が顕著であるのが前期前半との大きな違いである。また、Ds・Dt-139グリッド付近に際立った集中が認められるが、このグリッドからは下層調査で中期後半加曽利Ｅ４式段階と見られる土坑が４基検出されており、土坑上面に中期後半の土器を主体とする遺物集中が認められたことと無関係ではないであろう。後期前半の遺物についても前期後半・中期前半と同様に出土総数は少なく、全域に散らばったようなあり方を示している。また、前期後半の遺物と同様に細片化したものが多い傾向が窺える。

当遺跡において検出された遺構は、縄文時代前期前半の竪穴住居と土坑、中期後半の土坑であり、前期後半、中期前半、後期前半及び１区の中期後半の遺物など、少なくとも当遺跡で遺構検出のなかった時期の遺物については、上位段丘面に展開する集落である中郷遺跡からもたらされたものである可能性が高い。




第92図　グリッド遺物出土状況（1）




第93図　グリッド遺物出土状況（2）

### ３　黒曜石の数量的出土傾向

縄文時代の遺構が検出された１区と３区について包含層調査に伴って出土した黒曜石についてグリッドごとの出土数を示したのが第93図８である。１区では、Dq・Dr-120 ～ 123グリッドに、３区ではDs・Dt-138・139、Dt-141・142グリッドの３ヵ所に黒曜石の出土が集中していることがわかる。これらの集中するグリッドと４面遺構全体図とを重ね合わせると、Dq・Dr-120 ～ 123グリッドでは６・８号住居や51・54・58土坑などが、Ds・Dt-138・139グリッドには２号住居・10号土坑、Dt-141・142グリッドには３号住居がそれぞれ下層調査で検出されている。特に３号住居においては、遺構調査時において覆土中から126点もの黒曜石が出土している。下層調査で遺構が検出されているグリッドであっても、黒曜石の顕著な集中が見られない場所もある。しかし、遺構の検出されたグリッドにおける黒曜石の集中傾向は、包含層調査を進めていく過程で、本来遺構覆土中に包含されていた黒曜石を包含層出土として取り上げた結果を反映している可能性が高い。また、１区においては、調査区東側に偏った出土傾向が認められる。これは西側が傾斜地であり遺構が構築されず、包含層の形成も希薄であることに関係する傾向であろう。

## 第４節　遺構外出土遺物

### １　土器・土製品

（１）土器の分類

型式別さらには紋様要素・紋様構成を主眼として、以下のように分類を行った。

第Ⅰ群　前期前葉の土器
- 第１類　刻み隆帯によって区画し、紋様帯内に円形刺突のみ施すもの
- 第２類　刻み隆帯によって区画し、撚糸側面圧痕により主幹紋様を描くもの
- 第３類　刻み隆帯によって区画し、紋様帯内にも刻み隆帯を施すもの
- 第４類　１本書き沈線によりモチーフを描くもの
  - a 種　１本の沈線に刻みを沿わせるもの
  - b 種　梯子状沈線を施すもの
  - c 種　併行沈線を施すもの
- 第５類　半截竹管による平行沈線でモチーフを描くもの
  - a 種　梯子状沈線を施すもの
  - b 種　平行沈線を施すもの
  - c 種　C字状爪形紋を施すもの
- 第６類　多条沈線を施すもの
- 第７類　刺突を施すもの
- 第８類　縄紋施紋土器

第Ⅱ群　前期中葉～末葉の土器
- 第１類　黒浜式・有尾式
- 第２類　諸磯ａ式
- 第３類　諸磯ｂ式
- 第４類　諸磯ｃ式
- 第５類　諸磯式併行の縄紋施紋土器
- 第６類　下島式
- 第７類　大木５式
- 第８類　十三菩提式あるいは併行期の土器

第Ⅲ群　中期の土器
- 第１類　五領ヶ台式
- 第２類　勝坂式

第３類　阿玉台式
第４類　焼町土器
第５類　加曽利Ｅ式
第Ⅳ群　後期の土器
第１類　称名寺式
第２類　堀之内式
第３類　加曽利Ｂ式

（２）１区出土土器

**第１群**　前期前葉の土器

**第１類**　刻み隆帯によって区画し、紋様帯内に円形刺突のみを施すもの（第94図１　PL.37）

１は口端部が剥落しているが、口縁部破片と思われる。２条の刻み隆帯を口縁下と口縁部にめぐらせて幅狭の口縁部紋様帯を区画。紋様帯内に円形刺突を横位にめぐらす。円形刺突は半截竹管によるＣ字状刺突を対向させて表出しており、間隙にはＣ字状刺突も施されている。紋様帯下は原体は分からないが、縄紋が施される。

**第２類**　刻み隆帯によって区画し、撚糸側面圧痕により主幹紋様を描くもの（第94・95図２～７　PL.37）

２は刻み隆帯をめぐらせて、幅狭な口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は撚糸側面圧痕によりワラビ手紋を施し、円形刺突、刺切紋を施す。紋様帯下はループ縄紋を施すようだ。３は撚糸側面圧痕によるワラビ手紋、円形刺突を施す。４，５は紋様帯下端の部位。４は紋様帯内に撚糸側面圧痕、円形刺突、刺切紋が見られる。紋様帯下は０段多条の羽状縄紋を施す。５は紋様帯内に撚糸側面圧痕、３条１単位の沈線が見られる。紋様帯下はループ縄紋を多段に施紋する。６は０段多条の羽状縄紋を地紋とし、胴部のすぼまる部位に１条の隆帯をめぐらせる。扁平な幅広の隆帯で、矢羽根状の刻みを付す。紋様帯内は、撚糸側面圧痕によるワラビ手紋、円形刺突を施すが、区画紋は見られない。７は２条の刻み隆帯によって紋様帯を区画するが、上記した土器群とは隆帯の様相が異なる。刻みはややまばらに施され、施紋も浅い。間隔の空いた隆帯間には多截竹管状工具による刺突が施され、さらに隆帯をつなぐように２個の貼付紋を貼付する。紋様帯内は撚糸側面圧痕、円形刺突、刺切紋を施す。紋様帯下は０段多条の羽状縄紋を施す。

**第３類**　刻み隆帯によって区画し、紋様帯内にも刻み隆帯を施すもの（第95図８～10　PL.37）

８は撚糸側面圧痕と刻み隆帯を併用する構成となる。撚糸側面圧痕が主幹紋様と思われ、脇に刻み隆帯による菱形紋を施す。菱形の角には貼付紋が施される。また間隙には円形刺突、刺切紋が施される。紋様帯下は０段多条縄紋を施す。９は直立する器形を呈し、口径13.2cm、現存器高15.8cmを測る。紋様帯内は刻み隆帯による縦位梯子状紋、ワラビ手紋、渦巻紋、弧状紋を配し、貼付紋を多数貼付する。撚糸側面圧痕は一切用いられない。一部、貼付紋が剥落した部分に沈線が引かれており、隆帯を貼り付けるまえに、沈線を引いてモチーフの下書きをしたことが分かる。紋様帯下はループ縄紋を施す。10は刻み隆帯により縦位や四角形状モチーフを描き、円形刺突を施す。

**第４類**　１本書き沈線によりモチーフを描くもの

**ｂ種**　梯子状沈線を施すもの（第95図11　PL.37）

11は梯子状沈線により紋様帯を区画、紋様帯内に菱形紋、弧状モチーフを描く。菱形の角に貼付紋を貼付しており、８の技法に共通する。区画紋上にも貼付紋を施す。紋様帯下はループ縄紋を施す。

**第５類**　半截竹管による平行沈線によりモチーフを描くもの

**ｂ種**　平行沈線を施すもの（第95図12　PL.37）

12は平行沈線ではないが、無紋部分にコンパス紋を施すため本種に含めた。縄紋はループ紋を施しているようだ。

**ｃ種**　Ｃ字状爪形紋を施すもの（第95図13　PL.37）

13は波状口縁を呈す。２条のＣ字状爪形紋をめぐらせて口縁部紋様帯を区画、紋様帯内は縦位区画、ワラビ手紋を施し、縦長の貼付紋を貼付する。おそらく波頂部下に垂下した縦位区画を中心に対称ワラビ手紋のモチーフになるのだろう。紋様帯下は０段

多条の結束羽状縄紋を施し、菱形構成としている。

**第６類**　多条沈線を施すもの（第95図14　PL.37）

14は０段多条の結束羽状縄紋を地紋とし、半截竹管による平行沈線を３条横位にめぐらせ、貼付紋を貼付する。貼付紋は、多条沈線上は長方形状に４隅とその中心に、縄紋上は結束部にと規則的に配置されている。縄紋は結束羽状縄紋により菱形状を構成する。

**第７類**　刺突を施すもの（第95図15～17　PL.37）

15は紋様帯内に半截竹管によるＣ字状刺突を横位多段に施す。紋様帯を画す区画紋は施されない。紋様帯下は結節縄紋を施す。16は小突起をもつ波状口縁。縦長の刺突を横位多段に施す。17は刺突列を横位、斜位に施し、崩れたコンパス紋を施す。

**第８類**　縄紋施紋土器（第95・96図18～28　PL.37･38）

18，19は同一個体で、波状口縁を呈す。０段多条の結束羽状縄紋を施し、口縁に沿って半截竹管内皮による刺突を施す。胴部には２条の隆帯と環状貼付紋を施し、隆帯に沿って上下、隆帯間、環状貼付紋の内部に半截竹管内皮による刺突を施す。隆帯上にも縄紋が施される。20は外反する器形を呈し、結束羽状縄紋を施す。横位１条の隆帯が剥がれた痕跡があり、第94図６と同様の構成だった可能性がある。21は０段多条の羽状縄紋を施し、菱形構成とする。22は波状口縁で緩く外反する器形を呈す。口縁下からループ縄紋を施すが、波頂部下に狭小な紋様帯があり、刺切紋が施されている。23～25もループ縄紋を施す。24は縄紋帯幅にバラツキがある。25は波状口縁を呈す。26は波状口縁で直立する器形を呈す。推定口径18.2cm、現存器高14.4cmを測る。結節縄紋を施す。27は上げ底の底部破片で、推定底径11.0cm。０段多条の羽状縄紋を施す。底面にも縄紋を施紋する。28は底部に向かって急激にすぼまる器形を呈す。網代状の付加条縄紋を施す。

**第Ⅱ群**　前期中葉～末葉の土器

**第３類**　諸磯ｂ式（第96図29　PL.38）

29は横位集合沈線、Ｘ字状沈線を施す。

**第５類**　諸磯式併行の縄紋施紋土器（第96図30，31　PL.38）

30，31は緩く外反する器形を呈し、単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。

**第６類**　下島式（第96図32　PL.38）

32は横位集合沈線を地紋とし、結節浮線による渦巻紋を施す。

**第８類**　十三菩提式あるいは併行期の土器（第96図33～36　PL.38）

33は沈線を横位、縦位に施し、結節凹線を充填施紋する。34は折り返し状の肥厚口縁を呈し、下端を三角形状に彫り取ることによって鋸歯状を作出する。肥厚部下は単節ＬＲ、ＲＬによる結束羽状縄紋を横位施紋する。35は波状口縁で、折り返し状の肥厚口縁を呈す。単節ＬＲ縄紋を地紋とし、肥厚部には縄紋原体圧痕、肥厚部下には半截竹管内皮による刺突を施す。36は単節ＬＲの結節縄紋を施す。

**第Ⅲ群**　中期の土器

**第１類**　五領ヶ台式（第96～98図37～79　PL.38･39）

37～57は口縁部破片。37はキャリパー状の器形を呈す。半截竹管による平行沈線で区画し、内部を斜格子目沈線で充填する。その上からさらに平行沈線で三角形状モチーフを描き、内部に印刻を施す。38もキャリパー状の器形を呈し、口縁がくの字状に短く外反する。右下がりの集合沈線を施した後、左下がりの沈線を間隔を空けて施す。頸部は横位、縦位の沈線を施す。胎土に金雲母を含む。39，40は同一個体。39は口縁部紋様帯の部位で波状口縁を呈し、口唇内面が肥厚する。口縁下に半截竹管による沈線を沿わせ、楕円状区画を施す。区画内に単節ＲＬ縄紋を充填施紋し、沈線で分割する。口唇部にＣ字状刺突を施す。40は胴部紋様帯の部位で半截竹管による横位沈線を施し、斜格子目紋を施す。胎土に金雲母を含む。41は１条の沈線をめぐらせて区画し、区画内に縦位の沈線を充填施紋する。口唇部に刻みを付す。口縁内面に１条の沈線をめぐらせている。42は波状口縁でキャリパー状器形を呈す口縁部破片。

頸部に降線をめぐらせて口縁部紋様帯を区画、波頂部からも降線を垂下させる。紋様帯内は沈線により渦巻紋、クランク紋などの幾何学モチーフを描き、間隙に印刻を施す。口唇内面を肥厚させ、口唇部に刻みを付す。胎土に金雲母を含む。43は内削ぎの口唇部形状を呈す。２段の横位集合沈線によって区画し、区画内の上下端を三角形状に彫り取ることによって鋸歯状紋を作出する。紋様帯内は縦位やＵ字状の平行沈線を施し、間隙に櫛歯状の刺突を施す。44は球胴形あるいはキャリパー状の器形と思われる。波状口縁で屈曲部に無紋帯を成形し、把手を付す。口縁下に集合短沈線、紋様帯内は平行沈線による幾何学モチーフを描き、印刻を施す。間隙に浅い平行沈線を充填施紋する。口縁内面に１条の降線をめぐらせる。45は口縁部に降線をめぐらせて区画、区画内に縦位の細沈線を充填施紋する。降線下は４条の沈線、竹管刺突をめぐらせ、単節ＬＲ縄紋を縦位施紋する。口唇部外端に矢羽根状の刻みを付す。46は波状口縁を呈し、波頂部から刻みを付した降線を垂下させる。口縁下に短沈線帯を施し、沈線によるモチーフを描く。口唇内面を肥厚させ、波頂部に深い刻みを付す。47は口唇内外面を肥厚させ、竹管外皮による刺突を施した降帯をめぐらせて区画し、区画内に沈線により幾何学モチーフを描く。地紋に無節Ｌｒ縄紋が施される。48は口縁下に刻みを付した降線をめぐらせ、降線の上位に円形刺突、下位に交互刺突を沿わせる。口唇内面を肥厚させ、口唇部に刻みを付す。49は波状口縁で、内削ぎの口唇部形状を呈す。口縁下に短沈線帯を施し、斜位、矢羽根状沈線を施す。50も波状口縁で、内削ぎの口唇部形状を呈す。口縁下に短沈線帯、口縁に沿って沈線を施す。沈線間に交互刺突を施し、鋸歯状紋を作出する。胎土に微量の金雲母を含む。51は台状突起をもつ波状口縁。口縁下に単節ＬＲ縄紋を横位施紋し、以下、横位集合沈線を施す。沈線間の上下端に交互刺突を施し、鋸歯状紋を作出する。52はキャリパー状器形の口縁部破片。降帯によるモチーフを描き、結節沈線を沿わせる。区画内に単節ＲＬ縄紋を充填施紋する。53は波状口縁を呈し、口唇内面が肥厚する。口縁下に短沈線帯、弧状沈線、交互刺突、竹管外皮による刺突を施す。波頂部下に把手状の貼付を付す。54は波状口縁を呈す。沈線を施し、竹管外皮による刺突を沿わせる。地紋に無節Ｒ１縄紋を施紋する。口唇内面を肥厚させ、口唇部に刻みを付す。55は口縁下に１条の沈線をめぐらせ、以下、竹管外皮による刺突を施す。地紋に単節ＲＬ縄紋を施紋する。56は単節ＲＬ縄紋を縦位施紋し、口縁部に環状貼付紋を付す。口唇内外面が肥厚する。57は波状口縁を呈し、単節ＬＲ縄紋を横位施紋する。口唇内面を肥厚させ、口唇部に刻みを付すが、波頂部は撚糸による刻みを施している。

58～66は胴部破片。58はくの字状に口縁が外反する。縦位区画、横位の沈線を施し、竹管外皮による刺突を沿わせて区画、区画内に単節ＲＬ縄紋を施す。横位沈線間には交互刺突を施して鋸歯状紋を作出する。屈曲部に貼付紋を貼付する。59は横位沈線を多段に施し、交互刺突によって２条の鋸歯状紋を作出する。60，61は同一個体。縦帯の紋様帯で、沈線による幾何学モチーフ、印刻を施す。モチーフに沿わせて短沈線を施紋する。紋様帯外は結節縄紋を縦位施紋する。62は２条１組の沈線によって区画し、区画内の上下端に三角印刻を施す。63は半截竹管による平行沈線を縦位、斜位に施す。胎土に金雲母を含む。64は４条の沈線を垂下させ、両脇に刺突を沿わせる。65は降帯を垂下させ、縦位や横位の沈線を沿わせる。降帯上には無節Ｌｒと思われる縄紋を施紋する。66は単節ＲＬ縄紋を地紋とし、沈線により幾何学モチーフを描く。

67～69は底部破片。みな底部が張り出す器形を呈す。67は沈線によって帯状に区画し、内部に三角印刻を施して鋸歯状紋を作出する。68は推定底径14.0㎝。単節ＬＲ縄紋を地紋とし、横位、鋸歯状の沈線を施す。横位沈線には竹管外皮による刺突を沿わせる。剥落しているが、縦位に降帯が貼付されていた痕跡が確認できる。69は推定底径15.6㎝。結節縄紋を縦位施紋する。

70，71は浅鉢である。ともに外面は無紋で、口縁内面に竹管外皮による刺突列を施す。70は口縁内面がやや肥厚し、口縁外端に刻みを付す。71は口縁内面を肥厚させて顕著な段をもち、肥厚部に刺突と沈線を施す。

72 ～ 79は五領ヶ台式に併行すると考えられる縄紋、無紋土器である。72は緩く外反する器形を呈し、口縁部外面に２段の輪積み痕を残している。口縁内面はくの字状の稜を成形する。単節ＬＲ縄紋を口縁部は横位、胴部は縦位に施紋する。73は口縁が緩くくの字状に外反する器形を呈す。単節ＬＲ縄紋を施す。72と同様、口縁部は横位、胴部は縦位に施紋する。74は単節ＬＲ縄紋を縦位帯状施紋する。75は無節Ｌｒ縄紋を縦位帯状施紋する。76 ～ 79は無紋土器。77 ～ 79は同一個体で、口縁内面に明瞭なくの字状の稜を成形する。縦位の擦痕が見られ、底面には網代痕が残る。

**第２類**　勝坂式（第98図80　PL.39）

80は隆線と沈線により三角形状モチーフを描き、半截竹管によるＣ字状刺突を沿わせる。中心に印刻を施す。

**第３類**　阿玉台式（第98図81 ～ 94　PL.39）

81 ～ 88は口縁部破片。81は波頂部下に環状貼付紋を貼付し、角押紋によるモチーフを描く。波頂部に刻みを付す。82は口唇内外端を肥厚させる。口縁に沿って角押紋を施し、沈線によるモチーフを描く。83は口縁に沿って角押紋を施す。84は口縁下に結節沈線により横位、逆Ｕ字状モチーフを描く。口唇部にも施紋する。85はキャリパー状器形の口縁部。結節沈線と隆線を口縁部にめぐらせる。86は刻みを付した隆帯で区画し、区画内に複列の角押紋によるモチーフを描く。口唇部にも刻みを付す。87は角押紋を横位、斜位に施す。88は隆線をめぐらせて紋様帯を区画、口縁および隆線に沿って角押紋を施す。口唇部には結節沈線を施し、紋様帯下はヒダ状紋を施す。

89 ～ 94は胴部破片。89はヒダ状紋を全面に施す。90は枠状紋とヒダ状紋の横帯を間隔を空けて多段に施す。91はのの字状把手を付し、結節沈線を施す。把手の下はヒダ状紋となる。92は隆線によるモチーフを描き、角押紋を沿わせる。93は２条の隆帯を横位にめぐらせ、角押紋、沈線によるモチーフを描く。94は沈線と竹管刺突によりモチーフを描く。

**第５類**　加曽利Ｅ式（第98・99図95 ～ 113　PL.39・40）

95は口縁の突起部で、隆帯を逆Ｓ字状に垂下させ、印刻を施す。96は口縁下に眼鏡状の隆帯を施す。97は口縁部楕円状区画内に縦位沈線を充填施紋する。98は波状口縁で、波頂部下に隆線による渦巻紋を施す。99 ～ 101は同一個体。キャリパー状の器形を呈し、頸部無紋帯をもつ。口縁部紋様帯は隆帯による渦巻紋、楕円状区画を描き、区画内に単節ＲＬ縄紋を充填施紋する。胴部はＲＬ縦位縄紋を地紋とし、沈線による懸垂紋を施紋する。102，105は胴部破片でＲＬ縦位縄紋を地紋とし、沈線による懸垂紋や横位、波状、幾何学モチーフを描く。103は撚糸紋Ｉを地紋とし、沈線による懸垂紋を施す。104は単節ＲＬ縄紋を地紋とし、沈線による懸垂紋、ワラビ手状モチーフを描く。106は隆線をめぐらせ、隆線下に横位沈線を多段に施し、交互刺突による鋸歯状紋を作出する。107は単節ＲＬ縄紋を縦位施紋し、逆Ｕ字状の沈線を横位に並べる。紋様帯下には１段下がった無紋帯がある。108は横位やＬ字状に隆線を施し、結節沈線を沿わせる。間隙には単節ＲＬ縄紋を充填施紋する。109は高さのある隆帯をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は横位矢羽根状沈線を施す。隆帯下は単節ＬＲ縄紋を充填施紋する。110は内湾する器形を呈し、隆線を横位、弧状に施す。一部、橋状把手と連結させる。

111 ～ 113は浅鉢。111はくの字状に内折する器形を呈し、屈曲部に斜位の刻みをめぐらせて紋様帯を区画。紋様帯内は沈線により楕円状、弧状のモチーフを描き、間隙に刺突を施す。112は口縁内外を肥厚させ、口縁下に浅い凹線をめぐらす。内外面に撫で痕が顕著に残る。113はくの字状に口縁が短く外反する器形で、口縁を肥厚させることによって口唇部に平坦面を作出する。口唇部から内面にかけて赤

色塗彩の痕跡が見られる。

**第Ⅳ群**　後期の土器

**第１類**　称名寺式（第99図114　PL.40）

114は沈線による縦位のモチーフを描き、列点を充填施紋する。

**第２類**　堀之内式（第99・100図115～133　PL.40・41）

115～119は堀之内１式。115は斜格子目状の沈線を施す。内面口縁下に沈線をめぐらす。116は附加条縄紋を地紋とし、指頭押捺を施した隆帯を垂下させる。口縁下を横位に撫でることによって無紋帯を作出する。内面口縁下に沈線をめぐらす。117は口縁がくの字状に短く内折する器形を呈し、内折部に沈線をめぐらす。118はくの字状に集合沈線を施す。内面口縁下に沈線をめぐらす。119は堀之内１式に伴うと思われる無紋土器。

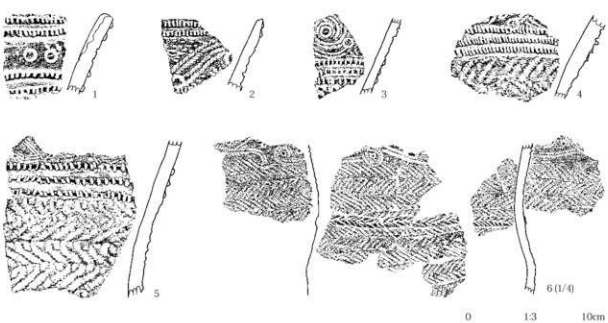
120～129は堀之内２式。口縁下に隆線をめぐらせ、沈線により幾何学モチーフを描いて縄紋を充填施紋する。125は口縁下に円孔が穿たれる。127，128は同一個体。波状口縁で口縁が外反する器形を呈し、波頂部に円形刺突を施す。３条の隆線と沈線をめぐらす。129は小形の鉢。口径13.4cm、底径6.1cm、器高7.5cmを測る。おそらく２単位と思われる小突起を付す。単節ＬＲ縄紋を施すが、部分的に斜位の撫で痕が見られる。内面口縁下に沈線をめぐらす。底面には網代痕が見られる。130～133は注口土器。130は注口部。131，132は橋状把手の部位。131は沈線により幾何学モチーフを描き、内部に列点を施す。133は胴部上位に沈線によるモチーフを描く。

**第３類**　加曽利Ｂ式（第100・101図134～137　PL.41）

134は口縁部の把手で、上面に沈線による渦巻紋を施す。135，136は鉢。135は多条の横位沈線をめぐらせ、沈線間に１列おきに斜位の単沈線を充填施紋する。136は帯縄紋、区切り紋を施す。137は注口土器で、多条沈線により幾何学モチーフを描き、刺突を沿わせる。

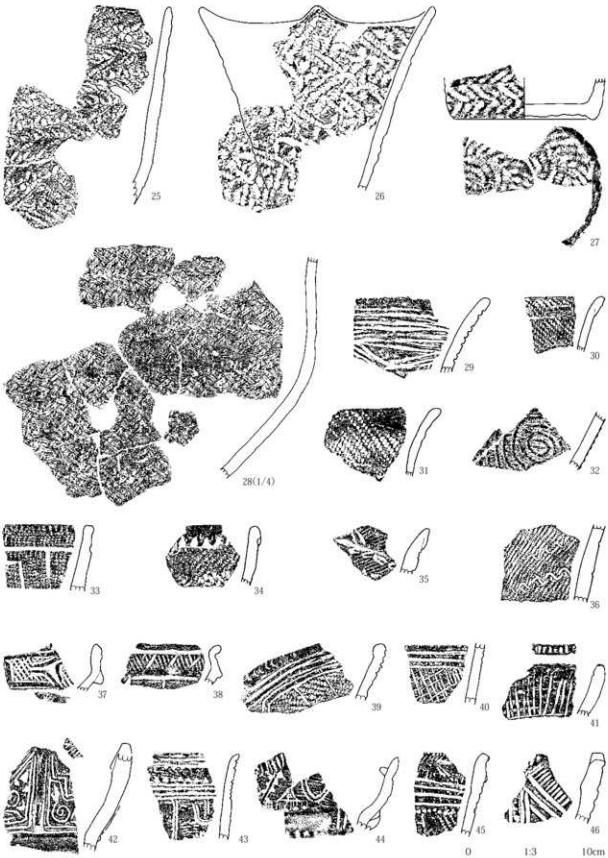
**土製品**（第101図138～140　PL.41）

138，139はミニチュア土器でともに無紋である。138は口径4.0cm、器高1.5cmを測る。140は断面楕円形の筒状の土製品。現存長4.7cm、長径3.5cm、短径2.8cm、底面の孔径1.2cmを測る。上部に横位沈線で区画した斜格子目紋が帯状にめぐる。底面には孔があく。

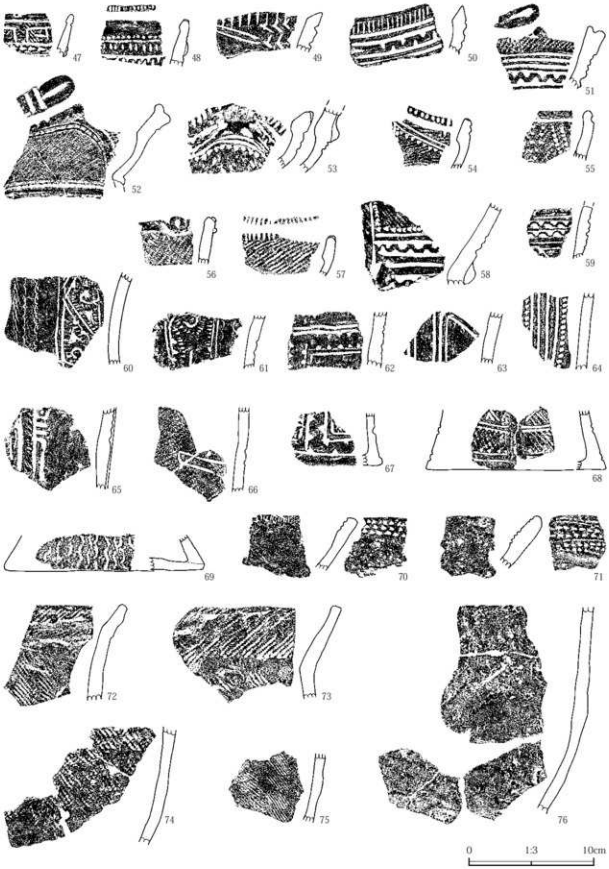



第94図　１区遺構外出土土器（１）

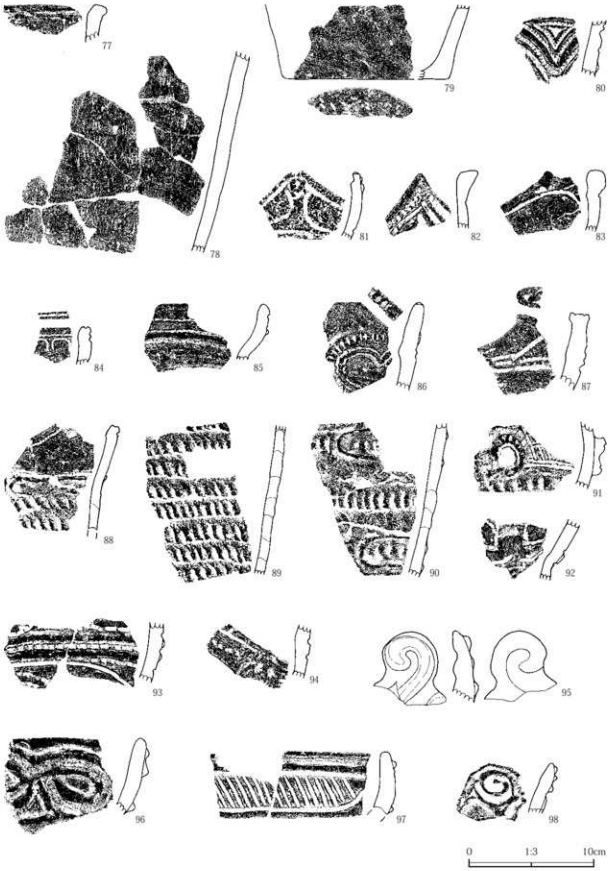
第95図　１区遺構外出土土器（２）



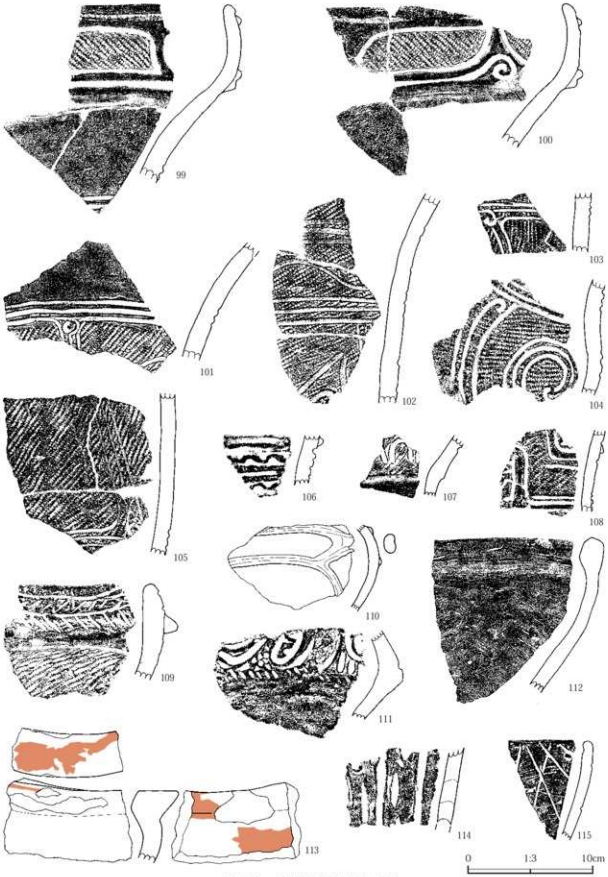

第96図　１区遺構外出土土器（３）



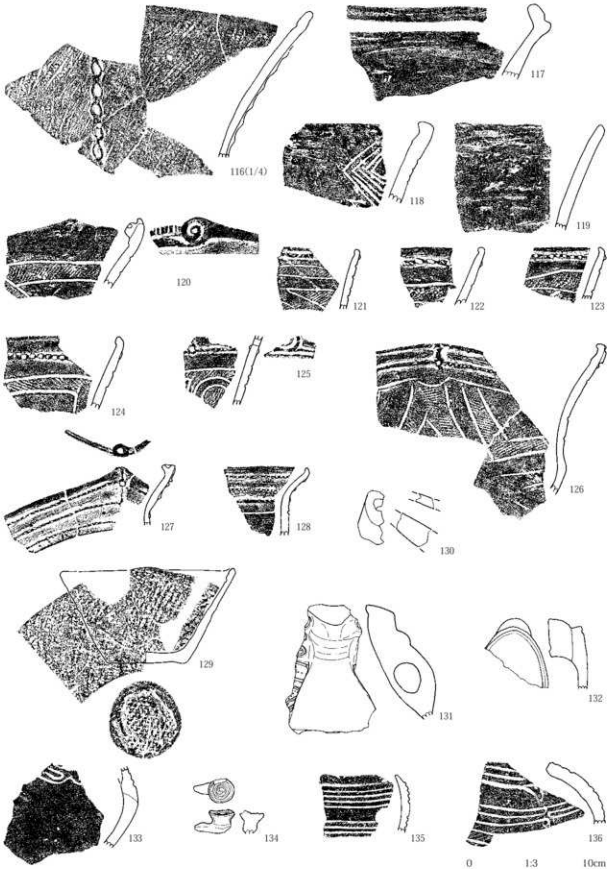

第97図　１区遺構外出土土器（４）



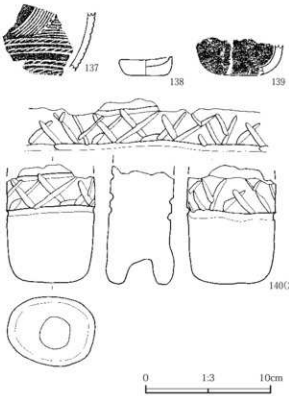

第98図　１区遺構外出土土器（５）




第99図　１区遺構外出土土器（６）




第100図　１区遺構外出土土器（７）




第101図　１区遺構外出土土器（８）

（３）３区出土土器

**第１群**　前期前葉の土器

**第２類**　刻み隆帯によって区画し、撚糸側面圧痕により主幹紋様を描くもの（第102図１～７　PL.41）

１は口縁下に２条の刻み隆帯をめぐらせ、紋様帯内は撚糸側面圧痕によるワラビ手状モチーフを描く。間隙に円形刺突、刺切紋を施す。２も１と同様の構成となるが、口縁下の刻み隆帯間と隆帯下に撚糸側面圧痕を沿わせている。３は波状口縁を呈し、口縁下に２条の刻み隆帯を施す。弧状の刻み隆帯も見られるが、波頂部下に施されるものと思われる。紋様帯内は撚糸側面圧痕によるワラビ手紋、直線モチーフを描き、間隙に円形刺突、刺切紋を施す。４は紋様帯内の部位。撚糸側面圧痕によるワラビ手紋を２段重畳させ、円形刺突、刺切紋を施す。５は紋様帯下端の部位で、刻み隆帯を２条めぐらせて紋様帯を区画。刻み隆帯間に撚糸側面圧痕と円形刺突を施し、隆帯上にも撚糸側面圧痕を沿わせている。紋様帯内は撚糸側面圧痕によるワラビ手状モチーフを描き、円形刺突、刺切紋を施す。６は２条の刻み隆帯を２段めぐらせて紋様帯を区画、少なくとも３帯の紋様帯が存在する。上位の紋様帯は剥落して判然としないが、横位の沈線が施されていた痕跡が見られる。中位の紋様帯は２条１組の撚糸側面圧痕を縦位多条に配し、圧痕間に刺切紋を矢羽根状に充填施紋する。左端には弧状の撚糸側面圧痕が見られることから、ワラビ手状モチーフも描かれていたようだ。下位の紋様帯は撚糸側面圧痕によるワラビ手紋、円形刺突を施す。刻み隆帯下に斜位の刺切紋を沿わせる。７は波状口縁を呈し、刻み隆帯をめぐらせて幅狭の口縁部紋様帯を区画する。口縁からやや下がった位置に隆帯を貼付し、隆帯から口縁にかけて刻みを施すことから、口縁部短沈線帯の効果を出している。紋様帯内は撚糸側面圧痕による渦巻状モチーフを描き、貼付紋を施す。貼付紋をかぶせるように円形刺突を施す。間隙には多条の短沈線を充填施紋する。

**第３類**　刻み隆帯によって区画し、紋様帯内にも刻み隆帯を施すもの（第102図８～10　PL.41）

８は波状口縁を呈す。刻み隆帯により口縁部紋様帯を区画し、波頂部下に刻み隆帯により対向する渦巻紋を施す。間隙に撚糸側面圧痕によるワラビ手紋を施し、円形刺突、刺切紋を施す。

９，10は紋様帯下端の部位。９は刻み隆帯をめぐらせて紋様帯を区画、紋様帯下はループ縄紋を施紋する。10は２条の刻み隆帯を施し、隆帯間と隆帯下に撚糸側面圧痕を沿わせる。隆帯間に貼付紋、円形刺突を施す。紋様帯下はループ縄紋を施紋する。どちらも１類～３類のいずれかになろう。

**第４類**　１本書き沈線によりモチーフを描くもの

**ａ種**　１本の沈線に刻みを沿わせるもの（第102図11　PL.41）

11は沈線を施した上から刻みを加えている。施紋技法は刻み隆帯と全く同じであり、隆帯を沈線に置換したものといってよく、いうなれば「刻み沈線」と呼べるようなものである。その刻み沈線をめぐらせて紋様帯を区画、紋様帯内に刻み沈線によるモチーフを描く。貼付紋、円形刺突を施す。紋様帯下

はループ縄紋を施す。器壁1.8cmと厚手。

**ｂ種**　梯子状沈線を施すもの（第102･103図12～14 PL.41）

12は梯子状沈線により区画、紋様帯内にＶ字状モチーフを描く。円形刺突、貼付紋を施す。13は波状口縁で梯子状沈線による幾何学モチーフを描き、貼付紋を貼付する。14は紋様帯下端の部位。梯子状沈線を２条めぐらせて区画。紋様帯内は梯子状沈線による弧状モチーフを描き、円形刺突、貼付紋を施す。紋様帯下はループ縄紋を施紋する。

**ｃ種**　併行沈線を施すもの（第103図15～17　PL.41･42）

15は平縁で､口縁下に１条の刻み隆帯をめぐらせ、口縁部に貼付紋を貼付する。併行沈線により幾何学モチーフを描き、円形刺突、刺切紋を施す。16は波状口縁で、先割れ工具による菱形状沈線、円形刺突を施す。17も波状口縁で、単沈線、併行沈線による幾何学モチーフを描き、円形刺突、貼付紋を施す。

**第５類**　半截竹管による平行沈線でモチーフを描くもの

**ｂ種**　平行沈線を施すもの（第103図18　PL.42）

18は双頭の波状口縁で平行沈線による幾何学モチーフを描き、円形刺突、貼付紋を貼付する。

**第６類**　多条沈線を施すもの（第103図19～21　PL.42）

19，20は同一個体。正反の合を地紋とし、口縁下に櫛状工具による鋸歯状紋をめぐらす。21も正反の合を地紋とし、櫛状工具によるコンパス紋をめぐらす。

**第７類**　刺突を施すもの（第103図22～25　PL.42）

22は口縁下に半截竹管によるＣ字状刺突を２条施し、コンパス紋を施す。23は半截竹管によるＣ字状刺突を逆Ｖ字状に２段施し、円形刺突を施す。24，25はＣ字状刺突を横位多段に施す。刺突は１段ずつ交互に向きを変え、羽状の効果を出している。

**第８類**　縄紋施紋土器（第103･104図26～42　PL.42）

26は波状口縁で、０段多条ＲＬ縄紋を横位施紋する。27は単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。28は波状口縁。０段多条ＲＬ、ＬＲによる羽状縄紋を施す。29，30は０段多条の結束羽状縄紋を施す。31は口径13.4cm、直立する器形を呈す。足の長いループ縄紋を横位施紋し､口縁下に２個１対の刺突をめぐらす。下半は縄紋の施紋方向が乱れている。32は小波状口縁を呈し、結節縄紋を施す。口唇部にも施紋する。33は結節縄紋を施す。34は網代状の附加条縄紋を施す。35は結節縄紋を施す。36は反撚りＲＲ、ＬＬの結束羽状縄紋を施す。37～40は網代状の附加条縄紋を施すもの。41，42は底部破片。41は上げ底で、底面にループ縄紋を施す。42は推定底径9.5cmを測り、ループ縄紋を施す。

**第Ⅱ群**　前期中葉～末葉の土器

**第１類**　黒浜式・有尾式（第104図43，44　PL.42）

43はキャリパー状の器形を呈し、推定底径10.7cmを測る。単節ＬＲ、ＲＬ縄紋による羽状構成。44は波状口縁を呈す。口縁下に櫛歯状工具による刺突を並べ、平行沈線で区画。さらに平行沈線によるモチーフを描く。

**第３類**　諸磯ｂ式（第104図45　PL.42）

45は集合沈線を横位帯状施紋する。

**第５類**　諸磯式併行の縄紋施紋土器（第104図46　PL.42）

46は緩く外反する器形を呈し、単節ＲＬ縄紋を横位施紋する。

**第７類**　大木５式（第104図47，48　PL.42）

47は鋸歯状浮線、貼付紋を横位に施す。48は単節ＲＬ、ＬＲの羽状縄紋を地紋とし、鋸歯状浮線を貼付する。

**第８類**　十三菩提式あるいは併行期の土器（第104図49～52　PL.42）

49は波状口縁を呈す。集合沈線により弧状モチーフを描く。50は集合沈線により対向する渦巻状モチーフを描く。51は口縁下に集合沈線をめぐらせて区画、紋様帯内に集合沈線による対向する渦巻状モチーフを描く。52は内湾する器形を呈す。結節沈線により幾何学モチーフを描き、結節沈線を充填施紋する。

**第Ⅲ群**　中期の土器

**第５類**　加曽利Ｅ式（第104図53～61　PL.42･43）

53はキャリパー状の器形を呈し、頸部に無紋帯をもつ。口縁部紋様帯は隆線による渦巻紋、楕円状モチーフを施し、区画内に斜位、矢羽根状の沈線を充填施紋する。54は浅鉢。くの字状に内屈し、屈曲部上位が紋様帯となる。紋様帯内は懸垂紋、楕円状の沈線を施し、区画内に単節ＬＲ縄紋を充填施紋する。55は緩く内湾する器形を呈す。隆線を口縁部にめぐらせ、さらに垂下させる。区画内、横位隆線上に円形刺突を施す。56は単節ＲＬ縦位縄紋を地紋とし、沈線によるモチーフを描く。口縁部は無紋帯として残す。57は小波状口縁を呈す。沈線により区画し、区画内に単節ＬＲ縄紋を充填施紋する。58は波状口縁の突起で波頂部を凹ませる。口縁に沿って沈線を施し、単節ＬＲ縄紋を充填施紋する。59は沈線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画し、沈線下は単節ＲＬ縄紋を充填施紋する。60は両耳壺の橋状把手。口縁部は無紋帯とし、単節ＲＬ縄紋を充填施紋する。61は条線を縦位施紋する。

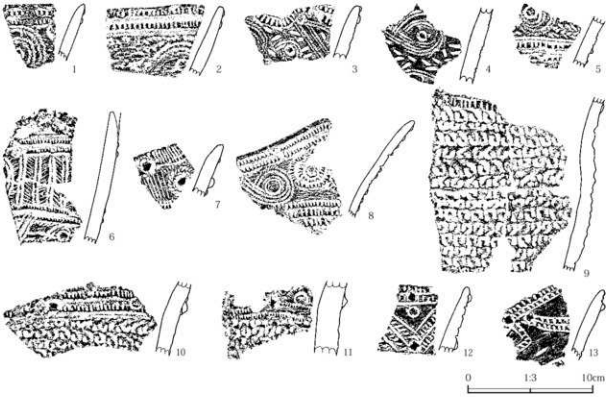
**第Ⅳ群**　後期の土器

**第３類**　加曽利Ｂ式（第104･105図62～64　PL.43）

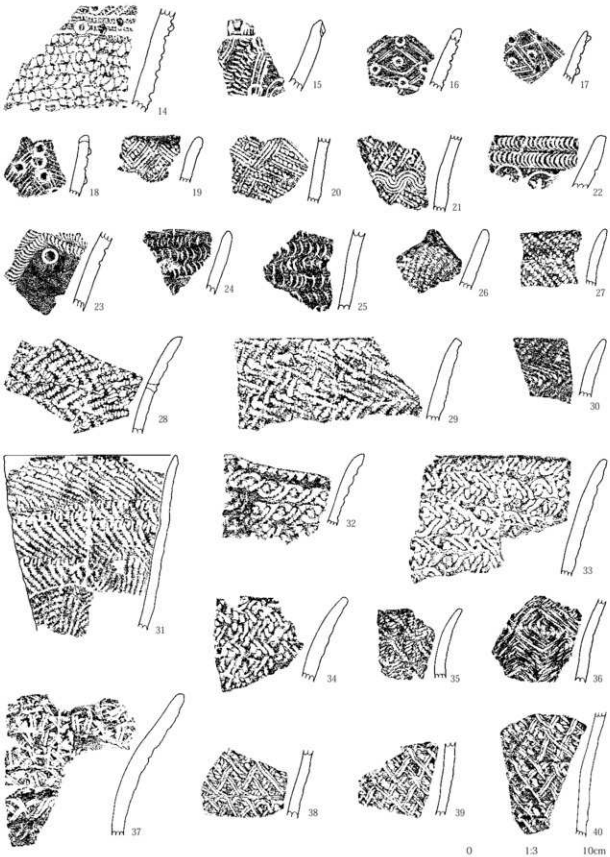
62は内湾する器形を呈す。横位沈線をめぐらせ、区切り紋、円形刺突を施す。沈線間に斜位の沈線、単節ＬＲ縄紋を充填施紋する。63も内湾する器形を呈し、横位沈線を多段にめぐらす。一部、区切り紋と連結し、楕円状区画となる。また部分的に斜位の沈線を充填施紋する。器面は丁寧に研磨される。64は胴部下半の部位。底径6.9cmで網代痕が残る。

**土製品**（第105図65･66　PL.43）

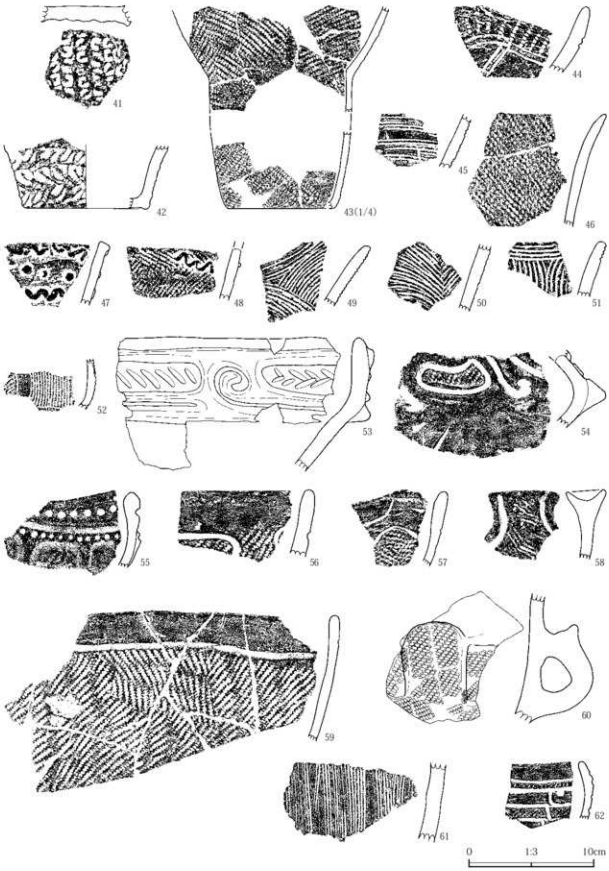
65はミニチュア土器の底部破片。底径3.8cmで底部際がすぼまり、底面中央が凹む。66は土偶の顔か。残存高6.8cm、残存幅4.9cm、残存厚1.7cmを測る。Ｔ字状に隆線を貼付して眉毛と鼻を表現。鼻の端部に刺突を加える。口も環状に隆線を貼付。目は円形の刺突で表現する。裏面の大部分は剥離しており、原形は判然としない。



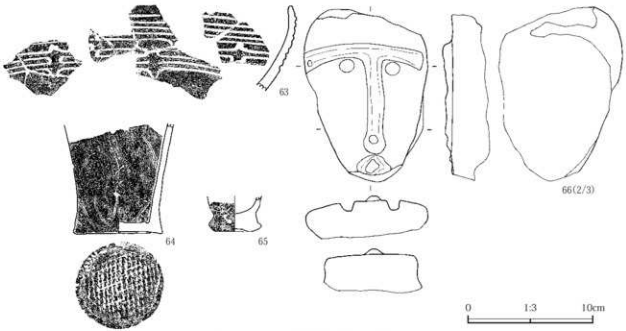

第102図　３区遺構外出土土器（１）




第103図　３区遺構外出土土器（２）




第104図　３区遺構外出土土器（３）




第105図　３区遺構外出土土器（４）

## （４）４区出土土器

**第Ⅰ群**　前期前葉の土器

**第４類**　１本書き沈線によりモチーフを描くもの

**ａ種**　１本の沈線に刻みを沿わせるもの（第106図１ PL.43）

１は１本書き沈線によりＶ字状、逆Ｖ字状モチーフを施し、刻みを沈線に沿わせる。円形刺突、貼付紋を施す。

**第８類**　縄紋施紋土器（第106図２，３　PL.43）

２は波状口縁で０段多条ＲＬ、ＬＲの結束羽状縄紋を横位施紋する。３はループ縄紋を多段に施す。

**第Ⅱ群**　前期中葉～末葉の土器

**第２類**　諸磯ａ式（第106図４，５　PL.43）

４は１本の沈線を垂下させて縦位区画し、そこを基点として集合沈線による木の葉状紋を連ねる。交点に円形刺突を施す。５は１本の沈線を垂下させ、そこを基点に集合沈線による肋骨紋を施す。交点に円形刺突を施す。肋骨紋の下端に半截竹管内皮による刺突列が見られる。区画紋か。

**第４類**　諸磯ｃ式（第106図６　PL.43）

６は単節ＲＬ縄紋を横位施紋し、貼付紋を施す。

**第Ⅲ群**　中期の土器

**第１類**　五領ヶ台式（第106図７～10　PL.43）

７は緩く内湾する器形を呈し、楕円状の隆帯を貼付する。単節ＬＲ縄紋を地紋とし、隆帯の縁に沿って沈線、押引紋を施す。８は沈線、押引紋の区画内に爪形刺突を充填施紋する。間隙に沈線による鋸歯状紋を施紋。９，10は縄紋施紋土器。９は波状口縁で単節ＬＲ縄紋を横位、縦位施紋する。10は推定底径13.8cmの底部破片で９と同一個体と思われる。

**第２類**　勝坂式（第106図11，12　PL.43）

11は緩く外反する口縁部破片で、口唇部を肥厚させて平坦面を成形する。半截竹管による沈線を横位、斜位に施紋。間隙に単節ＬＲ縄紋を施す。12は隆帯をめぐらせて区画。区画内に半截竹管による沈線で三角形状モチーフを描き、斜位の沈線を充填施紋する。

**第４類**　焼町土器（第106図13　PL.43）

13は半截竹管による半隆起線を横位、弧状に施し、三叉紋を施紋する。

**第５類**　加曽利Ｅ式（第106図14～17　PL.43･44）

14は口縁部紋様帯の部位。隆線による渦巻紋、楕円状モチーフを描き、単節ＲＬ縄紋を充填施紋する。15は三角形状の波頂部をもつ口縁部破片。波頂部下

に円孔が穿たれる。16は横位沈線、交互刺突、隆線が施される。17は隆線による弧線紋を施し、沈線による区画内に短沈線を充填施紋する。

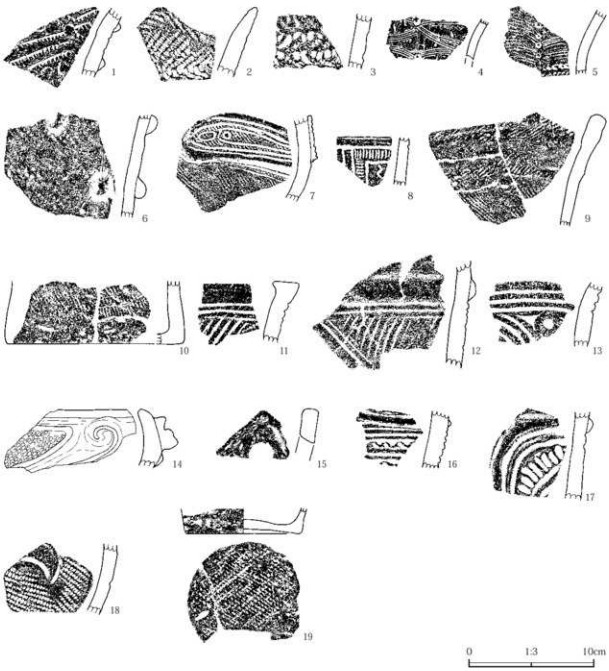
**第Ⅳ群**　後期の土器

**第１類**　称名寺式（第106図18　PL.44）

18は帯状沈線によりＪ字状モチーフを描き、単節ＬＲ縄紋を充填施紋する。

**第２類**　堀之内式（第106図19　PL.44）

19は網代痕のつく底部破片。底径9.3cmを測る。




第106図　４区遺構外出土土器

## （５）５区出土土器

**第Ⅰ群**　前期前葉の土器

**第１類**　刻み隆帯によって区画し、紋様帯内に円形刺突のみ施すもの（第107図１　PL.44）

１は波状口縁で、円形刺突を施す。一部、平行沈線も見られる。刻み隆帯は施されていないが、円形

刺突を全面に施すことから本類とした。

**第２類**　刻み隆帯によって区画し、撚糸側面圧痕により主幹紋様を描くもの（第107図２　PL.44）

２は波状口縁を呈し、口縁に沿って２条の刻み隆帯を施す。隆帯間と隆帯下に撚糸側面圧痕を押捺する。紋様帯内は円形刺突、刺切紋が見られる。

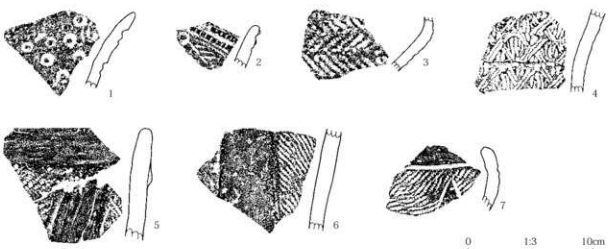
**第８類**　縄紋施紋土器（第107図３，４　PL.44）

３は０段多条ＲＬ、ＬＲによる羽状縄紋を横位施紋する。４は結節縄紋を施す。

**第Ⅲ群**　中期の土器

**第５類**　加曽利Ｅ式（第107図５～７　PL.44）

５は隆帯をめぐらせて口縁部無紋帯を成形。以下は隆帯による懸垂紋を施し、区画内に単節ＬＲ縄紋を充填施紋する。６は隆帯による懸垂紋を施し、単節ＬＲ縄紋を縦位施紋する。７は緩く内湾する器形。沈線をめぐらせて口縁部無紋帯を成形。以下は分岐懸垂紋を施し、単節ＬＲ縄紋を充填施紋する。




第107図　５区遺構外出土土器

## ２　石器

### （１）出土石器の概要

**打製石斧**

打製石斧は、計154点が出土した。従来型の大別区分に従えば、短冊形90・撥形21（ヘラ状石器10を含む）・分銅形28・石鏃？11・不明４という内訳になるが、短冊形としたものの中には頭部に近い側縁を抉ったものがあるなどバリエーションがある。

短冊形の打製石斧は、90例が出土した。細身で、両側縁が略並行するもの（Ⅰａ類、第108図１～７、第115図１～７、第122図１～６、第124図１～４）と、石器頭部に近い側縁を抉り、装着を意識した造作のあるもの３例（Ⅰｂ類、第108図８・17、第115図12）からなる。量的には、ａ類としたものが圧倒的に多く、Ⅰｂ類は客体的存在である。完成初期の形状を残したものは20例（12.9％）にとどまり、大半は刃部再生等のリダクションを受けているようである。製作途上の破損品33例（21.4％）を除く、56例が使用・再生過程にあることになる。Ⅰａ類の打製石斧には、やや幅広の大形品（幅６～８㎝）が５例ほどある。いずれも破損品で詳細は明らかではないが、刃部磨耗したものや捲縛痕の見られるものも少数だがあり、後述する石鏃様の打製石斧と関連する可能性も否定できない。

分銅形の打製石斧（Ⅱ類）は、器体中央・側縁の「抉り込み」を特徴とするもので28例が出土した。形態的には、大きく弧状に「抉り」が入る例（第108図13、第115図13･16）や、深く「抉り」が入る例（第115図14・15ほか）があり、量的には後者が圧倒するようである。刃部形態は円刃となるものが主体を占める。このほか、刃部が直刃となるもの（第116図18）や、小規模で深い「抉り込み」を入れる小形

品（第116図19・21）が少量存在する。

撥形の打製石斧（Ⅲ類）は、側縁が大きく「ハ」字状に開いたもので、計21点が出土した。比較的大形の３点（第108図10・11・13）と、ヘラ状を呈するものがある。第108図10については裏面側が未加工の礫面で、削器に分類すべきかもしれないが、残る２点の加工は典型的な石斧のそれである。２点とも破損しており詳細は不明だが、石鏃様石器の破損したものである可能性が否定できない。小形ヘラ状を呈する例は13点（第110図50～57、第115図８、第117図46～48、第118図49）を図示した。この種の石器の典型例は裏面側を浅く、表面側を厚く剥離、そのエッジは裏面側に偏る例が通例で、第110図52や第118図49がその典型である。第110図53・54も典型例に近いエッジを有しているが、エッジが中央付近にあるもの（同51・55）も少なくないようである。石器刃部は剥片端部を加工せず、そのまま刃部とするもの、エッジを整える程度に浅く加工するもの、掻器様の刃部を形成するもの等がある。こうした在り方は、刃部再生を反映するとも見えるが、概してこの種の石器には使用痕が乏しいのが実態である。

このほか、石鏃？とした石器11点が出土した。基部側の側縁が緩く湾曲して刃部に移行するタイプ（第115図９・11）と、明瞭に装着部を作り出したタイプ（第116図20、第122図７～９）からなり、前者の典型例は第115図11、後者の典型例は第116図20である。第115図９には刃部磨耗等はなく、破損品３点が接合、製作段階で破損したことが確実である。第116図20の刃部磨耗が明らかであるが、若干の痕跡を残す程度まで刃部はリダクションを受けている。石器基部の変形も、そうしたことを反映した結果と考えている。第122図７～９は、形態的に３点とも相似、装着を意識した幅広の石器基部と大きく広がる身部からなる。７の刃部再生は「抉り部」付近まで及んでおり、また、９の右側縁は再生で大きくその形を変えており、遺跡内で使用、再生の過程を経ていることは確実である。８については形態的特徴から分類したものであるが、左側縁を除いて粗割り段階にあり、未製品というべきだろう。以上の状況から、その基本形状は幅広の石器基部とそこから大きく開いた本部（身）からなることが明らかであり、短冊形Ⅰｂ類としたそれは石鏃？の基部であるという想定が成り立つ。仮に、これが事実なら、石鏃15点が出土したことになる。

**磨製石斧**（第116図22、第122図10）

２点のみ出土した。第116図22は、長さ3.0㎝・幅1.1㎝を測る小形品で、剥片の両端を折り、全面を研磨している。非実用具としての模造品だろうが、刃部は光沢を帯びており、判断が難しい。第122図10は、乳棒状を呈する。背面側刃部には使用により刃こぼれが著しい。

**石槍**（第116図23）

１点のみ出土した。厚さ６㎝を測る板状剥片を用いる。側縁加工が主体で、加工は粗く完成状態にない。石器端部のエッジは磨耗しており、転用石器の一種であろう。先端部作出意図は乏しく、また、削器とするには刃部加工が粗く、慎重を期せば加工痕ある剥片とすべきかもしれない。

**有舌尖頭器**（第116図24）

１点のみ出土した。側縁形状は内湾気味で、石器基部の作出が側縁加工に先行する。側縁形状から見て、石器は再生されている可能性もあるだろう。先端の欠損部分を含め、推定長は4.5㎝と小形である。

**石鏃**

60点が出土した。正三角形状を呈する石鏃と、二等辺三角形状を呈する石鏃の両者がある。いすれも平基・凹基・有茎の別があり、それぞれ７点・43点・１点・不明９点が出土、凹基無茎鏃が圧倒的多数を占めた。区別に見た各々の出土点数は、１区37点・３区21点・４区２点で、１区・３区に集中した。完形／未製品の別は、その対称性と薄さ・面構成にあり、非対称で厚手の石鏃を便宜的に未製品として捉えた。これを前提に完形／未製品という範疇で石鏃を見ると、29点が未成品であり、狩猟具については自ら製作したということができるだろう。

石材構成は在地石材４種（黒色頁岩19・珪質頁岩

５・黒色安山岩４・チャート４）が32点、非在地石材４種（黒曜石23、硬質泥岩１・赤碧玉３・碧玉１）が28点と両者は拮抗している。非在地の黒曜石は遺跡内製作が明らかであるが、それ以外の石材は剥片類の出土が少量、あるいは、皆無という状況で、在地・非在地石材間で逆転現象が生じており、搬入等の状況を想定すべきかもしれない。

**石匙**

13点が出土した。素材の打面側に抓み部を作出、周辺加工を施すタイプが多い。形態的には縦型が７点、横型が９点を占め、斜めタイプの石匙は２点と少ない。刃部加工は比較的丁寧だが、刃部が未加工のもの（第109図39・43）や粗く刃部を加工したもの（第109図41）がある。第109図44や第110図45は器種認定の基準となるべき抓み部を欠いているが、プロポーション及び加工の類似性から石匙としたものである。住居出土の石匙が多様な石材を用いていたのに対して、包含層から出土した石匙はいずれも黒色頁岩を用いていた。

**石錐**

４点が出土した。第110図47は先端部破片で、断面三角形状を呈する。機能部は、やや捩れた状態にあり、剥離面も新鮮で、加工途上に破損したのであろう。同図48は節理面で破損したものである。内湾気味の側縁形状を有し、やや膨らむ上端は抓み部の作出を意識したものかもしれない。第117図43・44は２点とも先端部を欠く。43は完成状態にあるだろうが、44は加工が粗く、未製品と見られる。

**楔形石器**

２点（１区・３区とも各１点）が出土した。長さ５㎝を測る比較的大形例で、形状も安定している。その安定性から石器として作出されたものと見られ、石鏃等の作出に伴う薄い素材獲得を意識した、両極剥離とは異なるのであろう。この見解については、包含層出土の石鏃の半数が遺跡内製作されたのではないか、とした先の見解に矛盾するようでもあるが、少なくとも出土黒曜石製剥片類には同種石器がないということは確実である。

**削器**

32点が出土した。器種認定に際しては刃部加工の安定性を重視、１区24点・４区７点・５区１点を認定した。３区の削器は認定されていないが、３区の加工痕ある剥片53点には、同種石器が含まれているかもしれない。素材剥片の形状は縦長様の剥片から幅広剥片まで多様で、石器刃部はエッジの長い剥片端部や側縁に作出されている。

第110図58～60・第111図63～66は、縦長様の小形剥片を用いたもので側縁部に、第110図61・62は幅広剥片の裏面側側縁に、第111図67～71は大形剥片の端部に刃部を作出したものである。瞥見した限り、打製石斧等の調整剥片を用いた削器は少なく、両者は相関しないようである。

**石核**

77点（１区43点・３区32点・４区２点）が出土した。石材７種からなり、黒色頁岩が48点と60％強を占めた。これに次いで、黒曜石23点がある。その他の石材では珪質頁岩・黒色安山岩・砂質頁岩・変質安山岩が各１点、変質玄武岩２点が出土した。

黒曜石製の石核は小形板状を呈す例（第111図73・74・77）が多い。その大半は上面の狭い平坦面から両面の広い剥離面で小形剥片を剥離している。その他の石核では、裏面に礫面を有するもの（第111図75）や小形分割礫を用いたもの（第111図76）があり、各嗇的な石核消費を見せている。

黒色頁岩製の石核は、厚さ５㎝大の掌サイズの偏平礫（第112図84･85）や棒状礫（同83）を用いる例、分割礫を用いる例（同86）、大形剥片（同80）を用いる例などがあるほか、打製石斧の未製品を用いる例（第118図53）がある。同種石核転用例に変質安山岩製のそれ（未掲載）があり、石器製作上の柔軟性を示唆している。

上記石材以外の石核についても同様で、珪質頁岩製のそれは黒曜石様に、変質安山岩は黒色頁岩様に石核を消費、前者については石鏃等の小形石器の製作に結び付いた剥片生産というものを想定することができるだろう。

**石錘**

１点が出土した。３区から出土した「切り目石錘」がそれ（第118図58）で、小形偏平棒状礫の両端にＶ字状に切れ目を入れている。表裏面とも被熱剥落している。

**凹石**（第３表）

35点が出土した。使用石材は５種類である。内訳は粗粒輝石安山岩30、石英閃緑岩２、細粒輝石安山岩・変質安山岩・変質玄武岩が各１であり、圧倒的に粗粒輝石安山岩を用いる例が多い。礫形状は円礫タイプ・楕円礫タイプ・長円礫タイプがあり、これに断面形状（球形・偏平）の要素が加わる。これに従い礫形状を見ると、円礫偏平タイプ２・楕円球形タイプ２・楕円偏平タイプ20・長円偏平タイプ10となる。予想通り、楕円偏平タイプが主体を占めたが、楕円タイプより長軸の長い長円礫タイプ（第113図92～94、第119図64・65など）10例があり注目しておきたい。数値的には、全体の平均値は長さ11.3㎝・幅8.1㎝・重さ571.8ｇで、これは他地域の凹石（例えば太田市大道東遺跡）と変わらない。これに対して、長円礫タイプのそれの平均値は長さ15.8㎝・幅8.2㎝・重さ1045.7ｇとなり、長さ（1.3倍）と重さ（1.8倍）の数値が異なる。幅8.2㎝という数値のみ変わらないのは、それが手持ち石器であるからだろうが、現状では打痕・磨耗痕・ロート状の凹部の有無が礫形状に強く結び付く要素は指摘できない。

表裏面の集合打痕・ロート状の凹部が器種認定の基準になるのが普通だが、要素的には磨石と重なる部分が多く、多様な使用法が想定されてしかるべきである。当然、石皿とセットになる磨石としての使用も想定可能で、側縁の敲打・磨耗が著しい石鹸型のそれは、石皿や台石とセットで使用されたものとすることができるだろう。近年、打製石斧の製作に絡んで注目されつつある敲打具としての使用を示唆する直線的敲打痕を有するもの（第119図64・65）もあり、注目しておきたい。

**磨石**（第４表）

第３表　遺構外出土凹石属性表

| 図版番号 | 集合打痕 | | ロート状窪み | | 磨耗面 | | | 打痕 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 表面 | 裏面 | 表面 | 裏面 | 表面 | 裏面 | 側面 | 小口 | 側面 |
| 未掲載 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | × |
| 第113図-87 | 2 | 1 | 1 | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | × |
| 未掲載 | × | × | 1 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | × | × |
| 第113図-88 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | × | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 第113図-93 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 第113図-94 | ○ | × | 2 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 第113図-92 | 1 | 1 | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | ? | ○ | ○ | ○ | ? | × | ○ | ○ |
| 第113図-91 | 1 | 1 | 1 | 1 | ○ | ○ | × | × | ○ |
| 第113図-90 | 1 | 2 | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 第113図-89 | 1 | 1 | ○ | ○ | × | × | × | ○ | × |
| 未掲載 | ○ | × | ○ | ○ | ○ | × | × | × | × |
| 第119図-60 | ○ | ○ | 1 | ○ | ? | ? | ? | ? | ? |
| 未掲載 | 1 | ○ | 1 | ○ | ○ | ○ | × | ○ | × |
| 未掲載 | 2 | 1 | ○ | ○ | ○ | ○ | × | × | × |
| 第119図-61 | ○ | ○ | 1 | ○ | ○ | ○ | × | × | × |
| 第119図-63 | ○ | ○ | 2 | 1 | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 第119図-62 | 2 | 2 | 1 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 第118図-59 | ○ | 1 | ○ | 1 | ○ | ○ | × | × | ○ |
| 未掲載 | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | × | × |
| 未掲載 | × | × | 1 | ○ | ○ | ○ | × | × | × |
| 未掲載 | 2 | ○ | ○ | 1 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 第119図-65 | ○ | × | ○ | ○ | ○ | × | × | ○ | × |
| 第119図-64 | ○ | ○ | 1 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 第122図-18 | ○ | ○ | 1 | 1 | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 第124図-6 | 1 | 1 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 第124図-5 | ○ | 1 | 1 | ○ | ○ | ○ | × | × | × |

29点が出土した。石材４種を用いる。内訳は粗粒輝石安山岩22、石英閃緑岩５、輝緑岩・変質安山岩が各１点である。礫形状は楕円偏平礫が16点と半数を超え、これより長軸の長い長円偏平礫が５点で続く。このほか、円礫球形タイプや棒状礫タイプの礫がある。礫サイズは長さ12.1㎝・幅8.4㎝・重さ632.7ｇが平均値で、数値的には凹石のそれと遜色はないようである。

第114図100は棒状礫タイプとしたものであるが、その断面形状は円形に近い。両端小口部を除いて、各面とも磨耗痕が著しく、その境に稜が形成されるほどである。第114図103、第120図72の２点は礫重量が１kgを越えるもので、磨石の平均重量を大きく越えるものだが、礫面の磨耗は明らかであり、磨石として認定した。

第４表　遺構外出土磨石属性表

| 図版番号 | 磨耗面 | | | 打痕 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 表 | 裏 | 側 | 小口 | 側面 |
| 未掲載 | ○ | ○ | × | × | × |
| 第113図-98 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 第113図-95 | ○ | ○ | × | × | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | × | × | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | × | ○ | × |
| 未掲載 | ○ | ○ | × | × | × |
| 第113図-97 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 第114図-99 | ○ | ○ | × | × | ○ |
| 第114図-100 | ○ | ○ | ○ | ○ | × |
| 第113図-96 | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | × | ○ | × |
| 未掲載 | ○ | ○ | × | ○ | × |
| 第114図-103 | ○ | × | × | × | × |
| 未掲載 | ○ | ○ | × | × | × |
| 未掲載 | ○ | ○ | ? | ? | ? |
| 未掲載 | ○ | × | × | × | × |
| 第119図-69 | ○ | ○ | × | × | × |
| 第119図-68 | ○ | ? | ? | ? | ? |
| 第119図-70 | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | × | × | × |
| 第120図-76 | ○ | × | × | × | ○ |
| 未掲載 | ○ | ○ | × | ○ | × |
| 第119図-71 | ○ | ○ | ○ | ○ | × |
| 第120図-72 | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 第120図-73 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 第123図-20 | ○ | ○ | ? | ? | ? |
| 第123図-19 | ○ | ○ | × | ○ | ○ |
| 第123図-21 | ○ | ○ | × | × | × |

**敲石**

９点が出土した。棒状礫タイプの礫を用い、その小口・側縁部分を機能部とするものが多い。礫重量は200～300ｇ程度で、中型例が多い。こうした中で注意されるのが、小形・棒状を呈する第111図72の資料である。礫の上下両端に敲打痕が集中、この敲打痕を重視して敲石としたものであるが、その先端には磨耗痕が明らかであり、石製の研磨具として注意されているものに類似する。これは小形・偏平礫の側面にある線状痕（擦痕）を注意したもので、土器内面の整形具だろうとされたものである。同種石器の存在は少なくとも縄文前期には存在したようで、前橋市今井道上遺下Ⅱ遺跡でも確認されている。先端部に磨耗痕のあるものは太田市大道東遺跡にもあり、希少例ということでもなさそうである。大道東のそれは中期後半から後期に帰属するものだろうが、この種の石器は縄文期全般を通じ存在した可能性を考えておくべきであろう。

**石皿**

２点が出土した。凹石・磨石等の出土量を考えると、出土量が少ないということが本遺跡の性格なり、包含層形成の要因を示唆するということができるであろう。

第114図104は、緑色片岩製の石皿である。中央から大きく破損しており、使用面および左上肩に各１の凹穴がある。使用面の最下部は厚さ７㎜と薄い。同105は粗粒輝石安山岩製のそれである。有縁の石皿で、その使用面は顕著に磨耗しているが、未だ使用可能な状態にあり、意図的な破損が想定されよう。

**台石**

２点が出土した。第114図106がそれで、偏平礫の背面側に磨耗がある。無縁の石皿とされるものに近い。

**多孔石**

３点が出土した。３点（第120図78・79、第121図80）とも粗粒輝石安山岩製で、３区の出土である。

**環状石斧**

１点（第121図81）のみ出土した。略1/2を破損しており、現状で外径10.5㎝・重さ133.7ｇを測る。中央孔は径３㎝ほどであり、その断面形状は鼓状を呈す。中央孔は敲打により作出され、その内縁の最突出部は装着による磨耗が著しい。エッジには小剥離痕が生じているが、背面側中央より左の剥離痕は剥離痕が新鮮に見え、石斧使用時の使用痕とは区別すべきかもしれない。破損面は、ほぼ同一線上にあり、リングも同一方向を指しているように見えるため、使用の際の激しい衝撃で破損したのであろう。裏面側剥離面はフラットで、本来的に内蔵していた衝撃痕であろう。推定重量は260ｇ程度かつ。変玄武岩製。

### （２）器種組成および石材構成（第５～７表）

包含層出土の石器は、計634点が出土した。その内訳は剥片系石器が553点と全体の87.2％を占め、礫石器類（81点）を圧倒した。剥片系石器には打製石斧154点・石鏃60点・削器32点等があるほか、石核（77点）の出土量も多い。そのほかの石器では有

第５表　遺構外出土石器の器種・石材構成

| データ数/石材 | 器種 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 石材 | 打斧 | 磨斧 | 石槍 | 有尖 | 石鏃 | 石匙 | 石錐 | 楔形 | 削器 | 石核 | 原石 | 加工 | 使用 | 石錘 | 凹石 | 磨石 | 敲石 | 石皿 | 台石 | 多孔 | 礫石 | 総計 |
| 黒色頁岩 | 117 | 1 | 1 | 1 | 19 | 13 | 2 | 2 | 29 | 48 | 1 | 155 | 21 | 1 | | | 3 | | | | | 414 |
| 頁岩 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 珪質頁岩 | 6 | | | | 5 | | | | 1 | 1 | | 4 | 1 | | | | | | | | | 18 |
| 黒色安山岩 | 1 | | | | 4 | | | | 2 | 1 | | 8 | 8 | | | | | | | | | 24 |
| チャート | | | | | 4 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 5 |
| ホルンフェルス | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | 2 |
| 砂岩 | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | | | | | 3 |
| 砂質頁岩 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 1 |
| 細粒輝石安山岩 | 20 | | | | | | | | | | | 2 | | | 1 | | | | | | | 23 |
| 流紋岩 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| 黒曜石 | | | | | 23 | | 1 | | | 23 | | 1 | | | | | | | | | | 48 |
| 硬質泥岩 | 2 | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| 赤碧玉 | | | | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 碧玉 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 粗粒輝石安山岩 | 3 | | | | | | | | | | | | | | 31 | 21 | 3 | 1 | 2 | 3 | | 64 |
| 石英閃緑岩 | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 5 | | | | | | 7 |
| 輝緑岩 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| デイサイト | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | 2 |
| 緑色片岩 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| 変質安山岩 | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | 1 | | | | | | 3 |
| 変玄武岩 | 3 | | | | | | | | | 2 | | | | | 1 | | | | | | | 6 |
| 変質玄武岩 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 2 |
| 総計 | 154 | 2 | 1 | 1 | 60 | 13 | 4 | 2 | 32 | 77 | 1 | 175 | 30 | 1 | 36 | 28 | 9 | 2 | 2 | 3 | 1 | 634 |

第６表　遺構外出土剥片の石材別総量

| | 1　区 | | 3　区 | | 4　区 | | 5　区 | | 合計点数 | 合計重量 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 点数 | 重量 | 点数 | 重量 | 点数 | 重量 | 点数 | 重量 | | |
| 黒色頁岩 | 1980 | 29498.1 | 955 | 16612.3 | 112 | 3917.6 | 20 | 887.6 | 3067 | 50915.6 |
| 珪質頁岩 | 36 | 341.9 | 34 | 281.6 | | | 1 | 18.8 | 71 | 642.3 |
| 頁岩 | 1 | 0.7 | | | | | | | 1 | 0.7 |
| 砂質頁岩 | 4 | 41.7 | | | | | | | 4 | 41.7 |
| 砂岩 | 17 | 387.1 | 1 | 124.7 | | | | | 18 | 511.8 |
| 黒色安山岩 | 108 | 1464.9 | 27 | 374.6 | 6 | 223.3 | 3 | 32.1 | 144 | 2094.9 |
| チャート | 28 | 368.9 | 12 | 49.8 | | | | | 40 | 418.7 |
| 黒曜石 | 428 | 359.7 | 20 | 24.2 | 6 | 8.8 | | | 454 | 392.7 |
| 流紋岩 | 5 | 18.3 | 4 | 24.8 | 1 | 28.1 | | | 10 | 71.2 |
| ぎょくずい | 1 | 1.3 | | | | | | | 1 | 1.3 |
| 赤碧玉 | 8 | 47.7 | 1 | 7.3 | | | | | 9 | 55 |
| 珪化凝灰岩 | 4 | 6.2 | | | | | | | 4 | 6.2 |
| 変質安山岩 | 3 | 27.7 | 1 | 1.8 | | | | | 4 | 29.5 |
| 細粒輝石安山岩 | 39 | 541.7 | 16 | 506.7 | 5 | 582.3 | 3 | 43.6 | 63 | 1674.3 |
| 変質玄武岩 | 5 | 171.2 | 9 | 255.8 | | | | | 14 | 427 |
| 緑色片岩 | 2 | 43.8 | 5 | 745.9 | 1 | 29.7 | 1 | 50.5 | 9 | 869.9 |
| 黒色片岩 | | | 1 | 5.1 | | | | | 1 | 5.1 |
| 変玄武岩 | 2 | 127.5 | | | | | | | 2 | 127.5 |
| 輝緑岩 | 3 | 56.4 | | | | | | | 3 | 56.4 |
| 粗粒輝石安山岩 | | | 1 | 13 | 1 | 58.5 | | | 2 | 71.5 |
| 石英閃緑岩 | | | | | 1 | 15.2 | | | 1 | 15.2 |
| デイサイト | 4 | 62.7 | | | | | | | 4 | 62.7 |
| デイサイト凝灰岩 | 1 | 5.4 | | | | | | | 1 | 5.4 |
| 溶結凝灰岩 | 4 | 42.9 | | | 1 | 6.9 | | | 5 | 49.8 |
| 石英 | 1 | 1.1 | | | | | | | 1 | 1.1 |
| 珪質変質岩 | 4 | 13.1 | 1 | 5.3 | | | | | 5 | 18.4 |
| 角閃石安山岩 | 1 | 2.4 | | | | | | | 1 | 2.4 |
| 軽石 | 2 | 2.8 | | | | | | | 2 | 2.8 |
| 合計 | 2691 | 33635.2 | 1088 | 19032.9 | 134 | 4870.4 | 28 | 1032.6 | 3941 | 58571.1 |

舌尖頭器や石錐（各１点）が出土した。礫石器類には、凹石や磨石の出土が多い。通常、凹石や磨石は製粉具類に分類されるもので、前期後半～中・後期に石器組成の主体を占めるようになるものであるが、同時期の土器が多出しているのにもかかわらず製粉具としての石皿や多孔石の出土量が少ないのが特徴的である。

その他の礫石器類で特筆されるものに、環状石斧１点がある。これについては、その所属時期が問題となろうが、ここでは便宜的に縄文包含層出土石器の項に掲載した。これに類するものとして、打製石斧にも弥生期の所産とされるものが含まれている。第115図11や第116図20がそれである。弥生期の土器がないのに弥生期の石鏃とするのも矛盾しているが、形態的にも弥生期の石鏃だろうとする意見が強い。

区毎に見た石器の出土量は１区334点・３区226点・４区57点・５区16点で、１・３区に集中することが明らかであり、これと剥片類の出土量は比例関係にある。区毎に見た剥片類、及び、礫・礫片類の出土量と石材構成は、別表に示したとおりであり、以下その傾向を指摘しておく。

剥片類については3941点（58.6kg）が出土した。最も多出した石材は黒色頁岩で、3067点（77.8％）が出土した。これに続いて黒曜石（454点）や黒色安山岩（144点）が多用されている。対器種レベルで見た石材構成は、剥片系石器と礫石器類で大きく異なっているが、前者には対在地・非在地系石材という理解も一定程度有効な枠組になるだろう。具体的には、大形石器から小形石器まで幅広く使われる

第７表　遺構外出土礫・礫片の石材別総量

| | １　区 | | ３　区 | | ４　区 | | ５　区 | | 合計点数 | 合計重量 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 点数 | 重量 | 点数 | 重量 | 点数 | 重量 | 点数 | 重量 | | |
| 黒色頁岩 | 22 | 731.6 | 27 | 1766.2 | 10 | 1591.1 | 11 | 574.3 | 70 | 4663.2 |
| 珪質頁岩 | 62 | 1207.7 | 15 | 358.9 | 10 | 237.4 | | | 87 | 1804.0 |
| 頁岩 | | | | | | | | | 0 | 0 |
| 砂質頁岩 | 2 | 180.2 | | | | | | | 2 | 180.2 |
| 砂岩 | 16 | 174.7 | 2 | 153.4 | 1 | 48.2 | | | 19 | 376.3 |
| 黒色安山岩 | 57 | 733.5 | | | | | | | 57 | 733.5 |
| 流紋岩 | 19 | 1812.1 | 8 | 102.6 | | | | | 27 | 1914.7 |
| ぎょくずい | | | | | | | | | 0 | 0 |
| 変質安山岩 | 16 | 2014.4 | 1 | 29.6 | 1 | 515.6 | | | 18 | 2559.6 |
| 細粒輝石安山岩 | 34 | 1875.3 | 2 | 87.8 | 1 | 599.0 | | | 37 | 2562.1 |
| 変質玄武岩 | 5 | 1036.6 | | | | | | | 5 | 1036.6 |
| 変玄武岩 | | | 1 | 41.0 | | | | | 1 | 41.0 |
| 変質蛇紋岩 | 1 | 78.5 | 2 | 242.1 | 1 | 64.0 | | | 4 | 384.6 |
| 輝緑岩 | 23 | 310.4 | | | | | | | 23 | 310.4 |
| 粗粒輝石安山岩 | 259 | 35683.0 | 57 | 6453.4 | 30 | 1791.4 | 15 | 521.4 | 361 | 44449.2 |
| 石英閃緑岩 | 2 | 4974.0 | 3 | 237.0 | 1 | 522.3 | | | 6 | 5733.3 |
| 閃緑岩 | 6 | 177.8 | | | 1 | 214.6 | | | 7 | 392.4 |
| ひん岩 | 4 | 760.2 | 3 | 156.2 | | | | | 7 | 916.4 |
| アプライト | | | | | 2 | 761.0 | | | 2 | 761.0 |
| 文象斑岩 | | | | | 1 | 36.6 | | | 1 | 36.6 |
| かこう岩 | 1 | 292.4 | | | | | | | 1 | 292.4 |
| デイサイト | 4 | 828.2 | 1 | 58.4 | 1 | 218.7 | 1 | 140.4 | 7 | 1245.7 |
| デイサイト凝灰岩 | 5 | 36.8 | | | | | | | 5 | 36.8 |
| ホルンフェルス | 4 | 59.7 | 2 | 267.5 | 1 | 4.6 | | | 7 | 331.8 |
| 片状ホルンフェルス | 2 | 882.4 | | | | | | | 2 | 882.4 |
| 溶結凝灰岩 | 24 | 1118.0 | 5 | 206.2 | 1 | 108.1 | 1 | 244.5 | 31 | 1676.8 |
| 石英 | | | 1 | 16.4 | | | | | 1 | 16.4 |
| 凝灰質砂岩 | 2 | 224.0 | | | | | | | 2 | 224.0 |
| 珪質変質岩 | 26 | 679.7 | 5 | 71.7 | 6 | 130.4 | 3 | 33.2 | 40 | 915.0 |
| 珪質準変岩 | 1 | 1.7 | | | | | | | 1 | 1.7 |
| 変珪岩 | | | 1 | 5.0 | | | | | 1 | 5.0 |
| 角閃石安山岩 | 11 | 325.8 | | | | | | | 11 | 325.8 |
| 蛇石 | 3 | 12.0 | | | | | | | 3 | 12.0 |
| 不明 | 1 | 46.5 | | | | | | | 1 | 46.5 |
| 合計 | 612 | 56257.2 | 136 | 10253.4 | 68 | 6843.0 | 31 | 1513.8 | 847 | 74867.4 |

黒色頁岩、小形石器のみ使われている黒色安山岩という在り方である。一方、黒曜石・碧玉等の非在地石材は小形石器に偏る傾向が明らかで、これは機能・用途、加工の難易度等を反映したもの、とすることができるだろう。黒曜石については砕片類が多く単純に点数で比較することはできないだろうが、黒色頁岩に続く第二の石材として多用されることは注意すべきことかもしれない。剥片類を構成した石材（28種類）を概観するなら、三国起源の頁岩類５種、武尊起源の黒色安山岩、黒曜石や碧玉等のガラス・油脂光沢に富んだ石材６種、打製石斧の素材に使われることの多い安山岩類２種、磨製石斧や石皿等に多い片岩類２種に大別することができるだろう。変質玄武岩以下の石材については本来的には礫石器に用いる石材だが、明らかに剥片としての属性を有しており、礫器等の刃部を作出した際に生じた剥片か、ハンマー的に使用した際に付随的に生じたものと考えている。

一方、礫・礫片類には剥片類28種類を上まわる33種類の石材が確認されている。これらには部分的に剥片系石器の石材と重複するものが含まれているが、概ね、利根川起源の河床礫種を反映しているということができる。具体的には、本遺跡上流域に分布する塩基性深成岩類（閃緑岩、ひん岩、石英斑岩、蛇紋岩など）や片品起源？の溶結凝灰岩などである。遺跡が利根川の上位段丘下にあることから、この崖線より上位段丘構成礫が供給されている可能性や、住居を構築した際に、地山の段丘構成礫が混じり込んでいるということも確実だが、基本的には利根川から拾い上げた礫というべきだろう。礫石器には、このうち６種類の石材が使われているのにすぎないが、石英閃緑岩・閃緑岩・ひん岩等の石材は利根川流域の縄文期遺跡においては礫石器類に比較的多用されることの多い石材である。

（３）帰属時期および製作構造

出土石器には前期的石器、中・後期的石器の別があるだろうが、特に偏在することなく出土している。このため、分布からその帰属時期を想定することは難しいというのが現状で、個別石器の製作構造なり帰属時期については周辺域を含む地域の集落動向を踏まえ理解すべきだろうと考えている。

発掘地点に限れば、その利用状況は前期前葉から後期中葉（第92・93図）まで断続的に続き、特に前期前半と中期後半の利用度が高い。同様な傾向が段丘上位の中郷遺跡にもあり、両者の密接な関係性は明らかである。居住域としては前期前葉のみ利用されただけである。最も土器量の多い中期後半の住居は未確認であることから、単純化して言えば廃棄の場として機能したということだろうが、同時期の土坑も少量存在しており、包含層形成の要因は多様であるというべきだろう。これについてこれ以上を指摘することはできないが、包含層出土石器の帰属時期を考えるとき、住居覆土の土器の在り方、すなわち、住居覆土の土器には中期段階のものはないということが参考になるだろう。これにより住居出土の石器についても前期前葉段階のそれとすることができると考えている。

住居覆土の定型石器を概観してまず気づくのは、狩猟具としての石鏃の安定性、粗製タイプとしての石匙、二ツ木式段階住居から出土する小形撥状の打製石斧、磨石類の多出等である。小形・撥状を呈する打製石斧については、短冊形の打製石斧に先行する古いタイプであることは以前から判明していたが、それ以外のものは前・中期的様相の典型例とされるものであることに注意しておきたい。

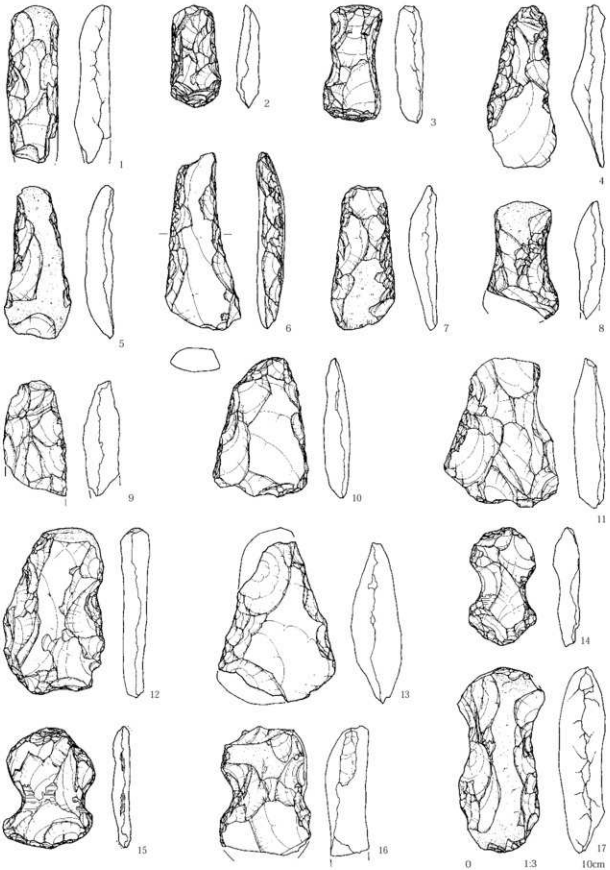
このことを前提にしてなお、包含層出土の石器の帰属時期については不明とせざるを得ないが、ここでは石鏃様の打製石斧に限定して若干私見を述べておきたい。石鏃という名称については、弥生中期の農耕具としての含意がある。大方の意見は装着部の作出を明瞭に意識した打製石斧で、縄文石斧より大形（長さ20cm前後）なら、石鏃としての可能性を考えるということである。本報告で石鏃？とした石斧についても、石器自体の持つ形態的特徴や、石鏃の盛行する弥生中期遺跡の立地傾向から総合して、新

規耕地の開発を試みたとしても不思議ではないということが大方の意見であるようだ。これについて特に意見は持ち合わせていないが、出土資料から見る限り、使用再生状態を示す資料以外にも未成品があり、短冊形とした幅広の頭部破片を石鏃の破片とするならば、相当量の石鏃が存在したことになり、周辺域に集落が存在したはずである。同時期に帰属することが確定的な環状石斧が存在することもこれを支持するものと見られるが、こうした理解の在り方については慎重であるべきだろう。

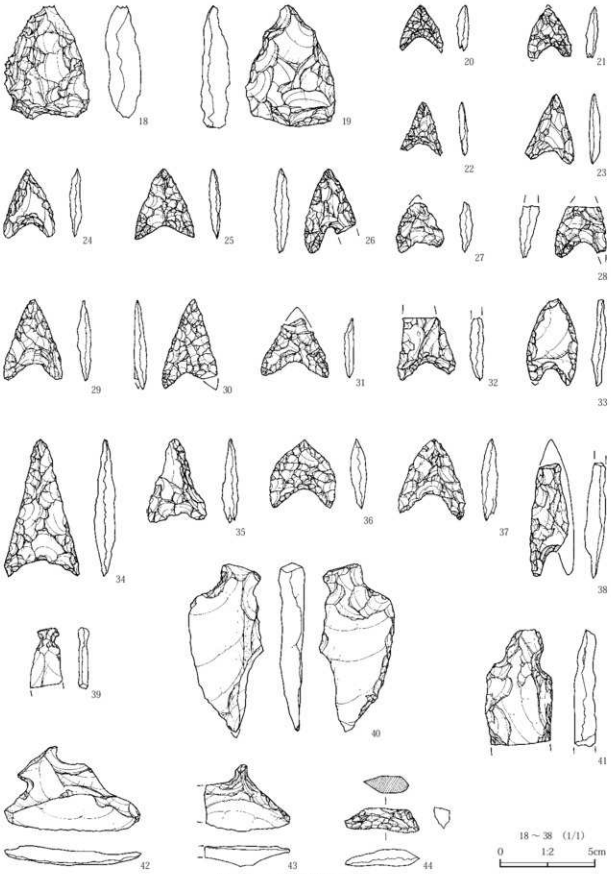
遺跡における石器製作構造を反映するものとして、剥片類の存在を指摘しておきたい。剥片類とした中で最も多出したのは黒色頁岩であることは、すでに述べたとおりである。これに続いて、黒曜石・黒色安山岩があり、上記３石材で92.9％を占めた。こうした傾向は剥片系石器（552点、礫石器82点を除く）としたものにも当て嵌まり、上記石材で87.5％を占めた。これに若干の差を認めるとすれば、細粒輝石安山岩製・珪質頁岩製の石器が剥片の出土量に相関していないということであろう。通常、赤城山南麓に所在する縄文遺跡では削器類の遺跡内製作は明らかであるが、打製石斧のそれについてはその証左が得られないことが多い。すなわち、それは完成状態か「粗割り」の状態で遺跡に持ち込んだ、と見られるのである。南麓縄文遺跡に比べてより石材の豊富な本遺跡においても、黒色頁岩製の大形剥片類や大形石核は見られないことから、その遺跡内製作については否定的にならざるを得ない状況である。未成品（154点中50点）が相当量を占める実態を考えるなら、遺跡地に近い利根川の河床で素材を得て遺跡地で最終的に加工したということになろう。石鏃については非在地の黒曜石を用いた遺跡内製作を指摘した。これに対して在地の黒色頁岩を用いた石鏃の遺跡内製作は低調で、在地・非在地石材間で逆転現象が生じていた。一般論として在地石材を用いた石鏃が大形で、非在地石材が斉齊的な石材利用を反映して小形であるということだろうが、同様な傾向は指摘できないようである。現状で、こうした在り方についてコメントできるだけのものはなく、評価は今後の課題だが、住居出土の石鏃には未製品を多く含み、狩猟具は自ら製作するという実態が明らかであった。

便宜的石器としての性格の強い削器は、32点が出土している。これについては器種のバリエーションが分かるように典型例を抽出、図化した。これに類似する便宜的石器のひとつに加工痕ある剥片175点がある。これについては個別に図化していないが、175点中155点が黒色頁岩を用い、豊富な在地石材を用いた石器製作の実態が見て取れた。この種の便宜的石器の素材は同一石材を用いる打製石斧の製作途上に生じる剥片類を用いた可能性もあるだろうが、原石を長軸方向に割り素材とするような石斧の製作は河床で行われたと考えておきたい。集落内から出土する石核類の大部分は偏平礫や棒状礫、分割礫を用いたものであり、サイズ的に石斧の素材を得られる状況にはなく、石核から得た剥片類は削器や加工痕ある剥片など小形剥片系の石器の素材とすることが妥当である。こうした想定は細粒輝石安山岩製剥片類の出土量からも裏づけられている。別表（第６表）によりそれは明らかで、その出土量は63点（1.6％）と少なく、細粒輝石安山岩製の打製石斧（20点）に見あうだけの出土量とはいい難い状況にあるからである。

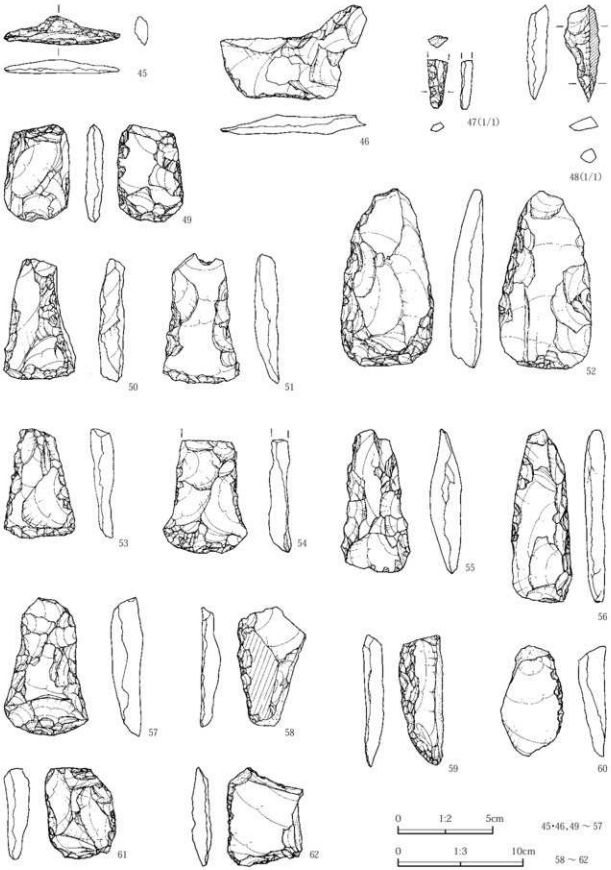
以上の石器製作状況を総括したうえで利根川上流域に所在する縄文遺跡のそれを評価するなら、豊富な在地石材を用いた石器製作（剥片系石器には黒色頁岩、礫石器類には粗粒輝石安山岩他の河床礫）が明らかであり、大部分は自前で調達したものとすることができる。出土資料から見れば打製石斧の製作は二次加工のみその証拠を残しているのにすぎないが、その製作地が近隣を流れる利根川の河床とするなら、余剰は他地域へ搬出されたとすることも可能であり、南麓縄文遺跡における石器の製作構造とは異なるというべきだろう。



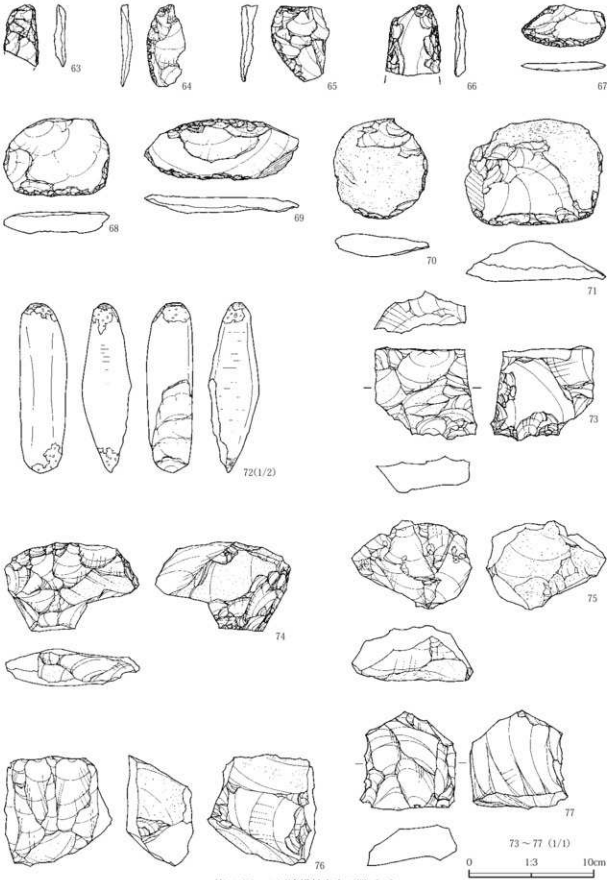

第108図　１区遺構外出土石器（１）



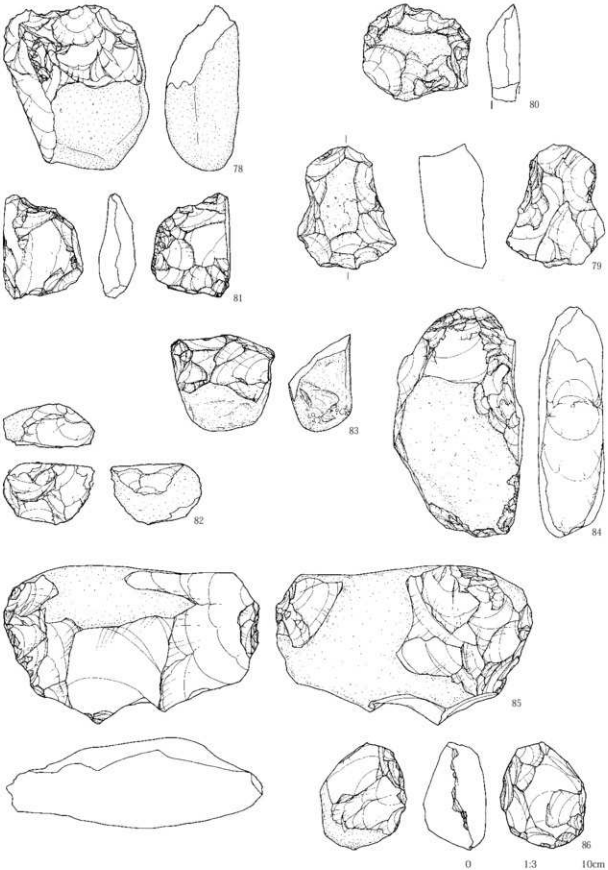

第109図　１区遺構外出土石器（２）



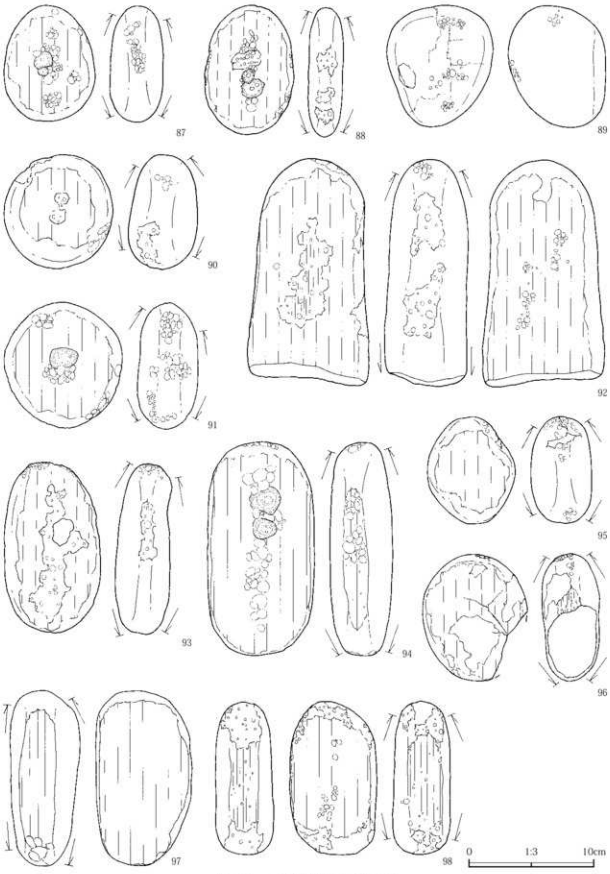

第110図　１区遺構外出土石器（３）



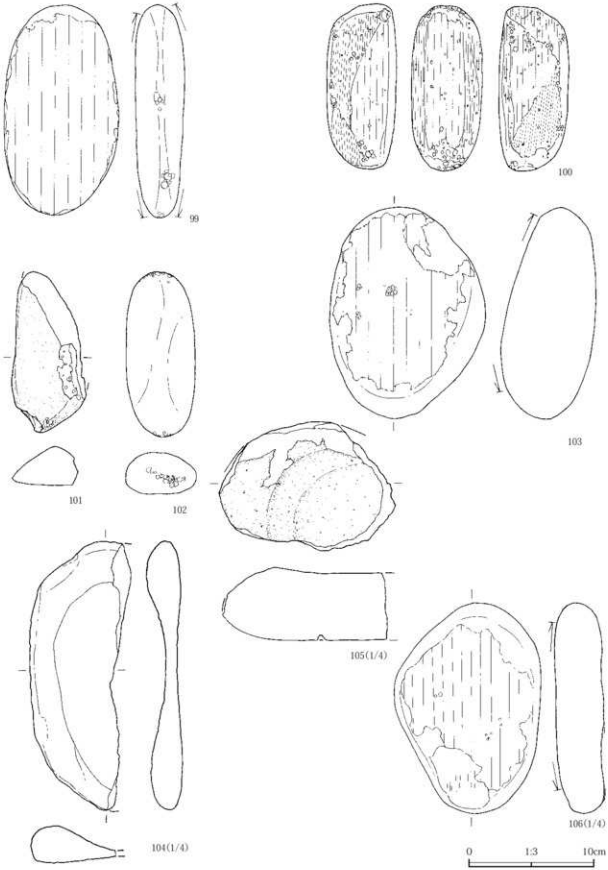

第111図　１区遺構外出土石器（４）




第112図　１区遺構外出土石器（５）

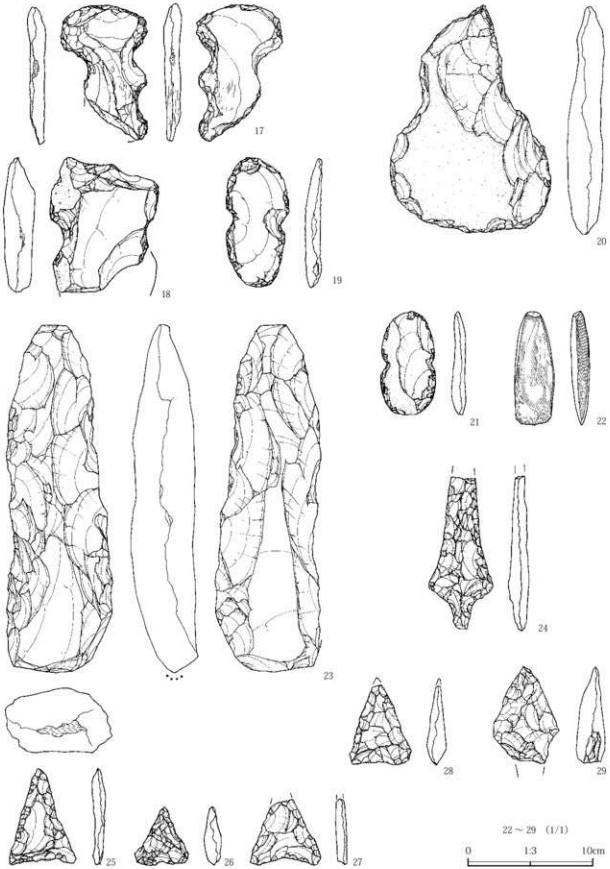



第113図　１区遺構外出土石器（６）

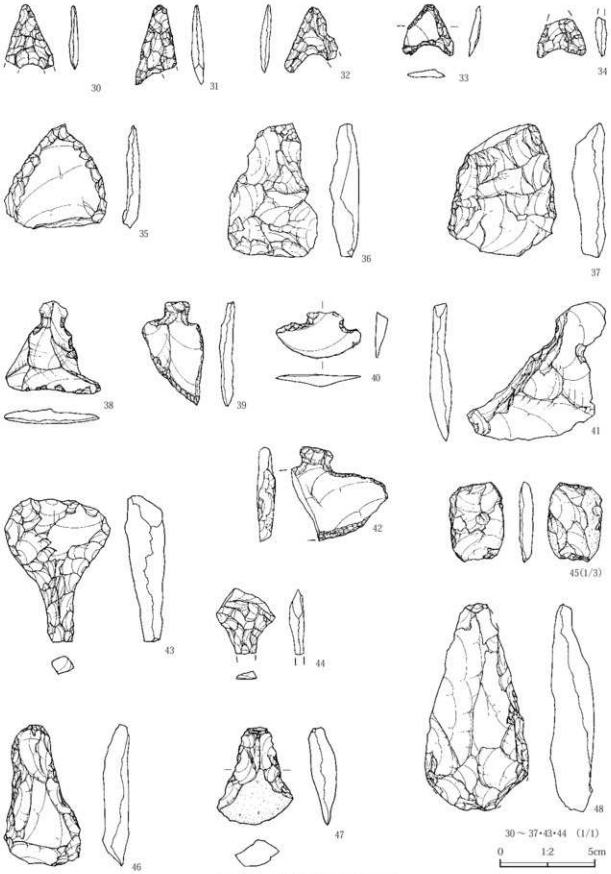



第114図　１区遺構外出土石器（７）

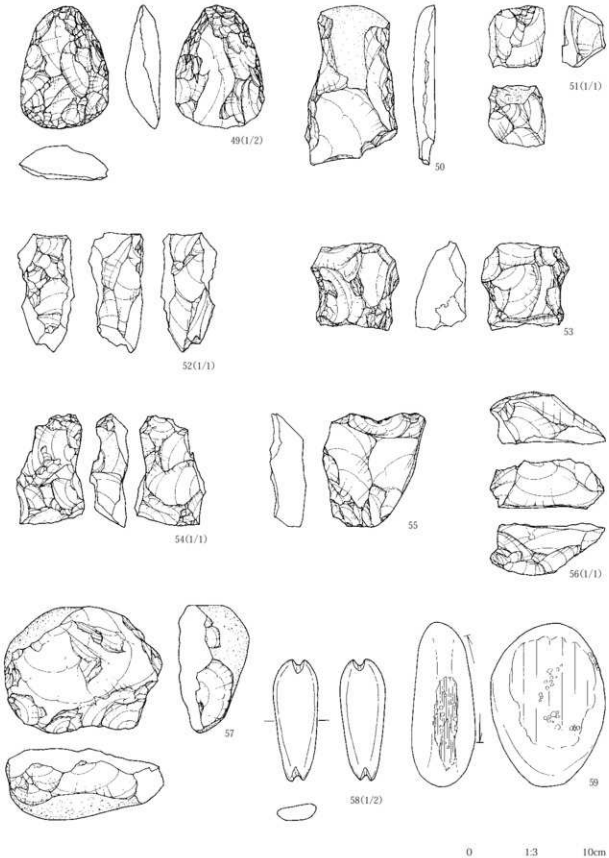
第115図　３区遺構外出土石器（１）



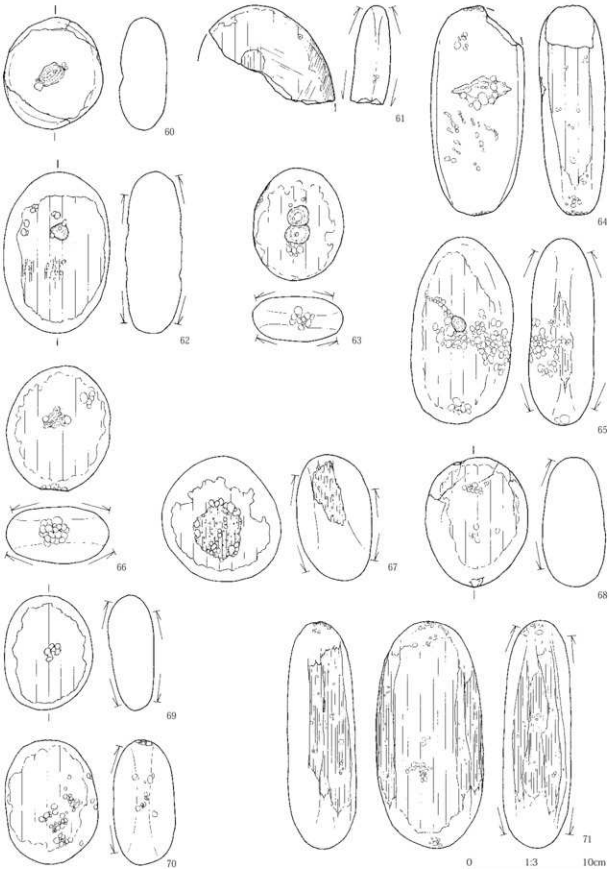

第116図　３区遺構外出土石器（２）



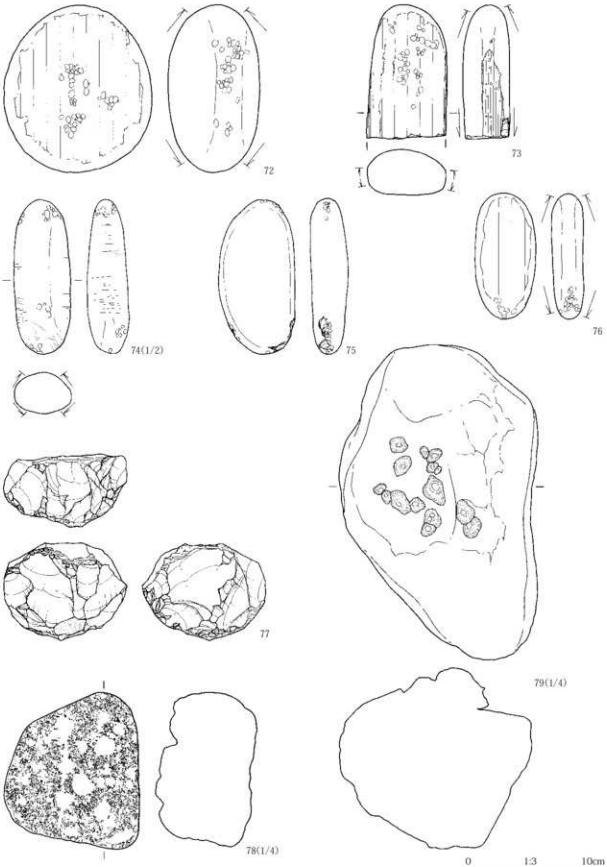

第117図　３区遺構外出土石器（３）



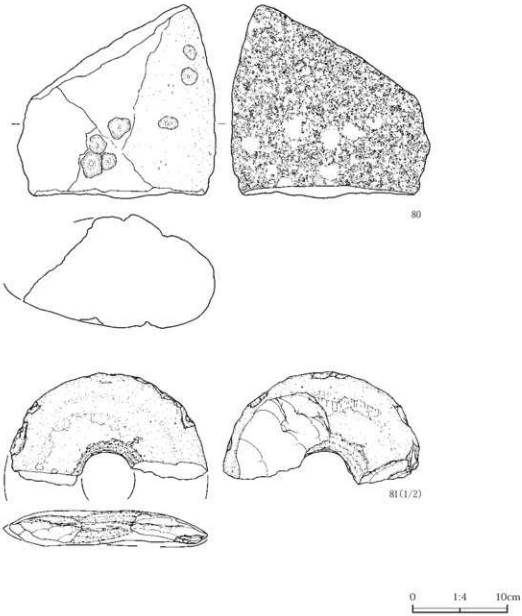

第118図　３区遺構外出土石器（４）



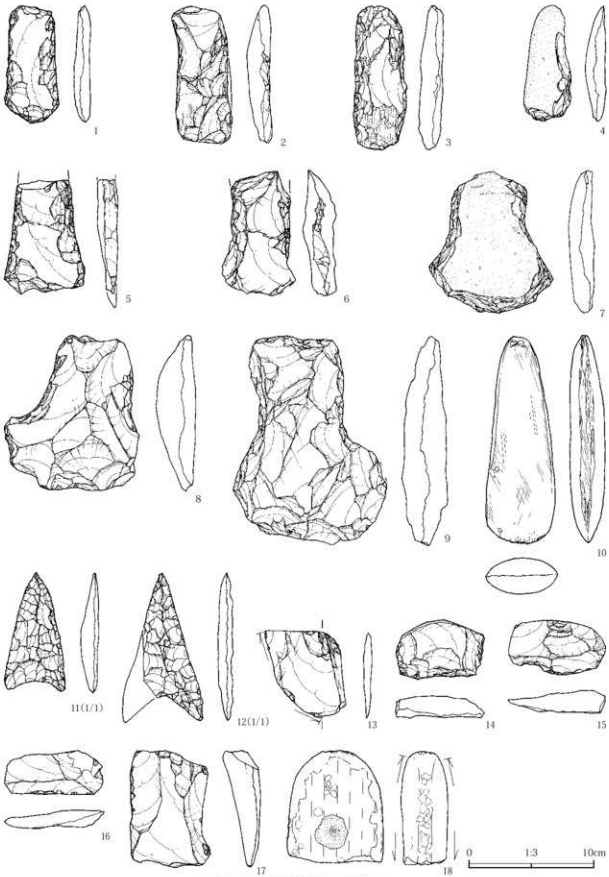

第119図　３区遺構外出土石器（５）



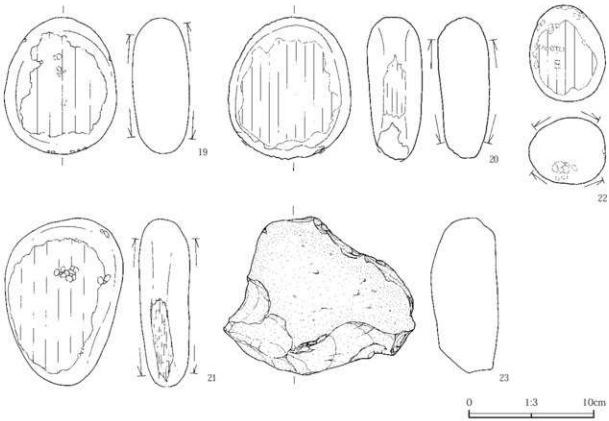

第120図　３区遺構外出土石器（６）



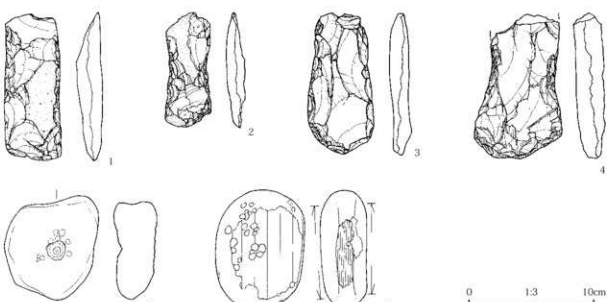

第121図　３区遺構外出土石器（７）




第122図　４区遺構外出土石器（１）




第123図　４区遺構外出土石器（２）




第124図　５区遺構外出土石器

# 第７章　自然科学分析

黒曜石製石器の産地推定について株式会社　パレオ・ラボに分析委託した報告は以下の通りである。

## 第１節　黒曜石製石器の産地推定

### １．はじめに

上白井西伊熊遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

### ２．試料と方法

分析対象資料は上白井西伊熊遺跡で検出された縄文時代前期の複数の住居跡より出土した黒曜石の石鏃、石核および剥片計17点である。試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジを用いて、表面の洗浄を行った。

分析装置は、(株)セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA－2001Lを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300sec、照射径10㎜、電流自動設定(１～63μA、デッドタイムが20％未満になるよう自動設定)、電圧50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月,2004など)。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計７元素のX線強度(cps；count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

1)Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

2)Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

3)Mn強度×100/Fe強度

4)log(Fe強度/K強度)

そしてこれらの指標値を用いた２つの判別図(横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定するものである。この判別図法は、原石同士の判別図が重複した場合、分離は不可能となるが、現在のところ、同一エリア内の多少の重複はあってもエリア間の重複はほとんどないことから、産地エリアの推定には十分である。また、指標値に蛍光X線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせて算出しているため、形状や厚みなどの影響を比較的受け

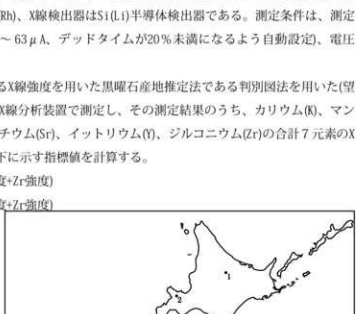



図１　黒曜石産地分布図（東日本）

にくいという利点があり、非破壊分析を原則とし、形状が不規則で薄い試料も多く存在する出土遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。なお、厚みについては、かなり薄くても測定可能であるが、それでも0.5mm以下では影響をまぬかれないといわれる（望月,1999）。極端に薄い試料の場合、K強度が相対的に強くなるため、log(Fe強度/K強度)の値が減少する。また、風化試料の場合でも、log(Fe強度/K強度)の値が減少する（同上）。そのため、試料の測定面はなるべく奇麗で平坦な面を選び、測定した。測定結果が判別群からかけ離れた値を示した場合は、測定面を変更するか、あるいはメラミンフォーム製スポンジで再度表面の洗浄を行った後、何回か再測定を行って検証した。原石試料は、採取原石を割り新鮮な面を表出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表１に各原石産地とそれぞれの試料点数、ならびにこれらのエリアと判別群名を示す。また、図１に各原石の採取地分布図を、図２に長野県の原石採取地分布図を示す。

表１　黒曜石産地（東日本）の判別群名称（望月，2004参考）

| 都道府県 | エリア | 判別群 | 記号 | 原石採取地 |
|---|---|---|---|---|
| 北海道 | 白滝 | 八号沢群 | STHG | 赤石山山頂・八号沢露頭・八号沢・黒曜の沢・幌加林道(36) |
| | | 黒曜の沢群 | STKY | |
| 青森 | 赤井川 | 曲川群 | AIMK | 曲川・上木川(12) |
| | 木造 | 出来島群 | KDDK | 出来島海岸(10) |
| | 深浦 | 八森山群 | HDHM | 岡崎沢(7)、八森山公園(8) |
| 秋田 | 男鹿 | 金ヶ崎群 | OGKS | 金ヶ崎温泉(10) |
| | | 脇本群 | OGWK | 脇本海岸(4) |
| 岩手 | 北上川 | 北上折居２群 | KKO2 | 北上川(9) |
| 山形 | 羽黒 | 月山群 | HGGS | 月山砂前(10) |
| 宮城 | 宮崎 | 湯ノ倉群 | MZYK | 湯ノ倉(40) |
| | 色麻 | 根岸群 | SMNG | 根岸(40) |
| | 仙台 | 秋保１群 | SDA1 | 上蔵(18) |
| | | 秋保２群 | SDA2 | |
| | 塩釜 | 塩竈群 | SGSG | 塩竈(10) |
| 新潟 | 新発田 | 板山群 | SBTY | 板山改場(10) |
| | 新津 | 金津群 | NTKT | 金津(7) |
| 栃木 | 高原山 | 甘湯沢群 | THAY | 甘湯沢(22) |
| | | 七尋沢群 | THNH | 七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3) |
| 長野 | 和田(WD) | 鷹山群 | WDTY | 鷹山(20)、東餅屋(20) |
| | | 小深沢群 | WDKB | 小深沢(18) |
| | | 土屋橋西群 | WDTN | 土屋橋西(11) |
| | | ブドウ沢群 | WDBD | ブドウ沢(20) |
| | 和田(WO) | 牧ヶ沢群 | WOMS | 牧ヶ沢下(20) |
| | | 高松沢群 | WOTM | 高松沢(19) |
| | 諏訪 | 星ヶ台群 | SWHD | 星ヶ台(35)、星ヶ塔(20) |
| | 蓼科 | 冷山群 | TSTY | 冷山(20)、麦草峠(20)、麦草峠東(20) |
| 神奈川 | 箱根 | 芦ノ湯群 | HNAY | 芦ノ湯(20) |
| | | 畑宿群 | HNHJ | 畑宿(51) |
| | | 鍛冶屋群 | HNKJ | 鍛冶屋(20) |
| 静岡 | | 上多賀群 | HNKT | 上多賀(20) |
| | 天城 | 柏峠群 | AGKT | 柏峠(20) |
| 東京 | 神津島 | 恩馳島群 | KZOB | 恩馳島(27) |
| | | 砂糖崎群 | KZSN | 砂糖崎(20) |
| 島根 | 隠岐 | 久見群 | OKHM | 久見パーライト中(6)、久見採掘現場(5) |
| | | 宮浦群 | OKMU | 宮浦海岸(3)、加茂(4)、岸浜(3) |

図２　長野県の黒曜石産地分布図（望月，2004を元に作成）

３．分析結果

表４に出土遺物の測定値及び算出された指標値を、図３・４に、黒曜石原石の判別図に遺跡出土遺物17点をプロットした図を示す。なお、図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。１点が高原山エリア甘湯沢群THAY、１点が和田エリア鷹山群WDTYと同小深沢群WDKBの重複域、８点が和田エリア土屋橋西群WDTN、１点が和田エリアブドウ沢群WOBD、３点が和田エリア高松沢群WOTM、３点が諏訪エリア星ヶ台群SWHDの範囲およびその周辺にプロットされた。表４に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

分析した17点の範囲内の傾向ではあるが、そのほとんどが信州地方産の黒曜石という結果となった。その中で、分析対象資料としては唯一の６号住居出土である分析№９のみが高原山エリア産と特徴的であった。表２に住居跡別の産地推定結果を示す。また、表３に器種別の産地推定結果を示す。

表２　出土住居跡別の産地推定結果

| | 高原山 | 諏訪 | 和田 |
|---|---|---|---|
| ２号住居 | | | 3 |
| ３号住居 | | 2 | 8 |
| ３・４号住居 | | | 1 |
| ６号住居 | 1 | | |
| ７号住居 | | 1 | 1 |

表３　器種別の産地推定結果

| | 高原山 | 諏訪 | 和田 |
|---|---|---|---|
| 石核 | 1 | 1 | |
| 剥片 | | 2 | 4 |
| 石鏃 | | | 9 |

４．おわりに

上白井西伊熊遺跡出土の黒曜石製石器17点について蛍光X線分析による産地推定を行った結果、13点が和田エリア産、３点が諏訪エリア産、１点が高原山エリア産と推定された。

引用・参考文献

望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定.「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書２　―上和田城山遺跡篇―」:172-179, 大和市教育委員会.

望月明彦（2004）殿山遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定. 上尾市文化財調査報告第76集　「殿山遺跡　先土器時代石器群の保管･活用のための整理報告書」:272-282, 上尾市教育委員会.

表4　分析対象資料および産地推定結果

| 分析No. | 区 | 遺物番号 | 出土遺構 | 器種 | 重量 | 備考 | K強度(cps) | Mn強度(cps) | Fe強度(cps) | Rb強度(cps) | Sr強度(cps) | Y強度(cps) | Zr強度(cps) | Rb分率 | Mn×100/Fe | Sr分率 | log Fe/K | 判別群 | エリア | 分析No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 3 | 0001 | 2住 | 石鏃 | 0.40 | No.96 | 7.35 | 4.91 | 48.12 | 22.15 | 0.33 | 9.46 | 8.69 | 54.52 | 10.20 | 0.80 | 0.82 | WDTYorWDKB | 和田 | 1 |
| 2 | 3 | 0002 | 2住 | 石鏃 | 0.90 | 16Pit | 8.98 | 3.93 | 52.33 | 16.69 | 2.12 | 6.58 | 11.21 | 45.60 | 7.50 | 5.78 | 0.77 | WDTN | 和田 | 2 |
| 3 | 3 | 0003 | 2住 | 石鏃 | 0.40 | No.61 | 8.65 | 3.56 | 50.14 | 16.91 | 1.53 | 6.13 | 10.02 | 48.89 | 7.09 | 4.41 | 0.76 | WDTN | 和田 | 3 |
| 4 | 3 | 0022 | 3･4住 | 石鏃 | 0.90 | No.39 | 7.33 | 3.12 | 48.41 | 13.55 | 2.05 | 4.96 | 9.67 | 44.83 | 6.43 | 6.76 | 0.82 | WDTN | 和田 | 4 |
| 5 | 3 | 0023 | 3住 | 石鏃 | 0.70 | 剥片 | 8.07 | 3.57 | 54.42 | 15.51 | 2.96 | 5.79 | 10.35 | 44.80 | 6.56 | 8.56 | 0.83 | WDTN | 和田 | 5 |
| 6 | 3 | 0025 | 3住 | 石鏃 | 0.40 | 覆土 | 8.36 | 3.34 | 58.60 | 13.64 | 3.71 | 5.85 | 12.11 | 38.63 | 5.69 | 10.51 | 0.85 | WDTM | 和田 | 6 |
| 7 | 3 | 0027 | 3住 | 石鏃 | 1.10 | 覆土 | 6.60 | 3.01 | 44.19 | 13.15 | 2.00 | 4.17 | 9.08 | 46.31 | 6.82 | 7.05 | 0.83 | WDTN | 和田 | 7 |
| 8 | 3 | 0030 | 3住 | 石鏃 | 0.50 | 覆土 | 6.90 | 2.92 | 50.20 | 12.45 | 3.65 | 4.36 | 11.50 | 38.96 | 5.81 | 11.42 | 0.86 | WDTM | 和田 | 8 |
| 9 | 1 | 0071 | 6住 | 石核 | 27.30 | No.58 | 3.34 | 3.33 | 107.69 | 5.52 | 7.46 | 4.08 | 14.79 | 17.33 | 3.09 | 23.42 | 1.51 | THAY | 高原山 | 9 |
| 10 | 1 | 0092 | 7住 | 石鏃 | 0.40 | 床下 | 7.17 | 3.05 | 52.11 | 12.36 | 3.67 | 3.81 | 12.34 | 38.41 | 5.85 | 11.40 | 0.86 | WDTM | 和田 | 10 |
| 11 | 1 | 0096 | 7住 | 石核 | 7.10 | No.135 | 5.61 | 2.37 | 32.91 | 10.00 | 3.09 | 2.87 | 7.55 | 42.51 | 7.19 | 13.14 | 0.77 | SWHD | 諏訪 | 11 |
| 12 | 3 | 0790 | 3住 | 剥片 | 1.82 | A群 | 6.43 | 3.05 | 33.99 | 9.44 | 3.03 | 3.45 | 7.08 | 41.05 | 8.96 | 13.18 | 0.72 | SWHD | 諏訪 | 12 |
| 13 | 3 | 0791 | 3住 | 剥片 | 2.56 | A群 | 7.71 | 3.47 | 45.60 | 15.24 | 1.66 | 5.51 | 8.30 | 49.63 | 7.60 | 5.40 | 0.77 | WDTN | 和田 | 13 |
| 14 | 3 | 0792 | 3住 | 剥片 | 2.08 | A群 | 7.26 | 3.13 | 44.88 | 15.23 | 1.66 | 5.71 | 9.85 | 46.94 | 6.98 | 5.11 | 0.79 | WDTN | 和田 | 14 |
| 15 | 3 | 0793 | 3住 | 剥片 | 3.60 | B群 | 7.45 | 2.68 | 53.01 | 10.64 | 4.36 | 4.12 | 13.36 | 32.76 | 5.06 | 13.42 | 0.85 | WOBD | 和田 | 15 |
| 16 | 3 | 0794 | 3住 | 剥片 | 2.99 | B群 | 8.37 | 3.43 | 49.99 | 16.11 | 1.52 | 6.31 | 10.35 | 46.97 | 6.86 | 4.44 | 0.78 | WDTN | 和田 | 16 |
| 17 | 3 | 0795 | 3住 | 剥片 | 2.88 | B群 | 6.57 | 3.41 | 39.08 | 10.24 | 3.42 | 3.75 | 8.09 | 40.15 | 8.71 | 13.42 | 0.77 | SWHD | 諏訪 | 17 |

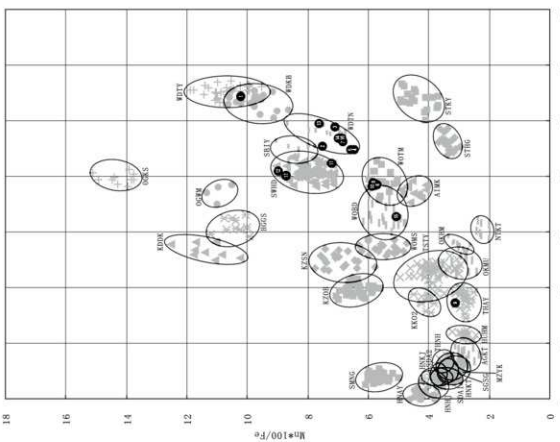



図３　黒曜石産地推定判別図（１）

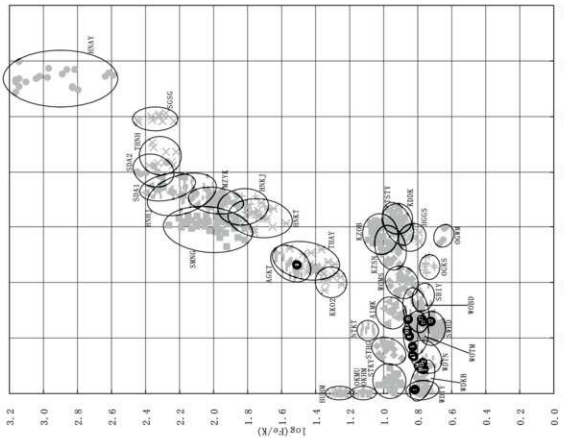



図４　黒曜石産地推定判別図（２）

# 第８章　まとめ

## 第１節　各調査面の遺跡景観

### １　１面

１面として調査したFP上面では、古代から中世の遺構はまったく検出されず、当遺跡周辺がFP降下以降どのような土地利用がなされていたのかわからない状況である。検出された遺構は、近世以降に掘削されたと見られる耕作坑と呼称した溝状の土坑と、不定形の土坑だけであった。耕作坑については、吹屋遺跡などの報告では遺跡周辺地域での聞き取り調査をもとに、冬季における芋類やごぼうなどの根菜類貯蔵用の土坑と考えられていた。それが中郷遺跡の報告では「土囲い法(穴囲い)と呼ばれるコンニャクの種玉を貯蔵するために畠の片隅に掘られた穴」と、より具体的な用途に言及している。当遺跡で検出されている耕作坑についても、中郷遺跡で検出されている耕作坑と基本的に同形態であり、検出状況も共通することから同じ目的で掘削されたと見てよいであろう。また、掘削された場所については、聞き取りでは畠の片隅や境界の場合が多いということであるが、中郷遺跡の調査では圃場整備前にあった道に沿って掘削されていることが確認されており、当遺跡の耕作坑も方位に規則性が見られることから道に沿って掘削されていた可能性が高いと考えている。

### ２　２面

当遺跡周辺のFP下の遺跡としては、同一段丘北東側にレーダー探査で住居の存在が想定されている梅木遺跡があり、その北側には積石塚の検出された宇津野・有瀬遺跡が位置している。また、上位段丘の長坂面に立地する中郷遺跡では広範囲に放牧地が検出されている。また、下位段丘の白井面に立地している浅田遺跡では、水田が検出されている。したがって、FP降下以前の時点で当遺跡周辺には、放牧地、居住域、墓域、生産域が比較的狭い範囲に集約され、この地域ならではの集落景観が展開していたはずである。当遺跡は、段丘面は異なるが梅木遺跡と中郷遺跡との間にあり、居住域と放牧地との間に位置していたことになる。しかし、いずれの調査区においても居住域の近くであることを窺わせるような遺物の出土は認められない。踏み分け道と馬の蹄跡以外に当遺跡の性格付けができそうな遺構が検出されていないことから、放牧地の一部であったと考えられる。しかし、放牧地とされている遺跡では、踏み分け道や馬の蹄跡ばかりでなく、畦状遺構や焼土、炭化物、畝立てされた畠、耕起されたような面など、多面的な土地利用を想起させる作業痕跡が検出されることが多い。これに反して、当遺跡では踏み分け道と判断した硬化面が検出された以外に、他の土地利用を示唆するような作業痕跡がまったくと言ってよいほど見られない。これは、今回調査対象となった場所が上位段丘面に連なる斜面地であり、他の地域ほどに有益な空間とは認識されておらず、多面的な土地利用の対象とはなっていなかったことによるのであろう。

### ３　３面

FA降下を前後する時期に、隣接する梅木遺跡には集落が営まれていた可能性があり、下位段丘面の白井面にはFAで埋没した古墳群が調査されている。したがって、当遺跡を含む一帯には上述したFP下面の状況に似た景観が展開していたことが想定されるのであるが、３面調査においては遺構がまったく検出されず、遺物の出土も皆無であった。この段階においても２面の時期と同様に有益な空間とは認識されていなかったものと思われる。

### ４　４面

４面調査では、住居６棟、土坑34基、ピット５基が検出された。住居は、３区２号住居、３区３号住

居、１区６号住居、１区７号住居の４棟が二ツ木式段階、３区５号住居が関山式段階、１区８号住居は時期を特定できるような遺物がないために判断しにくいが、検出状況からほぼ前期前半の可能性が高いので、住居はすべて前期前半の段階のものと考えられる。土坑は、隅丸方形または楕円形の平面形を持つ一群が中期後半から後期初頭、長楕円形の陥穴と見られる一群が時期不明であるのを除いて、円形の平面形の土坑は住居の時期と同じである可能性が高く、それらは住居周辺に散在する傾向がある。包含層の調査では、前期の二ツ木式から後期の加曽利Ｂ式までの土器が出土しており、出土破片数の比較では前期前半と中期後半が圧倒的に多く、他の時期の土器は少ない。これは、検出遺構の時期が反映された結果と見られるが、中期後半の遺物が多い最大の要因は上位段丘に立地している中郷遺跡の影響と考えられる。したがって、当遺跡の主体は、二ツ木式から関山式段階の集落遺跡とすることができる。伊藤順一氏の群馬県内の時期別の住居集成では、二ツ木式段階の住居が検出されている遺跡として、旧大胡町の横沢新屋敷遺跡、堀越中道遺跡、旧赤城村の見立峯遺跡Ⅱ、旧北橘村の芝山遺跡、前橋市の芳賀東部団地遺跡Ⅲなど12遺跡が上げられている。その中で比較的調査範囲が広く、集落の全体像が捉えられる遺跡として堀越中道遺跡、横沢新屋敷遺跡、見立峯遺跡Ⅱの３遺跡がある。堀越中道遺跡は、二ツ木式段階の住居15棟が、比較的平坦な台地中央部に北西に開いた「Ｌ」字形に検出されている。台地北西部は全面が調査対象となっていないので判然としないが、トレンチ調査された場所からは数棟の住居が検出されており、この一角にも二ツ木式段階の住居の存在を想定される。したがって、堀越中道遺跡の集落は、中央に空間を持った環状または馬蹄形集落となる可能性がある。横沢新屋敷遺跡では、二ツ木式段階の住居21棟が検出されているが、等高線に沿った配置をする一群と比較的平坦な部分を占める一群があり、直径20m前後の円形の空間を囲むように環状に配置されているかのように見える。見立峯遺跡Ⅱでは、幅40mほどの緩い谷を挟んで15棟の二ツ木式段階の住居が検出されている。北東部の調査されていない部分については、住居が占地している緩斜面が連続していると考えられることから、この部分にも二ツ木式段階の住居が存在する可能性は高いと考えられる。したがって、見立峯遺跡Ⅱは、南西に開口する谷を望む馬蹄形の集落となる可能性がある。

以上のような当遺跡と同段階の比較的大規模な集落遺跡が存在することを前提として、当遺跡の集落構造について想定してみることにする。当遺跡の住居は、上位段丘面との間に形成された崖から平坦部への変換点に当たる斜面地に、崖線に沿うように検出されているのが特徴であり、北側の４・５区や南側の０区では当該期の遺構は検出されていない。調査区より西側は、急斜面となっていることから、この場所に住居が構築されているとは考えられないので、当遺跡の前期集落が５～６棟程度の小規模集落でない限り、今回検出された６棟の住居を西端として調査区東側の平坦部分に展開していたことが予測されるのである。当遺跡の東側の西伊熊面の平坦部は、集落が大規模に展開するに十分な広さがあることを考慮すれば、当遺跡の集落は横沢新屋敷遺跡などのような環状または馬蹄形集落であった可能性は高く、そうした比較的大規模な集落の西端の一部が調査されたのではないだろうか。

## 第２節　前期前葉土器群について

本書において前期前葉土器として扱ったのは、いわゆる二ツ木式～関山Ⅰ式である。群馬県内における該期については谷藤保彦氏による精力的な研究があり、細分案も提示されている（谷藤1988，2002，2006）。氏は口縁部紋様帯内における描画の手法を視点とし、①燃糸側面圧痕→②刻み隆帯→③１本書

きによる梯子状沈線→④半截竹管による平行沈線という変遷案を提示し、①を二ツ木Ⅰ式、②を二ツ木Ⅱ式、③を関山Ⅰ式（古段階）、④を関山Ⅰ式としてそれぞれ比定した。型式名称はひとまず置いておくとして、①～④の段階的変遷については各期をほぼ単純に出土する遺跡が赤城山西・南麓を中心とした比較的狭い範囲に確認できることから支持できるものである。本書では谷藤氏の二ツ木Ⅰ式、二ツ木Ⅱ式、関山Ⅰ式（古段階）、関山Ⅰ式を、Ⅰ期～Ⅳ期としてとりあえず置き換えておく（第125図）。

Ⅰ期は「新田野段階花積下層式」の段階であり、県内での資料が比較的充実している時期である。赤城山西・南麓では前橋市（旧大胡町）堀越中道遺跡、渋川市（旧北橘村）芝山遺跡でほぼ単純に出土している。堀越中道遺跡ではⅠ期の集落が検出され、前後段階をほとんど含まない良好な出土状況を示しており、群馬県内におけるⅠ期の基準資料といえるであろう。芝山遺跡についてもⅡ期に降る可能性のある土器がわずかに見られるものの、Ⅰ期の段階をほぼ単純に出土していると考えられる。さらに赤城山麓から南に目を向ければ、伊勢崎市（旧赤堀町）五目牛南組遺跡でもこの段階の土器群が出土している。

Ⅱ期は口縁部紋様帯内に刻み隆帯による描画が入り込む段階で、特に波状口縁の波頂部下に縦位区画や渦巻紋などのモチーフが施されるようだ。波頂部下に弧状の刻み隆帯を施す手法は、渋川市（旧赤城村）三原田城遺跡の花積下層式終末段階にすでに見られ、その伝統がⅠ期にも継承されている（１，３）。それがⅡ期になり、さらに口縁部紋様帯内に展開するようになったと考えられるだろう。Ⅱ期は前橋市（旧大胡町）横沢新屋敷遺跡で良好な資料が見られる。集落はⅠ期～Ⅱ期にかけてであるが、同じ旧大胡町内の堀越中道遺跡でⅠ期がほぼ単純に出土していることから、刻み隆帯による描画の土器群をⅡ期として確立できるであろう。また渋川市(旧赤城村)見立塚遺跡で良好な資料が見られるほか、同遺跡ではⅠ期の資料も充実しており、Ⅰ期～Ⅱ期の集落として重要である。また赤城山麓からは離れるが、県北西部の長野原町暮坪遺跡でⅡ期の住居が検出されている。

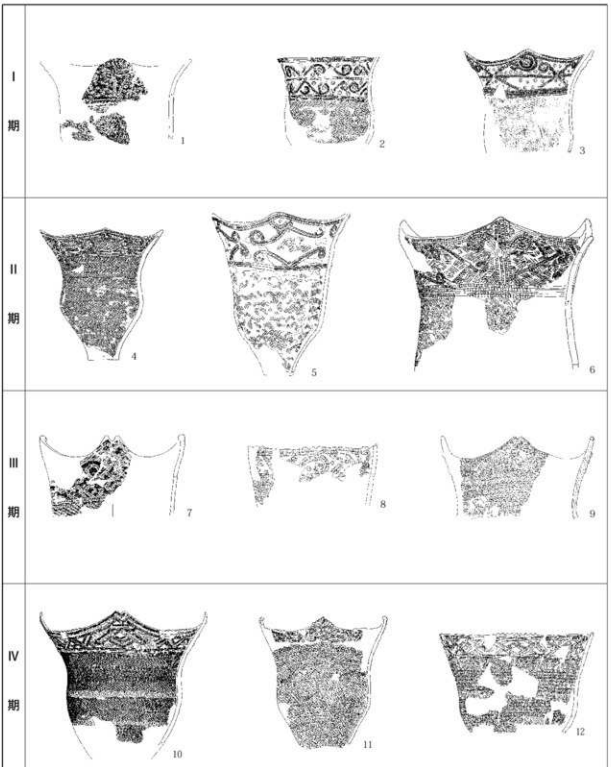
Ⅲ期は刻み隆帯に代わり１本書きの梯子状沈線によって描画を行う段階で、渋川市（旧赤城村）勝保沢中ノ山遺跡、諏訪西遺跡でほぼ単純な出土が見られる。勝保沢中ノ山遺跡は前後段階の土器の出土が少量見られるものの主体はⅢ期土器であり、住居も検出されている。諏訪西遺跡も同様に前後段階を少量含むが、やはりⅢ期土器を主体としており、住居も検出されている。この２遺跡の出土例からⅢ期が確立できるであろう。

Ⅳ期は半截竹管による平行沈線で描画を行う段階で、渋川市半田南原遺跡、渋川市（旧赤城村）見立十三塚遺跡で良好な資料が見られる。見立十三塚遺跡ではⅣ期～関山Ⅱ式の集落が検出されており、Ⅳ期の充実した資料が報告されている。

本遺跡出土資料を同様の視点で当てはめていくと第126図のようになる。簡単に概観してみたい。

Ⅰ期は13が相当する。波状口縁を呈し、２条の刻み隆帯で口縁部紋様帯を区画、紋様帯内は撚糸側面圧痕と円形刺突を施す。胴部縄紋は結節縄紋を施紋する。第125図１と酷似しており、同時期として問題ないであろう。

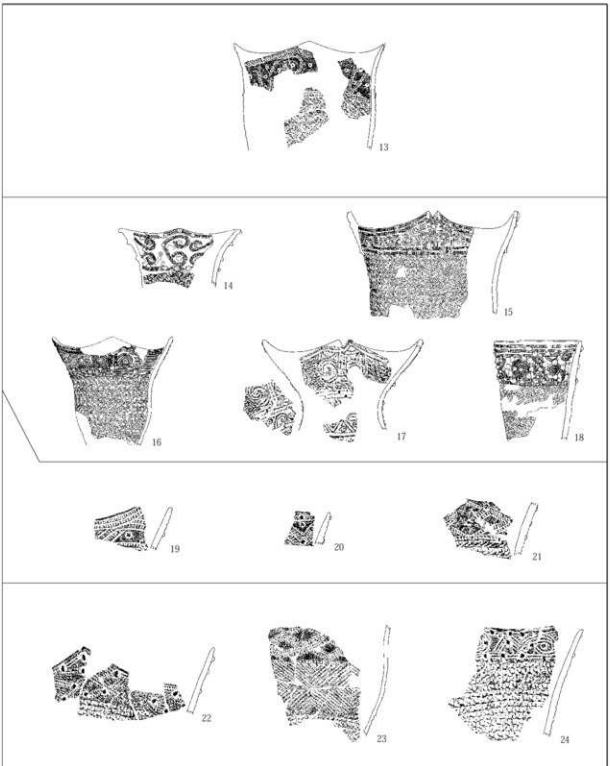
Ⅱ期は14 ～ 18が相当する。14は撚糸側面圧痕によるワラビ手紋が上下に対向するモチーフを描く。刻み隆帯による描画はなくⅠ期第125図２に様相が近いが、貼付紋が施されていることからⅡ期とした。15は双頭の波状口縁を呈し、紋様帯内は撚糸側面圧痕による渦巻紋、円形刺突を被せた貼付紋、刺切紋を施す。胴部縄紋はループ紋が施される。15も刻み隆帯による描画はないが、貼付紋が施されることから14同様にⅡ期とした。16は波頂部下に刻み隆帯によるワラビ手紋を施し、撚糸側面圧痕、円形刺突を施す。波底部下の１箇所に撚糸側面圧痕によるワラビ手紋を施しており（第47図参照）、Ⅰ期の伝統を残しつつ刻み隆帯を新たに取り込んだという見方ができるだろう。胴部縄紋はループ紋を施紋している。




(s=1/10)

1，2　前橋市（旧大胡町）堀越中道遺跡　　3　渋川市（旧北橘村）芝山遺跡　　4，5　渋川市（旧赤城村）見立塚遺跡
6　前橋市（旧大胡町）横沢新屋敷遺跡　　7　渋川市（旧赤城村）勝保沢中ノ山遺跡　　8，9　渋川市（旧赤城村）
諏訪西遺跡　　10　渋川市平田南原遺跡　　11,12　渋川市（旧赤城村）見立十三塚遺跡

第125図　赤城山西・南麓における前期前葉土器群




(13 ～ 17,23 s=1/8、18 ～ 22,24 s=1/6)

13,15,22,23　３号住居　　14　５号住居　　16,17,19,24　２号住居　　18,21　１区遺構外　　20　３区遺構外

第126図　本遺跡出土の前期前葉土器群（第125図に対応）

胴部縄紋は異なるものの第125図４，６に共通するであろう。17は双頭の波状口縁を呈し、３帯の紋様帯をもつ。刻み隆帯によるモチーフ、撚糸側面圧痕によるモチーフ、円形刺突、貼付紋、刺切紋を施す。胴部縄紋はループ紋を施す。18は完全に撚糸側面圧痕が消滅し、刻み隆帯と貼付紋のみによる構成となる。胴部縄紋はループ紋である。

Ⅲ期は19～21が相当し、本遺跡からの出土は少ない。それぞれ１本書きの梯子状沈線によるモチーフと貼付紋を施す。21の胴部縄紋はループ紋となる。

Ⅳ期は22～24が相当する。22は平行梯子状沈線、貼付紋、刺切紋を施す。23は平行梯子状沈線による菱形モチーフを施し、胴部縄紋は異間隔縄紋を施す。24は内削ぎ状の口唇部形状を呈す。平行沈線によるワラビ手紋などのモチーフを施し、胴部はループ紋を施す。

以上、各遺跡における出土状況を確認しながら谷藤氏による段階的変遷のトレース作業を行い、合わせて本遺跡出土土器の様相を簡単にまとめてみた。本遺跡ではⅠ期～Ⅳ期にわたる土器の出土が見られたが、Ⅱ期を主体とした様相を示す。住居についていえば、埋甕として16が検出された２号住居がⅡ期として位置付けられよう。それ以外は良好な出土状態にある住居が少ないため確実な時期判断は難しいが、概ねⅡ期を主体とした集落と考えてよいと思われる。Ⅱ期のまとまった資料として、本遺跡資料が新たに加わった意義は大きいといえるだろう。

参考文献
原　雅信　「群馬県における縄文時代前期の住居形態について」「研究紀要８」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991
黒坂禎二　「二ツ木・関山式土器の変容と継分史」「第19回　縄文セミナー　前期前葉の再検討」縄文セミナーの会　2006
谷藤保彦　「二ツ木式土器」「群馬の考古学一創立十周年記念論集一」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
谷藤保彦　「群馬県における二ツ木式土器」「地域考古学の展開一村田文夫先生還暦記念論文集一」　2002
谷藤保彦　「二ツ木式から関山式への土器文様の変遷と異系統土器」「第19回　縄文セミナー　前期前葉の再検討」縄文セミナーの会　2006
『市之関遺跡』宮城村教育委員会　1954
『八幡林古墳群及び縄文住居跡調査概報』赤城村教育委員会　1981
『中畦遺跡　諏訪西遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986
『糸井宮前遺跡Ⅱ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986
『三原田城遺跡　八崎遺跡・八崎塚　上青梨子古墳』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1987
『子持村誌　上巻』子持村誌編さん室　1987
『芳賀東部団地遺跡群Ⅲ』前橋市教育委員会　1990
『黒井峯遺跡』子持村教育委員会　1991
『五目牛南組遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992
『沼田西部地区遺跡群Ⅱ　赤坂遺跡　菅戸田遺跡』沼田市教育委員会　1992
『芝山遺跡』北橋村教育委員会　1993
『半田南原遺跡』渋川市教育委員会　1994
『堀越芝山遺跡』大胡町教育委員会　1996
『堀越中道遺跡』大胡町教育委員会　1997
『横沢新屋敷遺跡』大胡町教育委員会　1997
『八城三本杉東遺跡　行田大道北遺跡』松井田町教育委員会　1997
『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998
『鞍田遺跡群　上原・三角遺跡　真壁諏訪遺跡』北橋村教育委員会　1999
『暮坪遺跡』長野原町教育委員会　2001
『見立峯遺跡Ⅱ・滝沢日向堀遺跡』赤城村教育委員会　2003
『三原田諏訪上遺跡Ⅰ』赤城村教育委員会　2004
『柏倉芳見沢遺跡　柏倉落合遺跡』前橋市教育委員会　2005
『上ノ台遺跡』群馬県教育委員会　2005
『見立十三塚遺跡Ⅰ・Ⅱ』赤城村教育委員会　2005
『市之関前田遺跡Ⅱ』前橋市教育委員会　2006
『吹屋伊勢森遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006
『吹屋遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007
『白井十二遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008
『白井北中道Ⅲ遺跡(1)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2009

# 遺物観察表

## 2面出土遺物

| 遺物番号 | 器　種 | 出土遺構名 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残　存 | 胎　土 | 焼　成 | 色　調 | 成整形の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第35図1<br>PL.25 | 上師器<br>甕 | 4区2面 | Ds-46 | | 口縁部破片 | 砂粒 | ふつう | 明赤褐 | | 細片 |
| 第40図1<br>PL.25 | 弥生土<br>器壺 | 1区Ⅴ層 | Dr-129 | | 破片 | 細砂粒 | 良好 | にぶい黄褐 | 頸部下端に廉状文、肩部に波状文を巡らす。 | |
| 第40図2<br>PL.25 | 弥生土<br>器小壺 | 1区Ⅶ層 | 462 | | 破片 | 細砂粒 | 良好 | 褐 | 胴部下半に横位の刷毛を残し、上半及び内面縦位の磨きを施す。 | |
| 第40図3<br>PL.25 | 上師器<br>坏 | 5区Ⅳ層 | Eh-157 | 12.9<br>～<br>5.8 | 2/3 | 精良 | 良好 | にぶい黄褐 | ロクロ成形。底部回転篦削り（左回転）。口唇内面がシャープに傾斜し、沈線が巡る。外稜部上に沈線状の調整を加える。 | |
| 第40図4<br>PL.25 | 上師器<br>坏 | 3区Ⅳ層 | Ea-141 | | | 砂粒 | 良好 | 明赤褐 | 内湾口縁の丸底の坏で、内面に斜放射状の篦磨きを施す。 | |
| 第40図5<br>PL.25 | 上師器<br>甕 | 4区Ⅴ層 | Ea-151 | 12.6 | | 細砂粒 | 不良 | 赤褐 | 頸部と口縁部の境に弱い稜を有し、口縁部は受け口状に直立する。外面整形不明。内面横位撫で。 | |

## 4面出土遺物

## 3区　2号住居出土土器

| 遺物番号 | 器　種 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残　存 | 胎　土 | 焼　成 | 色　調 | 器形・文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第47図1<br>PL.25 | 深鉢 | 埋甕2 | 33.3<br>～<br>(29.3) | 底部欠<br>4/5 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい赤褐 | 4単位波状口縁。0段多条縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第47図2<br>PL.25 | 深鉢 | 埋甕1 | 25.0<br>～<br>(23.0) | 底部欠<br>4/5 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい橙 | 4単位波状口縁。3条の刻み隆帯をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は波頂部下に刻み隆帯によるワラビ手紋を施すが、1箇所のみ対向させている。また波底部の1箇所のみ、燃糸側面圧痕によるワラビ手紋を施す。間隙には燃糸側面圧痕を横位多段に充填施紋し、円形刺突を施す。紋様帯下は等間隔幅狭のループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第49図3<br>PL.25 | 深鉢 | 2,3,20,<br>29,38,<br>73,<br>Ea139 | | 口縁～<br>胴部破<br>片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | にぶい褐 | 双頭の波状口縁。幅広の口縁部紋様帯の下にさらに2帯の幅狭の紋様帯をもつ3帯構成となる。刻み隆帯により紋様帯を区画。口縁部紋様帯は波頭部下に刻み隆帯による対向するワラビ手紋を描き、波底部下に燃糸側面圧痕によるワラビ手紋を描く構成になると思われる。円形刺突、刺切紋を施す。2帯目は刻み隆帯によるワラビ手紋、円形刺突を施し、3帯目は刻み隆帯による鋸歯状紋、円形刺突を施す。区画紋の隆帯をつなぐように貼付紋を貼付する。紋様帯下はループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第49図4<br>PL.25 | 深鉢 | 埋没土 | | 胴部破<br>片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 紋様帯下端の部位か、燃糸側面圧痕を3条めぐらす。紋様帯下は結節縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第49図5<br>PL.25 | 深鉢 | 87 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 明黄褐 | 波状口縁。口縁下に4条の刻み隆帯を施す。 | 前期前葉 |
| 第49図6<br>PL.25 | 深鉢 | 78 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。口縁下に2条の刻み隆帯。紋様帯内は燃糸側面圧痕によるワラビ手紋、円形刺突、刺切紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第49図7<br>PL.25 | 深鉢 | 101 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。扁平な刻み隆帯を口縁に沿わせ、さらに波頂部下に3条横位に施すが、最下段の隆帯の上下には沈線を沿わせている。隆帯下は0段多条の縄紋施紋。ループ縄紋か。 | 前期前葉 |
| 第49図8<br>PL.25 | 深鉢 | 51 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。口縁下に2条の刻み隆帯。波頂部下に弧状の刻み隆帯を2条貼付してレンズ状区画をつくり、内部に円形刺突を施す。 | 前期前葉 |
| 第49図9<br>PL.25 | 深鉢 | 123 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。口縁下に2条の刻み隆帯。波頂部下には縦位や菱形状、ワラビ手状を構成する刻み隆帯、貼付紋を施す。紋様帯内は燃糸側面圧痕による弧状モチーフ、円形刺突、刺切紋を施す。 | 前期前葉 |

| 遺物番号 | 器　種 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残　存 | 胎　土 | 焼　成 | 色　調 | 器形・文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第49図10<br>PL.25 | 深鉢 | 127 | | 胴部破片 | | | | No.9と同一個体と思われる。３条の刻み隆帯をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は燃糸側面圧痕による ワラビ手状モチーフ、円形刺突、刺切紋を施す。区画紋上位に１条の燃糸側面圧痕を沿わせる。紋様帯下は９段多条縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第49図11<br>PL.25 | 深鉢 | 埋没上 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 細めの刻み隆帯を用い、二重の同心円紋や横位多段に施す。円形刺突、貼付紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第49図12<br>PL.25 | 深鉢 | 104 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 口縁部紋様帯下端の部位。刻み隆帯を３条めぐらす。紋様帯下は９段多条縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第50図13<br>PL.25 | 深鉢 | 48 | | 胴部破片 | 粗砂、石英、繊維 | ふつう | 橙 | 胴部縄紋帯に挟まれた紋様帯の部位。刻み隆帯により菱形モチーフを描き、貼付紋を貼付する。間隔に刺切紋を施す。器壁1.5cmと厚手。 | 前期前葉 |
| 第50図14<br>PL.26 | 深鉢 | 119 | | 胴部破片 | | | | No.13と同一個体で、同一部位と思われる。刻み隆帯による同心円紋を施す。13のモチーフと横につながるのだろう。紋様帯の上下は幅狭のループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第50図15<br>PL.25 | 深鉢 | 埋没上 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい橙 | 口縁下に２条の刻み隆帯。紋様帯内は１本書き波線による モチーフ、刺切紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第50図16<br>PL.26 | 深鉢 | 埋没上 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 波状口縁。１本書きの梯子状沈線による構成。２条をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は菱形状のモチーフを描き、円形刺突、貼付紋を施す。間隔に刺切紋を充填施紋。紋様帯下は縄紋を施紋するが、残存が少なく判然としない。ループ縄紋か。 | 前期前葉 |
| 第50図17<br>PL.26 | 深鉢 | 46 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | 良好 | 橙 | 波状口縁。１本書きの梯子状沈線による構成。貼付紋を貼付。 | 前期前葉 |
| 第50図18<br>PL.26 | 深鉢 | 117 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい橙 | 双頭の波状口縁。１本書き沈線により２条１単位として モチーフを描き、貼付紋を貼付。口縁部紋様帯を両す区画紋は見られない。紋様帯下はループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第50図19<br>PL.26 | 深鉢 | 116 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁で口唇部内側ぎ。半截竹管による平行沈線をめぐらせて幅狭な口縁部紋様帯を区画。口縁に沿わせて平行沈線を施し、貼付紋を貼付。紋様帯下は幅狭なループ縄紋を施紋。内面研磨。 | 前期前葉 |
| 第50図20<br>PL.26 | 深鉢 | 114 | | 口縁部破片 | 粗砂、石英、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁で、口唇部内側ぎ。半截竹管による平行沈線をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は平行沈線によりワラビ手紋、逆Ｖ字紋を描き、円形刺突、貼付紋を施す。紋様帯下は等間隔幅狭なループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第50図21<br>PL.26 | 深鉢 | 26,106 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 半截竹管を用いた梯子状沈線による構成。３条をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は弧状モチーフを描き、円形刺突、貼付紋を施す。紋様帯下は幅狭のループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第50図22<br>PL.26 | 深鉢 | 27 | | 胴部破片 | | | | No.21と同一個体。半截竹管を用いた梯子状沈線によりワラビ手状紋、弧状モチーフを描く。円形刺突、貼付紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第50図23<br>PL.26 | 深鉢 | 13 | | 口縁部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁で、口唇部内側ぎ。半截竹管による平行沈線をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は平行沈線によりワラビ手紋を描く。紋様帯下は幅狭なループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第50図24<br>PL.26 | 深鉢 | 埋没上 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 赤褐 | 双頭の波状口縁で、緩く内湾する。半截竹管による平行沈線で菱形状モチーフを描き、円形刺突、貼付紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第50図25<br>PL.26 | 深鉢 | 埋没上 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 明黄褐 | ループ縄紋帯間にコンパス紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第50図26<br>PL.26 | 深鉢 | 89 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい橙 | 口縁下から半截竹管による平行沈線を横位多段に施す。 | 黒浜式 |
| 第50図27<br>PL.26 | 深鉢 | 126 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 口縁下に２条のＣ字状爪形紋をめぐらせ、以下、０段多条の羽状縄紋を施紋。 | 黒浜式 |
| 第50図28<br>PL.26 | 深鉢 | 21 | | 口縁部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。口縁に沿ってＣ字状刺突を２条施し、以下、０段多条の結束羽状縄紋を施紋。補修孔あり。 | 前期前葉 |
| 第50図29<br>PL.26 | 深鉢 | 埋没上 | | 口縁部破片 | 粗砂、石英、繊維 | ふつう | 橙 | 口唇部内側ぎ。０段多条縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第50図30<br>PL.26 | 深鉢 | 17 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 単節ＲＬ、ＬＲ縄紋による菱形構成。内面研磨。 | 前期前葉 |

| 遺物番号 | 器種 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 器形・文様の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第50図31<br>PL.26 | 深鉢 | 113 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 黒褐 | 0段多条の結束羽状縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第50図32<br>PL.26 | 深鉢 | 71 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。結節縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第50図33<br>PL.26 | 深鉢 | 49 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい橙 | 0段多条R L、L R縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第50図34<br>PL.26 | 深鉢 | 125 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 結節縄紋帯間に紋様帯を挟み、繊細な爪形列突を不規則に施す。 | 前期前葉 |
| 第51図35<br>PL.26 | 深鉢 | 14 | | 口縁部破片 | 粗砂、石英、繊維 | ふつう | 橙 | 口縁下から幅狭なループ縄紋を横位多段に施紋するが、胴部中位に紋様帯を挟み、ループ縄紋により逆V字状モチーフを描いている。器壁1.5cmと厚手。 | 前期前葉 |
| 第51図36<br>PL.26 | 深鉢 | 34、埋没土 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい赤褐 | 幅狭なループ縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第51図37<br>PL.26 | 深鉢 | 7 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 明黄褐 | 幅狭なループ縄紋帯間に無紋帯を挟む。 | 前期前葉 |
| 第51図38<br>PL.26 | 深鉢 | 78、埋没土 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 赤褐 | 幅狭なループ縄紋を施紋。内面棒状工具による凝位のなで。 | 前期前葉 |
| 第51図39<br>PL.26 | 深鉢 | 68,70 | | 底部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 底径7.5cm。上げ底。0段多条縄紋を施す。底面にも施紋。 | 前期前葉 |
| 第51図40<br>PL.26 | 深鉢 | 124 | –<br>8.8<br>– | 底部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 明赤褐 | やや上げ底。結節縄紋を施す。底面は無紋。 | 前期前葉 |
| 第51図41<br>PL.26 | 深鉢 | 42 | | 底部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 上げ底。底面にループ縄紋を施す。 | 前期前葉 |

### 3区　2号住居出土石器

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 取上番号 | 残存 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) | 石材 | 特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第51図-42<br>PL.27 | 石鏃 | 平基無茎 | 96 | 完形 | 2.1 | 0.9 | 0.4 | 黒曜 | 加工は粗く、素材の変形度は少ない。完成状態。 | 分析No.1 |
| 第51図-43<br>PL.27 | 石鏃 | 凹基無茎 | 61 | 先端欠 | 1.7 | 1.2 | 0.4 | 黒曜 | 周辺加工。加工途中に右側縁を破損。未製品。 | 分析No.3 |
| 第51図-44<br>PL.27 | 石鏃 | 凹基無茎 | 16Pit | 先端欠 | 2.2 | 1.6 | 0.9 | 黒曜 | 調査時に先端部を破損。完成状態。 | 分析No.2 |
| 第51図-45<br>PL.27 | 石鏃 | 凹基無茎 | 58 | 完形 | 1.6 | 1.6 | 0.5 | 珪頁 | 左側縁上半に素材剥離面を大きく残す。完成状態。 | |
| 第51図-46<br>PL.27 | 石匙 | 横型 | | 完形 | 4.1 | 6.2 | 23.0 | 黒頁 | 石器下端に刃部を作出。刃部角は厚い。 | |
| 第51図-47<br>PL.27 | 礫器 | | 65 | 完形 | | | 938.9 | 変玄 | 楕円形状を呈する礫の小口部分に刃部を作出。 | |
| 第51図-48<br>PL.27 | 削器 | | 93 | 完形 | 7.0 | 9.9 | 155.1 | 黒頁 | 幅広剥片の端部に直刃状刃部を作出。 | |
| 第51図-49<br>PL.27 | 削器 | | 57 | 両端欠 | 6.7 | 5.1 | 44.8 | 黒頁 | 右側縁に弧状刃部を作出、左辺の加工は形状修正。 | |
| 第51図-50<br>PL.27 | 凹石 | | 92 | 完形 | 9.5 | 6.7 | 369.8 | 粗安 | 背面にアバタ状の打痕、右側縁に赤色顔料が付着。 | |
| 第52図-51<br>PL.27 | 磨石 | 楕円礫 | 67 | 完形 | 17.0 | 11.4 | 1993.6 | ひん | 表裏面・側縁に打痕、磨耗痕。サイズ的には台石？ | |
| 第52図-52<br>PL.27 | 磨石 | | P1 | 完形 | 15.5 | 8.6 | 1023.0 | 粗安 | 表裏面・側縁に打痕、磨耗痕。側縁の使用顕著。 | |
| 第52図-53<br>PL.27 | 凹石 | 楕円礫 | 64 | 完形 | 10.3 | 9.3 | 453.7 | 粗安 | 背面中央・右側面にアバタ状の集合打痕。被熱破損。 | |
| 第52図-54<br>PL.27 | 凹石 | | 72 | 完形 | 13.6 | 7.3 | 566.0 | 粗安 | アバタ状の打痕1、ロート状の凹穴1。被熱。 | |
| 第52図-55<br>PL.27 | 石皿 | 有縁 | 73 | 完形 | 34.4 | 28.0 | 9250.0 | 粗安 | 使用面は深く、セットになる磨石は円礫？猛出口あり。 | 10号土坑出土と接合。 |

## 3区　3号住居出土土器

| 遺物番号 | 器　種 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残　存 | 胎　土 | 焼　成 | 色　調 | 器形・文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第55図1<br>PL.27 | 深鉢 | 43,45,<br>70,78,<br>埋没土、<br>Dt141 | 32.0 | 口縁～<br>胴部破<br>片 | 粗砂、繊<br>維 | ふつう | 橙 | 波状口縁で口縁が緩く外反する。２条の刻み隆帯をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。刻みは縦位、斜位、矢羽根状に施される。紋様帯内は燃糸側面圧痕によるワラビ手紋や弧状モチーフ、円形刺突を施す。波頂部下に弧状の刻み隆帯が施される。紋様帯下は結節縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第55図2<br>PL.28 | 深鉢 | 56 | 34.6 | 口縁～<br>胴部破<br>片 | 粗砂、繊<br>維 | ふつう | 橙 | 双頂の波状口縁。２条の刻み隆帯をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は燃糸側面圧痕による渦巻紋を配し、中心に貼付紋を施す。間隙は刺切紋を縦横に充填施紋。貼付紋を被せるように円形刺突を施す。双頂の波頂部下には対の縦長貼付紋を貼付。紋様帯下は等間隔幅狭のループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第55図3<br>PL.27 | 深鉢 | 埋没土 | | 胴部破<br>片 | 粗砂、繊<br>維 | ふつう | 黒褐 | 燃糸側面圧痕を斜格子目状に施す。補修孔あり。 | 前期前葉 |
| 第55図4<br>PL.27 | 深鉢 | 81、埋没<br>土 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、繊<br>維 | ふつう | 橙 | 口縁下に２条の刻み隆帯。紋様帯内は燃糸側面圧痕によるワラビ手紋、円形刺突、刺切紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第55図5<br>PL.28 | 深鉢 | 86 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、繊<br>維 | 良好 | 明赤褐 | 平裁竹管による平行沈線でモチーフを描く構成で、１条めぐらせて幅狭な口縁部紋様帯を区画、紋様帯内は鋸歯状紋、貼付紋を施す。平行沈線のそれぞれの沈線に刻みを沿わせるが、一部沿わせない部分もある。紋様帯下は幅狭なループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第55図6<br>PL.28 | 深鉢 | 7 | | 口縁部<br>破片 | | | | №５と同一個体。 | 前期前葉 |
| 第55図7<br>PL.28 | 深鉢 | 83、<br>Ea142 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、石<br>英、繊<br>維 | ふつう | 橙 | 口唇部内側ぎ。平裁竹管による集合沈線をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は平行沈線、集合沈線による月紋や菱形状など幾何学モチーフを描き、貼付紋を施す。紋様帯下は０段多条の結束羽状縄紋で菱形を構成。さらにその下に集合沈線をめぐらせて貼付紋を貼付する。 | 前期前葉 |
| 第55図8<br>PL.28 | 深鉢 | 30、46、<br>50、66、<br>Ea141 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、細<br>礫、繊<br>維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。平裁竹管を用いた梯子状沈線により鋸歯状ないし菱形状モチーフを描き、貼付紋を施す。間隙に刺切紋。口縁部紋様帯を両す区画紋は見られない。紋様帯下は幅狭なループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第55図9<br>PL.28 | 深鉢 | 51～55、<br>58.59、<br>埋没土 | | 胴部破<br>片 | 粗砂、繊<br>維 | ふつう | 橙 | 平裁竹管を用いた梯子状沈線による構成。１条をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は横位、上下に連なる菱形モチーフを描く。紋様帯下は０段多条縄紋による幅広の菱形構成とし、その下は幅狭のループ縄紋を多段に施す。 | 前期前葉 |
| 第56図10<br>PL.28 | 深鉢 | 65 | | 胴部破<br>片 | 粗砂、繊<br>維 | ふつう | にぶい黄<br>橙 | Ｃ字状爪形紋を鋸歯状ないし菱形状に施し、間隙にＣ字状刺突を対向させた円形刺突を施す。以下は０段多条の羽状縄紋を施すが、口縁部紋様帯を両す区画紋は見られない。補修孔あり。 | 前期前葉 |
| 第56図11<br>PL.28 | 深鉢 | 埋没土 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、繊<br>維 | ふつう | にぶい黄<br>橙 | 波状口縁で緩く内湾する器形。単節ＲＬ縄紋を地紋とし、Ｃ字状爪形紋により菱形状モチーフを描く。 | 黒浜式 |
| 第56図12<br>PL.28 | 深鉢 | 34？ | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、石<br>英、繊<br>維 | ふつう | にぶい黄<br>橙 | 波状口縁。原体が判然としないが附加条縄紋か。 | 前期前葉 |
| 第56図13<br>PL.28 | 深鉢 | 5、8９、<br>Ea142 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂、繊<br>維 | ふつう | にぶい橙 | 口縁が緩く外反する器形。綱代状の附加条縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第56図14<br>PL.28 | 深鉢 | 3,13、埋<br>没土 | | 胴部破<br>片 | | | | №13と同一個体。 | 前期前葉 |
| 第56図15<br>PL.28 | 深鉢 | 埋没土 | | 胴部破<br>片 | 粗砂、石<br>英、繊<br>維 | ふつう | 橙 | ０段多条ＲＬ、ＬＲ縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第56図16<br>PL.28 | 深鉢 | 96 | 12.0 | 底部破<br>片 | 粗砂、繊<br>維 | ふつう | 橙 | 上げ底。幅狭なループ縄紋を施紋する。底面にも施紋。 | 前期前葉 |
| 第56図17<br>PL.28 | 深鉢 | 50、埋没<br>土 | 6.8 | 底部破<br>片 | 粗砂、繊<br>維 | ふつう | にぶい橙 | 上げ底。ループ縄紋？を施紋。 | 前期前葉 |

### 3区　3号住居出土石器

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 取上番号 | 残存 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 重量 (g) | 石材 | 特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第56図-18 PL.28 | 石鏃 | 不明 | | 先端欠 | 2.2 | 1.2 | 1.1 | 黒曜 | 加工状態は粗く、右側縁を破損。未製品。 | 分析No.7 |
| 第56図-19 PL.28 | 石鏃 | 凹基無茎 | | 先端欠 | 1.6 | 1.6 | 0.7 | 黒曜 | 先端部を破損。加工状態からみて石器は完成状態。 | 分析No.5 |
| 第56図-20 PL.28 | 石鏃 | 凹基無茎 | | 両端欠 | 1.4 | 1.5 | 0.5 | 黒曜 | 加工状態は粗く、返し部を破損。未製品。 | 分析No.8 |
| 第56図-21 PL.28 | 石鏃 | 凹基無茎 | | 両端欠 | 1.5 | 1.1 | 0.4 | 黒曜 | 返し部の破片。状況的に遺跡内製作の可能性が大。 | 分析No.6 |
| 第56図-22 PL.28 | 打斧 | 短冊形 | | 1/2 | 5.4 | 5.2 | 50.1 | 黒頁 | 側縁は開き気味。石器下半を欠損する。 | |
| 第56図-23 PL.28 | 削器 | | | 2/3 | 5.6 | 2.8 | 12.3 | 黒頁 | 左側縁に浅い角度の刃部。基部加工でバルブ除去。 | |
| 第56図-24 PL.28 | 台石 | 楕円偏平 | 103 | 完形 | 21.3 | 16.9 | 2850.6 | 粗安 | 背面側に磨耗面、中央の凹部は廃棄後の剥落。 | |
| 第56図-25 PL.29 | 石鏃 | 凹基無茎 | 24 | 完形 | 1.9 | 1.2 | 0.6 | 黒曜 | 右側縁返し部に素材剥離面を残す。完成状態。 | |
| 第56図-26 PL.29 | 石鏃 | 凹基無茎 | 39 | 基部欠 | 2.1 | 1.5 | 0.9 | 黒曜 | 右辺・返し部を破損。未製品。 | 分析No.4 |
| 第56図-27 PL.29 | 石鏃 | 不明 | 40 | 基部欠 | 2.6 | 1.7 | 2.1 | チャ | 加工量が少なく、加工初期に破損した可能性が高い。 | |
| 第56図-28 PL.29 | 石匙 | 横型 | 75 | 3/4 | 4.1 | 6.8 | 18.9 | 黒安 | 加工状態は粗く、交互剥離により刃部を作出。 | |
| 第57図-29 PL.29 | 削器 | | 69 | 完形 | 16.0 | 10.0 | 671.5 | 黒頁 | 石核を転用、端部を粗く加工して刃部を作出。 | |
| 第57図-30 PL.29 | 削器 | | 74 | 完形 | 8.0 | 9.3 | 128.2 | 黒頁 | 剥片裏面を粗く加工して刃部を作出。加工時に破損？ | |
| 第57図-31 PL.29 | 打斧 | 撥形 | 95 | 完形 | 8.1 | 6.2 | 69.3 | 黒頁 | ハの字状に開き、刃部に最大幅。刃部角は浅い。 | |
| 第57図-32 PL.29 | 石鏃 | 不明 | | 完形 | 2.4 | 1.7 | 1.6 | 黒頁 | 加工は周辺加工に止まり、最終形状は不明。未製品。 | |
| 第57図-33 PL.29 | 磨石 | 楕円 | 49 | 完形 | 12.1 | 9.1 | 834.1 | 閃緑 | 表裏両面に磨耗痕。側縁に打痕。激しく使い込む。 | |
| 第57図-34 PL.29 | 磨石 | 楕円 | 73 | 完形 | 13.8 | 7.8 | 689.6 | ひん | 表裏両面に磨耗痕。小口部に打痕。 | |

### 3区　5号住居出土土器

| 遺物番号 | 器種 | 取上番号 | 口径(cm) 底径(cm) 器高(cm) | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 器形・文様の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第59図1 PL.29 | 深鉢 | 6,7,8,10,Eb145 | 26.0 | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 波状口縁で緩く外反する器形。２条の刻み隆帯をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は撚糸側面圧痕による上下対向するワラビ手紋、円形刺突、貼付紋を施す。紋様帯下は綱代状の附加条縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第59図2 PL.29 | 深鉢 | 36,37,38,39,88,Eb145 | 23.0 6.8 26.2 | 口縁～底部1/3 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | ４単位波状口縁。口縁部紋様帯は半截竹管内皮による刺突列と平行沈線を交互に施す。紋様帯下は９段多条複節の縄紋施紋となるが、胴部中位に刺突列を３条挟み、上位は羽状、下位は結束羽状縄紋を施す。底部上げ底。 | 前期前葉 |
| 第59図3 PL.29 | 深鉢 | 89,94 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい褐 | 直立する器形。口縁下から半截竹管による羽状の平行沈線を横位多段に施紋。口縁部には半截竹管内皮による刺突を１条めぐらせる。 | 前期前葉 |
| 第59図4 PL.29 | 深鉢 | 72～76,87,Eb145 | | 胴部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 胴部上位は半截竹管による平行沈線を羽状に施し、下位は太目の半截竹管による平行沈線で、Ｓ字状や弧状のモチーフを充填施紋する。 | 前期前葉 |
| 第59図5 PL.29 | 深鉢 | 9,67,68,Ea145,Eb145 | 26.0 | 口縁部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 明黄褐 | ほぼ直立する器形。結節縄紋を施す。 | 前期前葉 |

| 遺物番号 | 器　種 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残　存 | 胎　土 | 焼　成 | 色　調 | 器形・文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第59図6<br>PL.29 | 深鉢 | 12,15,<br>16,17,<br>20,32,<br>56,62,<br>100,<br>Ea145,<br>Eb145 | | 胴部1/3 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 0段多条RL、LR縄紋の羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第59図7<br>PL.29 | 深鉢 | 25P | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | 良好 | 橙 | 口縁下に2条の刻み隆帯。刻みは矢羽根状に施される。 | 前期前葉 |
| 第59図8<br>PL.29 | 深鉢 | 18 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい褐 | 刻み隆帯をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は撚糸側面圧痕によるワラビ手状モチーフ、円形刺突を施す。刻み隆帯間にも撚糸側面圧痕を施す。 | 前期前葉 |
| 第59図9<br>PL.29 | 深鉢 | 2 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 明褐 | 2条の刻み隆帯をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は撚糸側面圧痕によるワラビ手紋、円形刺突を施す。刻み隆帯上に貼付紋、紋様帯下は幅狭のループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第59図10<br>PL.29 | 深鉢 | 61 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 2条の刻み隆帯をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は撚糸側面圧痕、刺切紋を施す。紋様帯下は0段多条LR、RL縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第59図11<br>PL.29 | 深鉢 | 81 | | 口縁部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | 2条の刻み隆帯、刺切紋状の刺突列を口縁部に集約して幅狭な紋様帯とし、以下は胴代状の附加条縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第59図12<br>PL.29 | 深鉢 | 52 | | 口縁部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | No.11と同一個体。 | 前期前葉 |
| 第59図13<br>PL.29 | 深鉢 | 85 | | 胴部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | にぶい赤褐 | 刻みを沿わせた1条の沈線により口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は1本書きの棒子状沈線により鋸歯状ないし菱形状モチーフを描き、円形刺突を施す。紋様帯下は0段多条LR、RL縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第59図14<br>PL.30 | 深鉢 | 50？ | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 口縁下に1条の刻み隆帯を施すが、刻みは半截竹管によるC字状刺突を用いる。紋様帯内はC字状刺突により菱形状モチーフを描き、円形刺突を施す。 | 前期前葉 |
| 第60図15<br>PL.30 | 深鉢 | 63 | | 口縁部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 緩く外反する器形。0段多条RL、LR縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第60図16<br>PL.30 | 深鉢 | 110 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 0段多条RL、LRの結束羽状縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第60図17<br>PL.30 | 深鉢 | 24 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい橙 | 波状口縁で緩く外反する器形。結節縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第60図18<br>PL.30 | 深鉢 | 82 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 結節縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第60図19<br>PL.30 | 深鉢 | 22 | | 胴部破片 | 粗砂、石英、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 幅狭なループ縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第60図20<br>PL.30 | 深鉢 | 64 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい赤褐 | ループ縄紋と0段多条縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第60図21<br>PL.30 | 深鉢 | 111,<br>Ea145,<br>Eb145 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 胴代状の附加条縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第60図22<br>PL.30 | 深鉢 | 71,84 | | 胴部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | 0段多条RL、LR縄紋の羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第60図23<br>PL.30 | 深鉢 | 45,47,<br>49,77 | | 胴部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | 0段多条RL、LR縄紋の羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第60図24<br>PL.30 | 深鉢 | 34,102,<br>Eb145 | 8.0 | 底部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 0段多条RL、LR縄紋の羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第60図25<br>PL.30 | 深鉢 | 70,<br>Eb145 | 7.7 | 底部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | 上げ底。縄紋が施されているようだが、器面が荒れており、不明。 | 前期前葉 |

### 3区　5号住居出土石器

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 取上番号 | 残存 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 重量 (g) | 石材 | 特　徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第60図-26 PL.30 | 石匙 | 縦型 | 119 | 完形 | 7.5 | 4.8 | 30.7 | 珪質 | 三角形状の剥片基部を加工。抓み部を作出。 | |
| 第60図-27 PL.30 | 削器 | | 35 | 完形 | 7.8 | 4.6 | 43.7 | 黒質 | ヘラ状の石器形状。裏面側を加工。弧状刃部を作出。 | |
| 第60図-28 PL.30 | 磨石 | 楕円 | 121 | 完形 | 12.5 | 9.2 | 994.3 | 粗安 | 表裏両面に磨耗痕、側面に打痕あり。 | |
| 第60図-29 PL.30 | 凹石 | 楕円 | 115 | 完形 | 10.7 | 7.3 | 477.7 | 粗安 | 表裏両面・側面に打痕・磨耗痕。 | |
| 第61図-30 PL.30 | 凹石 | 楕円 | | 完形 | 11.3 | 7.8 | 655.4 | 粗安 | 表裏両面に打痕・磨耗痕、側面に顕著な磨耗。 | |
| 第61図-31 PL.30 | 磨石 | 楕円 | 114 | 完形 | 9.5 | 7.3 | 462.9 | 粗安 | 表裏両面に磨耗痕、小口部に打痕あり。 | |
| 第61図-32 PL.30 | 磨石 | 楕円 | 117 | 完形 | 15.4 | 8.9 | 921.1 | 粗安 | 表裏両面に磨耗痕、側面に打痕・磨耗痕。激しく使用。 | |
| 第61図-33 PL.30 | 磨石 | 楕円 | 122 | 完形 | 14.4 | 10.4 | 1053.3 | 粗安 | 表裏両面に磨耗痕、側面に打痕あり。 | |

### 1区　6号住居出土土器

| 遺物番号 | 器　種 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残　存 | 胎　土 | 焼　成 | 色　調 | 器形・文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第65図1 PL.31 | 深鉢 | 122,204,214,215,220,221,294,299,305,1区-741,873,881,Dq119 | 18.0<br>8.2<br>18.1 | 口縁～底部1/2 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい橙 | 直立する器形。上半にC字状刺突を横位多段にめぐらす。下半は0段多条LR縄紋を施すが、一部RLのループ縄紋を挟み込む。上げ底の底面には繊細な爪形刺突を充填施紋する。補修孔あり。 | 前期前葉 |
| 第65図2 PL.31 | 深鉢 | 93 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 波状口縁。口縁下に3条の刻み隆帯。紋様帯内は撚糸側面圧痕によるワラビ手紋、円形刺突を施す。間隙に角押状の刺切紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第65図3 PL.31 | 深鉢 | 286 | | 口縁部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。口縁部に2条の刻み隆帯。紋様帯内は撚糸側面圧痕、円形刺突を施す。 | 前期前葉 |
| 第65図4 PL.31 | 深鉢 | 202 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 3条の刻み隆帯により口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は刻み隆帯によるモチーフを施す。間隙に刺切紋。円形刺突を施す。紋様帯下は幅狭のループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第65図5 PL.31 | 深鉢 | 284,295,1区-80 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 3条の刻み隆帯をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は撚糸側面圧痕によるワラビ手紋、刻み隆帯による菱形状モチーフ、円形刺突、刺切紋、貼付紋を施す。紋様帯下は0段多条RL、LRによる羽状構成。内面研磨。 | 前期前葉 |
| 第65図6 PL.31 | 深鉢 | 242 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 口縁下に3条の刻み隆帯。紋様帯内はC字状爪形紋によりモチーフを描く。刺切紋、円形刺突を施す。 | 前期前葉 |
| 第65図7 PL.31 | 深鉢 | 300 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。口縁から弧状の刻み隆帯を施す。以下は1本書きの梯子状沈線による構成。刺切紋、貼付紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第65図8 PL.31 | 深鉢 | 233 | | 口縁部破片 | 粗砂、石英、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 双頭の波状口縁。1本書き沈線による構成。円形刺突を施す。 | 前期前葉 |
| 第65図9 PL.31 | 深鉢 | 303 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 1本書き沈線による構成。貼付紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第65図10 PL.31 | 深鉢 | 290,291,293、埋設土 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 3条のC字状爪形紋をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は半截竹管による平行沈線でワラビ手紋、弧状モチーフ、円形刺突を施す。紋様帯下はループ縄紋を3段施し、さらにその下にC字状爪形紋による X字状モチーフ、円形刺突を施した紋様帯を組み込む。 | 前期前葉 |
| 第65図11 PL.31 | 深鉢 | 埋設土 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 口縁の突起。地紋に0段多条RL縄紋を施し、半截竹管による平行沈線、角押刺突を施す。 | 前期前葉 |

| 遺物番号 | 器　種 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残　存 | 胎　土 | 焼　成 | 色　調 | 器形・文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第65図12<br>PL.31 | 深鉢 | 289 | 5.6 | 底 部 破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 上げ底。ループ縄紋を多段に施紋。 | 前期前葉 |
| 第65図13<br>PL.31 | 深鉢 | 317 | | 口 縁 部 破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 明黄褐 | 口縁下から単沈線による斜格子目紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第65図14<br>PL.31 | 深鉢 | 241 | | 胴 部 破片 | 粗砂、細礫、繊維 | 良好 | 橙 | 太目の刻み隆帯を２条横位にめぐらす。隆帯下に縄紋を施すが、原体は判然としない。ループ縄紋か。 | 前期前葉 |
| 第65図15<br>PL.31 | 深鉢 | 81,192 | | 口 縁 部 破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 波状口縁で緩く内湾する器形。波頂部下に円孔を穿つ。C字状爪形紋による菱形状構成。地紋にＬＲ縄紋を施紋。 | 黒浜式 |

## １区　６号住居出土石器

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 取上番号 | 残存 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) | 石材 | 特　徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第65図-16<br>PL.31 | 石鏃 | 平基無茎 | 235 | 完形 | 2.4 | 1.3 | 1.4 | 珪頁 | 素材剥離面を大きく残す。遺跡内製作。 | |
| 第65図-17<br>PL.31 | 石鏃 | 平基無茎 | | 完形 | 2.9 | 2.1 | 4.3 | 黒頁 | 加工は粗く、未加工部分が多い。未製品。 | |
| 第65図-18<br>PL.31 | 石鏃 | 平基無茎 | | 完形 | 2.8 | 2.6 | 4.8 | チャ | 加工は粗く、断面は厚い。未製品。 | |
| 第65図-19<br>PL.31 | 石鏃 | 凹基無茎 | 22 | 完形 | 1.8 | 1.4 | 0.5 | チャ | 薄身、左右対称の石器形状。完成状態。 | |
| 第65図-20<br>PL.31 | 石匙 | 横型 | 325 | 完形 | 5.9 | 10.2 | 60.8 | 黒頁 | 剥片端部に浅い角度の刃部作出。加工量は少ない。 | |
| 第65図-21<br>PL.31 | 削器 | | 94 | 1/2 | 3.6 | 3.6 | 9.5 | 黒頁 | 幅広剥片の端部に粗い刃部を作出。加工時に破損？ | |
| 第65図-22<br>PL.31 | 楔形 | | | 完形 | 4.4 | 4.7 | 37.4 | 黒頁 | 表裏両面とも上下に対向する剥離面。 | |
| 第66図-23<br>PL.31 | 打斧 | 短冊形 | 38 | 完形 | 14.6 | 5.6 | 231.1 | 粗安 | 左側縁に捲縛痕。刃部中央から右側縁は再生加工。 | |
| 第66図-24<br>PL.31 | 打斧 | 短冊形 | 145 | 完形 | 12.5 | 5.7 | 182.8 | 黒頁 | 刃部に磨耗痕。鉢状の石器形状は再生の影響？ | |
| 第66図-25<br>PL.31 | 打斧 | 短冊形 | 70 | 完形 | 12.0 | 4.7 | 160.1 | 黒頁 | | |
| 第66図-26<br>PL.31 | 削器 | | 249 | 2/3 | 9.1 | 5.4 | 58.0 | 黒頁 | 右側縁裏面側を連続剥離して刃部を作出。 | |
| 第66図-27<br>PL.31 | 打斧 | 短冊形 | 54 | 完形 | 10.5 | 4.7 | 128.5 | 黒頁 | 背面側刃部に磨耗痕。再生時に刃部裏面を破損。 | |
| 第66図-28<br>PL.31 | 石核 | | 58 | | 3.4 | 5.0 | 27.3 | 黒曜 | 板状剥片素材。小形幅広剥片数枚を剥離。 | 分析No.9 |
| 第66図-29<br>PL.31 | 敲石 | 棒状 | 338 | 完形 | 18.3 | 7.2 | 741.7 | 閃緑 | 上下両端の小口部に打痕。 | |
| 第66図-30<br>PL.32 | 凹石 | 楕円 | 193 | 完形 | 10.7 | 6.9 | 411.2 | 粗安 | 背面側にロート状の凹部３、間を埋める集合打痕。 | |
| 第66図-31<br>PL.32 | 磨石 | 楕円 | 333 | 完形 | 15.0 | 9.6 | 1087.8 | 閃緑 | 表裏両面とも磨耗。側縁・小口部に打痕。 | |
| 第66図-32<br>PL.32 | 凹石 | 楕円 | 153 | 完形 | 12.4 | 6.5 | 218.4 | 粗安 | 背面側中央よりやや上端側に集合打痕。被熱破損。 | |
| 第67図-33<br>PL.32 | 磨石 | 楕円 | 334 | 完形 | 11.9 | 10.7 | 1113.3 | 粗安 | 背面側の平坦な礫面に磨耗痕・打痕。 | |

## １区　７号住居出土土器

| 遺物番号 | 器　種 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残　存 | 胎　土 | 焼　成 | 色　調 | 器形・文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第72図１<br>PL.32 | 深鉢 | 151 | 23.2<br>-<br>(21.5) | ほ ぼ 完形 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 平縁で直立する器形。口縁部に隆帯を１条めぐらせ、小突起として口縁上に４単位で張り出す。隆帯下は結節縄紋を施紋。 | 前期前葉 |

| 遺物番号 | 器種 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 器形・文様の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第72図2<br>PL.32 | 深鉢 | 66 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 3条の刻み隆帯により口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は燃糸側面圧痕、円形刺突を施す。紋様帯下は0段多条R L、LRによる羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第72図3<br>PL.32 | 深鉢 | 26 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい赤褐 | 口縁下から刻み隆帯を5条めぐらせ、貼付紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第72図4<br>PL.32 | 深鉢 | 1 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 4条の刻み隆帯により紋様帯を区画。紋様帯内は刻み隆帯によるモチーフ、円形刺突を施す。紋様帯下はループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第72図5<br>PL.32 | 深鉢 | 65,77、<br>Dr132 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | 良好 | 橙 | 刻みを沿わせた1本書き沈線による構成。貼付紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第72図6<br>PL.32 | 深鉢 | 埋没上 | | 胴部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | にぶい橙 | 1本書きの梯子状沈線による構成。円形刺突、貼付紋を施す。紋様帯下はループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第72図7<br>PL.32 | 深鉢 | 12 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 刻みを沿わせた1本書き沈線による構成。貼付紋、間隙に刺切紋を施す。紋様帯下はループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第73図8<br>PL.32 | 深鉢 | 10,43 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 双頭の小突起を付す。半截竹管による平行沈線をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。平行沈線により同心円紋を中心としたX字状モチーフを描く。円形刺突、貼付紋を施す。紋様帯下は等間隔幅狭のループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第73図9<br>PL.32 | 深鉢 | 埋没上 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | | 明黄褐 | №8と同一個体。 | |
| 第73図10<br>PL.32 | 深鉢 | 88 | | 口縁部破片 | 粗砂、石英、繊維 | ふつう | にぶい橙 | 波状口縁で外反する器形。C字状爪形紋による紋様構成で弧状、横V字状モチーフを描く。間隙に円形刺突を施す。 | 前期前葉 |
| 第73図11<br>PL.32 | 深鉢 | 41 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | ループ紋の縄紋帯間にコンパス紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第73図12<br>PL.32 | 深鉢 | 70 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 幅狭のループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第73図13<br>PL.32 | 深鉢 | 81 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 波状口縁で複合口縁。結節縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第73図14<br>PL.32 | 深鉢 | 63,79 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 胴代状の附加条縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第73図15<br>PL.32 | 深鉢 | 11 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | ループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第73図16<br>PL.32 | 深鉢 | 48 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい赤褐 | 幅狭のループ縄紋を施紋。縄紋帯間に半截竹管による鋸歯状紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第73図17<br>PL.32 | 深鉢 | 73、埋没上 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 足長のループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第73図18<br>PL.32 | 深鉢 | 62 | | 底部破片 | 粗砂、石英、繊維 | ふつう | 橙 | 幅狭のループ縄紋を施紋。底面にも縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第73図19<br>PL.32 | 深鉢 | 39 | 9.3 | 底部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 上げ底。0段多条R L、LRによる羽状構成。底面にも縄紋施紋。内外面および欠け口に赤色塗彩。顔料容器として利用か。 | 前期前葉 |

## 1区　7号住居出土石器

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 取上番号 | 残存 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) | 石材 | 特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第73図-20<br>PL.32 | 石鏃 | 凹基無茎 | 床下 | 3/4 | 1.6 | 1.2 | 0.4 | 黒曜 | | 分析No.10 |
| 第73図-21<br>PL.32 | 石匙 | 横型 | 93 | 完形 | 4.0 | 5.7 | 22.3 | 珪頁 | 剥片の打面側に摘み部。端部を加工して刃部を作出。 | |
| 第73図-22<br>PL.32 | 削器 | | 14・15 | 2/3 | 6.3 | 8.0 | 104.8 | 黒安 | 幅広剥片端部に刃部を作出。右辺は調査時の破損。 | |
| 第73図-23<br>PL.33 | 打斧 | 撥形 | 113 | 完形 | 7.4 | 5.1 | 72.7 | 黒頁 | 刃部に最大幅。石器に磨耗は見られない。未使用？ | |
| 第73図-24<br>PL.32 | 石核 | | 135 | | 2.3 | 3.2 | 7.1 | 黒曜 | 板状石核の側縁で幅広剥片を剥離。 | 分析No.11 |
| 第74図-25<br>PL.33 | 打斧 | 撥形 | | 完形 | 8.1 | 5.1 | 65.4 | 黒頁 | 刃部に最大幅。右側縁のみ加工。未使用？ | |
| 第74図-26<br>PL.33 | 削器 | | 99 | 完形 | 7.8 | 9.2 | 76.1 | 黒頁 | 剥片右側縁を剥離、弧状刃部を作出。 | |

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 取上番号 | 残存 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 重量 (g) | 石材 | 特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第74図-27 PL.33 | 敲石 | 棒状 | 132 | 完形 | 12.8 | 6.1 | 492.6 | 粗安 | 上下両端とも小口部両側縁に打痕。 | |
| 第74図-28 PL.33 | 凹石 | 楕円 | 158 | 完形 | 14.4 | 7.4 | 589.5 | 粗安 | ロート状の凹部５。側縁の使用が顕著で、稜を形成。 | |
| 第74図-29 PL.33 | 凹石 | 楕円 | 147 | 完形 | 14.7 | 8.6 | 584.7 | 粗安 | 背面側両端付近に集合打痕。 | 炉 |
| 第74図-30 PL.33 | 凹石 | 楕円 | 148 | 完形 | 16.2 | 10.0 | 1023.8 | 粗安 | 表裏両面とも磨耗。打痕は側縁・小口にもあり。 | |
| 第74図-31 PL.33 | 凹石 | 楕円 | 150 | 完形 | 10.2 | 6.6 | 394.9 | 粗安 | 表裏両面とも２ヶ所の集合打痕。小口部両端に打痕。 | 炉 |
| 第74図-32 PL.33 | 敲石 | 棒状 | 118 | 完形 | 7.9 | 3.5 | 105.9 | 変玄 | 小口部周辺に打痕、小口部先端付近に磨耗痕。 | |
| 第74図-33 PL.33 | 凹石 | 楕円 | 131 | 完形 | 12.5 | 8.8 | 859.2 | 粗安 | 表裏両面とも磨耗、集合打痕。打痕は側面にもあり。 | |
| 第74図-34 PL.33 | 凹石 | 楕円 | 153 | 完形 | 13.1 | 8.1 | 630.0 | 粗安 | 表裏両面とも磨耗、集合打痕。打痕は側面にもあり。 | |
| 第74図-35 PL.33 | 凹石 | 楕円 | 145 | 完形 | 11.1 | 6.6 | 414.2 | 細安 | 表裏両面とも磨耗。小口部に打痕。 | 炉 |

## １区　８号住居出土土器

| 遺物番号 | 器種 | 取上番号 | 口径(cm) 底径(cm) 器高(cm) | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 器形・文様の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第68図１ PL.32 | 深鉢 | 講 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい赤褐 | 附加条縄紋を施紋。 | 前期前葉 |

## 土坑出土土器

| 遺物番号 | 器種 | 出土遺構名 | 取上番号 | 口径(cm) 底径(cm) 器高(cm) | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 器形・文様の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第75図１ PL.33 | 深鉢 | ３区９号土坑 | Dt136 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 折り返し状の複合口縁。肥厚部下に環状貼付紋を施し、ＲＬ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第75図２ PL.33 | 深鉢 | ３区９号土坑 | Dt136 | | 口縁部破片 | 粗砂 | ふつう | にぶい赤褐 | 波状口縁。集合沈線によりレンズ状モチーフを描く。 | 十三菩提式 |
| 第75図３ PL.33 | 深鉢 | ３区９号土坑 | Dt136 | | 胴部破片 | 粗砂 | ふつう | 黒褐 | 沈線により弧状モチーフを施し、ＲＬ縄紋を充填施紋。 | 堀之内２式 |
| 第78図１ PL.33 | 深鉢 | ３区 10a～10d 号土坑 | 244,245, 246,271, 274,277, 埋設上、Dt139 | 13.7 6.0 32.2 | ほぼ完形 | 粗砂、繊礫 | ふつう | 明赤褐 | ４単位の波状口縁で、１箇所に橋状突起を付す。突起を基点に降線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。降線下は沈線により渦巻紋、懸垂紋を描き、ＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ４式 |
| 第78図２ PL.33 | 深鉢 | ３区 10a～10d 号土坑 | 168, Dt139, Ea139, 140 | 24.5 (12.0) | 口縁部破片 | 粗砂 | ふつう | 明赤褐 | ４単位の波状口縁で、２箇所に橋状突起を付す。降線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。降線下は沈線により渦巻紋、懸垂紋を描き、ＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ４式 |
| 第78図３ PL.34 | 深鉢 | ３区 10a-10d 号土坑 | 34, 54, 93, 110, 111, 112, 116, 121, 152, 158, 160, 161, 165, 184, 204～207,210, 211,213, 215～219, 240, 埋設上、Dt139、Ea139 | 35.0 – (23.3) | 口縁～胴部 1/2 | 粗砂 | 良好 | 橙 | 口縁部に４単位の突起を付して基点とし、降線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。降帯下はＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ４式 |

| 遺物番号 | 器種 | 出土遺構名 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 器形・文様の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第78図4<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 6,7,21,48,<br>49,57,67,<br>69,70,71,<br>107,124,<br>169, 170,<br>178, 180,<br>181, 182、埋<br>没土、Dt139 | | 胴部<br>1/4 | 粗砂 | ふつう | 明赤褐 | 沈線による懸垂紋構成。ＬＲ縄紋を縦位充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第78図5<br>PL.33 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 埋没土 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | ふつう | 橙 | 口縁の橋状突起。頂部に隆線による円紋を配す。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第78図6<br>PL.33 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 埋没土 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | ふつう | にぶい<br>黄橙 | 太沈線により逆U字状懸垂紋を施し、外部にＬＲ縄紋を充填施紋する。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第78図7<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 埋没土 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | ふつう | にぶい<br>褐 | 口縁下に沈線をめぐらせ、以下、沈線による分岐懸垂紋を施し、ＬＲ縄紋を充填施紋。口縁部無紋帯に刺突を充填。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第78図8<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 51 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | 良好 | にぶい<br>黄橙 | 沈線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。以下、沈線により分岐懸垂紋を施し、ＲＬ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第78図9<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 埋没土 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | 良好 | 明赤褐 | 口縁部無紋帯。沈線による分岐懸垂紋を施し、ＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第78図10<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 埋没土 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | ふつう | にぶい<br>黄橙 | 沈線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。沈線下は無節Ｌｒ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第78図11<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 5 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | ふつう | 橙 | 隆線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。隆線下は沈線による分岐懸垂紋構成。ＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第78図12<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 111、埋没土 | | 胴部破<br>片 | 粗砂 | | 明赤褐 | 口縁部の突起を基点に隆線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。隆線下は沈線による分岐懸垂紋を施し、ＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第78図13<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 222,264 | | 胴部破<br>片 | 粗砂 | ふつう | 橙 | 口縁部の突起を基点に隆線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。隆線下は沈線による分岐懸垂紋を施し、ＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第79図14<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 78 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | 良好 | 橙 | 隆線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。隆線下はＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第79図15<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 53 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | ふつう | 橙 | 隆線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。隆線下はＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第79図16<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 96 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | 良好 | 明赤褐 | 隆線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。隆線下は隆線による分岐懸垂紋を施し、ＲＬ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第79図17<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 20、Dt139 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | 良好 | 明赤褐 | 隆線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。隆線下はＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第79図18<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 93,97、Ea139 | | 口縁部<br>破片 | 粗砂 | 良好 | 暗赤褐 | 口縁部の突起を基点に隆線をめぐらせて口縁部無紋帯を区画。隆線下はＲＬ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |
| 第79図19<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>号土坑 | 39,89,104 | | 胴部破<br>片 | 粗砂 | ふつう | 明赤褐 | 隆線による懸垂紋構成。ＲＬ縄紋を縦位充填施紋。 | 加曽利Ｅ<br>４式 |

遺物観察表

| 遺物番号 | 器種 | 出土遺構名 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 器形・文様の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第79図20<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>弓土坑 | 126,162、<br>Ds137 | | 胴部破片 | 粗砂 | ふつう | 明赤褐 | 隆線による縦位楕円状区画を施し、ＬＲ縄紋を充填施紋。 | 加曽利Ｅ４式 |
| 第79図21<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>弓土坑 | 117、Dt139、<br>Ea139 | | 胴部破片 | 粗砂 | ふつう | 赤褐 | 隆線による縦位楕円状区画を施し、ＬＲ縄紋を施紋。 | 加曽利Ｅ４式 |
| 第79図22<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>弓土坑 | 171,172 | | 胴部破片 | 粗砂 | ふつう | 橙 | ＬＲ縄紋を縦位、横位に施し、沈線を垂下させる。 | 加曽利Ｅ４式 |
| 第79図23<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>弓土坑 | 84 | | 胴部破片 | 粗砂 | ふつう | 浅黄橙 | 縦位に条線を施す。 | 加曽利Ｅ式 |
| 第79図24<br>PL.34 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>弓土坑 | 15、Dt139 | 7.6 | 底部破片 | 粗砂 | ふつう | 明赤褐 | 無紋。 | 中期末葉～後期初頭 |
| 第79図25<br>PL.35 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>弓土坑 | 27、Dt139 | 7.3 | 底部破片 | 粗砂 | ふつう | 橙 | 残存部は無紋。 | 中期末葉～後期初頭 |
| 第79図26<br>PL.35 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>弓土坑 | 123 | 6.8 | 底部破片 | 粗砂 | ふつう | にぶい黄橙 | 残存部は無紋。 | 後期初頭 |
| 第79図27<br>PL.35 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>弓土坑 | 134 | | 胴部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | ２条の梯子状沈線をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。梯子状沈線の横位沈線は半截竹管によるものと思われ、平行沈線の一方ずつを重ねて３条を施す。横位沈線は深く刻まれるが、縦位の刻みは細く浅めの施紋である。紋様帯内は撚糸側面圧痕によるワラビ手紋や弧状モチーフ、円形刺突を施す。紋様帯下は綾代状の附加条縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第79図28<br>PL.35 | 深鉢 | 3区<br>10a-10d<br>弓土坑 | 60,127 | | 口縁部破片 | 粗砂 | ふつう | にぶい黄橙 | 沈線による横帯構成。口縁部に列点、斜位の短沈線を充填した２帯、間隔をあけて斜位の短沈線を充填した帯状沈線を施す。 | 加曽利Ｂ式 |
| 第84図1<br>PL.35 | 深鉢 | １区46号土坑 | 2 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | ループ縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第84図2<br>PL.35 | 深鉢 | １区49号土坑 | 1 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。撚糸側面圧痕、円形刺突、刺切紋を施す。口縁下の区画紋は施されない。 | 前期前葉 |
| 第84図3<br>PL.35 | 深鉢 | １区50号土坑 | 1 | | 胴部破片 | 粗砂 | 良好 | 赤褐 | 集合沈線により弧状モチーフを描く。 | 十三菩提式 |
| 第85図1<br>PL.36 | 深鉢 | １区51号土坑 | 埋没土 | | 胴部破片 | 粗砂、石英 | ふつう | 暗赤褐 | 斜位に沈線を施す。 | 中期前半？ |
| 第85図2<br>PL.36 | 深鉢 | １区52号土坑 | 埋没土 | | 胴部破片 | 粗砂 | 良好 | 赤褐 | ＲＬ縄紋を施す。 | 前期後葉？ |
| 第86図1<br>PL.36 | 深鉢 | １区54号土坑 | 1 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | ループ縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第86図2<br>PL.36 | 深鉢 | １区55号土坑 | 1 | | 口縁部破片 | 粗砂 | ふつう | 赤褐 | 口縁部に輪積み痕を残して口縁部紋様帯とする。口縁部には横位に、胴部は縦位帯状にＬＲ縄紋を施紋。胴部は結節。 | 中期初頭 |
| 第86図3<br>PL.36 | 深鉢 | １区55号土坑 | 4 | | 口縁部破片 | 粗砂 | 良好 | 明赤褐 | 沈線を横位多段に施し、竹管による刺突を施す。内側壁の口唇部に刻みを付す。 | 五領ヶ台式 |
| 第86図4<br>PL.36 | 深鉢 | １区55号土坑 | 3 | | 胴部破片 | 粗砂 | ふつう | 橙 | 半截竹管による平行沈線を縦位、横位に施し、交互刺突を施す。 | 五領ヶ台式 |
| 第86図5<br>PL.36 | 深鉢 | １区55号土坑 | 埋没土 | | 胴部破片 | 粗砂、石英 | ふつう | 明赤褐 | 屈曲する器形。屈曲部に隆線を貼付。 | 阿玉台式 |

| 遺物番号 | 器種 | 出土遺構名 | 取上番号 | 口径(cm)<br>底径(cm)<br>器高(cm) | 残存 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 器形・文様の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第87図1<br>PL.36 | 深鉢 | 1区56号土坑 | 1 | 22.8<br>－<br>(25.0) | 底部欠 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | 横断面が楕円形を呈し、口径の長径22.8cm、推定短径19.6cmを測る。4単位の波状口縁で、波頂部がやや肥厚する。ループ縄紋を横位多段に施すが、部分的に斜位になったりと、密接には施紋されない。 | 前期前葉 |
| 第87図2<br>PL.36 | 深鉢 | 1区56号土坑 | 埋没土 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。結節縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第87図3<br>PL.36 | 深鉢 | 1区56号土坑 | 埋没土 | | 口縁部破片 | 粗砂、細礫 | ふつう | にぶい黄橙 | 緩く外反する器形。口唇部、口縁直下にC字状刺突を施し、紋様帯内はC字状刺突による弧状モチーフを描く。器厚1.3cmと厚手。 | 前期前葉 |
| 第87図4<br>PL.36 | 深鉢 | 1区56号土坑 | 4 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 結節縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第87図5<br>PL.36 | 深鉢 | 1区57号土坑 | 11 | | 胴部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | にぶい赤褐 | ループ縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第87図6<br>PL.36 | 深鉢 | 1区57号土坑 | 10 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 0段多条縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第88図1<br>PL.36 | 深鉢 | 1区63号土坑 | 埋没土 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 波状口縁。口縁下に2条の刻み隆帯と撚糸側面圧痕。紋様帯内は波頂部下に刻み隆帯によるモチーフ、間隙に刺切紋を施す。波頂部直下は紋様が空白となっている。 | 前期前葉 |
| 第88図2<br>PL.36 | 深鉢 | 1区63号土坑 | 2,3 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 0段多条縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第88図3<br>PL.36 | 深鉢 | 1区63号土坑 | 1 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 波状口縁。結節縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第84図4<br>PL.35 | 深鉢 | 1区64号土坑 | 1 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 暗赤褐 | 0段多条LR縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第89図1<br>PL.36 | 深鉢 | 1区67号土坑 | 2,4,5,6 | | 口縁部破片 | 粗砂、石英、繊維 | ふつう | にぶい橙 | 波状口縁。0段多条縄紋による羽状構成。 | 前期前葉 |
| 第89図2<br>PL.36 | 深鉢 | 1区68号土坑 | 1 | | 胴部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 明赤褐 | 結節縄紋を施す。 | 前期前葉 |
| 第89図3<br>PL.36 | 深鉢 | 1区68号土坑 | 3 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | 橙 | 半截竹管による平行沈線をめぐらせて口縁部紋様帯を区画。紋様帯内は円形刺突を施す。紋様帯下はループ縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第89図4<br>PL.36 | 深鉢 | 1区68号土坑 | 2 | | 底部破片 | 粗砂、細礫、繊維 | ふつう | 橙 | 上げ底。ループ縄紋を施す。底面にも施紋。 | 前期前葉 |
| 第89図5<br>PL.36 | 深鉢 | 1区69号土坑 | Dr133 | | 胴部破片 | 粗砂 | ふつう | にぶい赤褐 | 集合沈線により弧状モチーフを描く。 | 十三菩提式 |
| 第89図6<br>PL.36 | 深鉢 | 1区69号土坑 | Dr133 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい赤褐 | LR縄紋を施紋。 | 前期前葉 |
| 第89図7<br>PL.36 | 深鉢 | 1区69号土坑 | Dr133 | | 口縁部破片 | 粗砂 | ふつう | 灰黄 | 波状口縁で波頂部が内折。波頂部下に8の字貼付紋。沈線で区画し、LR縄紋を充填施紋。 | 堀之内2式 |
| 第90図1<br>PL.36 | 深鉢 | 1区70号土坑 | 2 | | 底部破片 | 粗砂 | ふつう | 橙 | 底面に網代痕。 | 後期前半 |
| 第90図3<br>PL.36 | 深鉢 | 1区71号土坑 | 埋没土 | | 胴部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 撚糸側面圧痕によるワラビ手紋、円形刺突を施す。 | 前期前葉 |
| 第90図4<br>PL.36 | 深鉢 | 1区71号土坑 | 埋没土 | | 口縁部破片 | 粗砂、繊維 | ふつう | にぶい黄橙 | 縄紋が施されるが、原体不明。 | 前期前葉 |

## 土坑出土石器

| 遺物番号 | 器種 | 形態 | 出土遺構名 | 取上番号 | 残存 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 重量 (g) | 石材 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第75図- 4 PL.33 | 打斧 | 短冊形 | 3区9号土坑 | | 完形 | 7.7 | 3.8 | 66.7 | 黒頁 | 刃部は破損。風化は激しく、捲縛痕等は不明。 |
| 第75図- 5 PL.33 | 凹石 | 楕円 | 3区9号土坑 | | 1/2 | 6.0 | 4.8 | 176.3 | 粗安 | 表裏面の磨耗痕・打痕の他、小口四辺の打痕も顕著。 |
| 第80図-29 PL.35 | 削器 | | 3 区 10a ～10d号土坑 | 145 | 1/2 | 5.9 | 4.6 | 54.4 | 黒頁 | 左側縁に磨耗痕。欠損後、再生？ |
| 第80図-30 PL.35 | 打斧 | 短冊形 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 279 | 1/2 | 6.8 | 4.3 | 38.9 | 黒頁 | 上端を欠損する。刃部磨耗等は不明。 |
| 第80図-31 PL.35 | 打斧 | 短冊形 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 142 | 1/2 | 5.7 | 4.9 | 32.3 | 黒頁 | 裏面刃部が僅か磨耗。再生時に破損？ |
| 第80図-32 PL.35 | 石鏃 | 凹基無茎 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 151 | 先端欠 | 2.8 | 1.9 | 1.6 | チャ | 薄身、左右対称の石器形状。完成状態。先端欠損。 |
| 第80図-33 PL.35 | 石鏃 | 凹基無茎 | 3 区 10a ～10d号土坑 | | 完形 | 2.4 | 1.4 | 1.1 | 黒頁 | 薄身、左右対称の石器形状。完成状態。 |
| 第80図-34 PL.35 | 石鏃 | 凹基無茎 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 234 | 基部欠 | 2.3 | 1.4 | 0.8 | チャ | 薄身、左右対称。完成状態。返し部を欠損する。 |
| 第80図-35 PL.35 | 石鏃 | 凹基無茎 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 198 | 完形 | 2.7 | 1.9 | 1.2 | 黒頁 | 側縁が歪み、これを修正する加工が左側縁にある。 |
| 第80図-36 PL.35 | 石鏃 | 凹基無茎 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 150 | 完形 | 1.9 | 1.4 | 1.0 | 黒曜 | 加工状態は粗く、断面形状は厚い。未製品？ |
| 第80図-37 PL.35 | 石鏃 | 凹基無茎 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 152 | 完形 | 2.1 | 1.7 | 0.9 | 黒安 | 薄身、左右対称の石器形状。完成状態。 |
| 第80図-38 PL.35 | 石鏃 | 凹基無茎 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 149 | 基部欠 | 2.7 | 1.4 | 0.8 | 黒頁 | 右側縁裏面の加工は粗く、異質。製作途状に破損？ |
| 第80図-39 PL.35 | 石鏃 | 凹基無茎 | 3 区 10a ～10d号土坑 | | 先端欠 | 2.1 | 2.0 | 1.7 | 黒頁 | 薄身で、左右非対称。未製品。 |
| 第80図-40 PL.35 | 打斧 | 撥形 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 148 | 完形 | 9.7 | 6.9 | 90.7 | 黒頁 | 刃部に最大幅。風化が激しく、磨耗痕は不明。 |
| 第80図-41 PL.35 | 削器 | | 3 区 10a ～10d号土坑 | | 完形 | 5.2 | 3.6 | 22.7 | 黒頁 | 幅広剥片の集変異加工。刃部は左側縁の直線部？ |
| 第80図-42 PL.35 | 石匙 | 縦型 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 197 | 完形 | 3.2 | 0.7 | 7.0 | 黒曜 | 剥片には表面のキズが多く、加工とは時間差がある。 |
| 第80図-43 PL.35 | 凹石 | 楕円 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 136 | 完形 | 9.5 | 7.2 | 348.8 | 粗安 | 礫面中央にロート状の凹み各1、側縁に打痕。 |
| 第80図-44 PL.35 | 凹石 | 楕円 | 3 区 10a ～10d号土坑 | | 完形 | 9.9 | 8.5 | 707.3 | 粗安 | 磨耗痕は顕著。激しく使い込んでいる。 |
| 第80図-45 PL.35 | 敲石 | 棒状 | 3 区 10a ～10d号土坑 | | 完形 | 23.5 | 6.1 | 1353.2 | 粗安 | 打痕は礫の上端側に集中する。片側に握り使用？ |
| 第81図-46 PL.35 | 磨石 | 棒状 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 143 | 完形 | 12.0 | 6.2 | 491.0 | 粗安 | 礫面中央の打痕は斜めに連続する。 |
| 第81図-47 PL.35 | 凹石 | 楕円 | 3 区 10a ～10d号土坑 | 137 | 完形 | 10.5 | 10.2 | 574.9 | 粗安 | 礫面中央にロート状の凹み各1、側縁に打痕。 |
| 第82図- 1 PL.35 | 石鏃 | 凹基無茎 | 3区12号土坑 | | 2/3 | 1.9 | 1.3 | 0.6 | 黒曜 | 両端の返し部を破損。未製品。 |
| 第86図- 6 PL.36 | 削器 | | 3区55号土坑 | | | 0.9 | 1.3 | 5.2 | 珪質 | 幅広剥片打面側を粗く加工して刃部を作出。 |
| 第88図- 4 PL.36 | 磨石 | 楕円 | 3区63号土坑 | 6 | 完形 | 19.0 | 14.6 | 2584.4 | 粗安 | 背面側の平坦な礫面に磨耗痕・打痕。 |
| 第90図- 2 PL.36 | 削器 | | 3区70号土坑 | 1 | | 6.1 | 4 | 42.5 | 黒安 | 幅広剥片の端部に角度の厚い掻器状刃部を作出。 |

## 1区遺構外出土石器

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 出土位置 | 層位 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第108図-1 PL.44 | 打斧 | | Dq-126 | Ⅴ | 黒頁 | 12.3 | 4.1 | 163.8 |
| 第108図-2 PL.44 | 打斧 | | Dq-122 | | 黒頁 | 8.0 | 4.0 | 68.9 |
| 第108図-3 PL.44 | 打斧 | | Dq-129 | Ⅴ | 黒頁 | 9.2 | 4.6 | 109.3 |
| 第108図-4 PL.44 | 打斧 | | Dq-121 | Ⅴ | 黒頁 | 12.8 | 5.5 | 128.8 |
| 第108図-5 PL.44 | 打斧 | | Dr-121 | Ⅵ | 黒頁 | 11.8 | 5.2 | 123.2 |
| 第108図-6 PL.44 | 打斧 | | Dr-126 | Ⅴ | 砂岩 | 13.8 | 5.9 | 182.0 |
| 第108図-7 PL.44 | 打斧 | | Dq-121 | Ⅵ | 黒頁 | 11.5 | 5.0 | 130.6 |
| 第108図-8 PL.44 | 打斧 | | Dr-134 | | 珪頁 | 9.2 | 5.8 | 113.5 |
| 第108図-9 PL.44 | 打斧 | | Dr-127 | Ⅵ | 黒頁 | 9.2 | 5.0 | 132.4 |
| 第108図-10 PL.44 | 打斧 | | Dq-120 | Ⅴ | 黒頁 | 11.0 | 7.5 | 171.1 |
| 第108図-11 PL.44 | 打斧 | | Dq-122 | Ⅴ | 黒頁 | 11.7 | 9.1 | 268.3 |
| 第108図-12 PL.44 | 打斧 | | 西トレ | | 硬安 | 13.2 | 8.0 | 235.8 |
| 第108図-13 PL.44 | 打斧 | | Dq-120 | Ⅴ | 変玄 | 12.6 | 9.3 | 433.9 |
| 第108図-14 PL.44 | 打斧 | | Dr-133 | Ⅴ | 黒頁 | 9.4 | 5.3 | 92.8 |
| 第108図-15 PL.44 | 打斧 | | Dq-122 | Ⅴ | 黒頁 | 9.6 | 7.7 | 109.3 |
| 第108図-16 PL.44 | 打斧 | | Dq-129 | Ⅴ | 黒頁 | 10.2 | 7.2 | 318.7 |
| 第108図-17 PL.44 | 打斧 | | Dq-129 | Ⅴ | 黒頁 | | | 389.0 |
| 第109図-18 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dr-120 | | チャ | 2.9 | 2.2 | 5.3 |
| 第109図-19 PL.45 | 石鏃 | 平基無茎 | Dr-129 | | 珪頁 | 3.2 | 2.4 | 5.4 |
| 第109図-20 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dq-124 | Ⅴ | 黒頁 | 1.3 | 1.1 | 0.2 |
| 第109図-21 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dr-129 | Ⅴ | 黒頁 | 1.4 | 1.2 | 0.3 |
| 第109図-22 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dq-122 | Ⅴ | 黒頁 | 1.4 | 1.1 | 0.2 |
| 第109図-23 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | | Ⅴ | 黒頁 | 1.9 | 1.3 | 0.5 |
| 第109図-24 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | | Ⅵ | 黒頁 | 1.8 | 1.4 | 0.6 |
| 第109図-25 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | | | 黒曜 | 1.9 | 1.5 | 0.5 |
| 第109図-26 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dq-125 | Ⅴ | 黒曜 | 2.2 | 1.9 | 0.7 |
| 第109図-27 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dr-123 | Ⅴ | 黒頁 | 1.3 | 1.3 | 0.4 |
| 第109図-28 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | | Ⅴ | 黒曜 | 1.4 | 1.4 | 0.7 |
| 第109図-29 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dr-122 | Ⅵ | 黒曜 | 2.1 | 1.5 | 0.7 |
| 第109図-30 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dr-122 | Ⅴ | 黒曜 | 2.3 | 1.4 | 0.9 |
| 第109図-31 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dq-121 | Ⅴ | チャ | 1.6 | 1.8 | 0.5 |
| 第109図-32 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dr-123 | Ⅴ | 黒安 | 1.6 | 1.5 | 0.9 |
| 第109図-33 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | | Ⅵ | 黒頁 | 2.3 | 1.4 | 1.0 |
| 第109図-34 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | | Ⅴ | 珪頁 | 3.6 | 2.0 | 2.4 |
| 第109図-35 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dr-124 | Ⅴ | 黒頁 | 2.2 | 1.5 | 0.9 |
| 第109図-36 PL.45 | 石鏃 | | Dr-121 | | 赤碧 | 1.8 | 1.7 | 1.2 |
| 第109図-37 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dr-121 | | 黒安 | 2.1 | 1.8 | 0.9 |
| 第109図-38 PL.45 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dq-119 | | 硬泥 | 3.0 | 1.0 | 1.4 |
| 第109図-39 PL.45 | 石匙 | 縦型 | Dr-121 | | 黒頁 | 3.2 | 1.8 | 2.8 |
| 第109図-40 PL.45 | 石匙 | 縦型 | Dq-122 | Ⅴ | 黒頁 | 8.8 | 4.0 | 38.5 |
| 第109図-41 PL.45 | 石匙 | 縦型 | Dr-133 | Ⅴ | 黒頁 | 6.2 | 3.6 | 29.1 |
| 第109図-42 PL.45 | 石匙 | 斜め | Dq-125 | Ⅴ | 黒頁 | 4.5 | 7.0 | 20.3 |
| 第109図-43 PL.45 | 石匙 | 横型 | Dq-122 | Ⅴ | 黒頁 | 3.4 | 4.5 | 11.3 |
| 第109図-44 PL.45 | 石匙 | 横型 | Dq-121 | Ⅴ | 黒頁 | 1.3 | 3.9 | 5.1 |
| 第110図-45 PL.45 | 石匙 | 横型 | Ds-151 | Ⅴ | 黒頁 | 1.6 | 6.0 | 5.5 |
| 第110図-46 PL.45 | 石匙 | 斜め | Dr-129 | Ⅴ | 黒頁 | 4.9 | 7.7 | 27.9 |
| 第110図-47 PL.45 | 石錐 | | Dr-124 | Ⅴ | 黒曜 | 1.3 | 0.5 | 0.2 |
| 第110図-48 PL.45 | 石錐 | | | | 硬泥 | 2.5 | 0.9 | 1.0 |
| 第110図-49 PL.45 | 楔形 | | Dq-120 | Ⅴ | 黒頁 | 5.0 | 3.6 | 20.4 |
| 第110図-50 PL.45 | 打斧 | | Dr-132 | | 黒頁 | 6.4 | 3.8 | 34.5 |
| 第110図-51 PL.45 | 打斧 | | Dr-126 | Ⅴ | 黒頁 | 6.7 | 4.0 | 37.4 |
| 第110図-52 PL.45 | 打斧 | | Dq-120 | | 黒頁 | 9.3 | 4.8 | 86.0 |
| 第110図-53 PL.45 | 打斧 | | Dr-121 | Ⅴ | 黒頁 | 5.8 | 3.7 | 23.3 |
| 第110図-54 PL.45 | 打斧 | | Dq-129 | | 黒頁 | 6.0 | 4.4 | 28.8 |
| 第110図-55 PL.45 | 打斧 | | Dr-120 | Ⅵ | 黒頁 | 7.5 | 3.6 | 41.1 |
| 第110図-56 PL.45 | 打斧 | | Dr-119 | Ⅴ | 黒頁 | 9.2 | 3.2 | 35.9 |
| 第110図-57 PL.45 | 打斧 | | Dr-121 | | 黒頁 | 7.3 | 4.5 | 50.6 |
| 第110図-58 PL.45 | 削器 | | Dq-121 | Ⅴ | 黒頁 | 9.4 | 5.4 | 56.6 |
| 第110図-59 PL.45 | 削器 | | Dq-121 | Ⅴ | 黒頁 | 10.2 | 3.4 | 63.6 |
| 第110図-60 PL.46 | 削器 | | Do-123 | | 黒頁 | 9.0 | 5.0 | 91.9 |

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 出土位置 | 層位 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第110図-61 PL.46 | 削器 | | Dq-123 | V | 黒安 | 7.2 | 5.4 | 80.7 |
| 第110図-62 PL.46 | 削器 | | Dr-123 | V | 黒頁 | 8.0 | 6.2 | 81.5 |
| 第111図-63 PL.46 | 削器 | | Dq-119 | V | 黒頁 | 4.9 | 2.2 | 12.2 |
| 第111図-64 PL.46 | 削器 | | Ds-132 | V | 黒頁 | 6.5 | 2.9 | 12.3 |
| 第111図-65 PL.46 | 削器 | | Dq-121 | V | 黒頁 | 6.1 | 4.7 | 29.3 |
| 第111図-66 PL.46 | 削器 | | Dr-126 | V | 黒頁 | 5.8 | 4.4 | 28.5 |
| 第111図-67 PL.46 | 削器 | | Dq-121 | V | 黒頁 | 3.4 | 6.6 | 14.2 |
| 第111図-68 PL.46 | 削器 | | | V | 黒安 | 6.2 | 8.4 | 97.6 |
| 第111図-69 PL.46 | 削器 | | | V | 黒頁 | 5.0 | 12.4 | 76.9 |
| 第111図-70 PL.46 | 削器 | | Dr-126 | Ⅵ | 黒頁 | 7.8 | 7.5 | 91.2 |
| 第111図-71 PL.46 | 削器 | | Dr-120 | V | 黒頁 | 9.2 | 11.0 | 283.3 |
| 第111図-72 PL.46 | 敲石 | | Dq-122 | V | 黒頁 | 8.9 | 2.6 | 77.6 |
| 第111図-73 PL.46 | 石核 | | Dq-120 | V | 黒曜 | 2.5 | 2.7 | 6.6 |
| 第111図-74 PL.46 | 石核 | | | V | 黒曜 | 2.3 | 3.6 | 7.1 |
| 第111図-75 PL.46 | 石核 | | Dr-124 | V | 黒曜 | 2.3 | 3.1 | 9.7 |
| 第111図-76 PL.46 | 石核 | | Dr-121 | Ⅵ | 黒曜 | 2.9 | 2.8 | 15.4 |
| 第111図-77 PL.46 | 石核 | | | V | 黒曜 | 2.6 | 2.6 | 7.8 |
| 第112図-78 PL.46 | 石核 | | Dq-131 | Ⅵ | 変安 | 12.9 | 11.5 | 1060.8 |
| 第112図-79 PL.46 | 石核 | | Dr-120 | V | 黒頁 | 9.7 | 7.7 | 393.6 |
| 第112図-80 PL.46 | 石核 | | Ds-131 | V | 黒頁 | 7.7 | 8.5 | 207.6 |
| 第112図-81 PL.46 | 石核 | | Dr-120 | Ⅵ | 黒頁 | 8.2 | 6.3 | 170.8 |
| 第112図-82 PL.46 | 石核 | | Dr-122 | V | 黒安 | 4.8 | 7.2 | 132.2 |
| 第112図-83 PL.46 | 石核 | | Dr-129 | V | 黒頁 | 7.5 | 8.2 | 383.5 |
| 第112図-84 PL.46 | 石核 | | Dr-119 | V | 黒頁 | 18.2 | 10.2 | 1583.7 |
| 第112図-85 PL.47 | 石核 | | Dp-119 | | 黒頁 | 20.1 | 12.5 | 1982.4 |
| 第112図-86 PL.47 | 石核 | | Dq-122 | V | 黒頁 | 8.4 | 6.8 | 363.6 |
| 第113図-87 PL.47 | 凹石 | | Dq-122 | V | 粗安 | 9.2 | 7.3 | 388.6 |
| 第113図-88 PL.47 | 凹石 | | Dq-122 | V | 粗安 | 10.3 | 7.1 | 295.1 |
| 第113図-89 PL.47 | 凹石 | | Dr-119 | Ⅵ | 粗安 | 9.6 | 8.4 | 850.3 |
| 第113図-90 PL.47 | 凹石 | | Dr-126 | V | 石英 | 9.0 | 8.5 | 556.9 |

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 出土位置 | 層位 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第113図-91 PL.47 | 凹石 | | Dr-121 | | 粗安 | 9.8 | 9.3 | 566.9 |
| 第113図-92 PL.47 | 凹石 | | Dr-122 | V | 変安 | 17.8 | 9.6 | 1842.7 |
| 第113図-93 PL.47 | 凹石 | | Dq-122 | Ⅵ | 粗安 | 13.3 | 7.6 | 577.2 |
| 第113図-94 PL.47 | 凹石 | | Dr-121 | V | 粗安 | 16.8 | 8.4 | 1033.7 |
| 第113図-95 PL.47 | 磨石 | | Dq-122 | V | 粗安 | 8.4 | 6.9 | 404.2 |
| 第113図-96 PL.47 | 磨石 | | Dq-121 | V | 粗安 | 9.9 | 8.2 | 473.7 |
| 第113図-97 PL.47 | 磨石 | | Dr-126 | V | 粗安 | 13.8 | 7.6 | 777.6 |
| 第113図-98 PL.47 | 磨石 | | Dr-120 | V | 石英 | 12.0 | 6.9 | 643.3 |
| 第114図-99 PL.47 | 磨石 | | Dq-122 | V | 粗安 | 16.5 | 9.1 | 959.3 |
| 第114図-100 PL.47 | 磨石 | | Ds-132 | V | 粗安 | 13.1 | 5.5 | 570.4 |
| 第114図-101 PL.48 | 敲石 | | Dq-122 | V | 粗安 | 12.5 | 5.9 | 287.7 |
| 第114図-102 PL.48 | 敲石 | | Dq-122 | V | デイ | 13.0 | 5.5 | 364.6 |
| 第114図-103 PL.48 | 磨石 | | Dq-122 | V | 粗安 | 16.6 | 12.3 | 2034.9 |
| 第114図-104 PL.48 | 石皿 | | Dq-122 | V | 緑片 | 28.2 | 10.8 | 1546.1 |
| 第114図-105 PL.48 | 石皿 | | Dr-119 | V | 粗安 | 13.7 | 18.1 | 2718.3 |
| 第114図-106 PL.48 | 台石 | | Dq-122 | V | 粗安 | 22.2 | 15.5 | 2810.8 |

### 3区遺構外出土石器

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 出土位置 | 層位 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第115図-1 PL.48 | 打斧 | | Ea-140 | V | 粗安 | 7.3 | 4.1 | 39.8 |
| 第115図-2 PL.48 | 打斧 | | Dt-139 | Ⅵ | 黒頁 | 7.1 | 4.4 | 46.0 |
| 第115図-3 PL.48 | 打斧 | | Ea-140 | Ⅵ | 黒頁 | 7.0 | 3.8 | 39.3 |
| 第115図-4 PL.48 | 打斧 | | Dt-137 | V | 粗安 | 9.7 | 4.3 | 63.6 |
| 第115図-5 PL.48 | 打斧 | | Dt-137 | V | 黒頁 | 9.3 | 4.6 | 42.5 |
| 第115図-6 PL.48 | 打斧 | | Dt-141 | V | 黒頁 | 10.8 | 4.5 | 93.6 |
| 第115図-7 PL.48 | 打斧 | | Ds-137 | V | 黒頁 | 9.6 | 5.2 | 56.3 |
| 第115図-8 PL.48 | 打斧 | | Ds-137 | V | 黒頁 | 8.7 | 7.0 | 153.3 |
| 第115図-9 PL.48 | 打斧 | | Dt-140 | V | 粗安 | 13.3 | 8.4 | 309.0 |
| 第115図-10 PL.48 | 打斧 | | Eb-143 | V | 黒頁 | 15.5 | 9.3 | 343.2 |
| 第115図-11 PL.48 | 打斧 | | Ea-139 | V | 粗安 | 20.1 | 9.5 | 447.3 |
| 第115図-12 PL.48 | 打斧 | | Dt-137 | V | 黒頁 | 12.3 | 5.7 | 185.7 |

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 出土位置 | 層位 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第115図-13 PL.48 | 打斧 | | Dt-139 | Ⅴ | 黒頁 | 10.8 | 5.5 | 173.2 |
| 第115図-14 PL.48 | 打斧 | | Dt-139 | Ⅴ | 黒頁 | 8.2 | 7.5 | 122.2 |
| 第115図-15 PL.48 | 打斧 | | Eq-143 | Ⅴ | 黒頁 | 10.7 | 7.5 | 216.1 |
| 第115図-16 PL.48 | 打斧 | | Dt-140 | Ⅴ | 黒頁 | 12.0 | 5.9 | 198.7 |
| 第116図-17 PL.49 | 打斧 | | Eb-142 | Ⅴ | 珪頁 | 10.6 | 6.8 | 96.1 |
| 第116図-18 PL.49 | 打斧 | | Eq-144 | Ⅴ | 黒頁 | 10.6 | 8.5 | 214.2 |
| 第116図-19 PL.49 | 打斧 | 分銅形 | Ea-143 | Ⅴ | 硬泥 | 10.2 | 5.0 | 80.9 |
| 第116図-20 PL.49 | 打斧 | | Ds-137 | Ⅴ | 黒頁 | 17.9 | 12.7 | 580.2 |
| 第116図-21 PL.49 | 打斧 | | Eb-145 | Ⅴ | 黒頁 | 8.1 | 4.3 | 46.1 |
| 第116図-22 PL.49 | 磨斧 | | Ep-144 | Ⅴ | 黒頁 | 3.0 | 1.0 | 2.2 |
| 第116図-23 PL.49 | 石槌 | | Ea-143 | Ⅳ | 黒頁 | 9.2 | 2.8 | 49.5 |
| 第116図-24 PL.49 | 有舌 | | Ea-143 | Ⅳ | 黒頁 | 4.0 | 1.7 | 2.6 |
| 第116図-25 PL.49 | 石鏃 | 平基無茎 | Eb-143 | Ⅴ | 黒頁 | 2.5 | 1.8 | 1.0 |
| 第116図-26 PL.49 | 石鏃 | 凹基無茎 | Ea-141 | Ⅴ | 黒曜 | 1.5 | 1.5 | 0.7 |
| 第116図-27 PL.49 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dt-139 | Ⅶ | 黒頁 | 1.7 | 1.6 | 0.9 |
| 第116図-28 PL.49 | 石鏃 | 平基無茎 | Dt-138 | Ⅴ | 碧玉 | 2.1 | 1.6 | 1.3 |
| 第116図-29 PL.49 | 石鏃 | | Ea-141 | | チャ | 2.5 | 1.8 | 3.1 |
| 第117図-30 PL.49 | 石鏃 | 凹基無茎 | Eb-145 | Ⅵ | 珪頁 | 1.6 | 1.3 | 0.3 |
| 第117図-31 PL.49 | 石鏃 | 凹基無茎 | Ea-143 | Ⅳ | 黒頁 | 2.1 | 1.1 | 0.5 |
| 第117図-32 PL.49 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dt-137 | Ⅵ | 赤碧 | 1.8 | 1.2 | 0.5 |
| 第117図-33 PL.49 | 石鏃 | 凹基無茎 | Ea-142 | Ⅶ | 黒曜 | 1.1 | 1.3 | 0.3 |
| 第117図-34 PL.49 | 石鏃 | 凹基無茎 | Eb-147 | Ⅵ | 黒曜 | 1.0 | 1.3 | 0.3 |
| 第117図-35 PL.49 | 石鏃 | 平基無茎? | Eb-145 | | 珪頁 | 2.8 | 2.5 | 2.8 |
| 第117図-36 PL.49 | 石鏃 | 平基無茎 | Ea-140 | Ⅵ | 黒安 | 3.5 | 2.4 | 6.0 |
| 第117図-37 PL.49 | 石鏃 | | Eb-143 | | 黒安 | 3.5 | 2.9 | 8.6 |
| 第117図-38 PL.49 | 石匙 | 縦型 | Ea-138 | Ⅵ | 黒頁 | 4.9 | 5.0 | 10.2 |
| 第117図-39 PL.49 | 石匙 | 縦型 | Eb-145 | Ⅶ | 黒頁 | 5.5 | 3.3 | 9.3 |
| 第117図-40 PL.49 | 石匙 | 横型 | Ea-139 | | 黒頁 | 1.2 | 2.2 | 4.4 |
| 第117図-41 PL.49 | 石匙 | 斜め | Dt-139 | Ⅴ | 黒頁 | 7.3 | 7.4 | 38.4 |
| 第117図-42 PL.49 | 石匙 | 横型 | Dr-138 | Ⅶ | 黒頁 | 5.0 | 5.2 | 17.9 |
| 第117図-43 PL.49 | 石錐 | | Ea-141 | Ⅴ | 黒頁 | 3.8 | 2.8 | 8.9 |

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 出土位置 | 層位 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第117図-44 PL.49 | 石錐 | | Ea-143 | | 黒頁 | 1.7 | 1.5 | 0.9 |
| 第117図-45 PL.49 | 楔形 | | Ea-141 | Ⅴ | 黒頁 | 6.3 | 4.3 | 38.3 |
| 第117図-46 PL.49 | 打斧 | | Dt-139 | Ⅵ | 黒頁 | 7.4 | 4.0 | 38.6 |
| 第117図-47 PL.49 | 打斧 | | Dt-140 | Ⅵ | 黒頁 | 7.7 | 5.9 | 68.0 |
| 第117図-48 PL.49 | 打斧 | | Dt-139 | Ⅴ | 黒頁 | 10.9 | 5.3 | 127.0 |
| 第118図-49 PL.49 | 打斧 | | Dt-140 | Ⅵ | 黒頁 | 6.5 | 4.7 | 58.1 |
| 第118図-50 PL.49 | 打斧 | | Ds-138 | Ⅴ | 粗安 | 12.6 | 7.3 | 199.7 |
| 第118図-51 PL.50 | 石核 | | Ea-138 | Ⅴ | 黒曜 | 1.6 | 1.5 | 2.6 |
| 第118図-52 PL.50 | 石核 | | Ea-140 | Ⅶ | 黒曜 | 1.7 | 1.5 | 6.7 |
| 第118図-53 PL.50 | 石核 | | Dt-138 | Ⅴ | 黒頁 | 7.0 | 6.9 | 205.8 |
| 第118図-54 PL.50 | 石核 | | Dt-137 | | 黒曜 | 3.0 | 1.6 | 4.1 |
| 第118図-55 PL.50 | 石核 | | Ds-138 | Ⅵ | 黒頁 | 8.9 | 8.1 | 210.9 |
| 第118図-56 PL.50 | 石核 | | Ds-137 | | 黒曜 | 1.3 | 3.0 | 4.6 |
| 第118図-57 PL.50 | 石核 | | Ea-142 | Ⅴ | 黒頁 | 10.0 | 12.4 | 910.0 |
| 第118図-58 PL.50 | 石錘 | | Ea-143 | Ⅴ | 黒頁 | 6.5 | 2.4 | 21.7 |
| 第118図-59 PL.50 | 凹石 | | Dt-141 | Ⅴ | 粗安 | 12.8 | 9.0 | 778.3 |
| 第119図-60 PL.50 | 凹石 | | Dt-140 | Ⅴ | 変玄 | 8.9 | 7.8 | 401.1 |
| 第119図-61 PL.50 | 凹石 | | Ds-137 | Ⅵ | 粗安 | 7.8 | 10.0 | 224.8 |
| 第119図-62 PL.50 | 凹石 | | 風倒木 | | 粗安 | 12.7 | 8.3 | 776.5 |
| 第119図-63 PL.50 | 凹石 | | Dt-139 | Ⅴ | 粗安 | 8.8 | 7.1 | 306.7 |
| 第119図-64 PL.50 | 凹石 | | Eb-144 | Ⅴ | 粗安 | 16.5 | 7.3 | 980.8 |
| 第119図-65 PL.50 | 凹石 | | Ea-139 | Ⅴ | 粗安 | 14.7 | 8.1 | 794.2 |
| 第119図-66 PL.50 | 凹石 | | Ds-137 | Ⅴ | 粗安 | 9.9 | 8.1 | 563.2 |
| 第119図-67 PL.50 | 磨石 | | Dt-138 | Ⅴ | 粗安 | 9.9 | 9.4 | 813.3 |
| 第119図-68 PL.50 | 磨石 | | Dt-138 | Ⅴ | 粗安 | 10.2 | 8.1 | 566.6 |
| 第119図-69 PL.50 | 磨石 | | Eb-145 | Ⅵ | 粗安 | 9.1 | 7.1 | 344.3 |
| 第119図-70 PL.50 | 磨石 | | Eb-145 | Ⅵ | 粗安 | 9.8 | 7.3 | 483.6 |
| 第119図-71 PL.50 | 磨石 | | Ea-142 | Ⅴ | 粗安 | 17.8 | 8.4 | 1165.0 |
| 第120図-72 PL.50 | 磨石 | | Ea-142 | Ⅴ | 粗安 | 13.1 | 11.7 | 1410.8 |
| 第120図-73 PL.50 | 磨石 | | Dt-141 | Ⅴ | 変安 | 10.6 | 6.3 | 395.9 |
| 第120図-74 PL.51 | 敲石 | | Ea-141 | Ⅵ | デイ | 8.2 | 3.0 | 76.5 |

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 出土位置 | 層位 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第120図-75 PL.51 | 敲石 | | 風倒木 | | 黒頁 | 12.3 | 6.0 | 353.2 |
| 第120図-76 PL.51 | 磨石 | | Ea-141 | Ⅴ | 粗安 | 9.9 | 4.8 | 199.8 |
| 第120図-77 PL.51 | 石核 | | Ea-142 | Ⅴ | 黒頁 | 7.7 | 9.7 | 524.5 |
| 第120図-78 PL.51 | 多孔 | | Ea-142 | Ⅴ | 粗安 | 16.5 | 14.2 | 3234.6 |
| 第120図-79 PL.51 | 多孔 | | Dt-140 | | 粗安 | 33.2 | 21.0 | 15600 |
| 第121図-80 PL.51 | 多孔 | | Dt-139 | Ⅴ | 粗安 | 20.4 | 21.0 | 5751.8 |
| 第121図-81 PL.51 | 環斧 | | Ea-143 | Ⅴ | 変玄 | 5.9 | 10.5 | 133.7 |

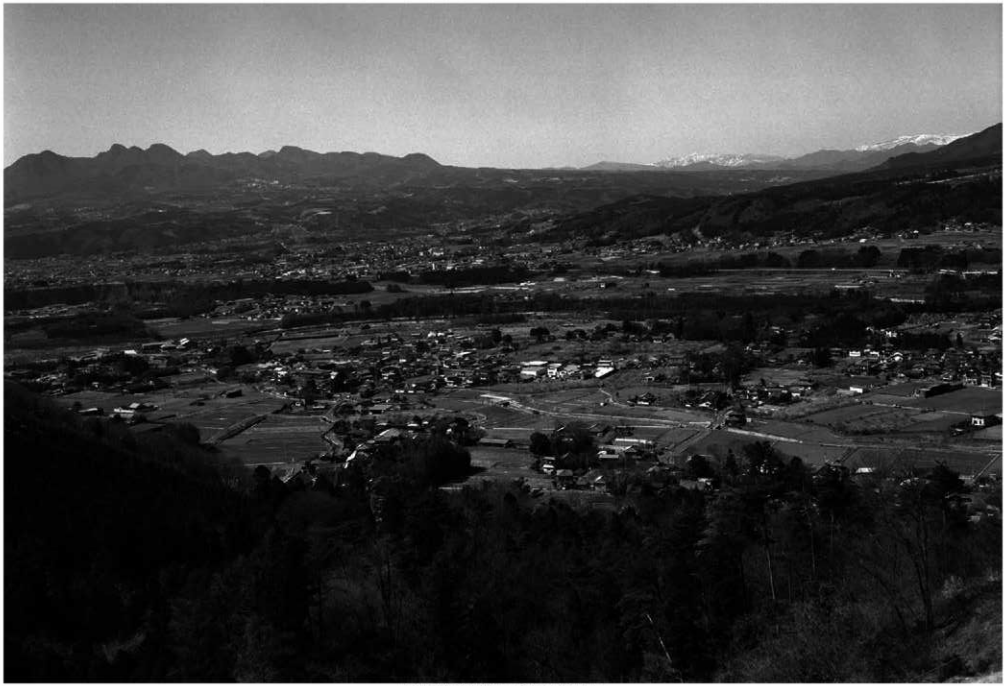
## 4区遺構外出土石器

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 出土位置 | 層位 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第122図- 1 PL.51 | 打斧 | | Dq-141 | Ⅴ | 黒頁 | 9.2 | 4.3 | 65.7 |
| 第122図- 2 PL.51 | 打斧 | | Dt-146 | Ⅴ | 粗安 | 10.9 | 4.7 | 99.8 |
| 第122図- 3 PL.51 | 打斧 | | Dq-141 | Ⅵ | 黒頁 | 11.2 | 4.2 | 112.7 |
| 第122図- 4 PL.51 | 打斧 | | Ds-146 | Ⅴ | 黒頁 | 9.1 | 3.7 | 57.1 |
| 第122図- 5 PL.51 | 打斧 | | Dr-142 | Ⅵ | 黒頁 | 9.0 | 6.4 | 102.8 |
| 第122図- 6 PL.51 | 打斧 | | Ea-151 | Ⅴ | 黒頁 | 10.0 | 5.8 | 148.1 |
| 第122図- 7 PL.52 | 打斧 | | Dq-140 | Ⅴ | 珪頁 | 11.2 | 9.8 | 255.4 |
| 第122図- 8 PL.52 | 打斧 | | Dq-140 | Ⅴ | 黒頁 | 12.2 | 10.6 | 356.9 |
| 第122図- 9 PL.52 | 打斧 | | Dq-140 | Ⅴ | 粗安 | 16.4 | 12.0 | 651.3 |
| 第122図-10 PL.52 | 磨斧 | | Ds-147 | Ⅴ | 変玄 | 16.2 | 5.5 | 380.3 |
| 第122図-11 PL.52 | 石鏃 | 凹基無茎 | Ds-147 | | 黒頁 | 3.1 | 1.6 | 2.0 |
| 第122図-12 PL.52 | 石鏃 | 凹基無茎 | Dq-141 | | 珪頁 | 3.9 | 1.6 | 1.8 |
| 第122図-13 PL.52 | 削器 | | Dq-141 | Ⅵ | 黒頁 | 5.6 | 8.6 | 46.4 |
| 第122図-14 PL.52 | 削器 | | Dt-151 | Ⅴ | 黒頁 | 4.7 | 7.0 | 60.7 |
| 第122図-15 PL.52 | 削器 | | Ds-145 | Ⅴ | 黒頁 | 4.4 | 7.7 | 61.5 |
| 第122図-16 PL.52 | 削器 | | Dq-140 | Ⅵ | 黒頁 | 3.5 | 7.8 | 33.0 |
| 第122図-17 PL.52 | 削器 | | Dq-140 | Ⅴ | 珪頁 | 9.2 | 6.4 | 141.3 |
| 第122図-18 PL.52 | 凹石 | | Dt-150 | Ⅳ | 粗安 | 8.8 | 7.5 | 305.9 |
| 第123図-19 PL.52 | 磨石 | | Dt-144 | Ⅴ | 粗安 | 10.7 | 8.8 | 614.8 |
| 第123図-20 PL.52 | 磨石 | | Dq-140 | Ⅶ | 石英 | 11.2 | 9.6 | 633.4 |
| 第123図-21 PL.52 | 磨石 | | Dt-149 | Ⅴ | 粗安 | 13.2 | 9.3 | 765.2 |
| 第123図-22 PL.52 | 敲石 | | Dp-138 | Ⅵ | 粗安 | 7.6 | 6.0 | 315.3 |
| 第123図-23 PL.52 | 原石 | | Dr-144 | Ⅴ | 黒頁 | 12.5 | 15.0 | 1301.9 |

## 5区遺構外出土石器

| 図版番号 | 器種 | 形態 | 出土位置 | 層位 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重量(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第124図- 1 PL.52 | 打斧 | | Ea-153 | Ⅴ | 硬泥 | 11.7 | 4.4 | 137.1 |
| 第124図- 2 PL.52 | 打斧 | | Ec-158 | Ⅴ | 黒頁 | 9.1 | 3.6 | 51.2 |
| 第124図- 3 PL.52 | 打斧 | | Ea-153 | Ⅵ | 黒頁 | 11.1 | 5.2 | 113.3 |
| 第124図- 4 PL.52 | 打斧 | | Ea-153 | Ⅵ | 粗安 | 11.4 | 7.0 | 207.4 |
| 第124図- 5 PL.52 | 凹石 | | Ea-153 | Ⅴ | 粗安 | 8.2 | 7.5 | 233.5 |
| 第124図- 6 PL.52 | 凹石 | | Eb-156 | Ⅵ | 粗安 | 9.4 | 7.2 | 377.0 |

# 写　真　図　版



上白井西伊熊遺跡遠景 ( 利根川左岸より )

PL.1

0区1面　調査区全景(北東から)

0区1面　1号溝全景

0区1面　2号溝全景(北から)

1区1面　調査区全景 ( 南東から )

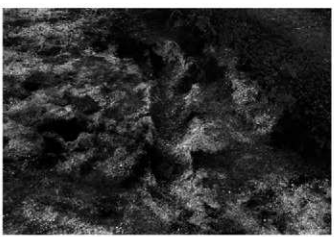
1区1面　調査区全景 ( 北から )

1区1面　14号耕作坑　全景(南から)

1区1面　15号耕作坑　全景(南から)

1区1面　16号耕作坑　全景(南から)

1区1面　25号耕作坑　全景(南から)

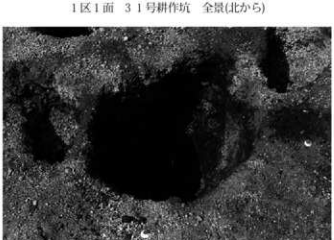


1区1面　26号耕作坑　全景(南から)

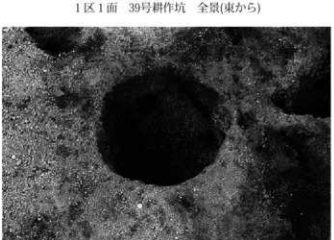
1区1面　28号耕作坑　全景(南から)

1区1面　３１号耕作坑　全景(北から)

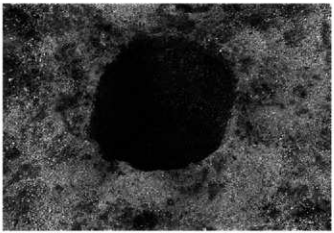
1区1面　39号耕作坑　全景(東から)



1区1面　17号土坑　全景(南から)



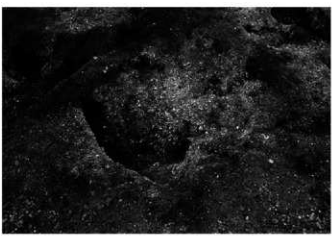
1区1面　18号土坑　全景(南から)



1区1面　19号土坑　全景(南から)

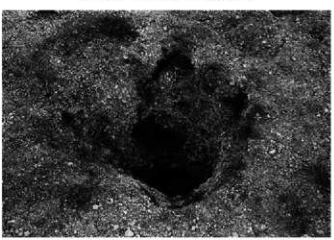
1区1面　20号土坑　全景(東から)

1区1面　21号土坑　全景(南から)

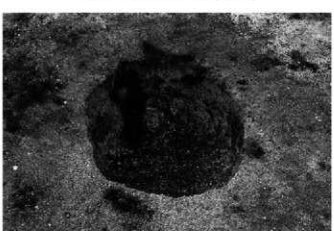


1区1面　22号土坑　全景(北から)

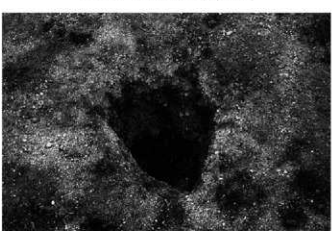
1区1面　23号土坑　全景(南から)



1区1面　24号土坑　全景(南から)



1区1面　27号土坑　全景(南から)

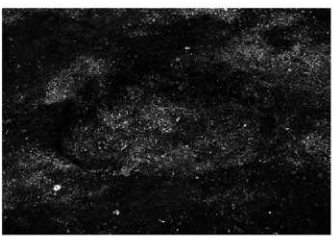


1区1面　29号土坑　全景(西から)

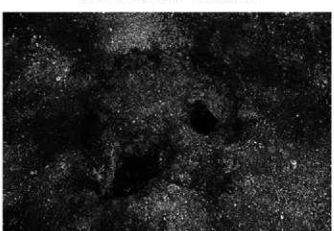
1区1面　30号土坑　全景(東から)

1区1面　32号土坑　全景(南から)

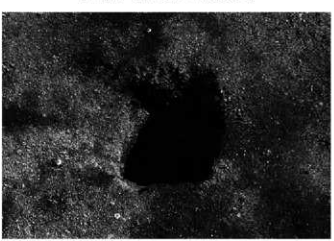
1区1面　33号土坑　全景(東から)



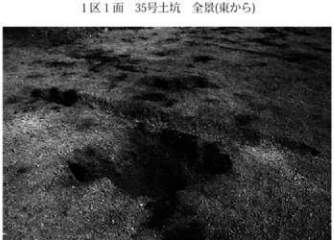
1区1面　34号土坑　全景(東から)



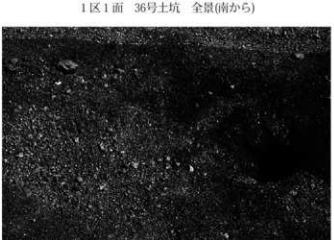
1区1面　35号土坑　全景(東から)



1区1面　36号土坑　全景(南から)



1区1面　37号耕作坑・38号土坑　全景(南から)



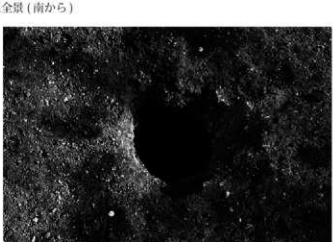
1区1面　40号土坑　全景(南から)

1区1面　41号土坑　全景(北から)

1区1面　1号棚列　全景(南から)

3区1面　調査区全景(南から)

3区1面　4号耕作坑　全景



3区1面　1号土坑　全景

3区1面　2号土坑　全景

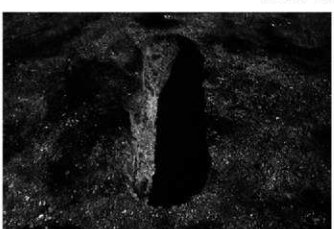
3区1面　3号土坑　全景

3区1面　ピット群　全景

3区1面　ピット群　全景

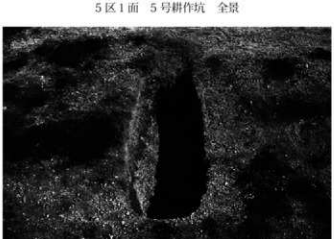
4区1面　調査区全景(南から)

5区1面　調査区全景(北から)

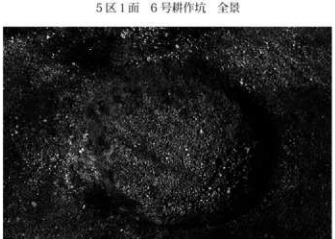


5区1面　5号耕作坑　全景

5区1面　6号耕作坑　全景

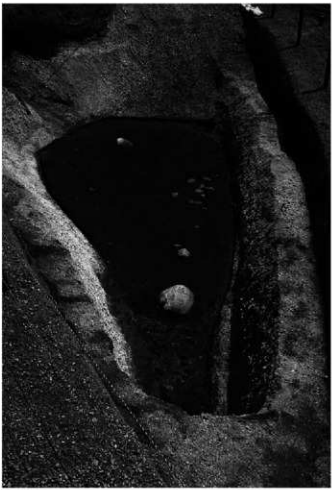


5区1面　8号耕作坑　全景



5区1面　7号土坑　全景

0区2面　調査区全景（空撮）



0区2面　調査区全景（南西から）

1区2面　調査区全景（空撮）

1区2面　調査区全景(南から空撮)

1区2面　調査区全景(北から空撮)

3区2面　調査区全景(北から)

3区2面　調査区全景(南から)

3区2面　調査区全景(南から)

3区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況 ( 北から )

3区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況

3区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況 ( 南東から )

3区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況 ( 南から )

4区2面　調査区全景 ( 北から )

4区2面　調査区全景 ( 南から )

4区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況

4区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況

4区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況

4区2面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況

4区2面　踏み分け道検出状況

4区2面　踏み分け道検出状況

4区2面　遺物出土状態

5区2面　調査区全景（南から）

5区２面　調査区全景(北から)

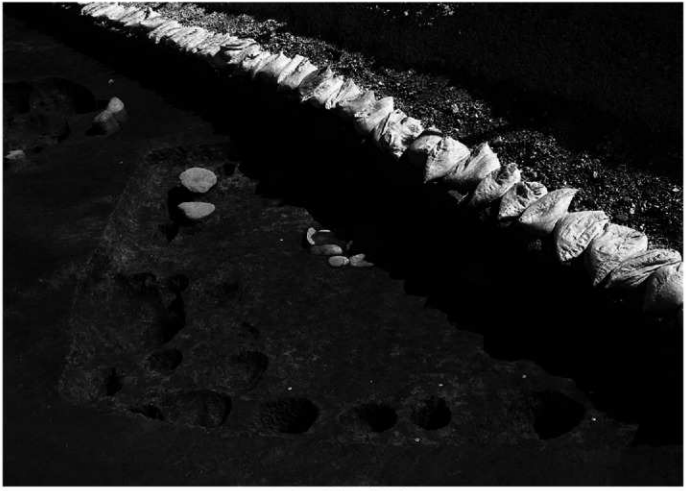
5区２面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況(南から)

5区２面　踏み分け道と馬の蹄跡検出状況(南から)

5区２面　遺物出土状態

1区４面　調査区全景(空撮)

3区4面　調査区全景(南から)



3区4面　2号住居　全景(南から)

3区4面　2号住居　遺物出土状態(西から)

3区4面　2号住居　炉全景(南から)

3区4面　2号住居　炉調査状況(南から)

3区4面　2号住居　炉掘り方全景(西から)

3区4面　3号住居　全景(南から)

3区4面　3号住居　遺物出土状態(北から)

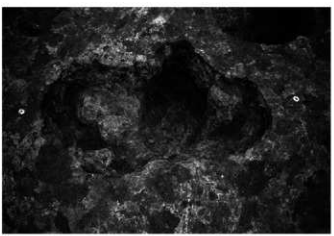
3区4面　3号住居　炉全景(南から)

3区4面　3号住居　炉掘り方全景(西から)

3区4面　5号住居　全景(南から)

3区4面　5号住居　遺物出土状態

3区4面　5号住居　炉全景(東から)



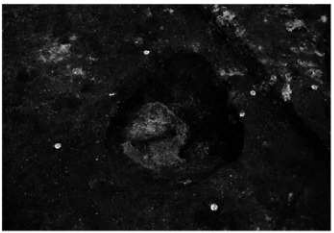
3区4面　5号住居　炉掘り方全景(西から)

1区4面　6・8号住居　全景(南から)

1区4面　6・8号住居　全景(北西から)

1区4面　6・8号住居　掘り方全景(北東から)

1区4面　6号住居　炉全景(南西から)

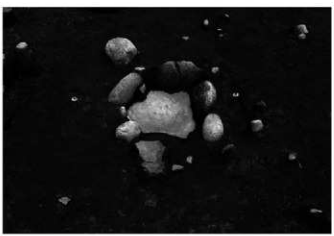


1区4面　6号住居　炉掘り方全景(北東から)

1区4面　7号住居　全景(東から)

1区4面　7号住居　全景(西から)

1区4面　7号住居　掘り方全景(西から)



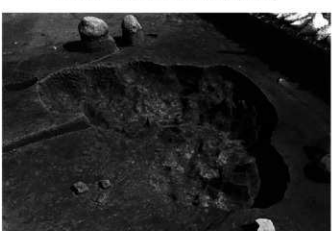
1区4面　7号住居　炉全景

1区4面　7号住居　炉全景(南から)

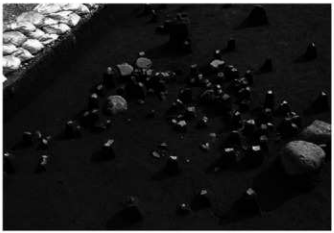
1区4面　7号住居　炉掘り方全景(南から)

1区4面　7号住居　遺物出土状態(南から)

3区4面　9号土坑　全景(西から)



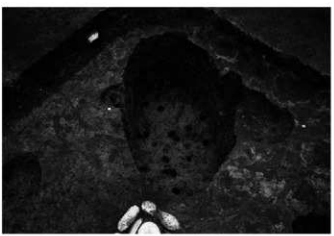
3区4面　10a～10d号土坑　全景(南から)



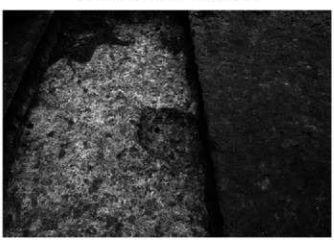
3区4面　10a～10d号土坑　遺物出土状態

3区4面　10a～10d号土坑　遺物出土状態(西から)

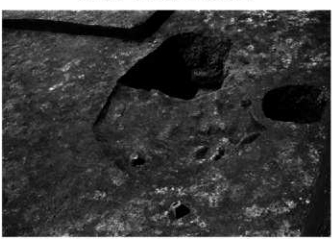
3区4面　11号土坑　全景(南から)



3区4面　12号土坑　全景(南から)



3区4面　13号土坑　全景(南から)



1区4面　42号土坑　全景(南から)

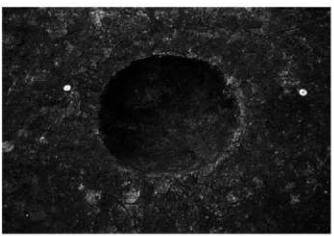
1区4面　43号土坑　全景(西から)

1区4面　44号土坑　全景(西から)

1区4面　45号土坑　全景(西から)

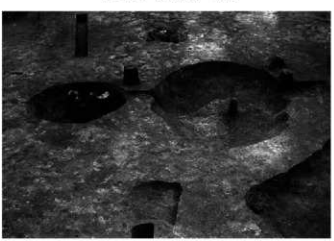
1区4面　46号土坑　全景(北から)

1区4面　47・49・50・64号土坑　全景(南から)

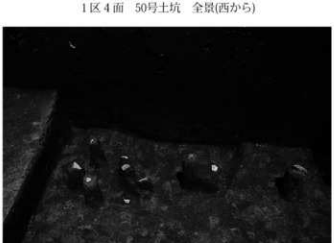


1区4面　48号土坑　全景

1区4面　50号土坑　全景(西から)



1区4面　54・55号土坑　全景(東から)



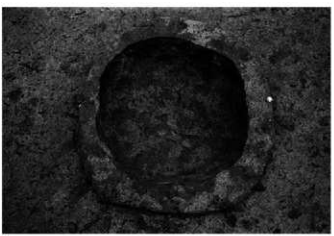
1区4面　56号土坑　全景(西から)

1区4面　57号土坑　全景(北西から)

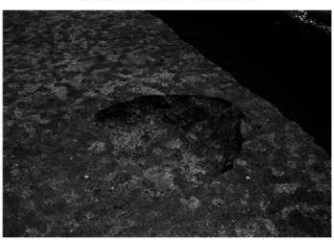
1区4面　58号土坑　全景(南から)

1区4面　61号土坑　全景(北から)

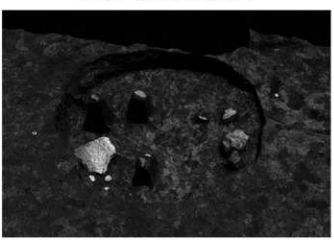
1区4面　63号土坑　全景(南から)



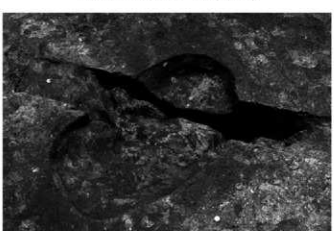
1区4面　65号土坑　全景(南から)



1区4面　67号土坑　全景(南から)

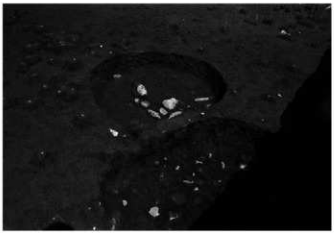


1区4面　68号土坑　全景(北西から)

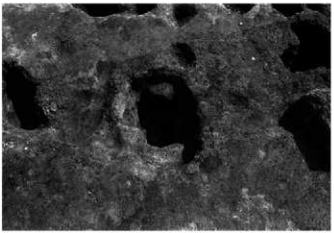


1区4面　69号土坑　全景(北西から)

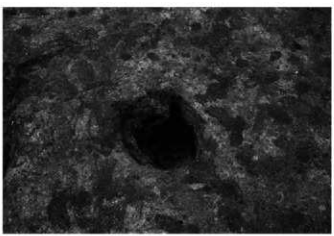
1区4面　70号土坑　全景(西から)



1区4面　71号土坑　全景(南東から)

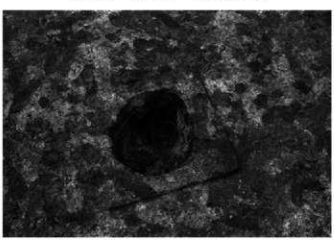


1区4面　3号ピット　全景(北から)



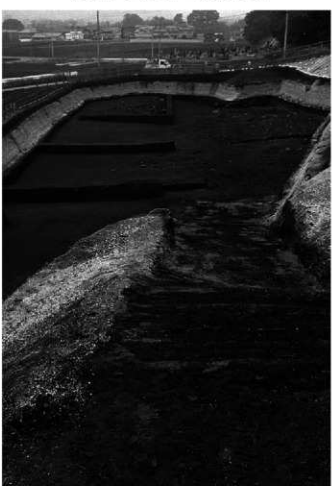
1区4面　4号ピット　全景(北から)

1区4面　5号ピット　全景(北から)

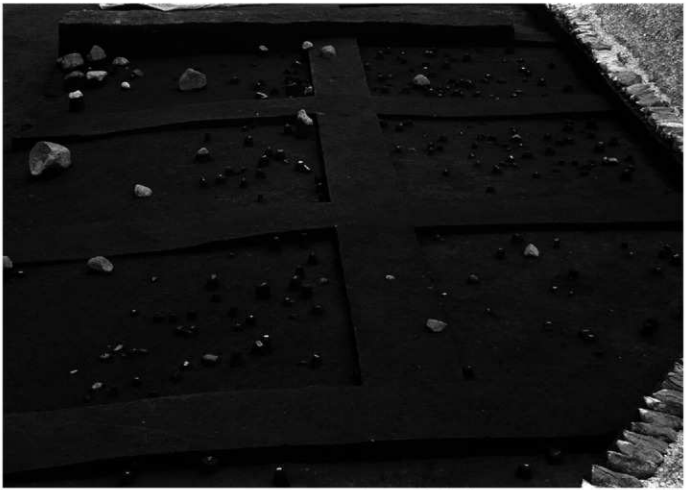


1区4面　6号ピット　全景(北から)

1区4面　Dq-120グリッド　遺物出土状態



1区4面　包含層調査全景(北から)



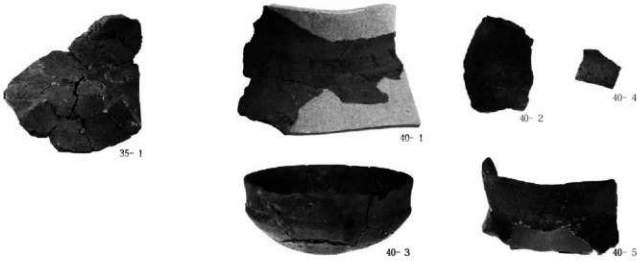
1区4面　Dq・Dr-123～125グリッド　遺物出土状態

1区4面　Dr-121グリッド　遺物出土状態(西から)

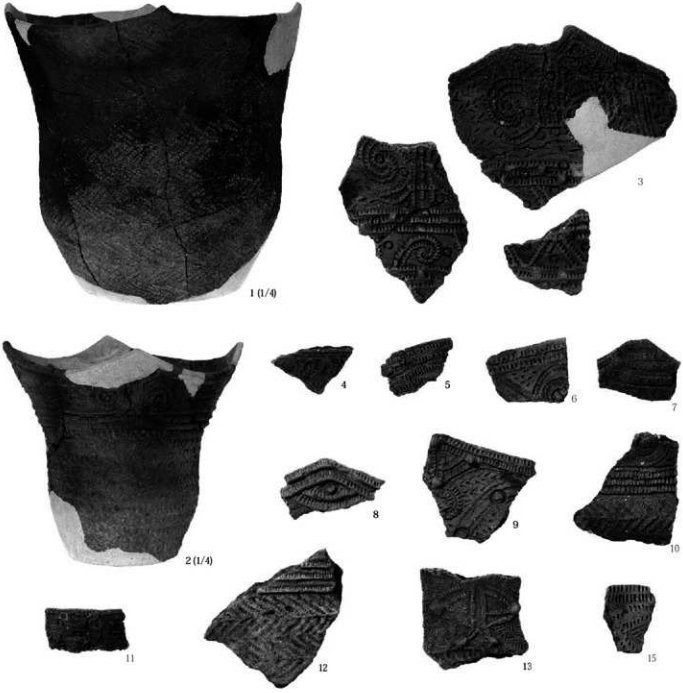
1区4面　Dr-122グリッド　遺物出土状態(南から)

4区4面　包含層　遺物出土状態

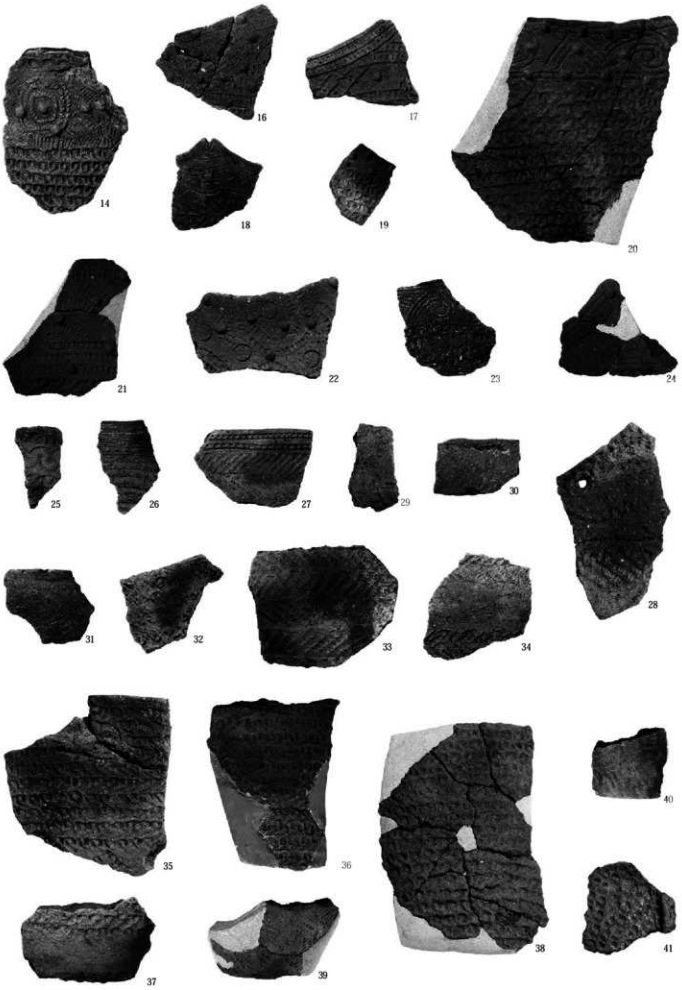
4区4面　包含層　遺物出土状態(南東から)



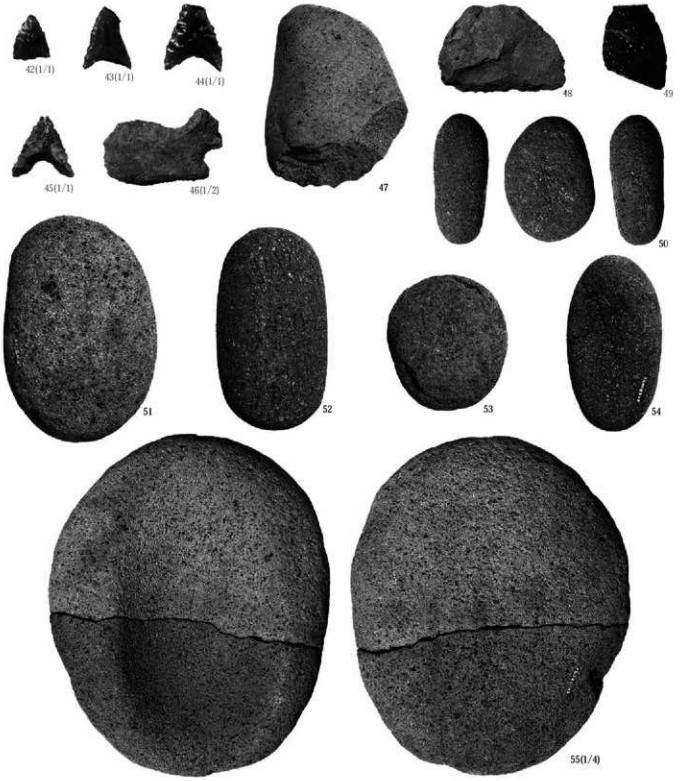

4区2面・5区2面出土遺物




3区4面　2号住居出土遺物

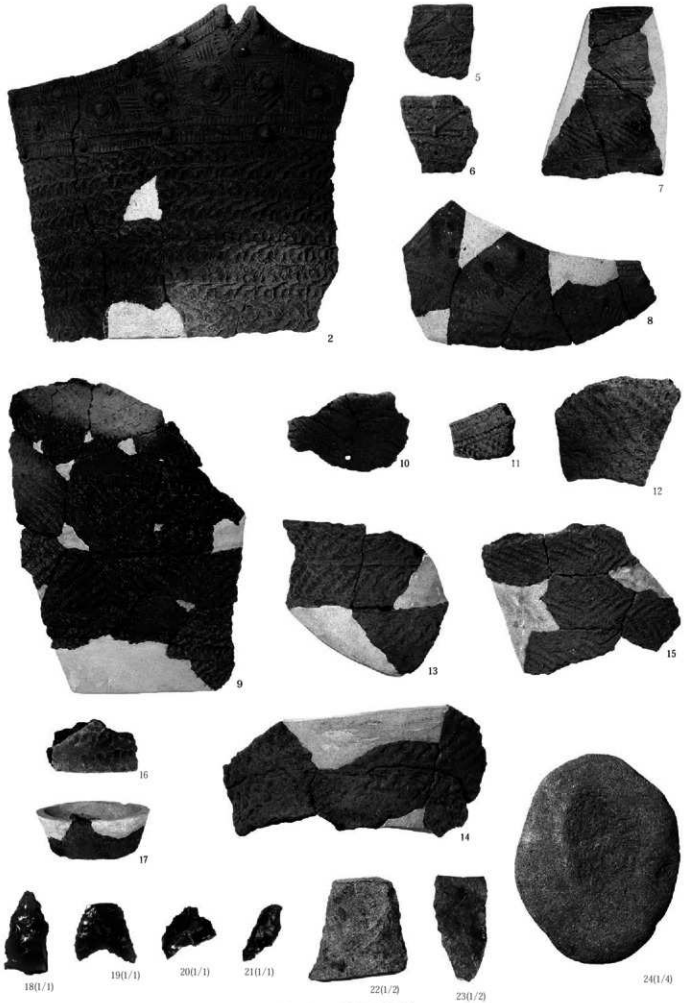



3区4面　2号住居出土遺物

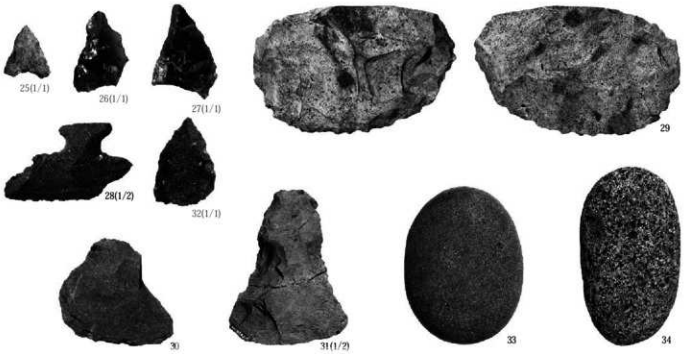



3区4面　2号住居出土遺物

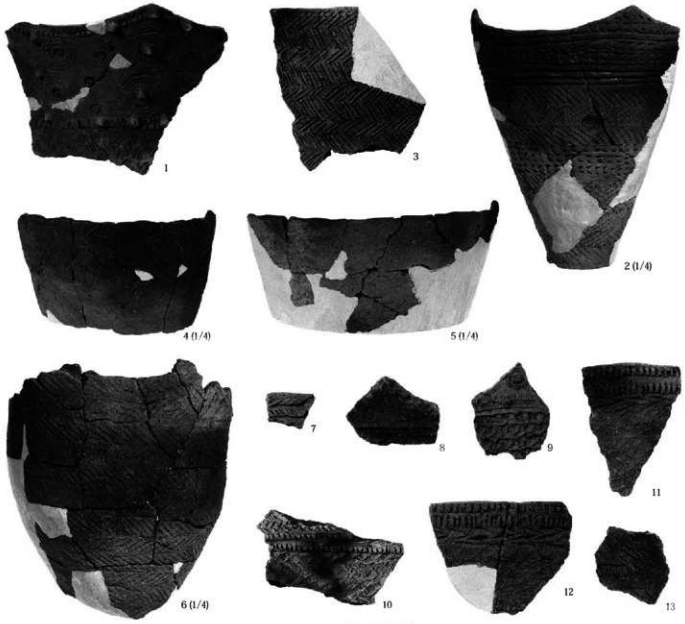
3区4面　3号住居出土遺物



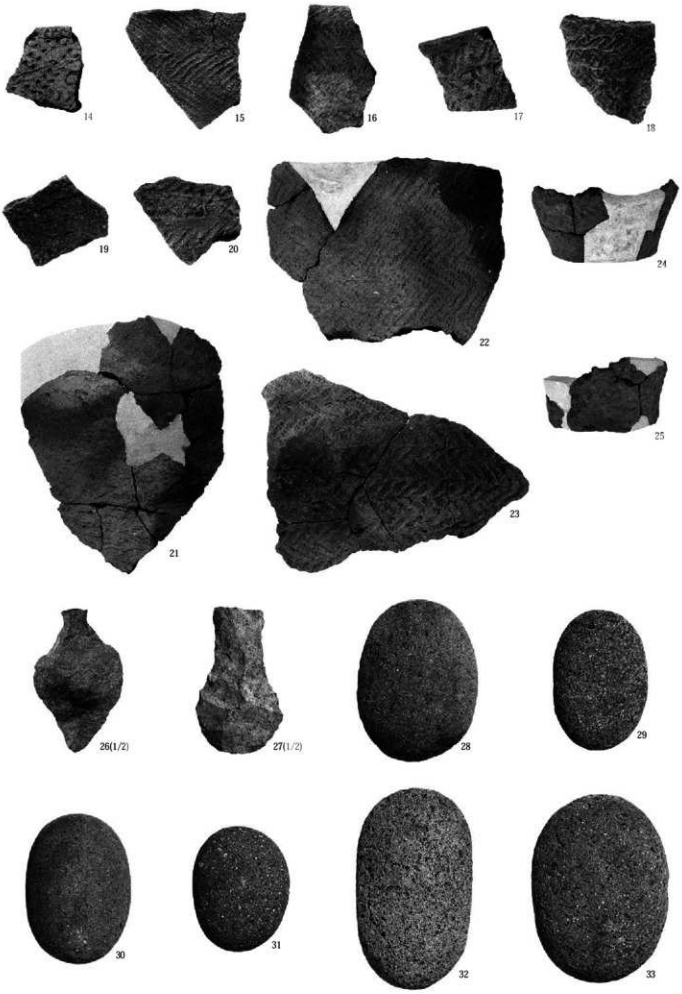

3区4面　3号住居出土遺物




3区4面　3号住居出土遺物

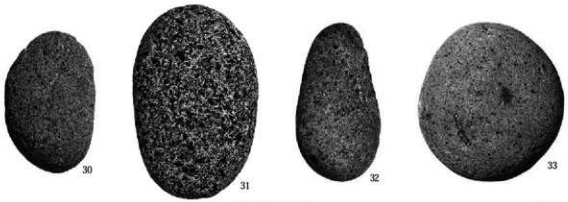



3区4面　5号住居出土遺物

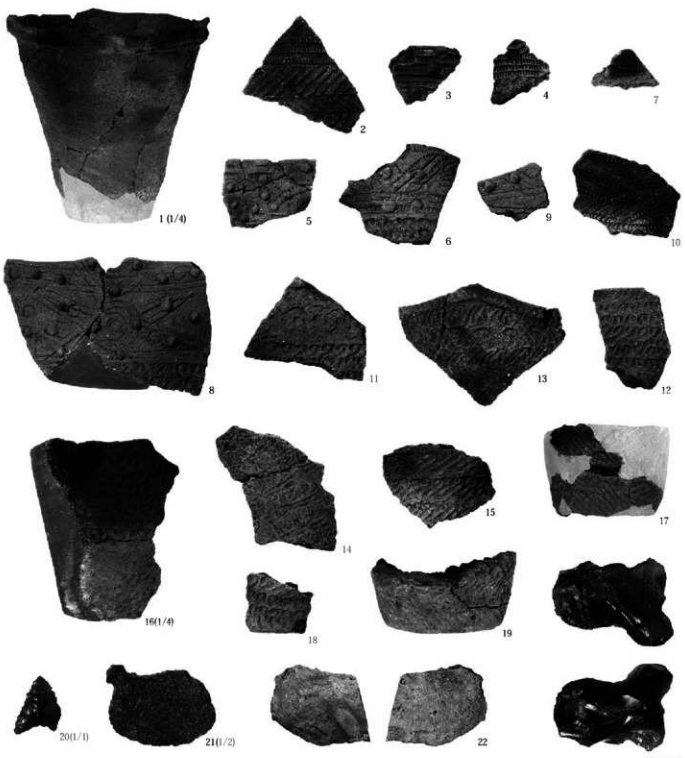



3区4面　5号住居出土遺物

1区4面　6号住居出土遺物



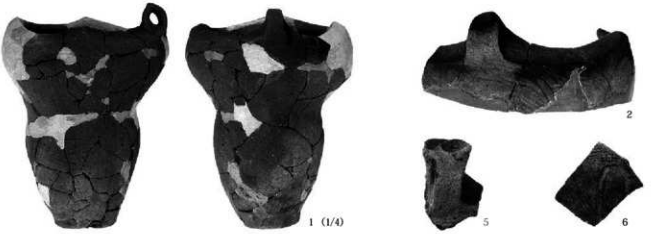

1区4面　6号住居出土遺物　　1区4面　8号住居出土遺物



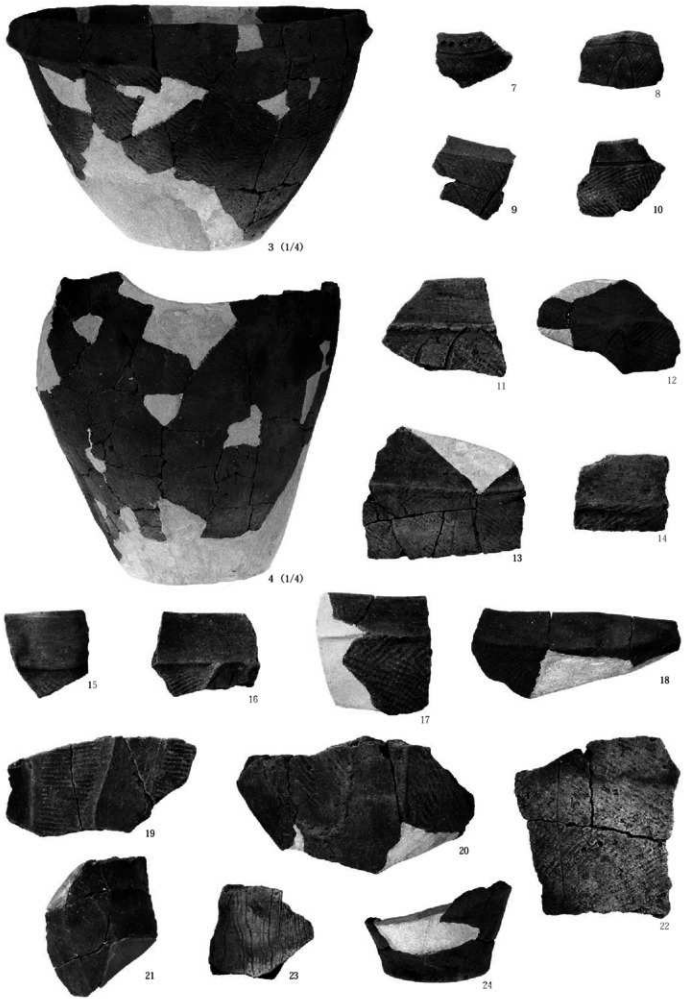

1区4面　7号住居出土遺物

1区4面　7号住居出土遺物

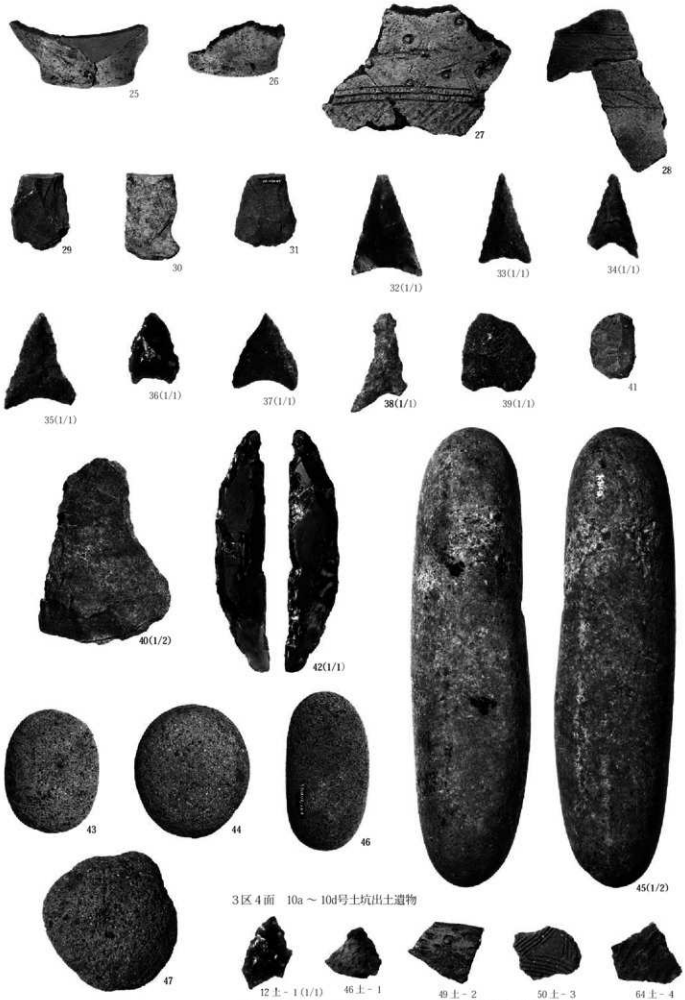
3区4面　9号土坑出土遺物




3区4面　10a～10d号土坑出土遺物

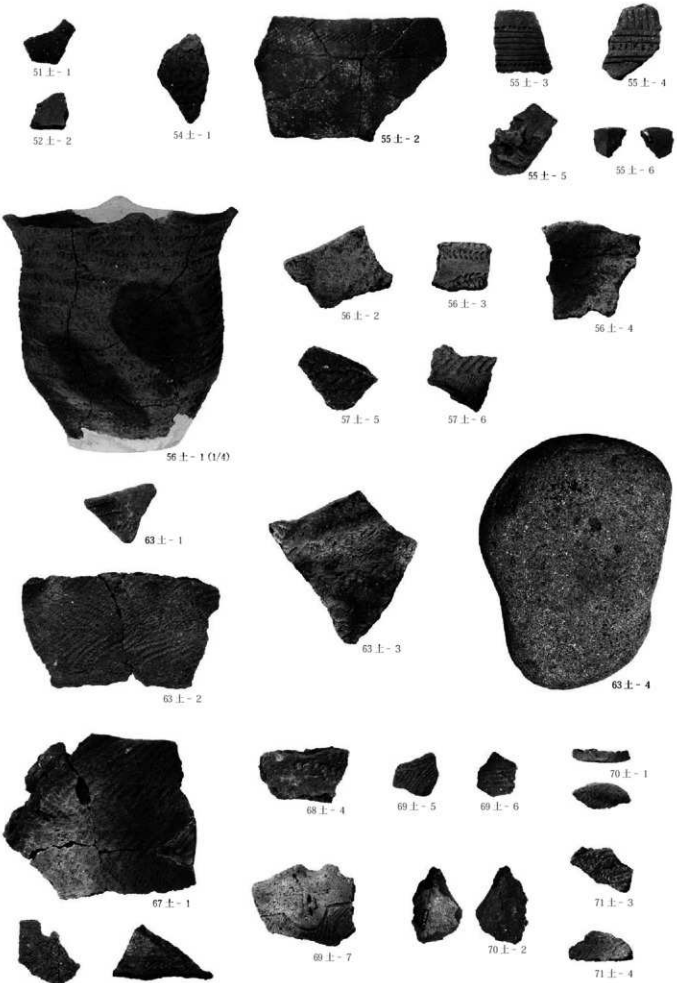



3区4面　10a～10d号土坑出土遺物

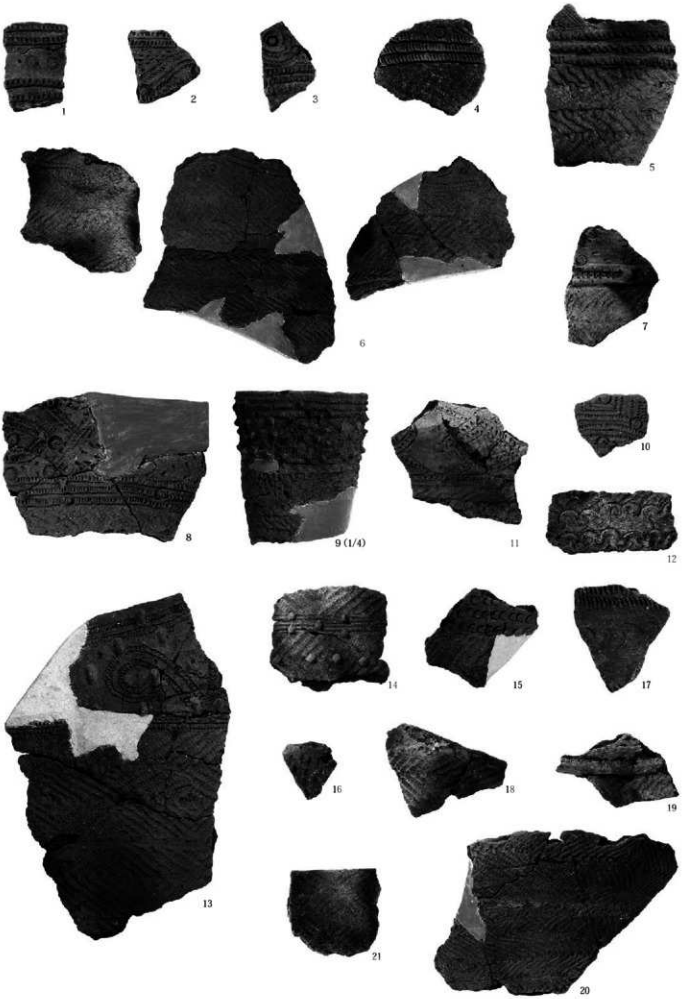



3区4面　10a ～ 10d号土坑出土遺物

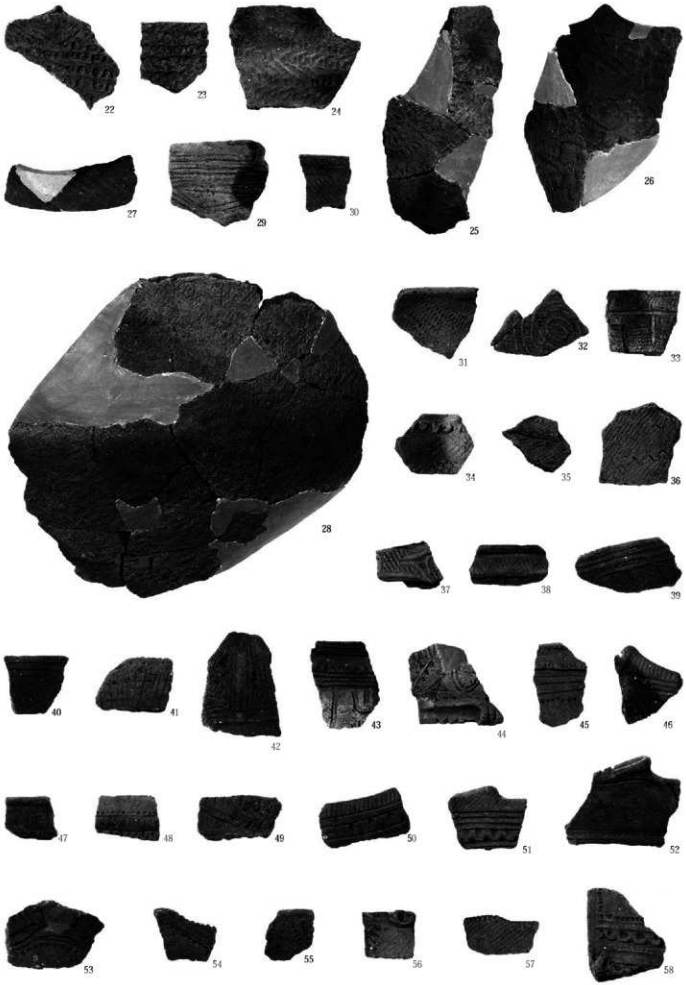
3区4面　12号・1区4面　46・49・50・64号土坑出土遺物



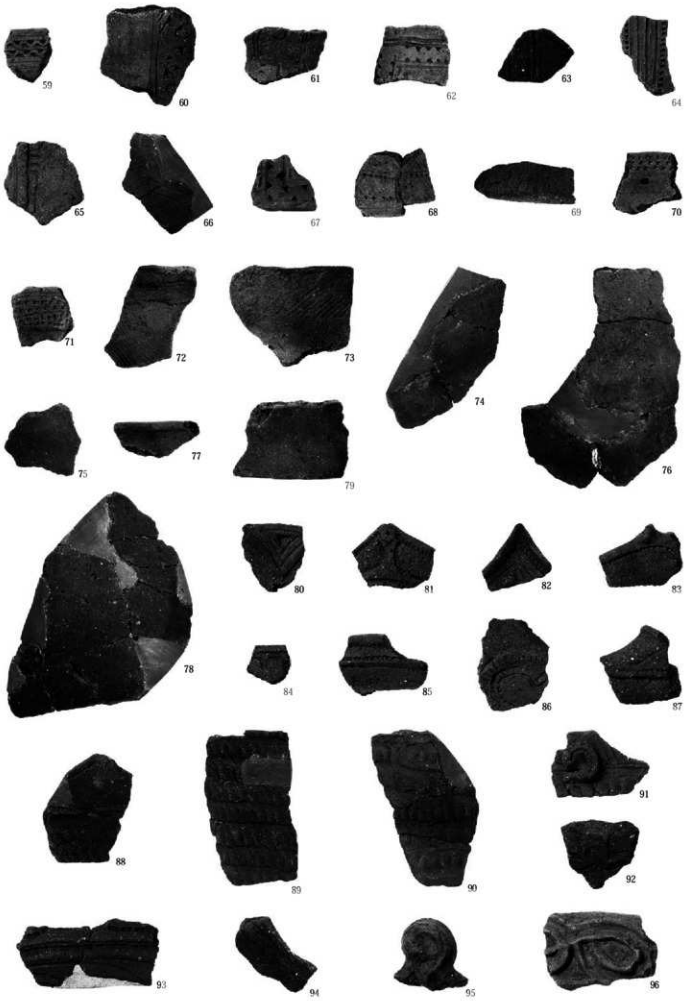

1区4面　51・52・54～57・63・67～71号土坑出土遺物



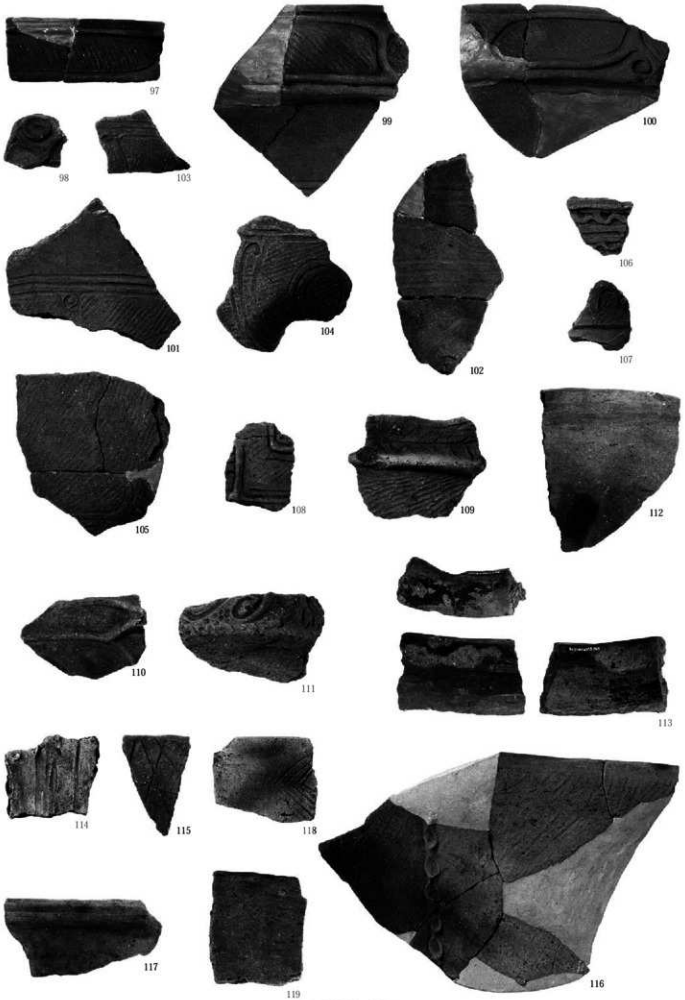

1区　遺構外出土土器


22
23
24
25
26
27
29
30
28
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58

1区　遺構外出土土器

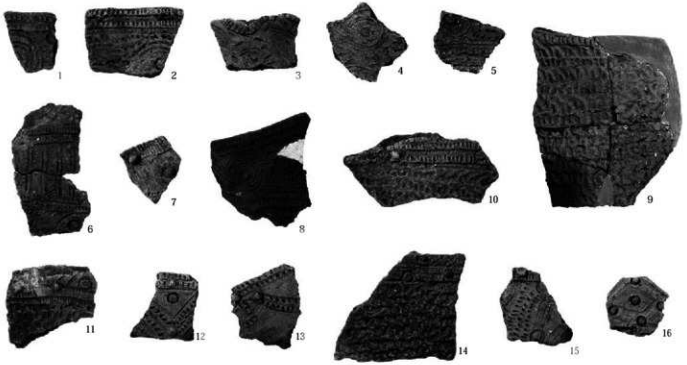

59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96

1区　遺構外出土土器

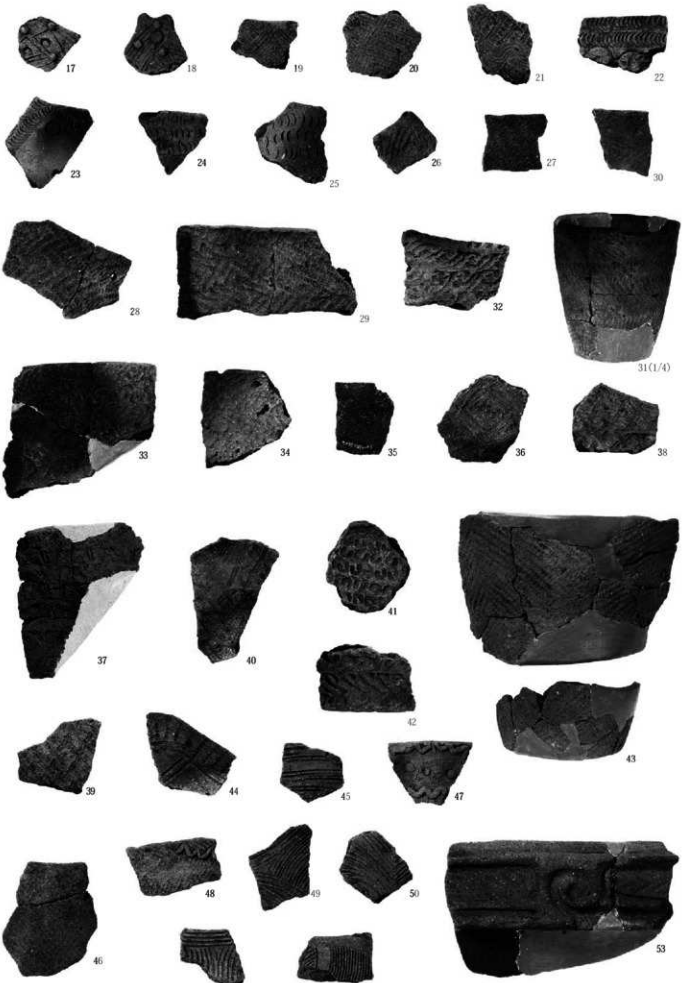

97
98
103
99
100
101
104
102
106
107
105
108
109
112
110
111
113
114
115
118
116
117
119

1区　遺構外出土土器

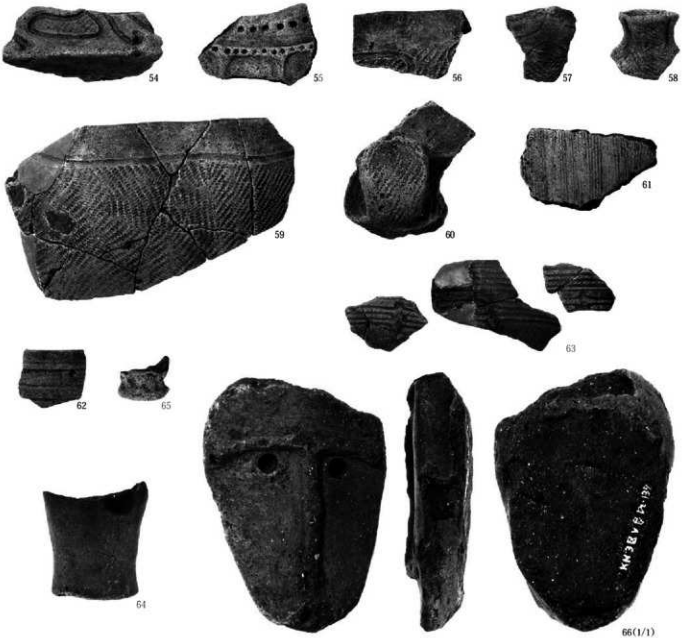
1区　遺構外出土土器



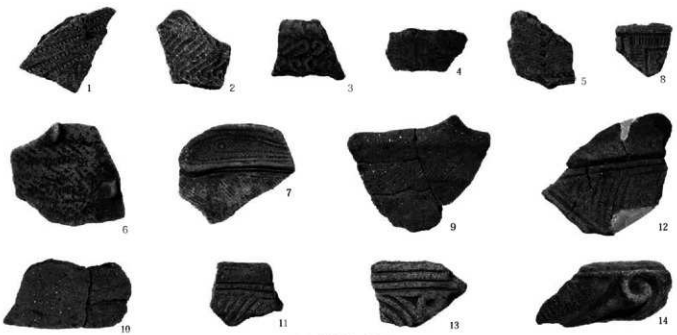

3区　遺構外出土土器


17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
30
28
29
32
31(1/4)
33
34
35
36
38
37
40
41
42
43
39
44
45
47
46
48
49
50
51
52
53

3区　遺構外出土土器



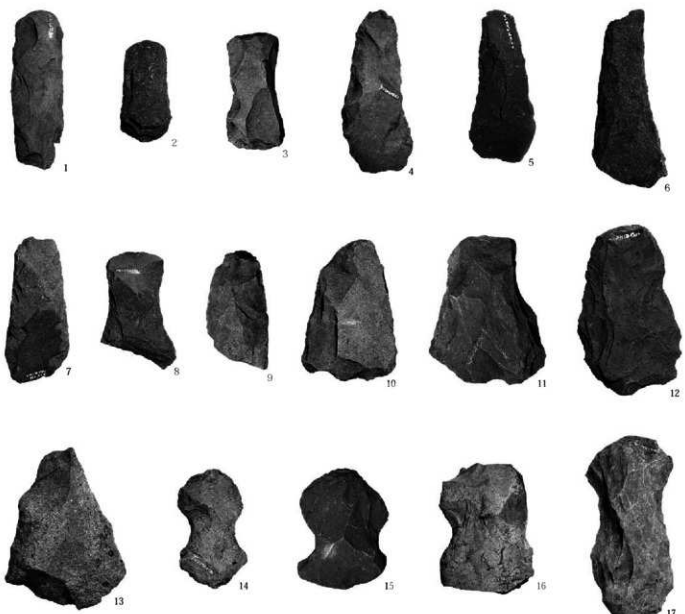

3区　遺構外出土土器



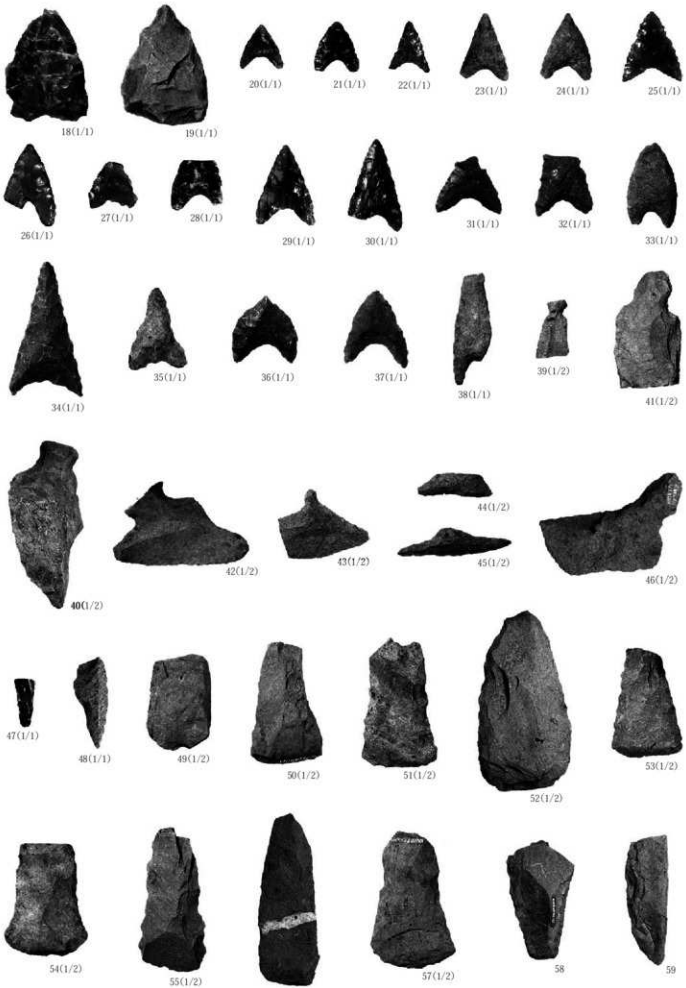

4区　遺構外出土土器

4区　遺構外出土土器

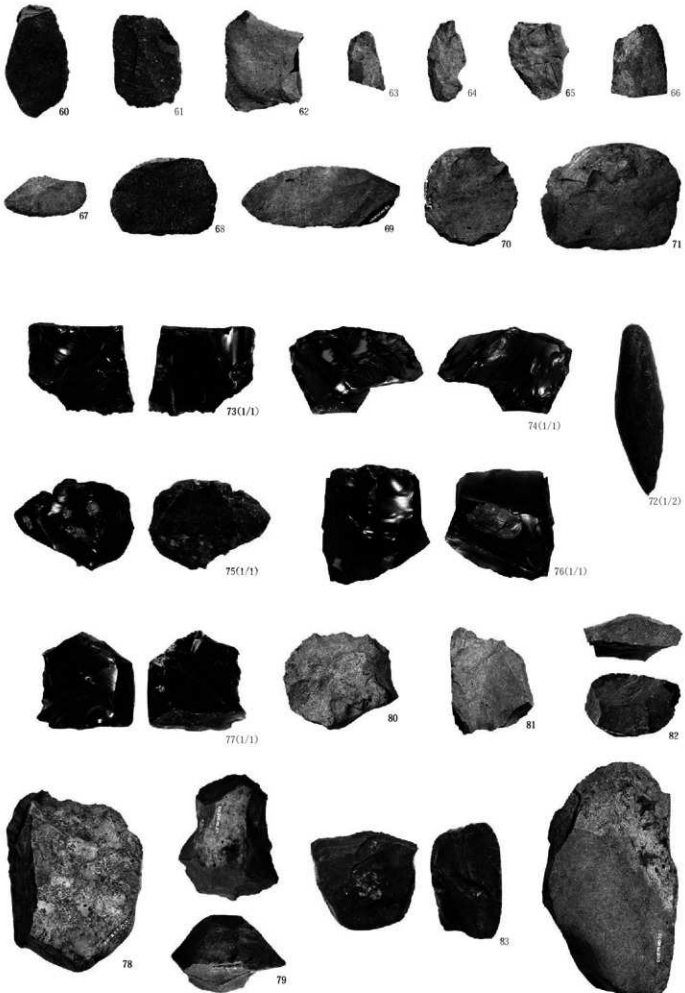
5区　遺構外出土土器



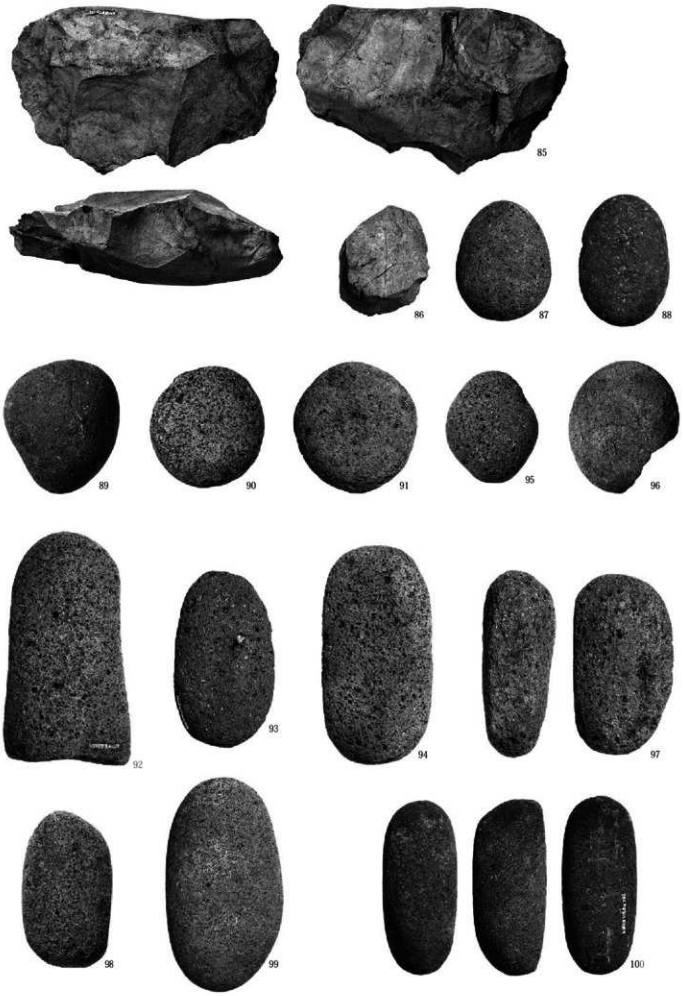

1区　遺構外出土石器


18(1/1)
19(1/1)
20(1/1)
21(1/1)
22(1/1)
23(1/1)
24(1/1)
25(1/1)
26(1/1)
27(1/1)
28(1/1)
29(1/1)
30(1/1)
31(1/1)
32(1/1)
33(1/1)
34(1/1)
35(1/1)
36(1/1)
37(1/1)
38(1/1)
39(1/2)
41(1/2)
40(1/2)
42(1/2)
43(1/2)
44(1/2)
45(1/2)
46(1/2)
47(1/1)
48(1/1)
49(1/2)
50(1/2)
51(1/2)
52(1/2)
53(1/2)
54(1/2)
55(1/2)
56(1/2)
57(1/2)
58
59

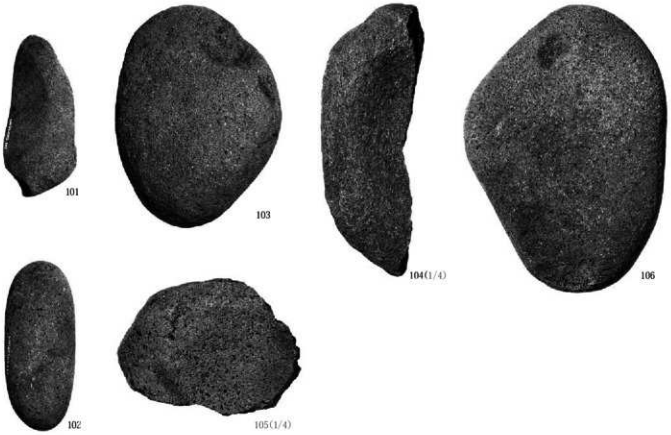
1区　遺構外出土石器


60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
73(1/1)
74(1/1)
72(1/2)
75(1/1)
76(1/1)
77(1/1)
80
81
82
78
79
83
84

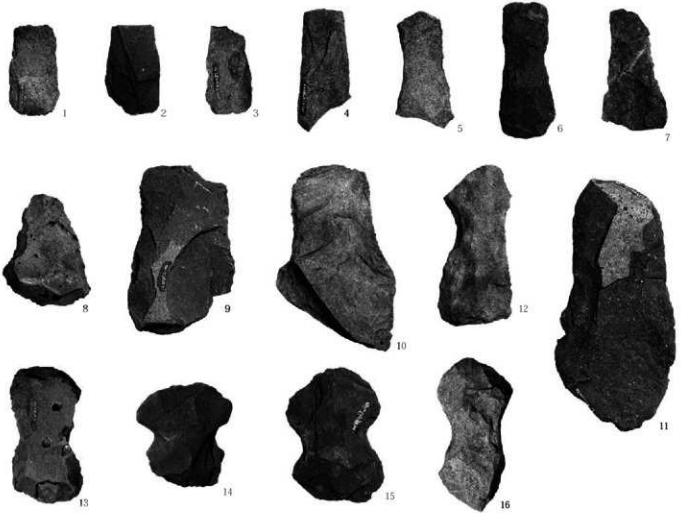
1区　遺構外出土石器



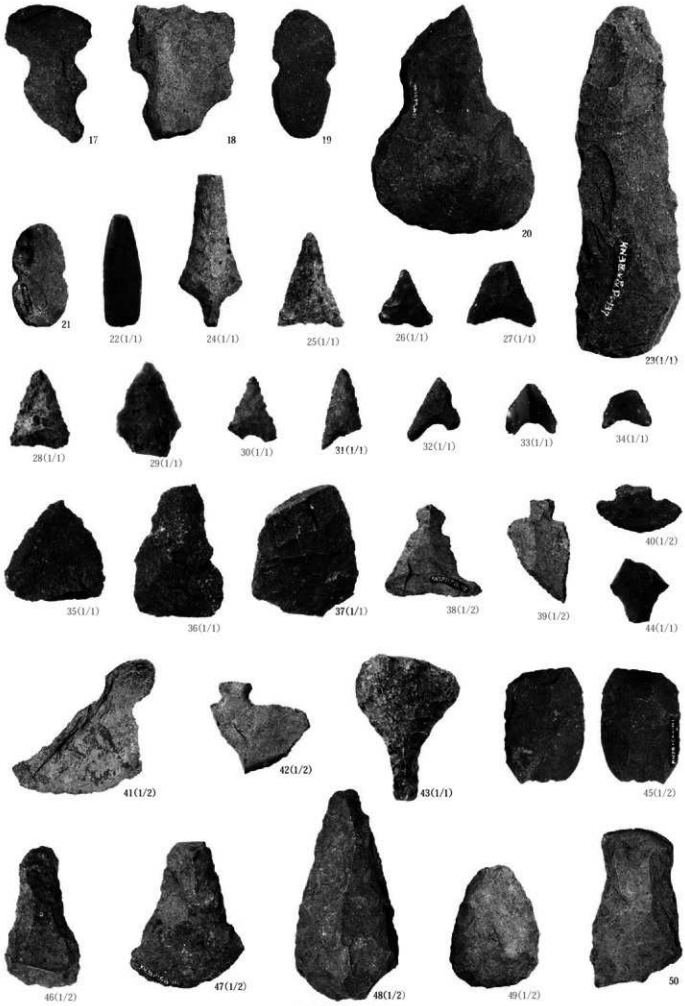

1区　遺構外出土石器



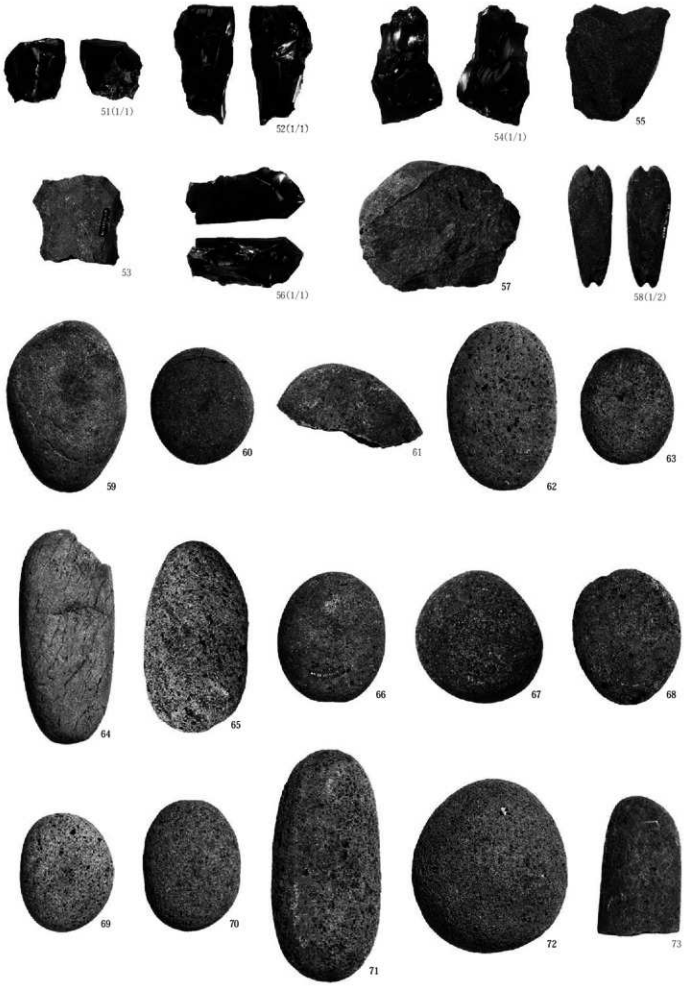

1区　遺構外出土石器



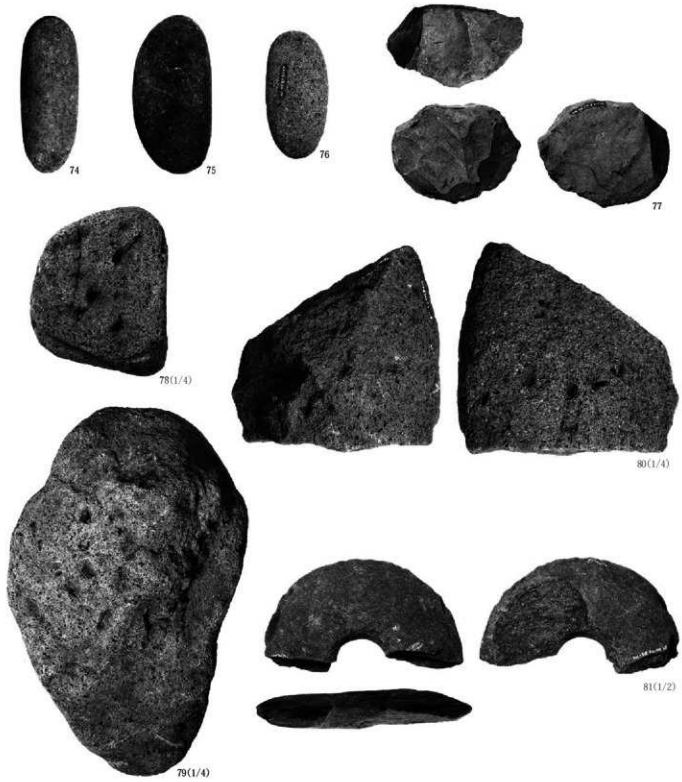

3区　遺構外出土石器


17
18
19
20
21
22(1/1)
24(1/1)
25(1/1)
26(1/1)
27(1/1)
29(1/1)
28(1/1)
29(1/1)
30(1/1)
31(1/1)
32(1/1)
33(1/1)
34(1/1)
35(1/1)
36(1/1)
37(1/1)
38(1/2)
39(1/2)
40(1/2)
44(1/1)
41(1/2)
42(1/2)
43(1/1)
45(1/2)
46(1/2)
47(1/2)
48(1/2)
49(1/2)
50

3区　遺構外出土石器

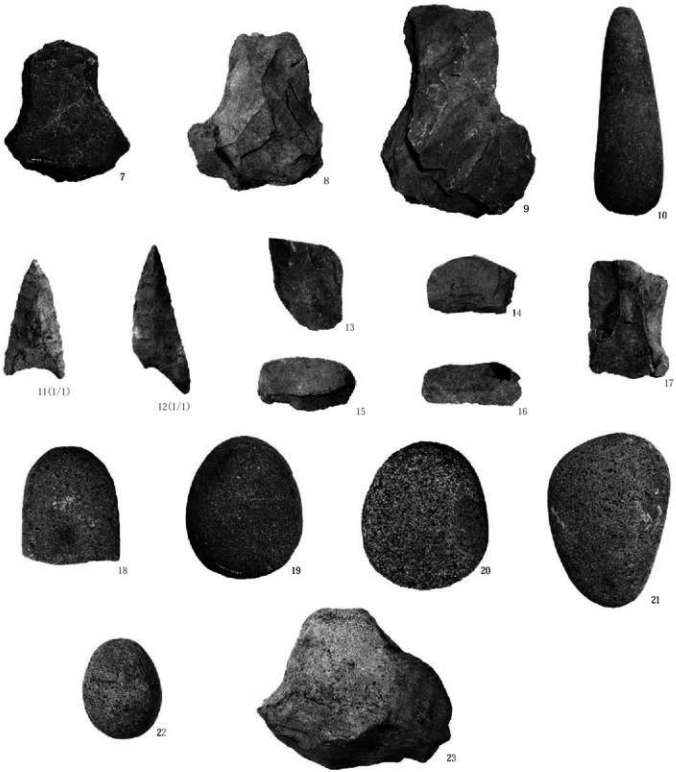

51(1/1)
52(1/1)
54(1/1)
55
53
56(1/1)
57
58(1/2)
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73

3区　遺構外出土石器




3区　遺構外出土石器

4区　遺構外出土石器




4区　遺構外出土石器

5区　遺構外出土石器

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第487集

# 上白井西伊熊遺跡 –縄文時代以降編–

一般国道17号（榛沢バイパス）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その２)報告書第９集

平成22年（2010）２月１日　印刷
平成22年（2010）２月19日　発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地２
電話（0279）52-2511（代表）
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／上毎印刷工業株式会社